

南島原市文化財調査報告書 第21集

## 権現脇遺跡

—水無川上流右岸資材搬入路工事に伴う発掘調査—

2020

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第21集

# 権 現 脇 遺 跡

—水無川上流右岸資材搬入路工事に伴う発掘調査—

2020

長崎県南島原市教育委員会

## 発刊にあたって

長崎県南島原市深江町に所在する権現脇遺跡は、平成2年11月17日に198年ぶりに噴火した雲仙普賢岳の東麓に立地します。雲仙普賢岳の噴火活動時は、火碎流や土石流が頻発するなど、ふもとの旧南高来郡深江町（現南島原市深江町）と島原市では非常に大きな被害がありました。権現脇遺跡周辺においても、旧深江町立大野木場小学校の校舎や体育館、多くの民家などが火碎流の熱風により焼失しています。

そして、雲仙普賢岳の火山活動が鎮静化したのち、水無川流域一帯は国有地化がなされ、国土交通省雲仙復興事務所によって大規模な砂防事業が進められてきました。今回の発掘調査も雲仙復興事務所による水無川上流右岸資材搬入路工事に伴って実施したものであります。

発掘調査では、おもに縄文時代末から弥生時代初頭にかけての遺物を多数検出し、島原半島における縄文・弥生移行期の一端を明らかにすることができました。

私たち現在に生きる者は、先人から預かったともいえる貴重な埋蔵文化財に対して、保護や記録の措置をとることで後世に伝えていく責任があります。権現脇遺跡における発掘調査の成果を収めた本書が、そうした役割を今後永く果たしてくれることを願うとともに、歴史教育や学術研究、文化財愛護思想の普及の場面で広く活用されることを希望いたします。

末筆ではございますが、発掘調査の実施と本書の作成にあたり、格別のご協力とご配慮を賜りました雲仙復興事務所はじめ関係各位に厚く御礼申し上げ、発刊のあいさつといたします。

令和2年9月30日

南島原市教育長 永田 良二

## 例　　言

- 1 本書は、権現脇遺跡（長崎県南島原市深江町大野木場所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国土交通省雲仙復興事務所が事業主体である水無川上流右岸資材搬入路工事に伴って実施した。
- 3 調査は、長崎県南島原市教育委員会が主体となって以下の期間で実施した。  
試掘・範囲確認調査 平成19年2月8日～平成19年3月27日  
本調査 平成19年8月6日～平成20年1月31日（F・G・H区）  
平成20年12月16日～平成21年3月20日（I区）
- 4 現地調査及び本報告書作成に係わる整理調査の体制と担当は、以下のとおりである。

### 調査体制

南島原市教育委員会	教育長	菅 弘賢（～平成22年6月）
		定方 郁夫（平成22年7月～平成26年7月）
		永田 良二（平成26年8月～）
教育次長		井口 敬次（～平成22年度）
		水島 文昌（平成23年度～平成25年度）
		渡部 博（平成26年度～平成28年度）
		深松 良藏（平成29年度～令和元年度）
		栗田 一政（令和2年度）
理事		宮崎 誠（平成31年度）
文化財課長		但馬 健剛（～平成21年度）
		松本 慎二（平成22年度～令和元年度）
		岡野 博明（令和2年度）
文化財課文化財班長	松本 慎二（～平成21年度）	
	林田 順助（～平成25年度）	
	木村 岳士（平成26年度～平成29年度）	
	末永 透（平成30年度）	
	鬼塚 俊範（平成31年度）	
	梶原 知治（令和2年度）	

調査担当

試掘・範囲確認調査

南島原市教育委員会 文化財課文化財班 主事（学芸員）本多 和典

本調査

南島原市教育委員会 文化財課文化財班 主事（学芸員）本多 和典（F・G・H・I区）

（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店 小石 龍信（F・G・H区）

同 上

松崎 卓郎（I区）

整理調査

南島原市教育委員会 文化財課文化財班 副参事（学芸員）本多 和典

- 5 現地調査における個別の遺構実測図は、上田五月の協力を得て小石、広瀬祐美、本多が作成した。土層実測図は、岩永憲秀、小林三一郎、谷口杉雄の協力を得て上田、本多が作成した。遺構配置図の作成及び航空写真的撮影は、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。写真撮影は、本多が行った。遺構配置図の製図は、（株）九州文化財研究所長崎支店に委託した。
- 6 遺物の実測・製図は、岩永英子、上田五月、佐藤三夏、本多が行った。遺物の拓本は、荒木秀之が行った。遺物の写真撮影は、竹村南洋が行った。
- 7 本書に関する遺物、図面、写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室において保管している。
- 8 調査及び本書の刊行にあたって以下の方々からご助言、ご指導をいただいた。記して謝意を表します。

池橋 宏、板倉有大、小畠弘己、杉本伸一、清水 洋、仙波靖子、田上勇一郎、辻田直人、長井大輔、中尾篤志、中沢道彦、松島 健、水ノ江和同、宮地聰一郎、山崎純男  
(五十音順、敬称・所属略)
- 9 本書の執筆・編集は、本多による。

## 目 次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 過去の調査.....	1
第Ⅱ章 位置と環境 .....	4
1 地理的環境.....	4
2 歴史的環境.....	4
第Ⅲ章 試掘・範囲確認調査.....	6
1 調査坑の設定と調査の方法.....	6
2 調査成果.....	6
第Ⅳ章 本調査 .....	10
1 調査区の設定と調査の方法.....	10
2 基本土層.....	12
3 F区の調査成果.....	13
(1) 土層と遺構.....	13
(2) 出土遺物.....	17
4 G区の調査成果.....	22
(1) 土層と遺構.....	22
(2) 出土遺物.....	30
5 H区の調査成果.....	97
(1) 土層と遺構.....	97
(2) 出土遺物 .....	100
6 I区の調査成果 .....	110
(1) 土層と遺構 .....	110
(2) 出土遺物 .....	115
第Ⅴ章 自然科学分析（放射性炭素年代測定） .....	145
第Ⅵ章 まとめ.....	150

## 挿図目次

第1図	権現脇遺跡の位置 (S = 1 / 10,000)	2
第2図	工事計画と過去の調査区 (S = 1 / 6,000)	3
第3図	権現脇遺跡と周辺遺跡 (S = 1 / 8,000)	5
第4図	調査坑配置図① (S = 1 / 3,000)	7
第5図	調査坑配置図② (S = 1 / 3,000)	7
第6図	調査坑土層実測図① (S = 1 / 50)	8
第7図	調査坑土層実測図② (S = 1 / 40)	9
第8図	本調査区の範囲とグリッド設定① (S = 1 / 2,000)	11
第9図	本調査区の範囲とグリッド設定② (S = 1 / 2,000)	11
第10図	基本土層実測図 (S = 1 / 30)	12
第11図	F区土層実測図 (S = 1 / 100)	14
第12図	F区Ⅲ b 下層上面遺構配置図 (S = 1 / 200)	15
第13図	F区Ⅳ層上面遺構配置図 (S = 1 / 200)	16
第14図	F区土器ほか実測図 (1 ~ 34 : S = 1 / 3, 35 : S = 1 / 2)	18
第15図	F区石器実測図 (1・2 : S = 1 / 3, 3 : S = 1 / 2, 4 ~ 13 : S = 2 / 3)	21
第16図	G区土層実測図 (S = 1 / 100)	23~24
第17図	G区Ⅲ b 下層上面遺構配置図 (S = 1 / 400)	25
第18図	G区Ⅳ層上面遺構配置図 (S = 1 / 400)	26
第19図	G区掘立柱建物実測図 (S = 1 / 80)	27
第20図	G区土坑1実測図 (S = 1 / 20)	28
第21図	G区土坑2実測図 (S = 1 / 30)	28
第22図	G区土坑3実測図 (S = 1 / 20)	28
第23図	G区土坑4実測図 (S = 1 / 20)	29
第24図	G区土坑5実測図 (S = 1 / 30)	29
第25図	G区土坑6実測図 (S = 1 / 30)	29
第26図	G区土器ほか実測図① (S = 1 / 3)	31
第27図	G区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)	32
第28図	G区土器ほか実測図③ (S = 1 / 3)	33
第29図	G区土器ほか実測図④ (S = 1 / 3)	34
第30図	G区土器ほか実測図⑤ (S = 1 / 3)	35
第31図	G区土器ほか実測図⑥ (S = 1 / 3)	37
第32図	G区土器ほか実測図⑦ (S = 1 / 3)	38
第33図	G区土器ほか実測図⑧ (S = 1 / 3)	39
第34図	G区土器ほか実測図⑨ (S = 1 / 3)	40
第35図	G区土器ほか実測図⑩ (S = 1 / 3)	41

第36図	G区土器ほか実測図⑪ (S = 1/3)	42
第37図	G区土器ほか実測図⑫ (S = 1/3)	43
第38図	G区土器ほか実測図⑬ (S = 1/3)	45
第39図	G区土器ほか実測図⑭ (S = 1/3)	46
第40図	G区土器ほか実測図⑮ (S = 1/3)	47
第41図	G区土器ほか実測図⑯ (S = 1/3)	48
第42図	G区土器ほか実測図⑰ (S = 1/3)	49
第43図	G区土器ほか実測図⑱ (S = 1/3)	50
第44図	G区土器ほか実測図⑲ (S = 1/3)	51
第45図	G区土器ほか実測図⑳ (S = 1/3)	53
第46図	G区土器ほか実測図㉑ (S = 1/3)	54
第47図	G区土器ほか実測図㉒ (S = 1/3)	55
第48図	G区土器ほか実測図㉓ (S = 1/3)	56
第49図	G区土器ほか実測図㉔ (S = 1/3)	57
第50図	G区土器ほか実測図㉕ (S = 1/2)	58
第51図	G区石器実測図① (S = 2/3)	73
第52図	G区石器実測図② (S = 1/2)	74
第53図	G区石器実測図③ (S = 1/2)	75
第54図	G区石器実測図④ (23~29 : S = 1/2, 30 : S = 2/3)	76
第55図	G区石器実測図⑤ (S = 1/2)	77
第56図	G区石器実測図⑥ (S = 2/3)	78
第57図	G区石器実測図⑦ (S = 2/3)	79
第58図	G区石器実測図⑧ (S = 2/3)	81
第59図	G区石器実測図⑨ (S = 2/3)	82
第60図	G区石器実測図⑩ (S = 2/3)	83
第61図	G区石器実測図⑪ (S = 2/3)	84
第62図	G区石器実測図⑫ (S = 1/3)	85
第63図	G区石器実測図⑬ (S = 1/3)	87
第64図	G区石器実測図⑭ (S = 1/3)	88
第65図	G区石器実測図⑮ (194 : S = 1/4, 195 : S = 1/3)	89
第66図	G区石器実測図⑯ (S = 1/3)	90
第67図	G区石器実測図㉗ (206~215 : S = 1/3, 216~217 : S = 1/1)	91
第68図	H区土層実測図 (S = 1/100)	98
第69図	H区土坑実測図 (S = 1/20)	98
第70図	H区IV層上面遺構配置図 (S = 1/400)	99
第71図	H区土器ほか実測図① (S = 1/3)	101
第72図	H区土器ほか実測図② (S = 1/3)	102

第73図	H区土器ほか実測図③ (35~37 : S = 1 / 3, 38 : S = 1 / 2) .....	103
第74図	H区石器実測図① (1 ~ 4, 7 ~ 11 : S = 2 / 3, 5 ~ 6 : S = 1 / 2) .....	106
第75図	H区石器実測図② (S = 2 / 3) .....	107
第76図	H区石器実測図③ (33 ~ 34 : S = 1 / 3, 35 : S = 2 / 3, 36 : S = 1 / 3) .....	108
第77図	I区土層実測図 (S = 1 / 100) .....	111 ~ 112
第78図	I区Ⅲ b下層上面遺構配置図 (S = 1 / 200) .....	113
第79図	I区Ⅳ層上面遺構配置図 (S = 1 / 200) .....	114
第80図	I区土器ほか実測図① (S = 1 / 3) .....	116
第81図	I区土器ほか実測図② (S = 1 / 3) .....	117
第82図	I区土器ほか実測図③ (S = 1 / 3) .....	119
第83図	I区土器ほか実測図④ (S = 1 / 3) .....	120
第84図	I区土器ほか実測図⑤ (S = 1 / 3) .....	121
第85図	I区土器ほか実測図⑥ (S = 1 / 3) .....	123
第86図	I区土器ほか実測図⑦ (S = 1 / 3) .....	124
第87図	I区土器ほか実測図⑧ (183 ~ 202 : S = 1 / 3, 203 ~ 204 : S = 1 / 2) .....	125
第88図	I区石器実測図① (1 ~ 2 : S = 1 / 2, 3 ~ 7 : S = 2 / 3) .....	132
第89図	I区石器実測図② (8 ~ 16 : S = 1 / 2, 17 : S = 2 / 3) .....	133
第90図	I区石器実測図③ (18 ~ 19 ~ 20 : S = 1 / 2, 21 ~ 26 : S = 2 / 3) .....	134
第91図	I区石器実測図④ (S = 2 / 3) .....	135
第92図	I区石器実測図⑤ (45 ~ 59 : S = 2 / 3, 60 ~ 65 : S = 1 / 3) .....	137
第93図	I区石器実測図⑥ (S = 1 / 3) .....	138
第94図	I区石器実測図⑦ (S = 1 / 3) .....	139
第95図	I区石器実測図⑧ (S = 1 / 3) .....	140
第96図	I区石器実測図⑨ (S = 1 / 3) .....	141
第97図	I区石器実測図⑩ (90 ~ 97 : S = 1 / 3, 98 ~ 99 ~ 100 : S = 1 / 2) .....	142
第98図	暦年較正年代グラフ .....	148
第99図	試料採取土器実測図 (S = 1 / 3) .....	149
第100図	G区遺物分布図① (S = 1 / 800) .....	152
第101図	G区遺物分布図② (S = 1 / 800) .....	153
第102図	G区遺物分布図③ (S = 1 / 800) .....	154

## 表 目 次

第1表 権現脇遺跡の調査履歴	1
第2表 F区土器ほか観察表	19
第3表 F区石器観察表	20
第4表 G区土器ほか観察表①	59
第5表 G区土器ほか観察表②	60
第6表 G区土器ほか観察表③	61
第7表 G区土器ほか観察表④	62
第8表 G区土器ほか観察表⑤	63
第9表 G区土器ほか観察表⑥	64
第10表 G区土器ほか観察表⑦	65
第11表 G区土器ほか観察表⑧	66
第12表 G区土器ほか観察表⑨	67
第13表 G区土器ほか観察表⑩	68
第14表 G区土器ほか観察表⑪	69
第15表 G区土器ほか観察表⑫	70
第16表 G区石器観察表①	92
第17表 G区石器観察表②	93
第18表 G区石器観察表③	94
第19表 G区石器観察表④	95
第20表 G区石器観察表⑤	96
第21表 H区土器ほか観察表	104
第22表 H区石器観察表	109
第23表 I区土器ほか観察表①	126
第24表 I区土器ほか観察表②	127
第25表 I区土器ほか観察表③	128
第26表 I区土器ほか観察表④	129
第27表 I区土器ほか観察表⑤	130
第28表 I区石器観察表①	143
第29表 I区石器観察表②	144
第30表 測定試料及び処理	145
第31表 測定結果	146
第32表 G区出土遺物内訳（出土位置記録分）	151
第33表 G区出土土器時期別内訳（出土位置記録分）	151
第34表 G区縄文時代後期～突帯文期出土土器器種別内訳（出土位置記録分・抜粋）	151

## 図版目次

図版1	椎現脇遺跡と平成新山	157
図版2	試掘・確認調査①	158
図版3	試掘・確認調査②	159
図版4	試掘・確認調査③	160
図版5	赤松谷川3号導流堤（手前）・2号導流堤（奥）とF区	161
図版6	F区全景、F区IV層上面	162
図版7	F区78-b・d列西壁土層、F区遺物出土状況	163
図版8	F区土器ほか①	164
図版9	F区土器ほか②	165
図版10	F区土器ほか③・石器	166
図版11	平成新山とG区	167
図版12	赤松谷川2号導流堤とG区	168
図版13	G区全景、G区IV層上面	169
図版14	G区土層	170
	H38-a西壁、H38-b北壁	
図版15	G区雲仙普賢岳平成噴火火山灰堆積状況	171
	タバコ烟畝間の火山灰堆積、火山灰堆積拡大	
図版16	G区遺構検出状況①	172
	掘立柱建物、溝（北から）、土坑1（南から）	
図版17	G区遺構検出状況②	173
	土坑2（東から）、土坑2内炭化物出土状況（南から）、土坑3（南から）、 土坑4（東から）、土坑5（東から）、土坑6（南から）	
図版18	G区倒木痕検出状況	174
	G40検出倒木痕（東から）、F41-b検出倒木痕（東から）	
図版19	G区遺物検出状況	175
	H37-a・c列IIIb上層（南から）、40列IIIb下層（南から）	
図版20	G区遺物出土状況①	176
図版21	G区遺物出土状況②	177
図版22	G区遺物出土状況③	178
図版23	G区土器ほか①	179
図版24	G区土器ほか②	180
図版25	G区土器ほか③	181
図版26	G区土器ほか④	182
図版27	G区土器ほか⑤	183
図版28	G区土器ほか⑥	184

図版29	G区土器ほか⑦	185
図版30	G区土器ほか⑧	186
図版31	G区土器ほか⑨	187
図版32	G区土器ほか⑩	188
図版33	G区土器ほか⑪	189
図版34	G区土器ほか⑫	190
図版35	G区土器ほか⑬	191
図版36	G区土器ほか⑭	192
図版37	G区土器ほか⑮	193
図版38	G区土器ほか⑯	194
図版39	G区土器ほか⑰	195
図版40	G区土器ほか⑱	196
図版41	G区土器ほか⑲	197
図版42	G区土器ほか⑳	198
図版43	G区土器ほか㉑	199
図版44	G区土器ほか㉒	200
図版45	G区土器ほか㉓	201
図版46	G区土器ほか㉔	202
図版47	G区土器ほか㉕	203
図版48	G区土器ほか㉖	204
図版49	G区土器ほか㉗	205
図版50	G区土器ほか㉘	206
図版51	G区土器ほか㉙	207
図版52	G区土器ほか㉚	208
図版53	G区土器ほか㉛	209
図版54	G区土器ほか㉜	210
図版55	G区土器ほか㉝	211
図版56	G区土器ほか㉞	212
図版57	G区土器ほか㉟	213
図版58	G区土器ほか㉟	214
図版59	G区土器ほか㉟	215
図版60	G区土器ほか㉟	216
図版61	G区石器①	217
図版62	G区石器②	218
図版63	G区石器③	219
図版64	G区石器④	220
図版65	G区石器⑤	221

図版66 G区石器⑥	222
図版67 G区石器⑦	223
図版68 G区石器⑧	224
図版69 G区石器⑨	225
図版70 G区石器⑩	226
図版71 眉山とH区、H区西半部Ⅳ層上面、H区東半部Ⅳ層上面	227
図版72 H区全景、石列（西から）、土坑（北から）	228
図版73 H区土器ほか①	229
図版74 H区土器ほか②	230
図版75 H区土器ほか③	231
図版76 H区土器ほか④	232
図版77 H区土器ほか⑤	233
図版78 H区石器①	234
図版79 H区石器②	235
図版80 平成新山とI区	236
図版81 赤松谷川2号導流堤とI区	237
図版82 眉山とI区	238
図版83 I区全景	239
図版84 I区Ⅲb下層上面、I区Ⅲb下層上面竹根検出状況、I区Ⅳ層上面	240
図版85 I区土層 調査区西壁（北東から）、東西方向ベルト（南から）	241
図版86 I区遺構検出状況 大型土坑群（南から）、溝（北から）	242
図版87 I区Ⅲb上層遺物検出状況 C47-b・d（西から）、D47（西から）	243
図版88 I区Ⅲb下層遺物検出状況 調査区北西部（南から）、調査区南西部（南から）	244
図版89 I区遺物出土状況	245
図版90 I区作業状況	246
図版91 I区土器ほか①	247
図版92 I区土器ほか②	248
図版93 I区土器ほか③	249
図版94 I区土器ほか④	250
図版95 I区土器ほか⑤	251
図版96 I区土器ほか⑥	252
図版97 I区土器ほか⑦	253
図版98 I区土器ほか⑧	254

図版99	I 区土器ほか⑨	255
図版100	I 区土器ほか⑩	256
図版101	I 区土器ほか⑪	257
図版102	I 区土器ほか⑫	258
図版103	I 区土器ほか⑬	259
図版104	I 区土器ほか⑭	260
図版105	I 区石器①	261
図版106	I 区石器②	262
図版107	I 区石器③	263
図版108	I 区石器④	264
図版109	I 区石器⑤	265
図版110	I 区石器⑥	266

# 第Ⅰ章 はじめに

## 1 調査に至る経緯

国土交通省九州地方整備局雲仙復興事務所により水無川上流右岸資材搬入路工事が計画された。この工事は、雲仙普賢岳平成噴火の沈静化以降、継続的に赤松谷川・水無川流域一帯で施工されている砂防事業にあたって、資材の運搬を目的とした道路を建設するものである。路線計画は、大野木場監視所（砂防みらい館）前を始点として、すでに完成していた3基からなる赤松谷川導流堤の外側に沿う形で上流のほうへと進み、最終的には3号導流堤に乗り上げるというものであった。このことを受け、雲仙復興事務所と南島原市教育委員会が協議を行い、市教育委員会が調査主体となって工事計画地における発掘調査を実施することになった。

南島原市教育委員会は、事業計画地において試掘・範囲確認調査を実施し、遺物包含層が良好に残存していると判断されたF・G・H区の約2,000m<sup>2</sup>について本調査の実施が必要であると判断した。またその後、赤松谷川2号導流堤基部付近において、運搬車両が行き違いを行なうための待避所が必要となったため、I区約800m<sup>2</sup>の追加の本調査が必要であると判断した。

## 2 過去の調査

権現脇遺跡においては、これまでに3次にわたる本発掘調査が実施されている。いずれも国土交通省雲仙復興事務所が事業主体の赤松谷川・水無川流域における砂防工事に伴うものである。発掘調査の主体は、第1次発掘調査及び第2次発掘調査が旧深江町教育委員会、第3次発掘調査が南島原市教育委員会である。

第1次調査（A～C区）は、赤松谷川1号・2号導流堤建設に伴うもので、全体として遺構の検出に乏しかったものの、B区においては突宍文期の小兒土器墓の検出があり、A区においては頭部横に11個の土師皿を副葬する中世土坑墓の検出がある。遺物としては縄文時代・弥生時代移行期の出土に恵まれている。また、調査地全域で縄文期の眉山噴火による権現脇火碎サージの堆積が確認され、火碎流の爆風によって形成された多くの倒木痕が検出されている。

第2次調査（D区）は、赤松谷川2号砂防堰堤の建設に伴うもので、樹状遺構等の近世期の遺構に加え、縄文時代早期末に位置づけられる妙見・天道ヶ尾式土器が出土するなどの成果が上がっている。

第3次調査（E区）は、赤松谷川1号床固工建設によるもので、縄文時代晚期から弥生時代初頭の良好な遺物の出土と縄文時代晚期の土器墓2基の検出がある。

第1表 権現脇遺跡の調査履歴

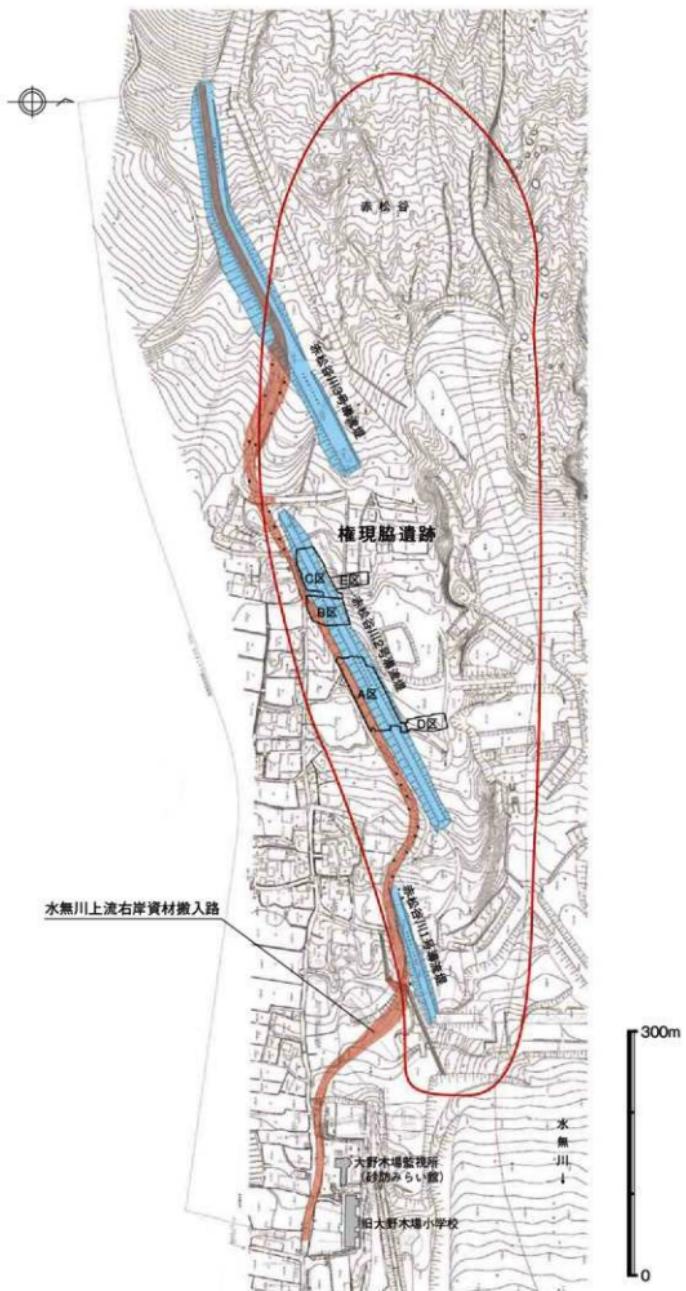
調査年度	調査種別	調査地	調査区名	調査面積	調査結果	書類
H14	試掘・範囲確認調査	赤松谷川2号導流堤	-	80m <sup>2</sup>	2m×2mの試掘坑20ヶ所	
H14～H15	本調査（1次）	赤松谷川2号導流堤	A・B・C区	7,287m <sup>2</sup>	主に縄文・弥生移行期の遺物出土。	深江町文化財調査報告書第2集「権現脇遺跡」(2006)
H16	本調査（2次）	赤松谷川2号堰堤	D区	870m <sup>2</sup>	樹状遺構検出。縄文早期の遺物出土。	
H18	本調査（3次）	赤松谷川1号床固工	E区	750m <sup>2</sup>	主に縄文・弥生移行期の遺物出土。	南島原市文化財調査報告書第1集「権現脇遺跡」(2007)
H18	試掘・範囲確認調査	水無川上流右岸資材搬入路	-	96m <sup>2</sup>	2m×2mの試掘坑24ヶ所	
H19～H20	本調査（4次）	水無川上流右岸資材搬入路	F・G・H・I区	3,062m <sup>2</sup>	主に縄文・弥生移行期の遺物出土。 近世初頭の樹立柱建物検出。	本報告

【参考文献】

- 本多 和典 編 2006 「椎現脇遺跡」深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会  
本多 和典 編 2007 「椎現脇遺跡－赤松谷川1号床固工工事に伴う発掘調査－」南島原市文化財調査報告書第  
1集 南島原市教育委員会



第1図 椎現脇遺跡の位置 ( $S = 1/10,000$ )



第2図 工事計画と過去の調査区 ( $S = 1/6,000$ )

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 地理的環境

権現脇遺跡の位置する島原半島は、九州島の北西部に位置し、西岸が橘湾に、東岸が有明海（島原湾）に面している。半島の中央には、普賢岳（1,359m）、国見岳（1,347m）、妙見岳（1,333m）、野岳（1,142m）、九干部岳（1,062m）といった雲仙山系の20を超える山々がそびえる。行政区域としては南島原市、雲仙市、島原市の3市からなり、南東部が南島原市、北西部が雲仙市、北東部が島原市という位置関係にある。海上交通という目でみると、南島原市は有明海に面しており、市域南端である口之津は、早崎の瀬戸を挟んで熊本県の天草鬼池とは4.4kmの近距離にあり、そこを抜けければ東シナ海へと通じる環境である。

権現脇遺跡は、南島原市の最北部である深江町の上大野木場に所在し、遺跡の一部は島原市にもまたがる。200mを超える標高域に展開しており、有明海をはさんで対岸には、熊本平野や宇土半島を展望できる。

遺跡は雲仙普賢岳の東麓に位置するが、普賢岳は平成2（1990）年11月17日、198年ぶりに噴火し、その後、平成7（1995）年まで噴火活動を続けた。山頂に出現した溶岩ドームは、成長と崩落を繰り返し、火碎流となって東斜面を駆け下った。権現脇遺跡周辺においても旧大野木場小学校をはじめ、多くの家屋が焼失している。現在、山頂に残った溶岩ドームは、普賢岳に代わる雲仙の新たな主峰として平成新山（標高1,483m）と命名され、平成16（2004）年には国の天然記念物にも指定されている。

### 2 歴史的環境

権現脇遺跡の周辺遺跡を深江町域において概観する。近年、は場整備事業などの開発事業の増加に伴って特に縄文時代から突帯文期にかけての遺跡の調査事例が蓄積されつつある状況である。

旧石器時代の遺跡は、今までのところ確認されていない。深江町各地においては厚い土石流堆積物が基盤層として確認されており、およそ1万年前ころと考えられる雲仙山系の活発な噴火活動によって町域の大部分が埋没したものと推定される。

そうして形成された火山性の扇状地が土台となって縄文時代早期以降、遺跡の展開がみられるようになる。分布は大きく3つに分かれる。権現脇遺跡や山ノ寺梶木遺跡のように山岳急斜面から緩斜面へと移行する標高200m程度の地形変換点付近に立地する遺跡、大坂遺跡、古作遺跡、下末宝遺跡のように深江川水系一帯に立地する遺跡、それから諏訪ノ上遺跡のように海岸に近い扇端部に立地する遺跡である。そして、水資源に乏しい扇央部は、遺跡の空白地帯となっている。

山ノ寺梶木遺跡は、突帯文土器「山ノ寺式土器」の標識名になっていることでも知られる。日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会や百人委員会による調査が実施されており、縄文時代晚期から突帯文期の遺物の出土がある。

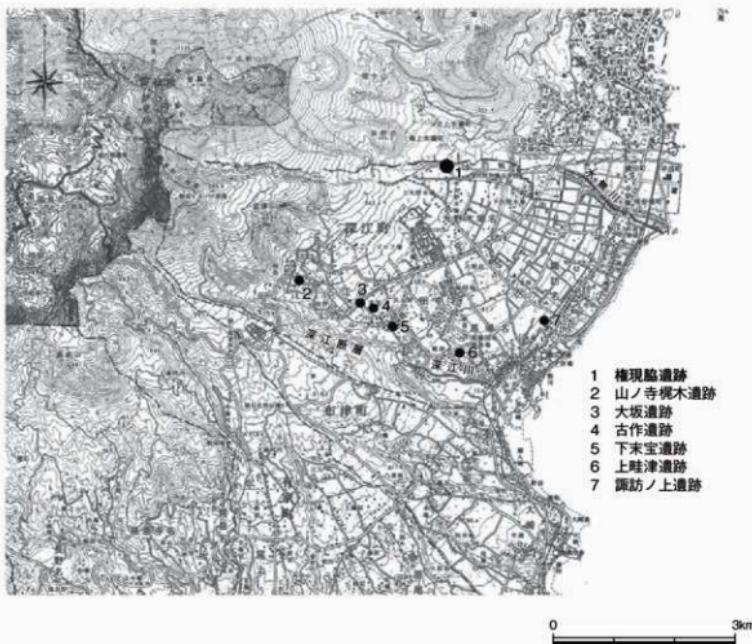
古江・田中地区は場整備事業においては、下末宝遺跡、上畦津遺跡の調査が実施されている。下末宝遺跡においては、多数の押型文土器とそれに伴う石器群の出土がある。上畦津遺跡においては、縄文時代早期、円筒形条痕文土器の出土がある。

道路改良工事に伴う大坂遺跡の調査では、縄文時代早期土器や縄文時代晩期土器の出土がある。同じく、道路改良工事に伴う古作遺跡の調査では、縄文時代早・前期に位置づけられる円筒形条痕文土器、塞ノ神式土器、轟式土器、縄文時代後期の土器などが出土している。

諏訪地区は場整備事業に伴って実施された諏訪ノ上遺跡の発掘調査では、刻目突帯文土器、丹塗壺、紡錘車、打製石斧など、突帯文期の充実した資料が得られている。

#### 【参考文献】

- 深江町郷土誌編さん委員会 1971 「深江町郷土誌」 深江町  
古田 正隆 1973 「山の寺桙木遺跡」 百人委員会埋蔵文化財報告書第1集 百人委員会  
本多 和典編 2005 「下末宝遺跡・上畦津遺跡」 深江町文化財調査報告書第1集 深江町教育委員会  
本多 和典編 2006 「椎現臨遺跡」 深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会  
本多 和典 2007 「椎現臨遺跡」 南島原市文化財調査報告書第1集 南島原市教育委員会  
本多 和典 2018 「古作遺跡」 南島原市文化財調査報告書第10集 南島原市教育委員会  
小川 康晴編 2018 「大坂遺跡」 南島原市文化財調査報告書第16集 南島原市教育委員会  
本多 和典 2020 「諏訪ノ上遺跡」 南島原市文化財調査報告書第20集 南島原市教育委員会



第3図 椎現臨遺跡と周辺遺跡 (S = 1/8,000)

## 第Ⅲ章 試掘・範囲確認調査

### 1 調査坑の設定と調査の方法

計画された水無川上流右岸資材搬入路工事は、全長1,520mを測るもので、調査坑の設定にあたっては、残存地形を考慮しながら任意の地点を選定した。調査坑の平面は2m四方で、すべて人力での掘削である。

事業計画地の大部分が雲仙普賢岳の平成噴火前は畠地であった地点で、噴火鎮静後は国有地化されてしまらぐの間放置されていたためにメダケの竹林や荒蕪地になっているところ、緊急災害対策工事による工事用道路造成などがなされたところ、導流堤の縁辺であったため導流堤法面から崩落・流失した土砂が堆積しているところなどがあり、試掘・範囲確認調査を実施するにあたっては、調査坑の設定にいくぶんかの制限があった。平成噴火災害以前の地割が残存して確認できるところにおいては、極力削平や造成の可能性が少ないのであると判断される地点に調査坑を設定し、地下の遺跡情報の収集により有効な調査地の選定に努めた。そのため、多くの調査坑はメダケの竹林や雜木林の中に設定することが多かった。竹林の場合は密集して繁茂している状況で、特に地下茎が縦横に走ってそこから根を張る状態であったため、表土の掘削にはかなりの困難を伴い、また、一部では少なからず遺物包含層や遺構面への影響も見られた。遺構の検出は、すべてまず半裁して深度や断面形状、遺物の出土状況などを検討しながら掘削し、人為的遺構か否かの判断を行った。また、掘削完了後、壁面土層の写真撮影と実測図作成を行った。

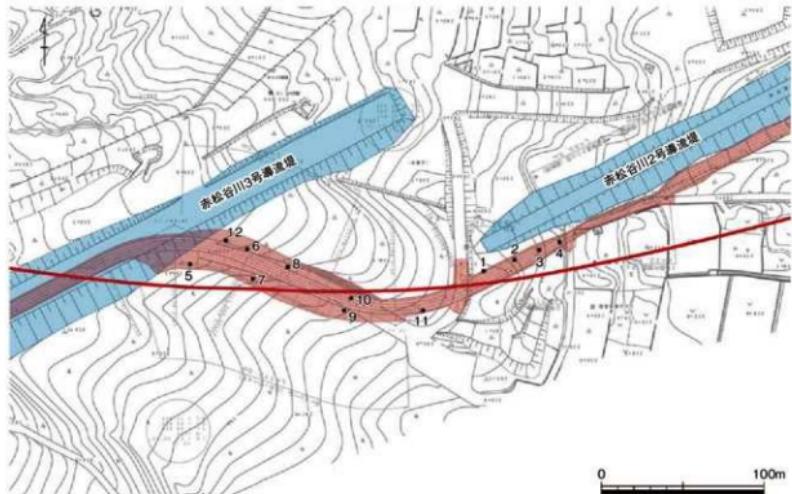
### 2 調査成果

調査の結果、試掘・範囲確認調査における土層は、以下の通りであった。

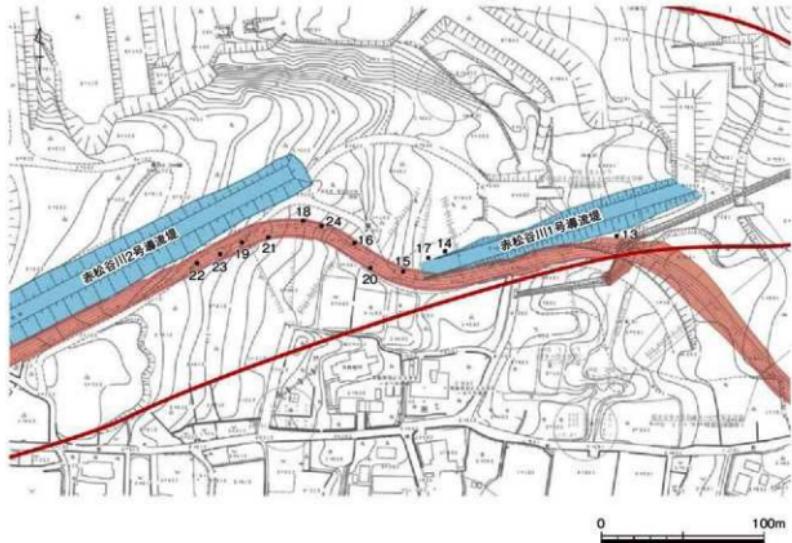
- 0 層 雲仙普賢岳平成噴火の火山灰層。
- I 層 暗褐色土。平成噴火以前の耕作土。
- II 層 暗褐色土。近世以降の造成土。小礫を多量に含み、下位になるほど色調が暗くなる。
- III a 層 黒色土。礫の混入がなく、しまりがない。
- III b 層 暗褐色土。縄文時代末～弥生時代初頭の遺物包含層。
- IV 層 浅黄褐色火山灰。下位に白灰色火山灰が認められる場合もある。權現脇火碎サージ。
- V a 層 黄色土。小礫を多量に含む。
- V b 層 褐色土。小礫を多量に含む。
- VI 層 黒色土。軽石状の小礫を多量に含む。
- VII 層 砂礫層。

24か所の調査坑のうち、TP. 6, TP. 12, TP. 14, TP. 18, TP. 19, TP. 21～24の各調査坑においてIII b層を主体に縄文時代末から弥生時代初頭のまとまった遺物の出土をみた。主な遺物としては、粗製深鉢、精製浅鉢、刻目突帯文土器、打製石斧などがある。また、TP. 14, TP. 22, TP. 24のIV層上面においてはビットの検出がみられ、さらにTP. 14のIV層上面で集石を検出した。

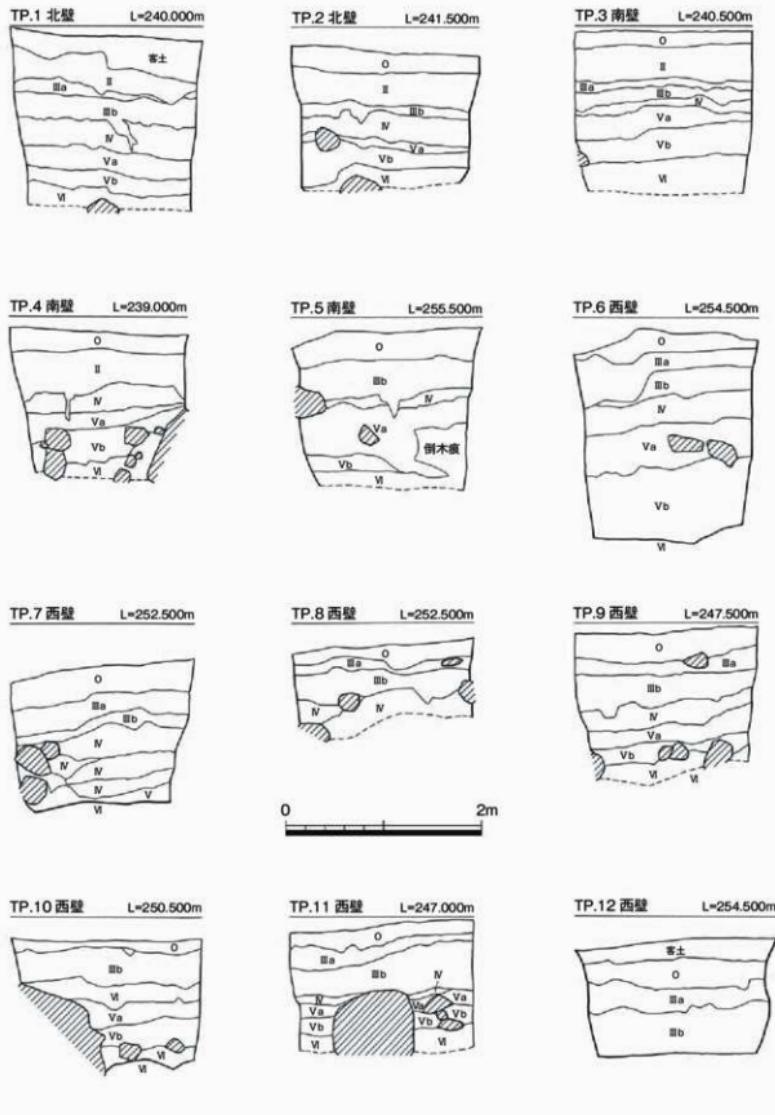
以上の各調査坑における成果をもとに、F区約200m<sup>3</sup>, G区約1,000m<sup>3</sup>, H区約800m<sup>3</sup>の計約2,000m<sup>3</sup>について本調査実施が必要であると判断した。また、その後対向車両との行き違いに退避所が必要となり、赤松谷川2号導流堤の海側端部付近においてI区約800m<sup>3</sup>の本調査を実施することとなった。



第4図 調査坑配置図① ( $S = 1/3,000$ )

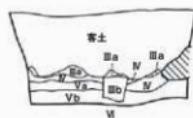


第5図 調査坑配置図② ( $S = 1/3,000$ )

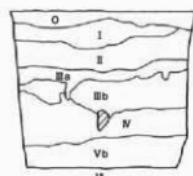


第6図 調査坑土層実測図① (S = 1 /50)

TP.13 南壁 L=204.000m



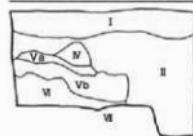
TP.14 南壁 L=205.000m



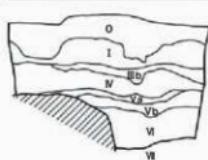
TP.15 南壁 L=206.000m



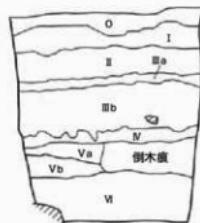
TP.16 東壁 L=209.000m



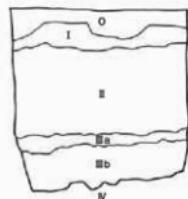
TP.17 南壁 L=205.000m



TP.18 南壁 L=213.000m



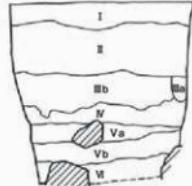
TP.19 南壁 L=216.000m



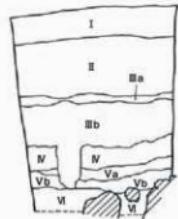
TP.20 北壁 L=208.500m



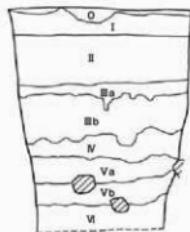
TP.21 南壁 L=214.500m



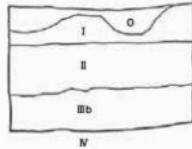
TP.22 西壁 L=216.000m



TP.23 南壁 L=216.000m



TP.24 南壁 L=212.000m



第7図 調査坑土層実測図② (S = 1 / 40)

## 第IV章 本調査

### 1 調査区の設定と調査の方法

本調査は、試掘・範囲確認調査の結果をふまえて設定したF区、G区、H区の3つの調査区との工事計画の変更によって設定したI区を対象として実施した。

各調査区にはメダケや樹木、クズなどの雑草が広く繁茂している状況であったので、まずそれらの伐採、刈り取りから着手した。作業の一部については、(社)南島原市シルバー人材センターに委託を行った。伐採・刈り取りの作業が終了次第、調査区の範囲を設定し、重機を用いて表土剥ぎを行った。

表土剥ぎののち、調査区壁面及び掘削面の清掃を行い、調査区内に4m四方のメッシュ杭を設定し、調査グリッドとした。グリッド名称については、平成14年度を皮切りに断続的に実施してきた推現脇遺跡の調査と整合するものとした。すなわち、旧測地系X = -28136、Y = 78168を基準とする地点を原点A 1とし、8mごとにアルファベットとアラビア数字を順に割り振り、両者の組み合わせによって地点名を決定し、その上で、各グリッドの北西角の地点名をもって大グリッド名称とした。加えて、この8mグリッドをさらに十字に分割した4m四方を小グリッドとし、北西部、北東部、南西部、南東部にそれぞれa、b、c、dのアルファベット小文字を小グリッド名称として与えた。

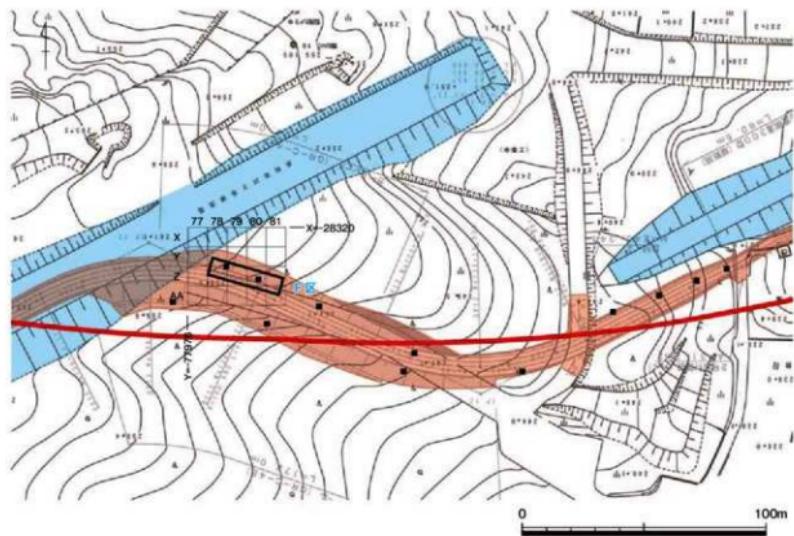
掘削調査にあたっては、必要に応じて大グリッド程度を目安として、土層観察用ベルトを設定して残存させ、堆積状況を確認した。ベルトは、グリッド境界線を中心として南北、東西にそれぞれ25cmを確保して幅50cmで設定し、調査の進行に伴って不要と判断すれば取り除いた。

遺物包含層の掘削は、小グリッドを単位として各層位ごとに行い、下位層上面まで達した時点で遺構の有無を確認し、写真で検出状況を記録した上でその後遺構の掘削を行った。包含層中の遺物については、基本的に小グリッドごとに層位別に一括して取り上げを行ったが、G区及びI区のⅢ b上・下層については、一部削平などの影響が見られたものの良好な出土状況であることが確認されたことから、遺物1点ごとに出土地点の座標観測による記録を行い、個別に取上番号をふって取り上げを行った。

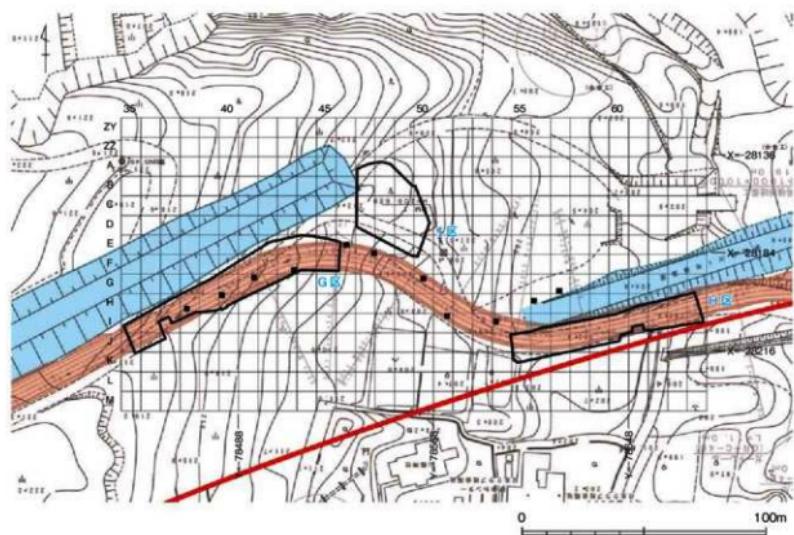
遺構の掘削については、基本的に半裁して深さや形状、覆土の状況、遺物や炭化物などの包含の状況などを確認して完掘した。特段の注意事項があるものについては、個別に記録・図化を行った。また、特に検出平面の大きいものなどについては、4分の1あるいは6分の1ずつ掘削し、必要に応じて個別に記録・図化を行った。

遺構配置図の図化にあたっては、各調査区、検出面ごとに行つたが、すべての検出遺構について、それが人為的なものであるか、人為的であっても、削平の関係で本来の生活面を異にするものではないか、あるいは植物根の下位層への侵入やそれによる周辺土壤への土色の変調、大風による倒木痕など、自然営力によるものなのかといった点を検出状況から可能な限り判断し、遺構配置図への記録を行つた。土層実測図については、最終的に16m四方程度の土層観察ベルトを残し、掘削調査が完了した段階で調査区壁面とあわせて図化作業を行つた。基本的にはベルトの南側と東側、すなわち行・列の北壁と西壁についての作図である。

なお、調査終了後は間をおかず工事に取りかかる予定であったため、埋め戻しは行わず、完掘の状態で現地引き渡しを行つた。



第8図 本調査区の範囲とグリッド設定① ( $S = 1/2,000$ )



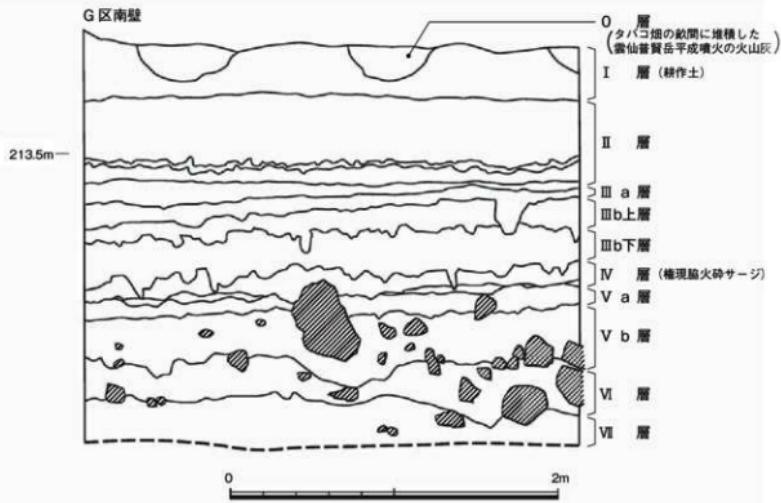
第9図 本調査区の範囲とグリッド設定② ( $S = 1/2,000$ )

## 2 基本土層

F区～I区の本調査において、以下の基本土層が確認できた。

- 0 層 雲仙普賢岳平成噴火による火山灰。
- I 層 暗褐色土。耕作土。
- II 層 暗褐色土。近世以降の造成土。
- III a 層 黒色土。弥生時代中期～中世の遺物包含層。
- III b 上層 暗褐色土。縄文時代後・晩期～弥生時代早・前期の遺物包含層。
- III b 下層 褐色土。縄文時代後・晩期～弥生時代早・前期の遺物包含層。
- IV 層 浅黄橙色火山噴出物。椎現脇火碎サージ（眉山起源）。
- V a 層 明黄褐色土。縄文時代早期の遺物包含層。
- V b 層 黑褐色土。縄文時代早期の遺物包含層。
- VI 層 黒色土。
- VII 層 灰赤色・浅黄色半固結砂礫。土石流堆積物。

基本的には試掘・範囲確認調査及び過去の本調査と変わらないものであるが、縄文時代後・晩期から突帯文期にかけての主要な遺物包含層であるIII b層については、明暗の差から上層と下層とに分離が可能であった。G区においては、雲仙普賢岳の平成噴火当時まで葉タバコの栽培が行われていたため、調査区の壁面にはタバコ畑の畝が断面として観察された。また畝間にはおもに火碎流から降下したと考えられる火山灰の堆積が認められた。



### 3 F区の調査成果

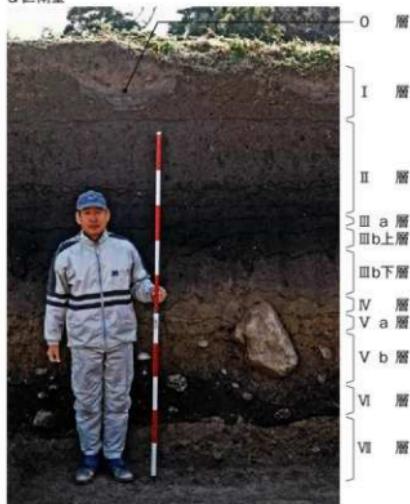
#### (1) 土層と遺構

今回の工事計画において、F区は赤松谷川3号導流堤への乗り上げ部分にあたり、東西30.0m、南北7.2mの面積213m<sup>2</sup>の調査区である。今回の本調査区を含め、これまで権現脇遺跡において実施されてきた本調査区の中ではもっとも山手に位置する。標高は250mを超える地点である。

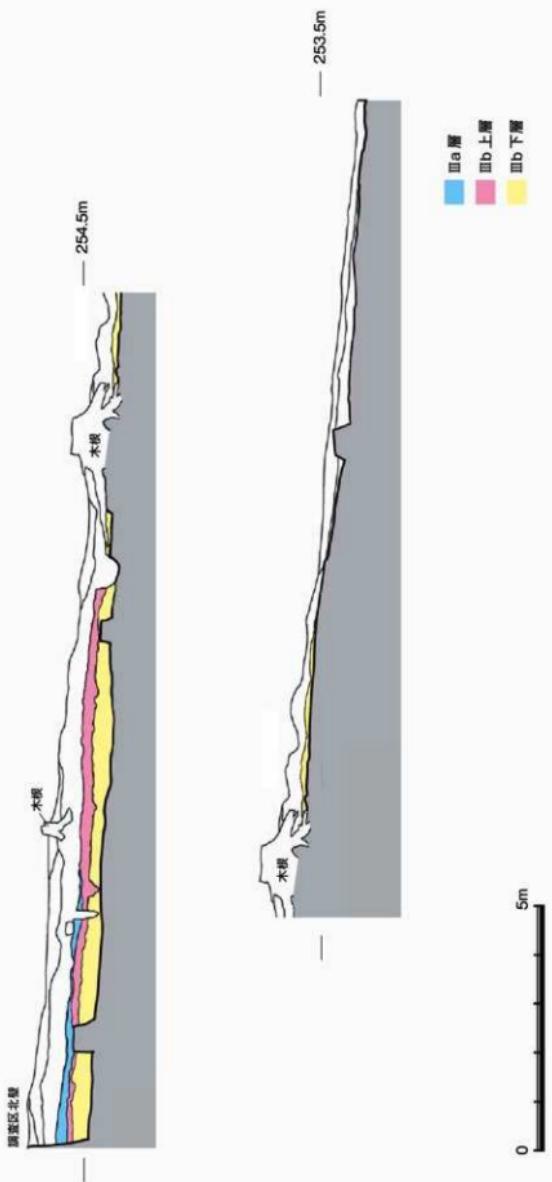
調査区の南半部は雲仙普賢岳噴火災害以降の緊急的な工事用道路の建設によって大きく搅乱を受けしており、路面に碎石材が厚く造成されている状況であった。表土剥ぎ時に重機による掘削を試みたが、長期間にわたって大型運搬車両が通行したことによって非常に硬くしまっており、また搅乱が主要な遺物包含層よりもさらに下位まで深く達していることが確認できたため、除去は断念した。

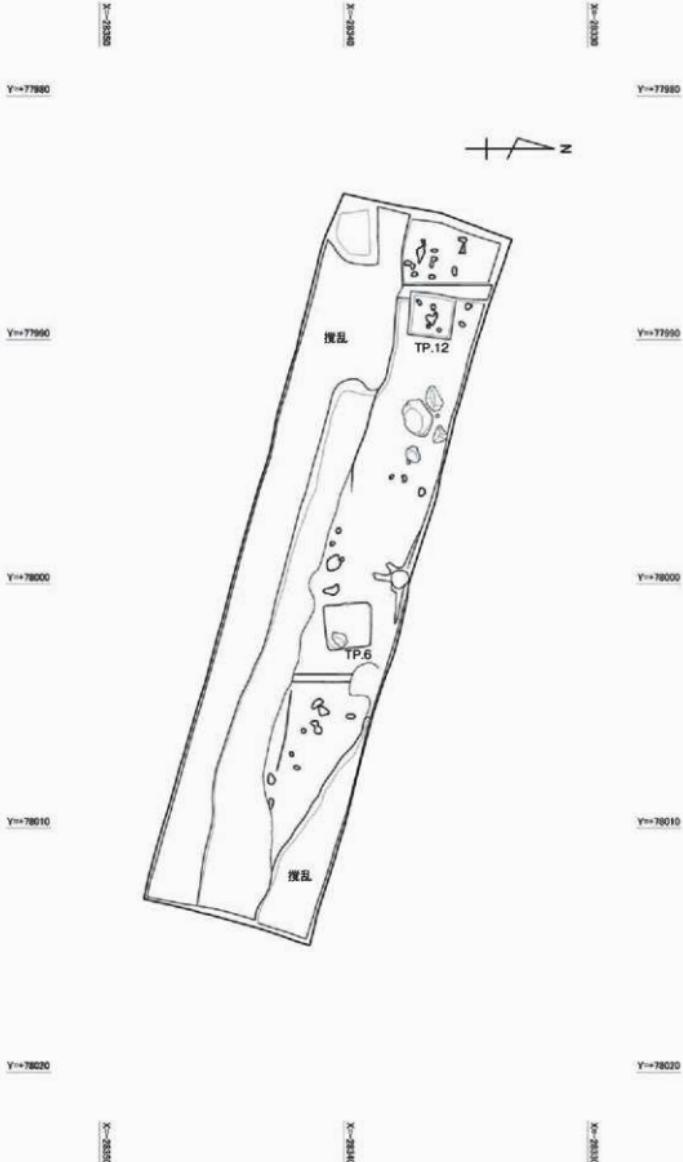
土層としては、山手の西半部ではⅢ a 層、Ⅲ b 上層、Ⅲ b 下層の堆積が確認された。Ⅲ a 層及びⅢ b 上層が各10~20cm、Ⅲ b 下層が約40cmの厚層である。海手の東半部では後世の削平がIV層上面あるいはそれ以下にまで及んでいている状況であった。よって遺物の出土も主に山手、東半部からのものである。遺構としては、特筆するものの検出はみられなかった。

G区南壁

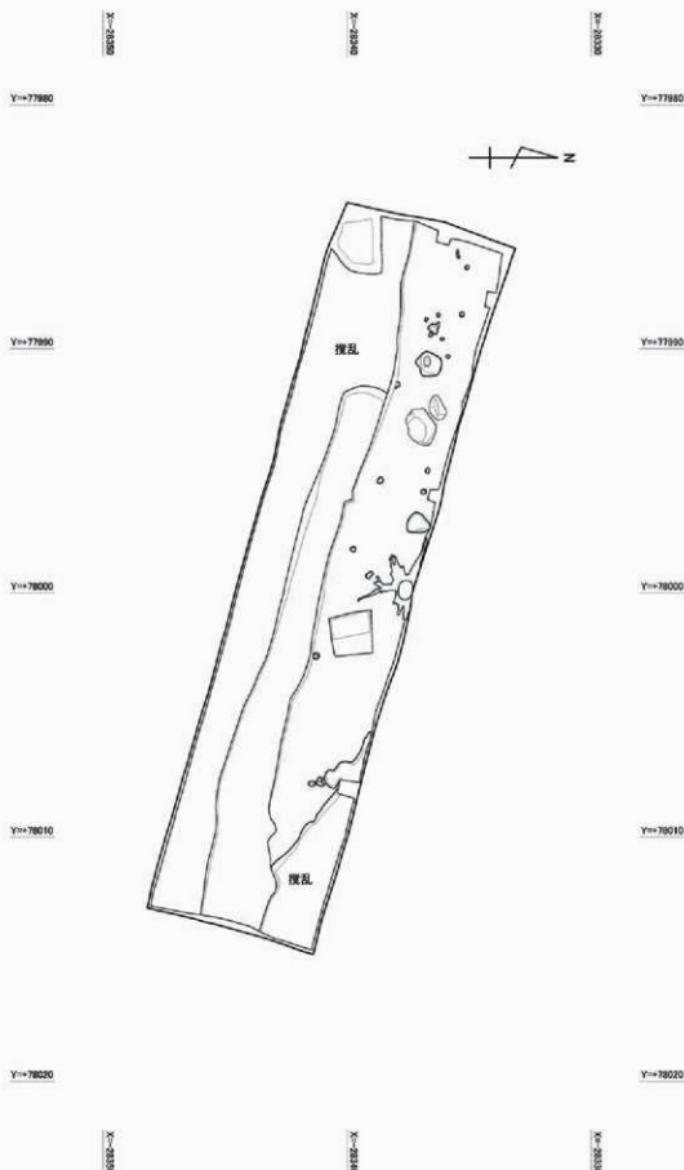


第11图 F区土层实测图 ( $S = 1/100$ )





第12図 F区III b下層上面遺構配置図 (S = 1/200)



第13図 F区N層上面造構配置図 ( $S = 1/200$ )

## (2) 出土遺物

### 土器ほか

1～34は縄文時代後・晩期の資料、35は中世の資料である。

1～27は深鉢の資料である。

1は内外面ともに貝殻条痕調整のちにナデ調整を施す。2は内外面ともに貝殻条痕調整を残す。

3はやや外傾する。4は内外面ともに貝殻条痕調整が認められ、口唇部上面はナデ調整によって平坦である。

5～12はいわゆるタガ状口縁の資料で、いずれも長大化して外傾し、外面の沈線は多条化している。

5・6は内面に稜を作り、それより上位の内面は研磨調整を施す。9の外面は施文後にナデ調整を行っており、沈線が曖昧になっている。

13～18は黒川式期にみられる深鉢で、胴部で屈曲して肩部を作るか、もしくは胴で膨らんでその上位でいったんすぼまり、口縁部が外反・外傾する器形のものである。13は薄手の作りで、内外面ともに貝殻条痕調整のちナデ調整を行う。外面に炭化物の付着が認められる。14も薄手の器壁である。15は外面に貝殻条痕調整を残す。

16は小型品で、櫛原式系の文様と考えられる弧状の沈線文が施されている。外面に炭化物の付着がある。17・18は間隔の広い平行沈線を外面にもつ資料である。18は外面の施文帯最下位に段を設ける。

19は口唇部に突帯を貼り付ける資料で、互い違いにヘラ状の工具によって刻目を施している。内外面ともに横方向の擦過調整で、傾きについては外傾する可能性もある。20は胴屈曲部の資料である。外面は、屈曲より上位には縱方向の、下位には横方向の貝殻条痕調整が認められる。21は胴部下位の資料である。外面は研磨調整、内面は丁寧なナデ調整であり、おそらく口縁部はタガ状口縁となるものであろう。

22～27は底部の資料である。復元底径は、22が9.2cm、23が11.2cm、24が9.6cm、27が8.8cmである。22の底部内面は平坦である。25は薄手の作りで、胎土には3mm以下程度の礫を多く含む。26・27は厚手の底面で、断面の外側への張り出しが強い。

28～34は浅鉢の資料である。

28は外反して口唇部は丸縁となり、外面には沈線を1条引く。29・30は胴部から頸部にかけての資料で、胴部から屈曲していったん肩を作り、頸部は大きく外反する。31は短い頸部に内面に段をもつた口縁部がつく。32・33はおそらく扁球状の胴部をもつ浅鉢と思われ、短く外へ立ち上がる頸部に丸縁の口縁部がつき、口縁部外面には沈線1条を引く。34は組織痕土器で、外面に目の広い網目の圧痕が認められる。

35は青花皿、端反りの口縁部である。外面には唐草文、内面には四方擗文が描かれる。



第14図 F区土器ほか実測図 (1~34: S = 1/3, 35: S = 1/2)

第2表 F区土器ほか観察表

回	番号	取上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調	地土	備考
						外面	内面			
1	-	深鉢	278-c	Ⅱb下	貝徳条痕・ナデ	貝徳条痕・ナデ	にふい済褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
2	-	深鉢	278-a	Ⅱb	貝徳条痕	貝徳条痕・ナデ・貝徳条痕	浅青色		角閃石・長石・石英・赤色粒子	
3	-	深鉢	278-b	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
4	-	深鉢	278-a	Ⅱb上	貝徳条痕	貝徳条痕・ナデ	にふい済褐色	灰青色	角閃石・長石・石英	
5	-	深鉢	278-b	Ⅱb下	灰褐色/ナデ・研磨	研磨・ナデ	明赤褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
6	-	深鉢	279-a	Ⅱb下	沈褐色/ナデ・研磨	研磨・ナデ	にふい赤褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英	
7	-	深鉢	279-a	Ⅱb下	灰褐色/ナデ・研磨	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
8	-	深鉢	280-c	Ⅱb下	沈褐色/ナデ	ナデ	にふい済褐色	にふい済褐色	長石・石英	
9	-	深鉢	278-b	Ⅱb下	灰褐色/ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい済褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
10	-	深鉢	279-a	Ⅱb上	沈褐色/ナデ	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
11	-	深鉢	279-a	Ⅱb下	沈褐色/ナデ	ナデ	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
12	-	深鉢	279-a	Ⅱb下	灰褐色/ナデ	ナデ	にふい済褐色	褐色	長石・石英	
13	-	深鉢	278-c	Ⅱb上	貝徳条痕・ナデ	ナデ	にふい済褐色	にふい済褐色	角閃石・長石・石英	
14	-	深鉢	278-a	Ⅱa	貝徳条痕	研磨	にふい済褐色・灰青色	にふい済褐色	角閃石・長石・石英	
15	-	深鉢	278-b	Ⅱb下	貝徳条痕	ナデ	にふい済褐色	にふい済褐色	角閃石・長石・石英	
16	-	深鉢	278-a	Ⅱb上	灰褐色/研磨	ナデ	にふい済褐色	にふい済褐色	角閃石・長石・石英	
17	-	深鉢	280-d	Ⅱb下	沈褐色/ナデ	ナデ	にふい済褐色	明赤褐色・灰青色	長石・石英	
18	-	深鉢	279-a	Ⅱb下	沈褐色/ナデ	ナデ	にふい済褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
19	-	深鉢	278-c	Ⅱb下	削れ/擦過	削過	にふい済褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
20	-	深鉢	278-b	Ⅱb下	貝徳条痕	ナデ	褐色・にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
21	-	深鉢	279-a	Ⅱb下	研磨	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
22	-	深鉢	280-d	Ⅱb下	貝徳条痕・ナデ	ナデ	明赤褐色・にふい褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	前面調整ナデ
23	-	深鉢	278-b	Ⅱb下	ナデ	ナデ	浅青色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	前面調整ナデ
24	-	深鉢	278-b	Ⅱa	ナデ	ナデ	褐色・にふい褐色	にふい済褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	前面調整ナデ
25	-	深鉢	278-c	Ⅱb上	貝徳条痕・ナデ	ナデ	にふい済褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・漂母	前面調整ナデ
26	-	深鉢	278-b	Ⅱb下	貝徳条痕・ナデ	ナデ	にふい済褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	前面調整ナデ
27	-	深鉢	279-a	Ⅱb上	ナデ	削過	にふい済褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	前面調整ナデ
28	-	浅鉢	279-b	Ⅱb下	沈褐色/研磨	研磨	浅青色	浅青褐色	角閃石・石英	
29	-	浅鉢	279-b	Ⅱb下	研磨	研磨	灰青褐色	にふい済褐色・褐灰色	角閃石・長石・漂母	
30	-	浅鉢	278-a	Ⅱa	研磨	研磨	にふい済褐色	にふい褐色	長石・石英	
31	-	浅鉢	278-d	Ⅱb下	研磨	研磨	にふい済褐色	にふい済褐色	角閃石・長石・石英	
32	-	浅鉢	280-d	Ⅱb下	沈褐色/研磨	研磨	にふい済褐色	にふい済褐色・褐灰色	長石・石英	
33	-	浅鉢	279-a	Ⅱb上	沈褐色/研磨	研磨	にふい済褐色・褐灰色	褐色	角閃石・石英	
34	-	浅鉢	279-c	Ⅱb上	貝徳条痕(底付)	研磨	明赤褐色	褐色	長石・石英	
35	-	青花鉢	-	北側	唐草文	四重瓣文	-	-	-	

## 石器

1・2はサスカイトの角礫を素材とした石核である。

1は長軸で12.5cmを測る大型品で、周縁から中心部へと向かって剥片の作出が行われており、背面には大きく自然面を残す。2は全体の2分の1ほどに自然面が残る。上下端部を打ち欠いてその剥離面を作業面とし、長軸方向に向かって剥片の作出が行われている。

3はサスカイト製のスクレイパーである。自然面を打面として作られた先細りの剥片を用い、片方の側刃から末端にかけて調整剥離を行う。

4～13は二次加工のみられる剥片、使用によると考えられる微細な剥離のある剥片である。いずれも黒曜石を素材としている。

4は白色の不純物を多く含む横長の剥片で、直線的な末端部に微細な剥離が認められる。

5～11は縦長の剥片を素材とするものである。5は背面に大きく自然面を残し、両側刃に細かい剥離が認められる。6は先細りとなる剥片で、右側刃の打点近くに連続的な二次加工が認められる。

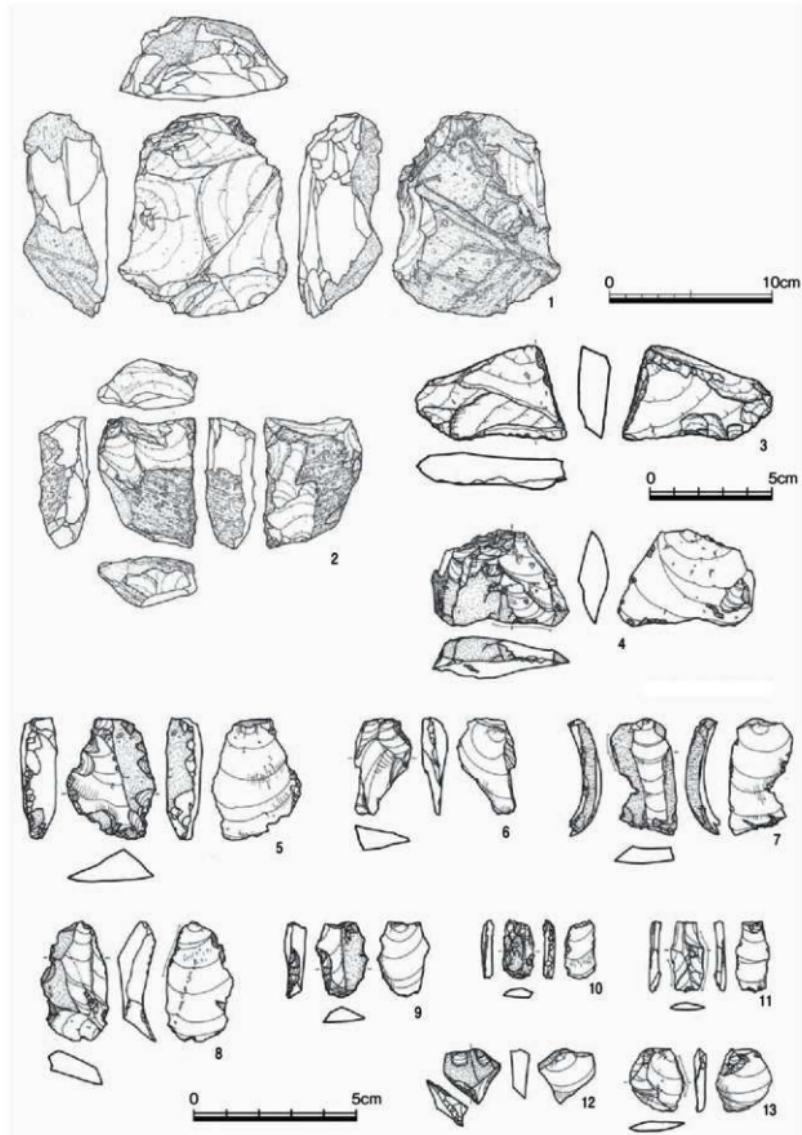
7は背面に縦長剥片の剥離が認められ、両側刃には自然面を残す素材で、左側刃上部に微細な剥離が観察される。8は左側刃に自然面を残し、右側刃上半に微細な剥離が認められる。

9は大きく自然面を残す小ぶりの剥片で、左側刃の下位に二次加工が連続する。10は自然面を一部残す非常に小さい剥片で、両側刃に二次加工とみられる剥離が認められる。11は両側刃に微細な剥離が観察される。

12は自然面を打面として作出した剥片を用い、末端部に連続的な二次加工を施している。13は薄手の剥片で、右側刃に微細な剥離が観察される。

第3表 F区石器観察表

図	番号	取上面番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
15	1	-	石核	サスカイト	Z79-a	Ⅲ b 上	12.5	10.3	5.1	643.5
	2	-	石核	サスカイト	Z80-d	Ⅲ b 下	8.0	6.0	3.1	160.8
	3	-	スクレイパー	サスカイト	Y78-d	Ⅲ b 下	3.8	6.1	1.4	32.6
	4	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	Z79-a	Ⅲ b 下	3.0	4.2	1.0	12.0
	5	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	Z78-b	Ⅲ b 上	3.8	2.7	1.3	8.6
	6	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	Z78-b	Ⅲ a	3.0	1.8	0.8	3.0
	7	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	Y78-c	Ⅲ b 下	3.5	2.0	1.0	4.2
	8	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	Y78-d	Ⅲ b 上	3.6	2.1	1.2	5.0
	9	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	Z78-b	Ⅲ a	2.3	1.7	1.0	2.0
	10	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	Z78-b	Ⅲ b 上	1.8	1.0	0.4	0.6
	11	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	Z78-b	Ⅲ a	2.2	1.0	0.4	0.6
	12	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	-	埋面	1.8	1.8	0.8	1.3
	13	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	Y78-d	Ⅲ b 上	2.0	1.7	0.4	0.8



第15図 F区石器実測図 (1・2 : S = 1/3, 3 : S = 1/2, 4~13 : S = 2/3)

## 4 G区の調査成果

### (1) 土層と遺構

G区は赤松谷川2号導流堤の外側に位置し、東西90m、南北12~14mの面積1,182m<sup>2</sup>の調査区である。堆積状況としては、調査区の中でも山手の部分ではⅢb上層・Ⅲb下層の残存を比較的良好に確認した一方、Ⅲa層については大部分が後世の削平によって残存しておらず、また調査区海手の部分では後世の敷地造成などによってⅢb下層かそれより深くまで削平を受けている部分もみられた。層厚は、Ⅲb上層が20cm程度、Ⅲb下層が20~40cm程度である。基本IV層上面までを調査対象としたが、一部Va層・Vb層の掘削を行った。

遺構としては、各層の掘削完了時点で検出作業を行ったが、調査前の段階で広くメダケの繁茂がみられた区域であり、その地下茎と根の影響で堆積土の黒色化が顕著に認められ、特にⅢb下層上面における影響は大きく、結果的に人為的に造営された遺構との区別の判断を難しくした。

調査区西端部では近世以降のものと判断される溝状遺構を確認した。また、調査区東端部では近世の掘立柱建物を検出した。出土遺物の主体となる繩文時代末期から弥生時代初頭にかけての遺構としては、Ⅲb下層上面、IV層上面の36~38列付近で遺物の集中的出土があり、他よりも深度のあるピットが多い傾向が認められたことは、留意しておきたい。また、IV層上面において、遺跡の北側に位置する雲仙眉山の噴火活動に伴うと考えられる倒木痕を2基を確認した。

### 掘立柱建物（第19図）

グリッドE44・E45付近において検出した。東西2間×南北4間の建物で、西側に半間の間隔をとつて庇がつく。柱穴内出土遺物から近世初頭のものと判断される。

### 土坑1（第20図）

IV層上面、グリッドE42-dでの検出である。耕作地造成により削平を受けている地点であるためIV層上面での検出であるが、本来はⅢa層より上位からの掘り込みである。平面は長軸0.89m、短軸0.8mを測り、深さは39cmである。内部には30cm程度以下の礫が投げ入れられている。黒褐色を呈する埋土から近世以降のものと判断される。

### 土坑2（第21図）

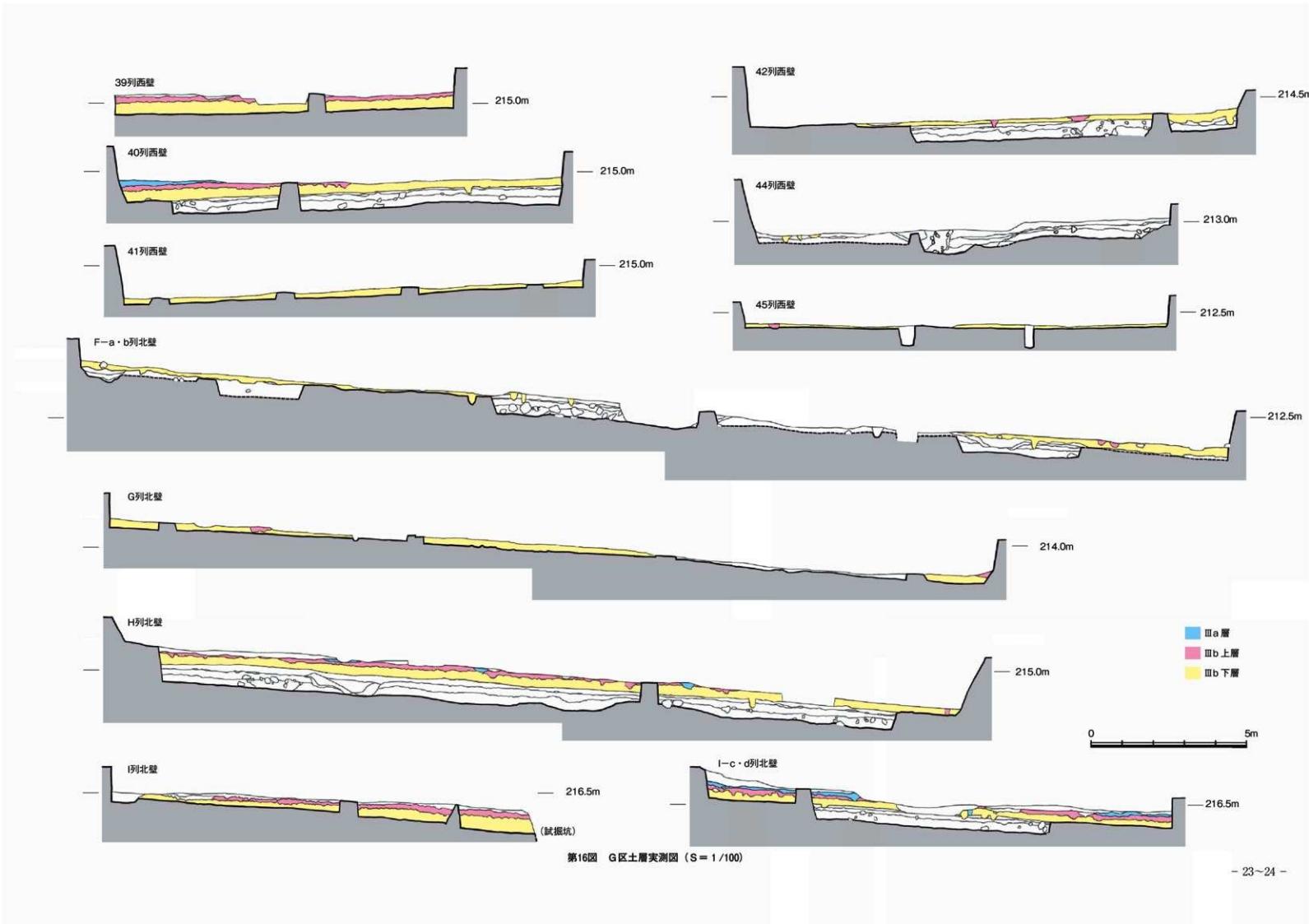
Ⅲb上層上面、グリッドH38-b、H39-aでの検出である。平面は隅丸の長方形を呈し、長軸1.81m、短軸1.23mを測る。深さは20cmである。床面には厚さ10cm弱の木炭層が確認され、壁面には硬化した焼土がめぐっていた。周辺には柱穴などの付属する遺構は確認されなかったが、炭焼きなどの作業が行われたものと考えられる。遺構内出土の遺物はみられなかつたが、検出面および埋土より中世期のものと判断する。

### 土坑3（第22図）

Ⅲb下層上面、グリッドH36-dでの検出である。平面は最大0.42mの不整形で、深さは7cmと比較的浅い。黒褐色の埋土には1cm大の炭化物を含んでいた。

### 土坑4（第23図）

Ⅲb下層上面、グリッドH37-dでの検出である。平面は長軸0.32m、短軸0.24mの楕円形で、深さは6cmである。埋土は黒褐色で、内部より硬化した焼土の検出があった。





第17図 G区III b 下層上面遺構配置図 ( $S = 1/400$ )



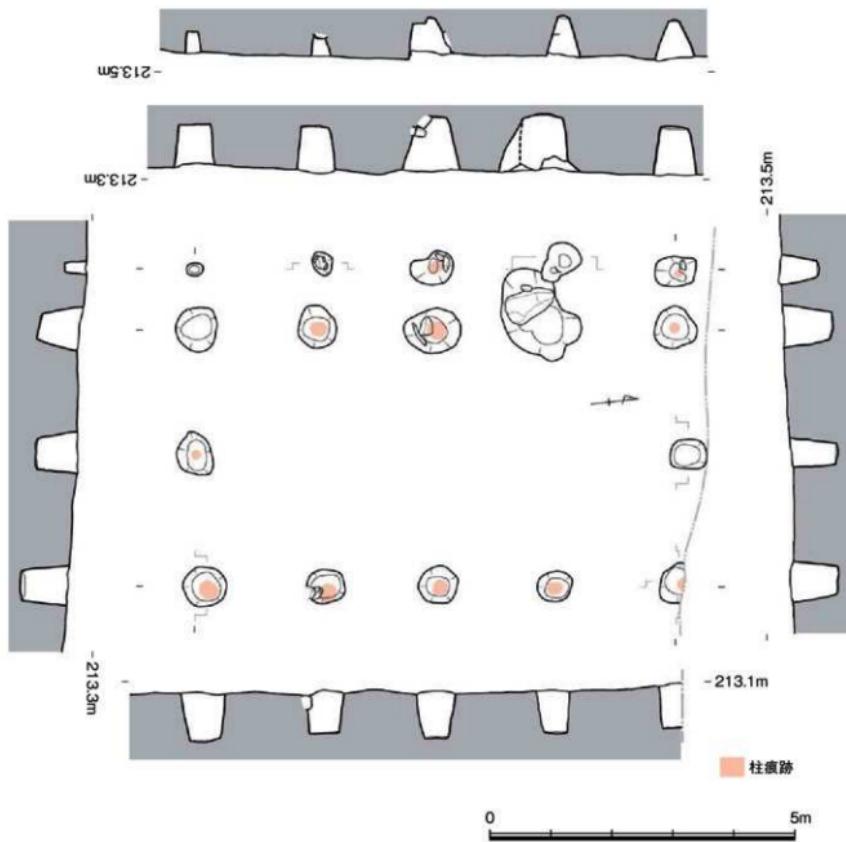
第18図 G区N層上面遺構配置図 (S = 1 / 400)

### 土坑5（第24図）

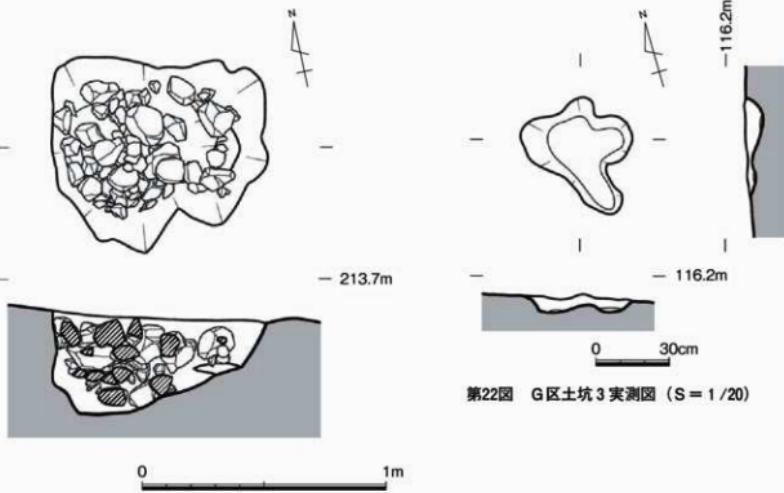
IV層上面、グリッドH40-bでの検出である。平面は長軸1.16m、短軸0.82mの不整形で、深さは45cmである。埋土は灰黄褐色で、3cm以下程度の炭化物を多量に含んでいた。

### 土坑6（第25図）

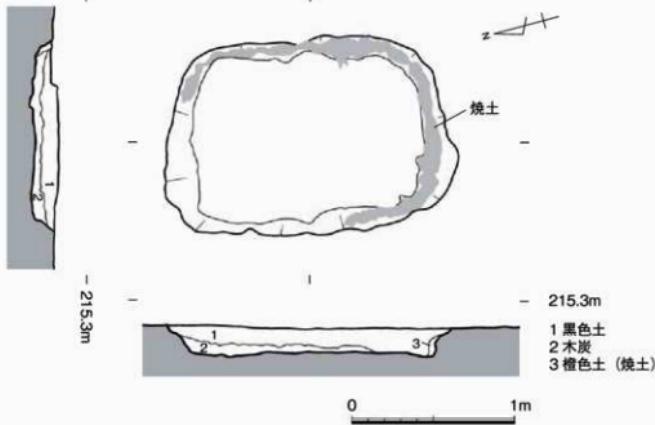
IV層上面、グリッドG38-d、G39-cでの検出である。平面は長軸2.80m以上、短軸1.24m、深さ30cm程度で、溝状の形状をなす。埋土は黒褐色である。床面は比較的平坦な形状である。



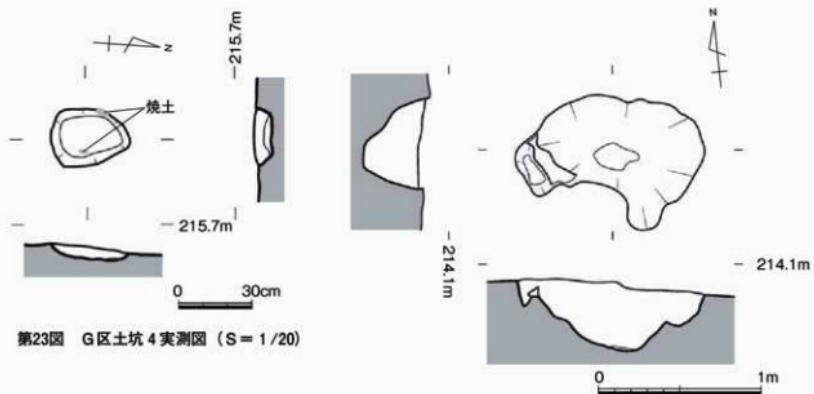
第19図 G区掘立柱建物実測図 (S = 1/80)



第20図 G区土坑1実測図 (S = 1 /20)

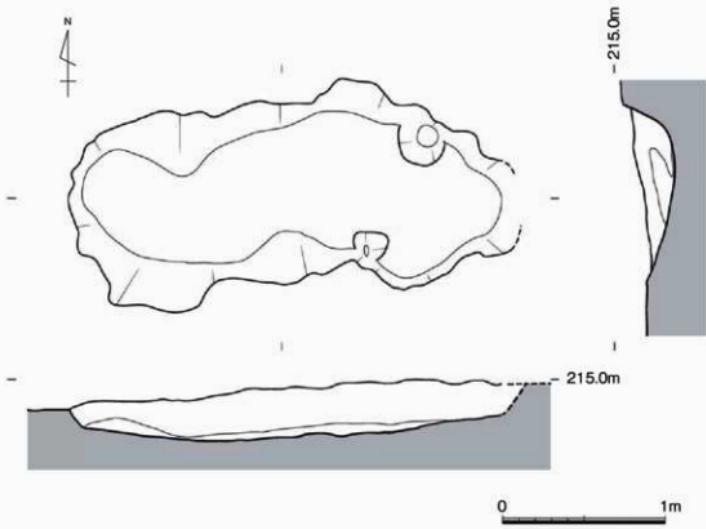


第21図 G区土坑2実測図 (S = 1 /30)



第23図 G区土坑4実測図 ( $S = 1/20$ )

第24図 G区土坑5実測図 ( $S = 1/30$ )



第25図 G区土坑6実測図 ( $S = 1/30$ )

## (2) 出土遺物

### 土器ほか

1～35は縄文時代早期の資料である。

1～13は押型文土器である。1～6は山形文、7～13は梢円文である。

1は口唇部を丸く整え、横方向の施文が行われる。2は厚手の器壁で、横方向の施文である。3・4も厚手の器壁である。1～4は小ぶりの山形文であるが、5・6は大ぶりの山形文である。8は粘土の積み上げ痕が明瞭で、縱方向の施文が行われている。外面に炭化物の付着が認められる。

14～29は塞ノ神式土器である。

14は外に大きく屈曲する口縁部で、緩く波状をなすものと思われる。外面には沈線文を入れ、口唇部に刻目を施す。15・16は内湾する口縁部である。外面に沈線文、口唇部に刻目を入れる。17は逆「く」字状に屈曲する口縁部で、口唇部に刻目を入れ、外面には沈線文と列点文を施す。

18は胴部外面に帯状の撫糸文を施し、沈線を横走させる。外面に炭化物の付着が認められる。19は口縁部直下の胴部資料で、沈線文が施される。外面に炭化物の付着がある。20～22は縱方向の帯状の撫糸文と横走する沈線文が認められる資料である。23～27は縱方向の帯状の撫糸文が施された資料である。28は無文の胴部である。29は底部の資料で、胴部立ちあがり部分に帯状の撫糸文が観察される。

30～35は妙見・天道ヶ尾式土器である。33を除き、器壁に多くの間隙がみられ、胎土に有機質のものか水溶性のものが含まれていたと考えられる。刻目突帯文と沈線文によって文様が構成されており、口縁部資料においては口唇部にも刻目を施す。

36～443は縄文時代後・晩期及び突帯文期の資料である。

36～69は砲弾形深鉢もしくは屈曲深鉢の資料である。

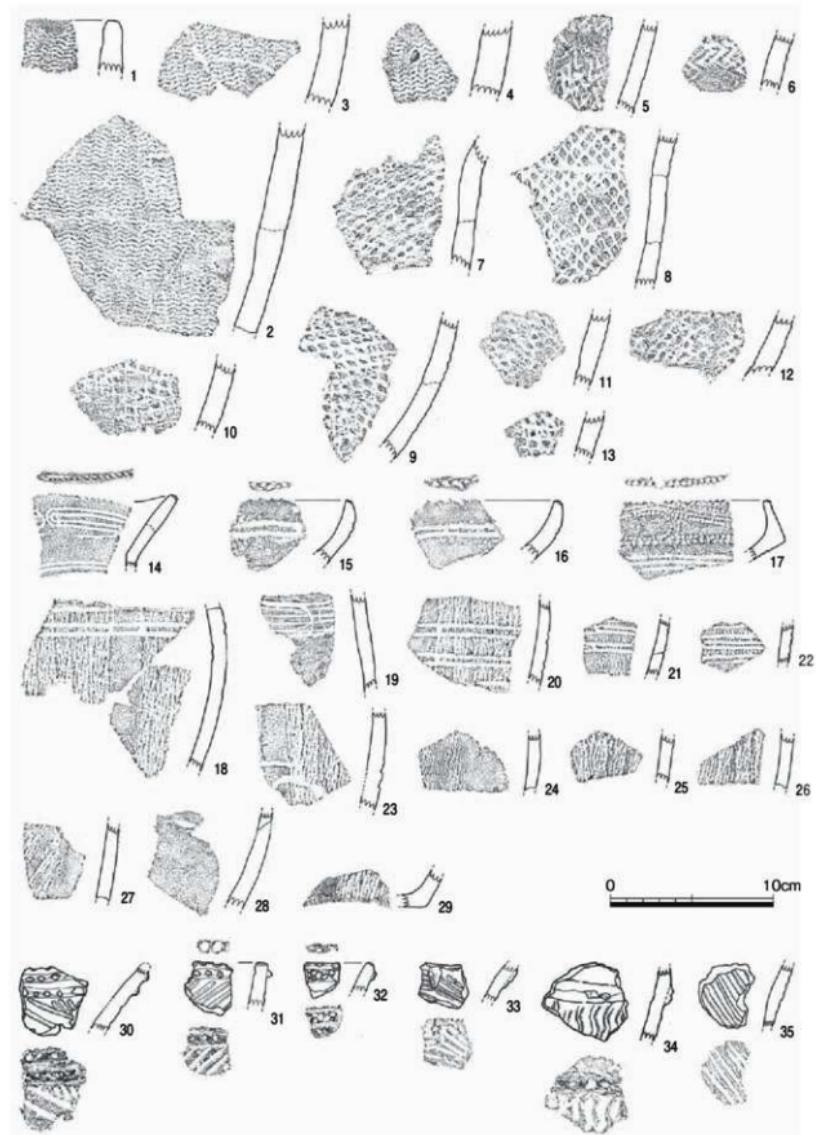
36は深鉢の胴部上半から口縁部にかけての資料である。胴部上位で最大径をとり、口縁部は内傾するが、明瞭な屈曲部は作らない。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整を施すが、内面についてはその後ナデ調整を行う。復元口径27.6cm、復元胴部最大径30.2cmである。37はわずかに内傾する口縁部の資料である。比較的小型の深鉢もしくは鉢である。内面には横方向の貝殻条痕調整を残す。外面には炭化物が付着する。復元口径19.3cmである。

38は胴部の資料である。外面には貝殻条痕調整のうちに擦過調整が施され、屈曲を意識したものか、わずかに横方向に肥厚させた部分がある。39は胴部の資料で、内外面ともに横方向の貝殻条痕調整が施される。外面には煤が付着する。

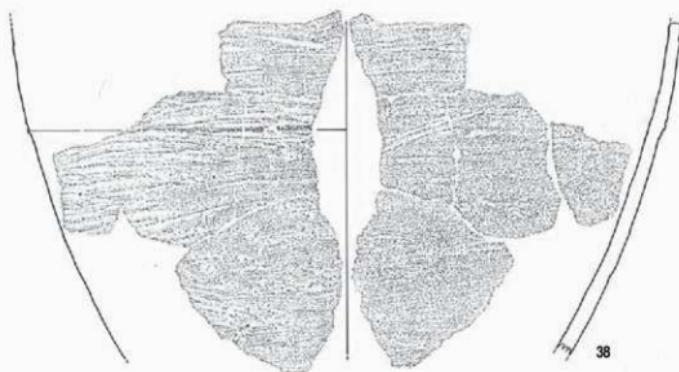
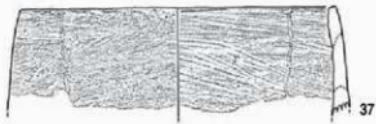
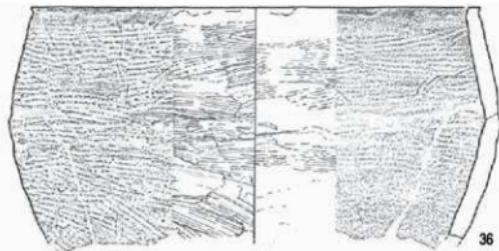
40は大きく開く口縁部の資料で、口縁部下でわずかにすぼまる。内外面ともに横方向の擦過調整が行われる。41は胴部から屈曲してわずかに内傾する口縁部で、内外面ともに横方向の貝殻条痕調整が施される。42は強く屈曲して内傾する口縁部で、口唇部は突帯状に外側へ張り出す。43は口唇部上端をなでて平坦にする。45の外面には横方向の貝殻条痕調整が明瞭である。46は比較的薄手の器壁で、外面にのみ貝殻条痕調整が残る。47は内外面ともに横方向の貝殻条痕調整である。

51は口唇部外面を肥厚させる。52は内外面ともに段を設けて肥厚させ、口唇部に突起を貼り付ける。54は口縁部上面を平坦に整える。62は内傾する口縁部で、わずかに外反し、外面には横方向の貝殻条痕調整が施される。胴部上位で屈曲部をもつものと思われる。63は外反する口縁部で、内外面ともに貝殻条痕調整が認められる。外面には炭化物が付着する。65は外反する口縁部である。

66は胴部下半の資料である。内外面ともに貝殻条痕調整が施される。67～69は胴屈曲部の資料である。67は横方向の擦過調整によって屈曲を明瞭化する。外面には炭化物の付着がある。68は粘土紐を貼り付けて屈曲部とする。

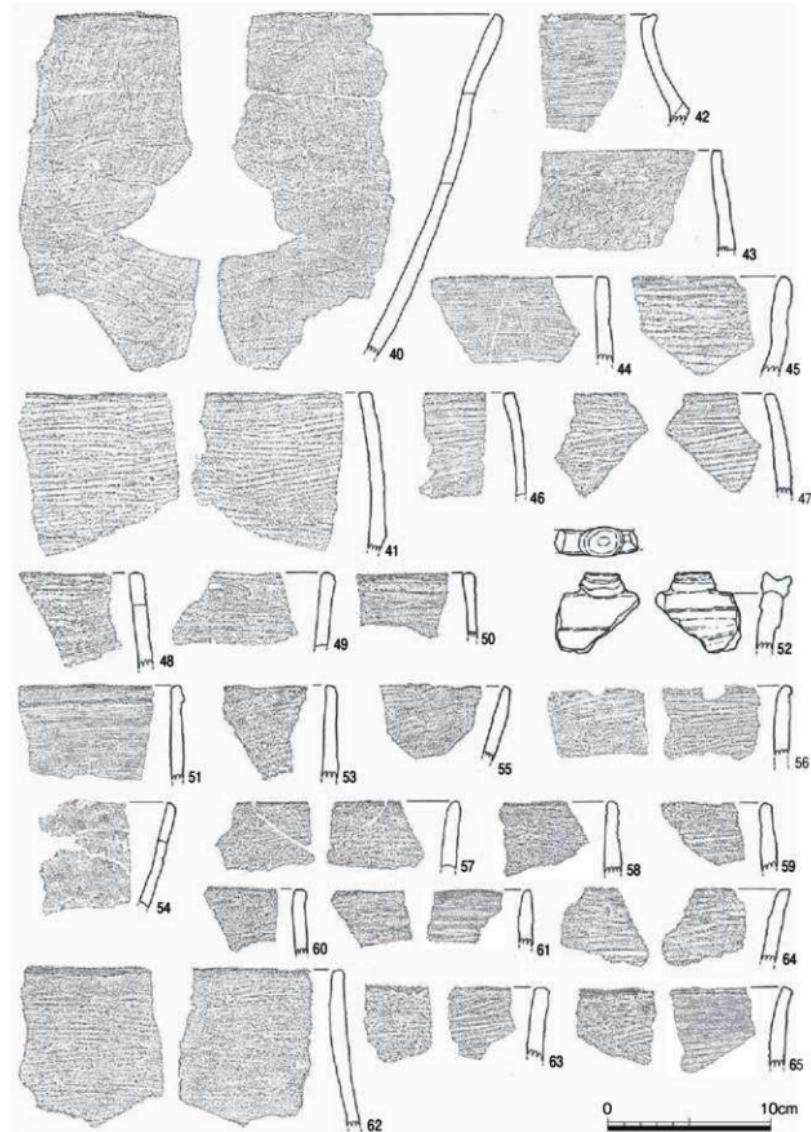


第26図 G区土器ほか実測図① (S = 1 / 3)

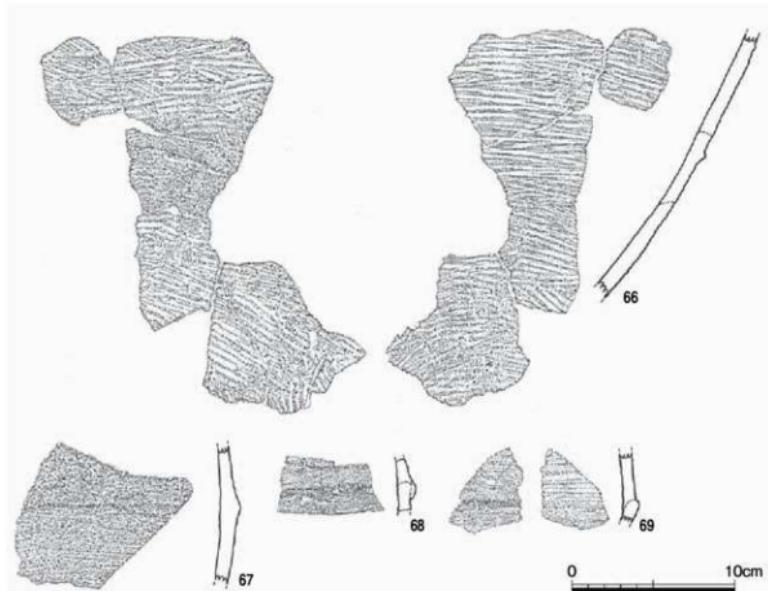


0 10cm

第27図 G区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)



第28図 G区土器ほか実測図③ (S = 1 / 3)



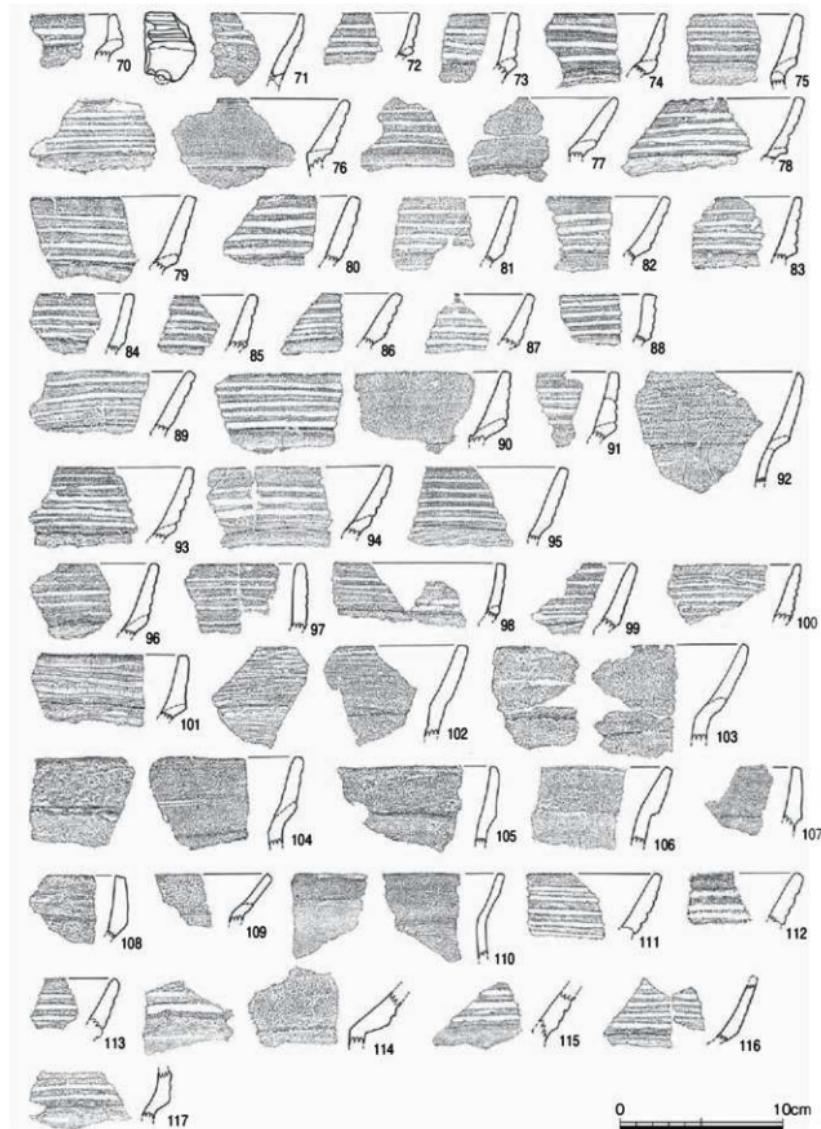
第29図 G区土器ほか実測図④ (S = 1/3)

70~128はいわゆるタガ状口縁と呼ばれる口縁部文様帯をもつ資料と、その胴部、頸部と考えられる資料である。

口縁部の資料としては、口縁部文様帯の沈線の本数でみると、2本のもの(70)、3本のもの(71~74)、4本のもの(75~89)、5本のもの(90~99)、6本のもの(100)、沈線を引かないもの(101~109)がある。口縁部の傾きとしては、70のように内傾するもの、107のように直立するものもみられるが、ほとんどが外傾する。

70は外反する頸部に内傾する短い口縁部がつく。71はわずかに内湾して先細りとなる口縁部であるが、頸部との境界は不明瞭である。焼成後の穿孔がみられる。72の内面は研磨調整が施される。76・90の内面は頸部と口縁部との境界で段を設ける。77の内面は頸部と口縁部との境界で稜を作る。92は外反する頸部に口縁部がつくが、外面の沈線は施文後のナデ調整によって曖昧になっている。101の外面には工具引きの浅い凹線が4条ほど横走するが、沈線文を意識したものであろう。110は薄手の器壁で、比較的小ぶりの深鉢もしくは鉢である。外反する頸部にわずかに肥厚する口縁部が外傾してつく。内外面ともに研磨調整が行われている。

118~123は頸部の資料である。118~121は内面の口縁部との境界で稜線を作る。118は頸部が短く、鉢になるものと思われる。124~128は胴屈曲部の資料で、いずれも屈曲部直上には沈線や段をもたな



第30図 G区土器ほか実測図⑤ (S = 1 / 3)

い。

129～157は肩部をもつか、いったん胴部ですばまって、口縁部が大きく開く深鉢の資料である。

129～149は口縁部の資料である。129～131の外面には横方向に間隔の広い平行沈線が引かれる。

132・133は弧状の沈線が施される。134は貝殻条痕調整が内外面ともに施される。外面には炭化物の付着が認められる。135・136も内外面ともに貝殻条痕調整が施されている。138の外面、139の内外面には擦過調整が認められる。141の外面には縦横に貝殻条痕調整が残る。147は薄手の作りで、外面には横方向の貝殻条痕調整が施される。148・149は比較的薄手の器壁で、内湾気味である。口唇部の形状でみると、135～137のように丸く収めるもの、132・133、147～149のように先細りの断面となるものの、144～146のように上面を工具によってなでて平坦に整えるものがみられる。

150～157は胴部の資料である。150～153は粘土塊の貼り付けをもつ。150は胴部の膨らみからいたんその上位ですばまり、段を作つて口縁部へは外傾する。段直下に短い粘土紐を貼り付け、その両端と中央部を指押さえすることによって蝶ネクタイ状となす。151は粘土紐の貼り付けに刻目を施す。貼り付け文より上位には横走する沈線がみられる。152は蝶ネクタイ状突起の貼り付けである。153は粘土紐の中央部を上下になでつけており、蝶ネクタイ状突起を意識したものであろう。156・157は外面に段をもつ資料である。157は屈曲が強く、肩部を形成する資料と考えられる。

158～218は刻目突帯文土器の甕である。

158～183は指先によって刻目を施した資料である。

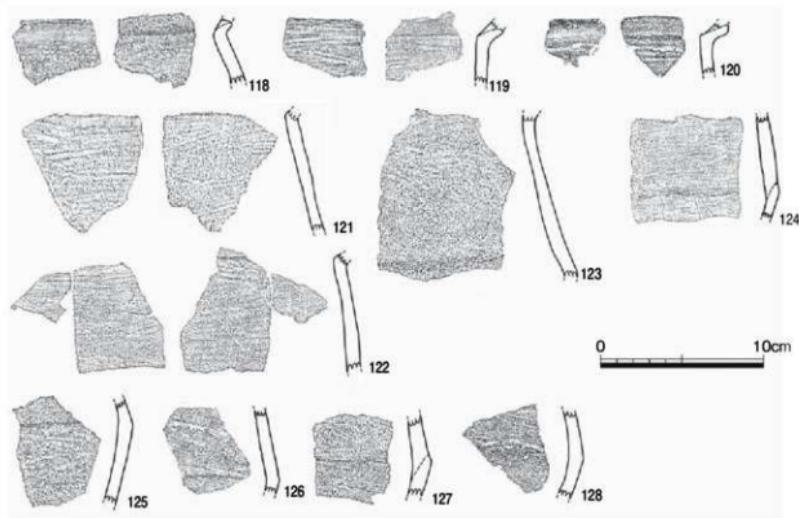
158は復元口径38.2cm、屈曲部での復元胴部最大径は42.5cmを測る。やや膨らみをもって立ち上がる胴部から、口縁部は屈曲して内傾し、口唇部は外反する。口縁部突帯は胴部突帯よりやや細く、口唇部から1.2cmほど下がった位置に貼り付けられる。外面の調整は、屈曲部、胴部突帯より下位は左上がり斜方向の貝殻条痕調整。胴部突帯より上位はナデ調整である。内面はナデ調整である。外面、屈曲部より下位に炭化物の付着が認められる。

159は口縁部の資料で、復元口径は39.6cmを測る。わずかに内傾し、口唇部は外反する。内外面ともに横方向の貝殻条痕調整のうちにナデ調整を行つてゐる。背の高い細い突帯が口唇部から1.0cmほど下がった位置につく。160は159と同一個体の可能性が高い。外面には貝殻条痕調整が残り、突帯は159のものより太い。突帯部分での復元径は41.7cmである。

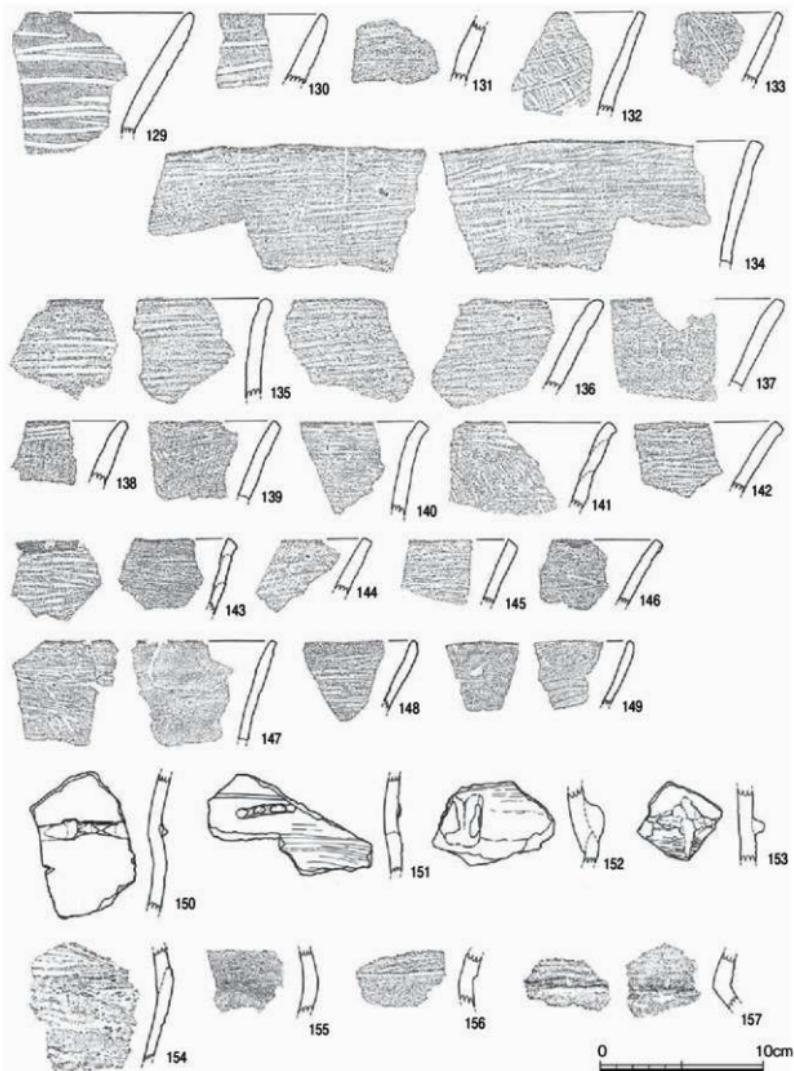
161は復元口径25.8cmである。口縁部は内傾し、口唇部は外反する。外面には貝殻条痕調整が横方向に施されている。口唇部から1.0cmほど下がったところに突帯が貼り付けられる。162は口唇部が強く外反する。163の外面は丁寧にナデ調整が行われている。165は刻目の間隔が広い。

167～169は薄手の器壁で、鉢となる可能性がある。169は口唇部に接して突帯が貼り付けられる。

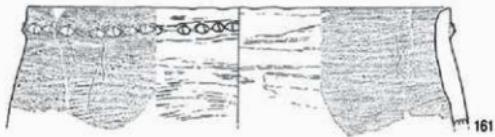
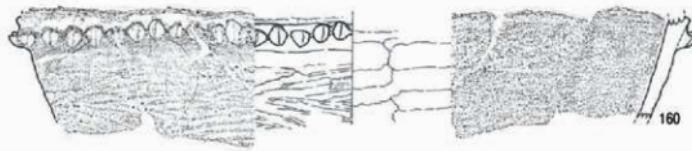
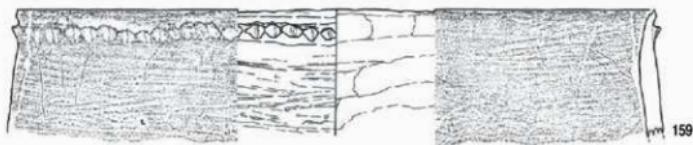
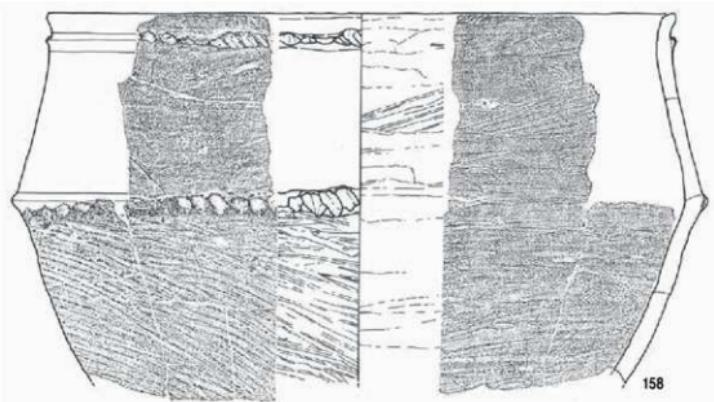
170は口唇部を欠くが、強い外反がみられ、突帯より上位は横方向の貝殻条痕調整のうちに比較的丁寧なナデ調整が行われている。171・172の外面には貝殻条痕調整が施される。176は比較的しっかりとした屈曲をみせ、突帯より上位に線刻が認められる。180は背の高い断面三角の突帯に、小ぶりの刻目が入る。



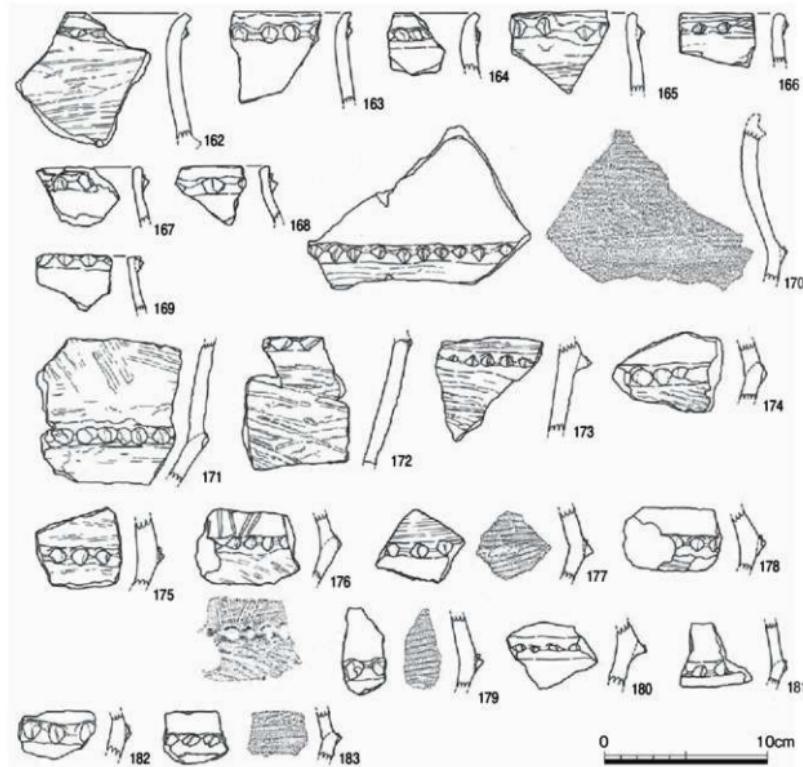
第31図 G区土器ほか実測図⑥ (S = 1 / 3)



第32図 G区土器ほか実測図⑦ (S = 1 / 3)



第33図 G区土器ほか実測図⑧ (S = 1/3)

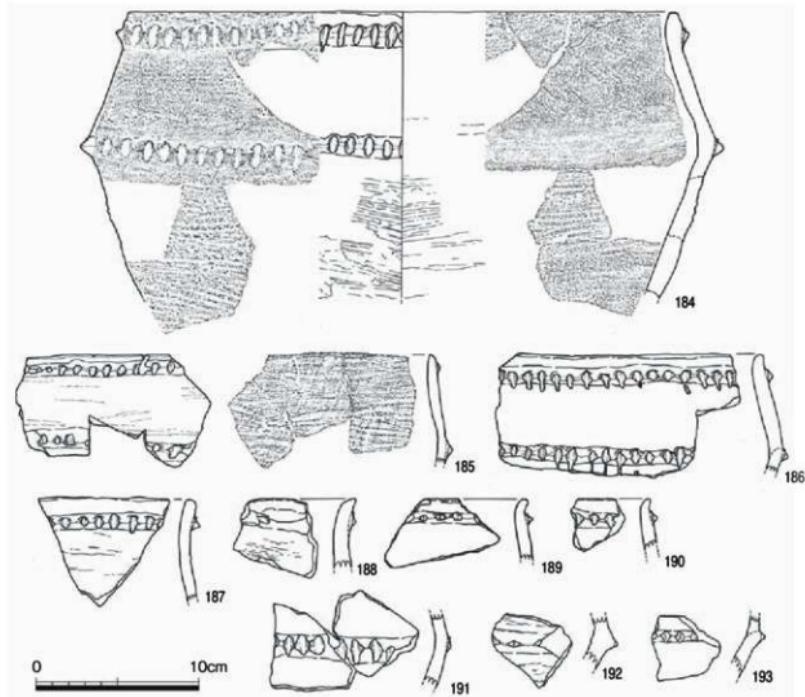


第34図 G区土器ほか実測図⑨ (S = 1/3)

184～193は棒状工具の側面押しあて、もしくはそこから上方への引き上げによって刻目を施す資料である。

184は復元口径33.6cm、胴部最大径39.5cmを測る。口縁部は内傾し、口唇部はわずかに外反する。口縁部突帯は口唇部から0.9cmほど下がった位置に貼り付けられる。外面は、胴部突帯より下位は貝殻条痕調整をそのまま残すが、胴部突帯より上位はなで消す。外面、胴部突帯から口唇部にかけて炭化物の付着が認められる。185は器壁が薄く、突帯は平行していないため、壺ではなく別器種かもしれない。傾きについても変動する可能性がある。186は内傾する口縁部で、口唇部は外反する。外面の突帯間は擦過調整である。187は強い外反をみせる。外面には炭化物の付着がみられる。188～190の口唇部は外反して先細りとなる。

194～207はヘラ状の工具によって刻目が施されている資料である。

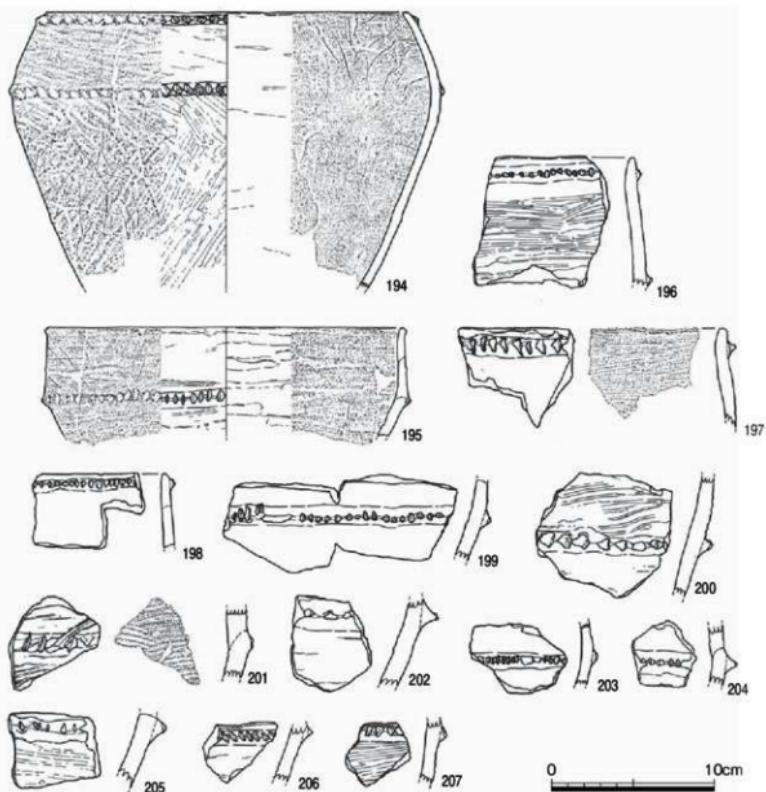


第35図 G区土器ほか実測図⑩ (S = 1/3)

194は復元口径22.1cm、胴部最大径26.7cmで、胴部から口縁部へは屈曲することなく内湾・内傾して口唇部に至る。口縁部の突帯は、口唇部から0.3cmほどの近い位置に貼り付けられる。内面は丁寧にナデ調整が行われ、外面、胴部下位から中ほどにかけては右上がりの貝殻条痕調整、胴部上位から口縁部にかけては緩い左上がりの貝殻条痕調整で、突帯貼り付け後、突帯間部分についてはなで消している。胴部突帯から下方8cmにかけては炭化物が付着している。

195は復元口径21.8cm、復元胴部最大径22.6cmで、口縁部はほぼ直立する。器形的には鉢となるかもしれない。胴部には突帯が貼り付けられ細かい刻目が施されるが、口縁部には突帯をもたない。

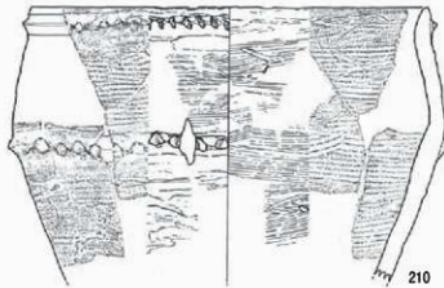
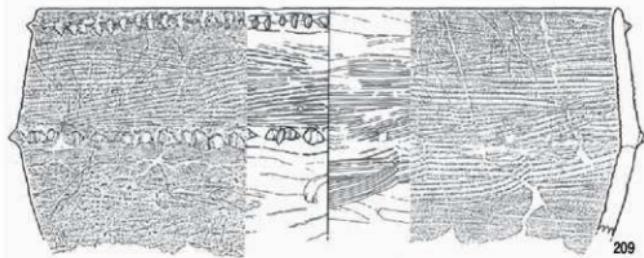
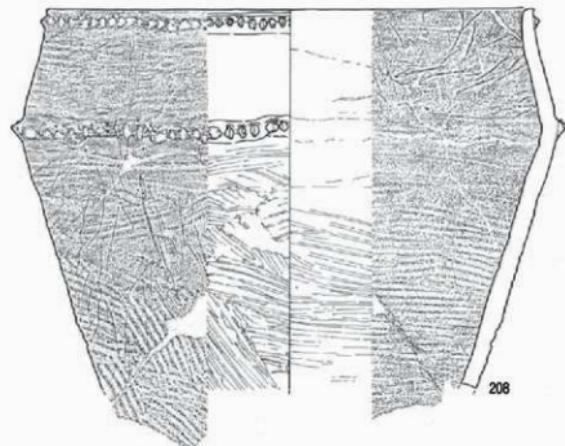
196は先細りとなる口唇部で、突帯間には横方向の貝殻条痕調整が残る。断面三角の突帯には細かく刻目が入れられる。198の口縁部突帯は口唇部に近接している。199は突帯部分での屈曲は弱く、緩く内湾する。突帯には細かく刻目が入れられる。200は突帯部分で屈曲も内湾もせず、直線的に立ち上がる。202・204には断面三角の突帯の頂部付近に小さめの刻目が施される。203は非常に細かく刻目が入る。



第36図 G区土器ほか実測図⑩ (S = 1/3)

208～210は口縁部と胴部の刻目の施文に異種のものが併用された資料である。

208は、口縁部は内傾し、復元口径は29.9cmを測る。復元胴部最大径は34.1cmである。口縁部突帯には半裁竹管状の工具によって、胴部突帯にはヘラ状工具によって刻目が入る。外面には貝殻条痕調整が残るが、突帯間についてはなで消している。内面の胴部下半は貝殻条痕調整が残る。209は復元口径35.2cm、胴部最大径39.1cmを測り、口縁部はわずかに内傾して直線的に立ち上がる。口縁部突帯にはヘラ状工具による、胴部突帯には指先による刻目が入る。内外面ともに貝殻条痕調整が施されるが、外面の胴部突帯より下位はなで消している。210は復元口径24.6cm、復元胴部最大径27.3cmを測る。口縁部は内傾して口唇部付近で外反する。口縁部突帯はヘラ状工具による、胴部突帯は指先による刻目が施されている。内外面ともに橙色を呈し、特徴的な色調である。内外面ともに貝殻条痕調整が認められる。



0 10cm

第37図 G区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)

211・212は工具の刺突によって刻目を施したものである。

211は復元口径18.0cm、復元胴部最大径19.7cmで、口縁部は突帯のある胴部から屈曲して直線的にやや内傾して立ち上がる。口唇部外端と胴部突帯に棒状工具の小口部分を刺突して刻目が施されている。内面は丁寧にナデ調整が行われており、外面は胴部突帯より下位は斜方向の貝殻条痕調整を残し、胴部突帯より上位は丁寧なナデ調整が行われている。口縁部に焼成後の穿孔が認められる。212は明確な屈曲をみせず、口縁部は内湾し、胴部突帯より上位で最大径になるものと思われる。胴部突帯と口唇部外面に工具小口による刺突が行われる。外面、胴部突帯より下位には擦過調整が残り、炭化物の付着が認められる。

213～215は貝殻腹縁による刻目が施されている資料である。

213は器壁の厚さや推定される口径に対して口縁部突帯と胴部突帯の間隔が狭く、鉢になる可能性もある。口唇部断面は先細りとなっている。214は比較的薄手の作りで、内面には擦過調整を残すが、外面は丁寧にナデ調整が行われている。

216～218は横方向に押し引くようにして刻目を施した資料である。

216は指先によるもの、217は何らかの工具小口によるものである。218は強く外反する口縁部で、施文具の種類は不明である。

219～259は深鉢の底部資料である。

219・220は外面の底部と胴部の境界が不明瞭であるもの、221～234は、断面、外面において底面からいたん垂直に立ち上がり、そこから胴部が外へと開くもの、235～242は断面、外への張り出しをもつものである。また、243～252は断面形状としては219～234に似るもの、作りとしては粗雑なものである。253～259は厚底のものである。

219は内外面ともに研磨調整が行われている。復元底径8.7cmである。220の内面はナデ調整、外面が研磨調整である。

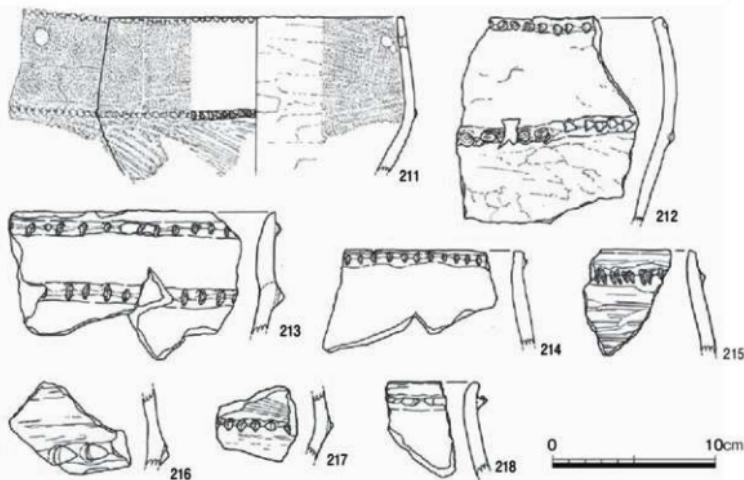
221は底面が剥落している。222は内外面、底面とも研磨調整が行われ、内面には炭化物の付着がある。

底径は、229が7.9cm、231が7.7cmである。

復元底径は、221が9.8cm、222が9.7cm、223が9.7cm、224が9.2cmである。225が8.6cm、226が8.7cm、227が8.5cm、228が8.2cmである。また、230が8.2cm、232が6.6cmである。

235は外面に貝殻条痕調整を行い、内面は貝殻条痕調整のうちにナデ調整を行っている。底面は上げ底となっている。236の器壁には1mm以下の間隙が多くみられ、有機質か水溶性のものが胎土に含まれていたものと思われる。239は底面に粘土を継ぎ足して張り出しを強くするとともに、上げ底にしている。241は若干上げ底で、内外面ともに貝殻条痕調整が残る。235の底径は9.9cm、240の底径は9.2cmである。復元底径は、236が10.8cm、237が9.6cm、238が9.6cm、239が9.1cm、241が8.2cmである。

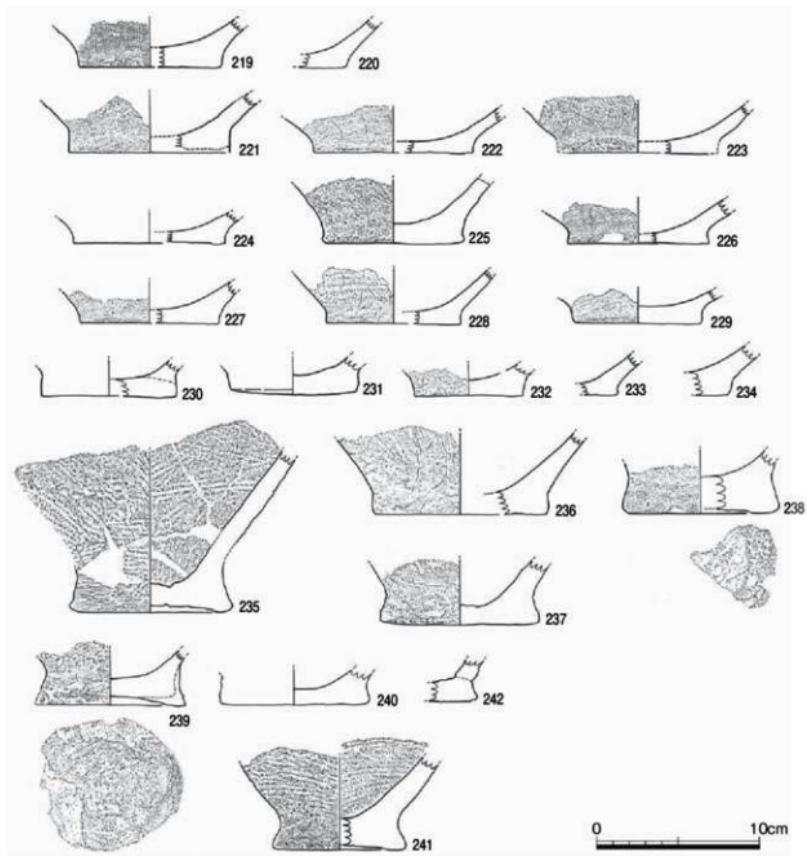
243はかなり大型深鉢の底部と考えられる。246の底面には貝殻条痕であろうか、搔き取りの痕跡がある。247は上げ底となっており、底面と外面に擦過調整による搔き取りの痕跡がある。内面にはリング状に炭化物の付着が認められる。248の底面は凹みをみせるが、意図的なものかは不明である。底径は、247が9.0cm、248が9.3cm、249が9.4cmである。また、復元底径は、243が15.3cm、244が



第38図 G区土器ほか実測図⑩ (S = 1/3)

12.8cm, 245が12.4cm, 246が11.3cm, 250が9.1cm, 251が6.7cmである。

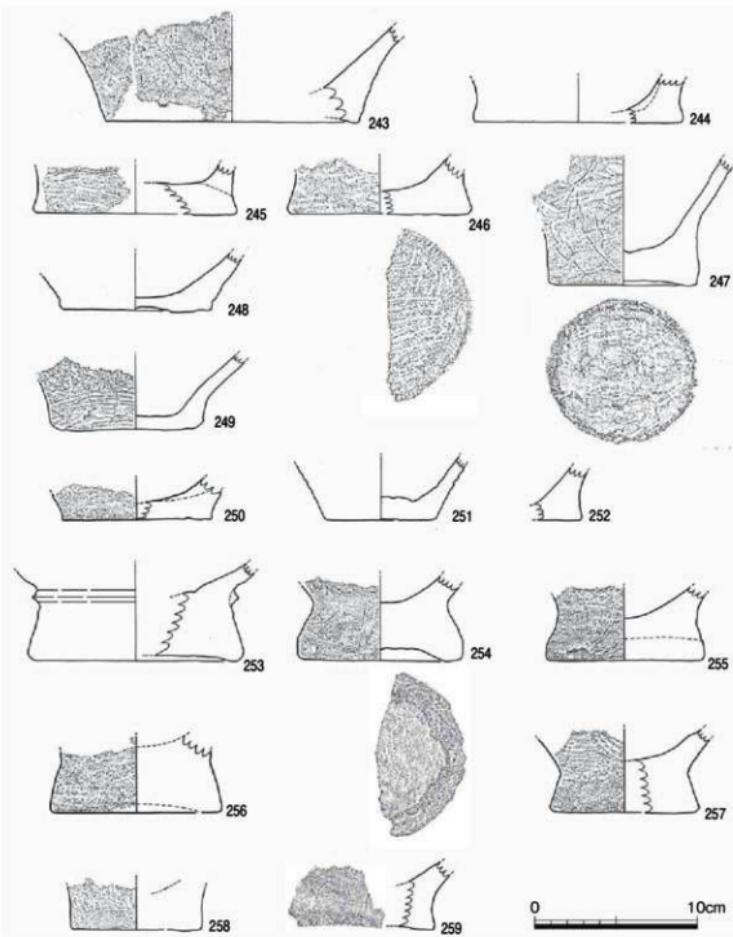
253は底部と胴部の境界に三角突帯を巡らし、底面は上げ底となる。254はしっかりとした上げ底で、四部はナデ調整が行われている。257の内面には炭化物の付着がある。復元底径は、253が13.1cm, 254が10.1cm, 255が9.7cm, 256が9.6cm, 257が9.2cm, 258が8.0cmである。



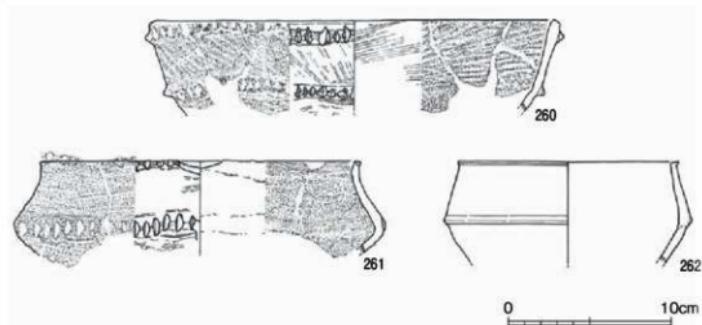
第39図 G区土器ほか実測図④ (S = 1/3)

260・261・262は鉢の資料である。

260は口縁部と胴部に突帯をもつ。復元口径は24.9cmである。内外面ともに貝殻条痕調整ののちナデ調整を行っている。外面には炭化物の付着が認められる。261は口唇部の外端と胴屈曲部に突帯を貼り付けることなく直接刻目を施す。外面、胴屈曲部より下位は貝殻条痕調整を残すが、上位についてはなで消す。復元口径19.7cm、胴部突帯での復元径22.7cmである。262の口縁部は直線的に内傾し、口唇部は上面からのナデによって外側にわずかに張り出す。胴屈曲部には突帯を貼り付ける。復元口径13.5cm、復元胴部最大径15.2cmを測る。



第40図 G区土器ほか実測図⑯ (S = 1 / 3)



第41図 G区土器ほか実測図⑩ (S = 1/3)

263～418は浅鉢の資料である。

263～276は外反する頸部に口縁部文様帯がつくものである。基本的には大きく外反して広がる頸部に玉縁状の短い口縁部が立ち上がり、口縁部外面に1条の沈線を引くか、段を設ける。263の復元口径は20.4cmである。264は頸部の外反が弱く、口縁部がほかに比べればしっかりと立ち上がり、外面には2条の沈線を引く。

277・278は外に開く頸部からそのまま立ち上ることなく玉縁状の口縁部に至る資料である。277は口唇部が剥落している。外面には1条の沈線を引く。278の外面には、沈線は見られない。

279～280は頸部の資料であり、強く外反して開く。281は胴部から頸部にかけての資料である。

282・283はいったん肩部を作り、そこから屈曲して頸部。玉縁状の口縁部と至る資料で、内面、肩部と頸部との境界には稜を作り、口縁部は玉縁状となって立ち上がりはみせない。282・283ともに口縁部外面には沈線1条を引く。

284～295は半球状の胴部に外へと開く短い頸部がつき、口縁部の内面には段を設けるものである。胴部と頸部との境界では、内面で張り出しをもち、外面では稜を作る。

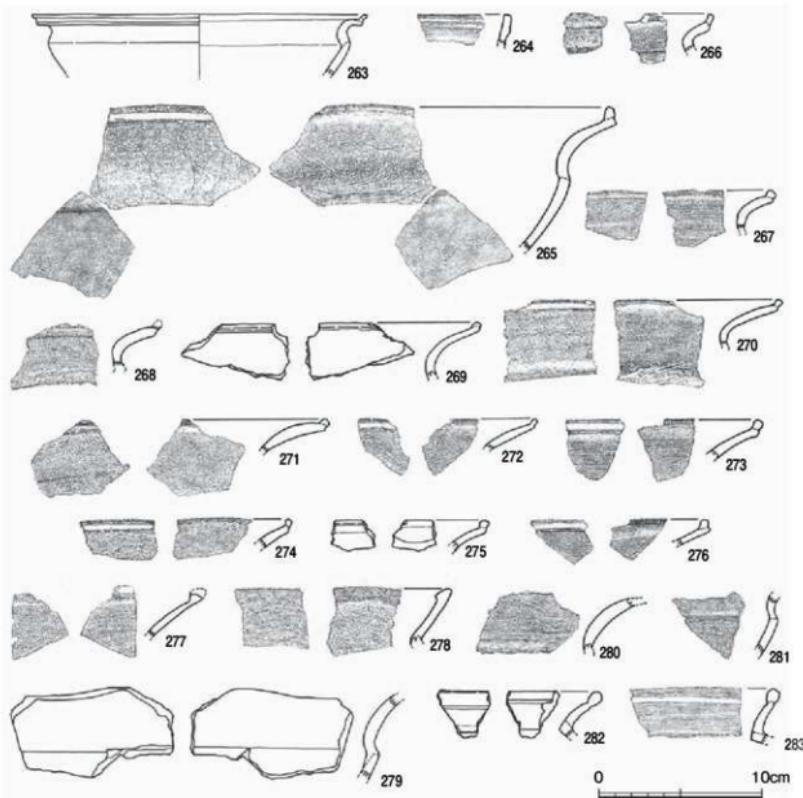
285の口縁部は立ち上がりを意識しており、外面に1条の沈線を引く。289は非常に薄手で精緻な作りである。295の外面は胴部と頸部との境界で明瞭な稜を作らない。

296～301はごく短い頸部に幅の広い口縁部文様帯をもつ資料である。

296～299、301の内面は頸部と口縁部との境界で段を設ける。296、299・300は波状口縁となる。301は浅い丸底の資料で、全体よく研磨されている。

302～314は扁球状の胴部にごく短い頸部と丸縁の口縁部がつく資料である。302については頸部をもたず胴部にそのまま口縁部を取り付ける。

302の復元口径は26.8cmで、胴部の最大径付近で外面に段を作る。303は復元口径12.7cmを測り、なで肩の胴部で、口縁部にはヒレ状突起をもつ。304～306は外傾する頸部で、口縁部外面には沈線1条を引く。307はリボン状突起をつける。308は胴部で屈曲がみられ、なで肩で胴部と頸部の境界も曖昧である。また、口縁部の丸縁も形骸化している。309・311は胴部下位で、310は胴部上位で段をもつ資料である。

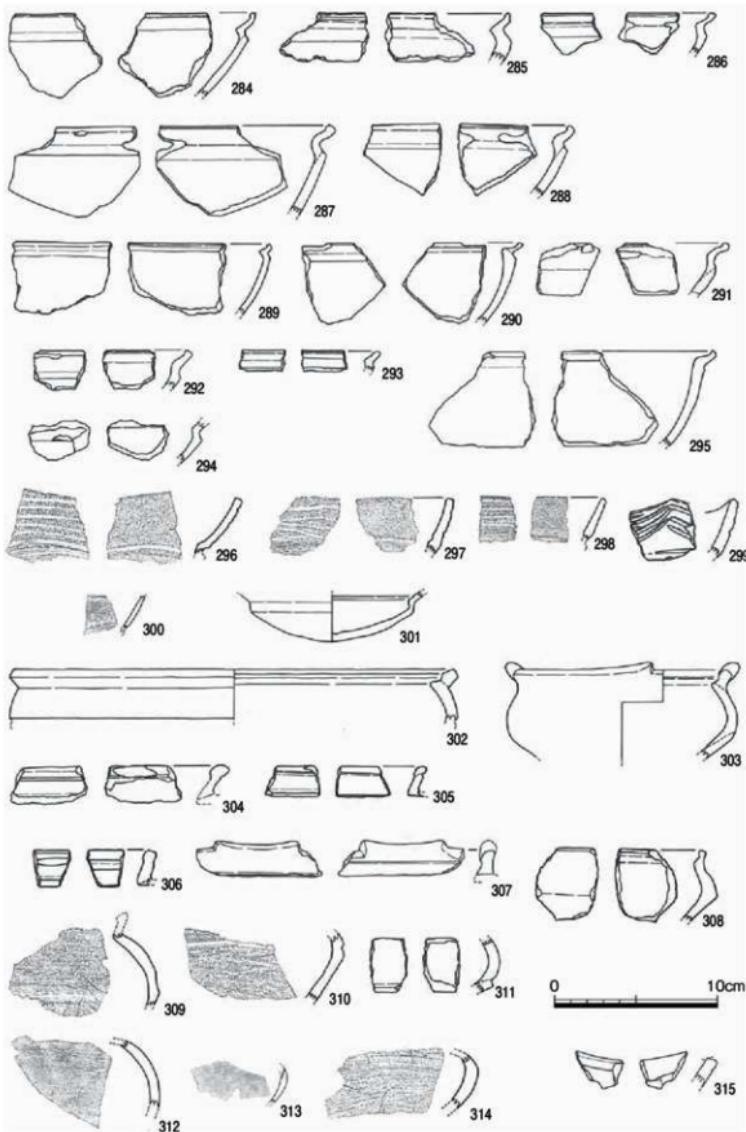


第42図 G区土器ほか実測図⑫ (S = 1 / 3)

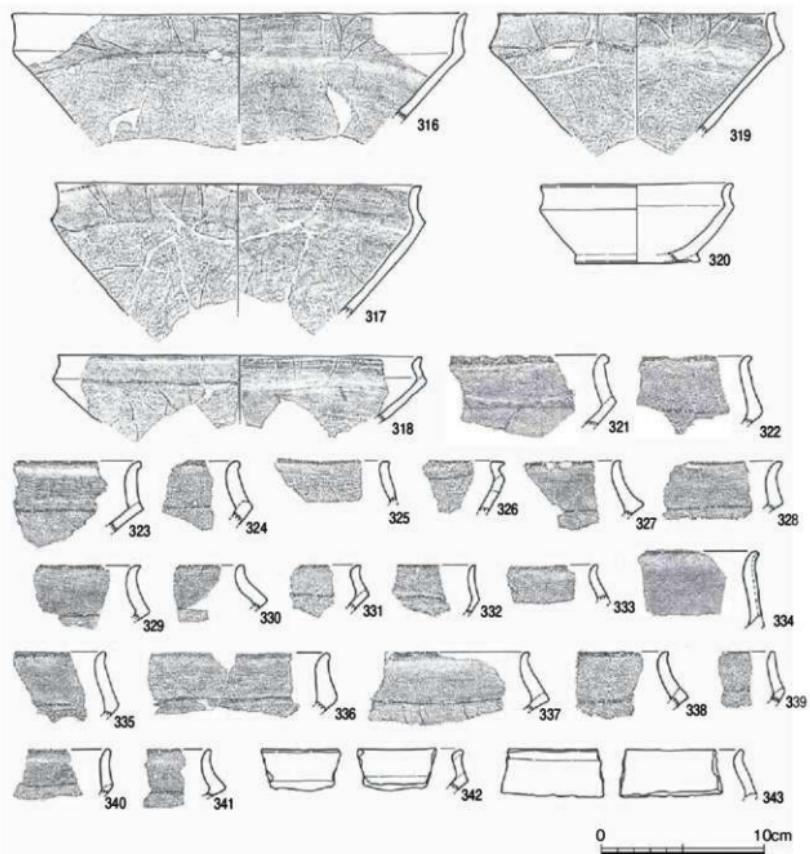
315は波状口縁の資料である。外面に沈線1条を引く。

316～343は断面逆「く」字状をなす器形のものである。胴部から屈曲した口縁部はほとんどが内傾し、口唇部で外反する。

316～318はいずれも黒色磨研であるが、318の外面屈曲部より下位は研磨が甘く、擦過調整が残る。317は外面屈曲部より下位に炭化物の付着する部分がみられる。復元口径は、316が27.7cm、317が22.4cm、318が22.2cmを測る。319は直線的に開く胴部で、復元口径は17.0cmを測る。320は復元口径11.8cm、復元底径7.6cmで、丸底にリング状に粘土紐を貼り付けて高台様とする。砂粒を含まない精緻な胎土である。326は口唇部を上方からなでたことにより、外側への張り出しが強い。334・343は口縁部と胴部の接合部分で剥離している。327、330、335、337、341などは胴部から口縁部への屈曲が強く、口唇部は外反し、口縁部の厚さからすると胴部の厚さが非常に薄いという特徴がある。



第43図 G区土器ほか実測図⑩ (S = 1 / 3)



第44図 G区土器ほか実測図⑨ (S = 1 / 3)

344～391はボウル形、もしくは洗面器形の器形を呈するものである。348は小型で塊形になるもので、ここに含めた。347・348、359～370は口縁部に刻目突帯をもつものである。

344は復元口径32.8cmで、器高は8.9cmほどである。外面には横方向の貝殻条痕調整を施し、底面付近は擦過調整を行う。内面は貝殻条痕調整ののち、ナデ調整を行う。外面には炭化物が付着する。345は復元口径19.3cmで、外面には縦方向の貝殻条痕調整が行われ、炭化物が付着する。内面は擦過調整ののち、粗く研磨を施している。346は復元口径18.2cmで、外面は貝殻条痕調整、内面は擦過調整の一次調整が行われ、その後内外面ともに研磨調整が行われている。外面には炭化物の付着がある。

347は復元口径23.8cmを測り、外面は貝殻条痕調整のち擦過調整が行われている。内面はナデ調整である。突帯には棒状工具による刻目が施される。また、外面には炭化物の付着が認められる。348は復元口径12.0cmで、口唇部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、ヘラ状工具による刻目を入れる。突帯は上下にうねっており、器面のナデ調整も含め粗雑な作りである。

349の外面には炭化物が付着する。350の外面は面取りするように擦過調整が行われている。小片であるためはっきりしないが、外面に肥厚させているかもしれない。351は外面から焼成後の穿孔を行っている。353は突起部をもつ。354～356は内外面ともに丁寧に磨かれる。354・355はわずかに内湾する口縁部で、外面には平行する沈線を引く。

357・358は肥厚する口縁部の資料で、内面は研磨調整が施される。357は口唇部に指押さえによる凹点をもつ。

359・368は棒状工具による刻目。360～367、369・370は指先による刻目が施されている資料である。360・370は口唇部に近接して突帯が貼り付けられている。

359の外面には横方向の擦過調整が残る。360の内面は丁寧にナデ調整が行われている。366の口唇部は先細りとなり外反する。360・362・369の外面には炭化物が付着する。

371～385は口縁部に突帯をもたない資料である。371～381は外傾するもの、382は外反するもの、383～385は内湾するものである。375は内外面ともに研磨調整が行われている。374、381の外面には貝殻条痕調整が行われる。384は粘土紐の積み上げ痕が観察され、組織痕土器である可能性もある。373・374、379、381、384・385の外面には炭化物が付着する。

386～391は胴部・底部の資料である。386は底部から胴部での立ち上がりの部分で、外面は擦過調整、内面は貝殻条痕調整である。388・389の内面は研磨調整が施されている。388の外面には炭化物が付着する。389の器壁は一旦整形した後に粘土を外面に継ぎ足したためか、二重構造となっている。

392～406は型取り成型によって製作されたと考えられる組織痕土器である。392～398はアンギン目、399～403は網目、404・405は籠目と網目の二種がみられる資料である。

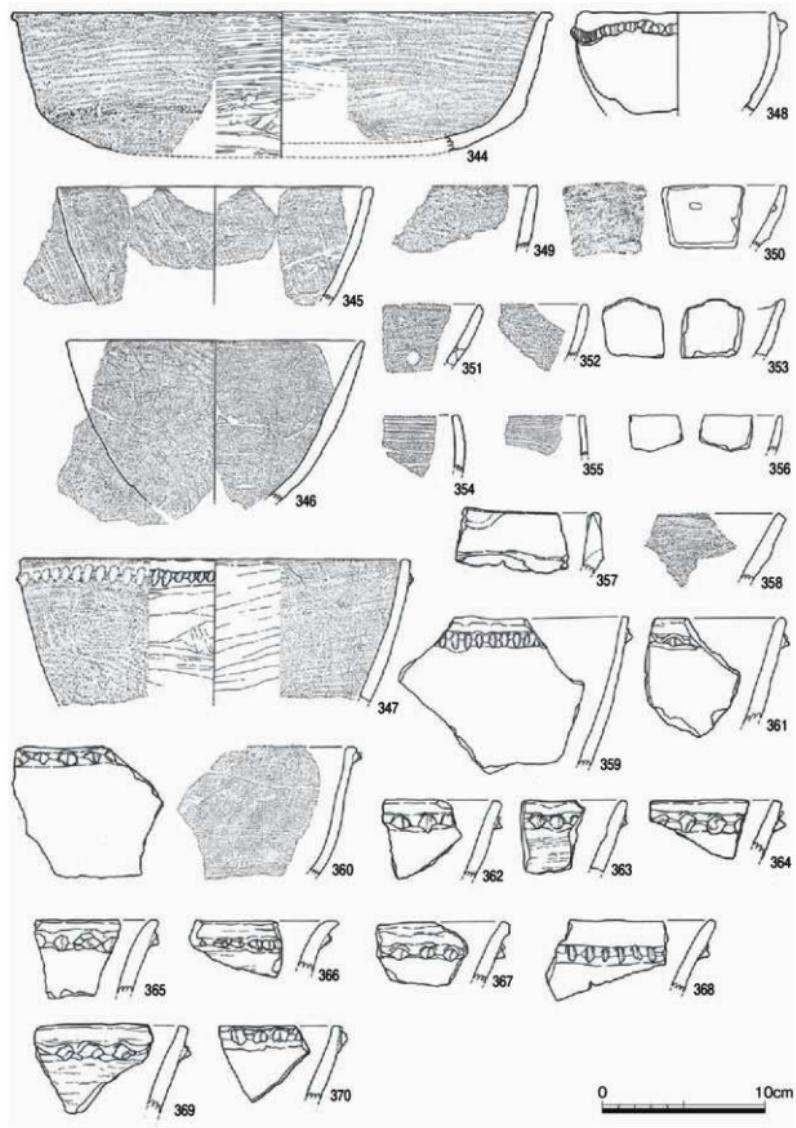
392は口径28.8cmを測り、アンギン目の残る型取りの胴部から屈曲して4.6cmほど口縁部が立ち上がる。外面には炭化物が付着する。393は経糸の間隔の広いアンギンが胴部に残り、先細りとなる口縁部が3.0cmほど立ち上がる。また、外面に炭化物の付着が認められる。394はアンギンの残る部分から口縁部への屈曲部分である。396は底部付近の資料で、アンギン目を搔き取るように擦過調整が行われている。397の内面は丁寧に研磨調整が行われている。398の外面には口縁部の立ち上がり部分に擦過調整がみられる。

400の外面には網目がわずかに観察されるが、擦過調整によってほとんどが消失している。403の内面は研磨調整が施されている。

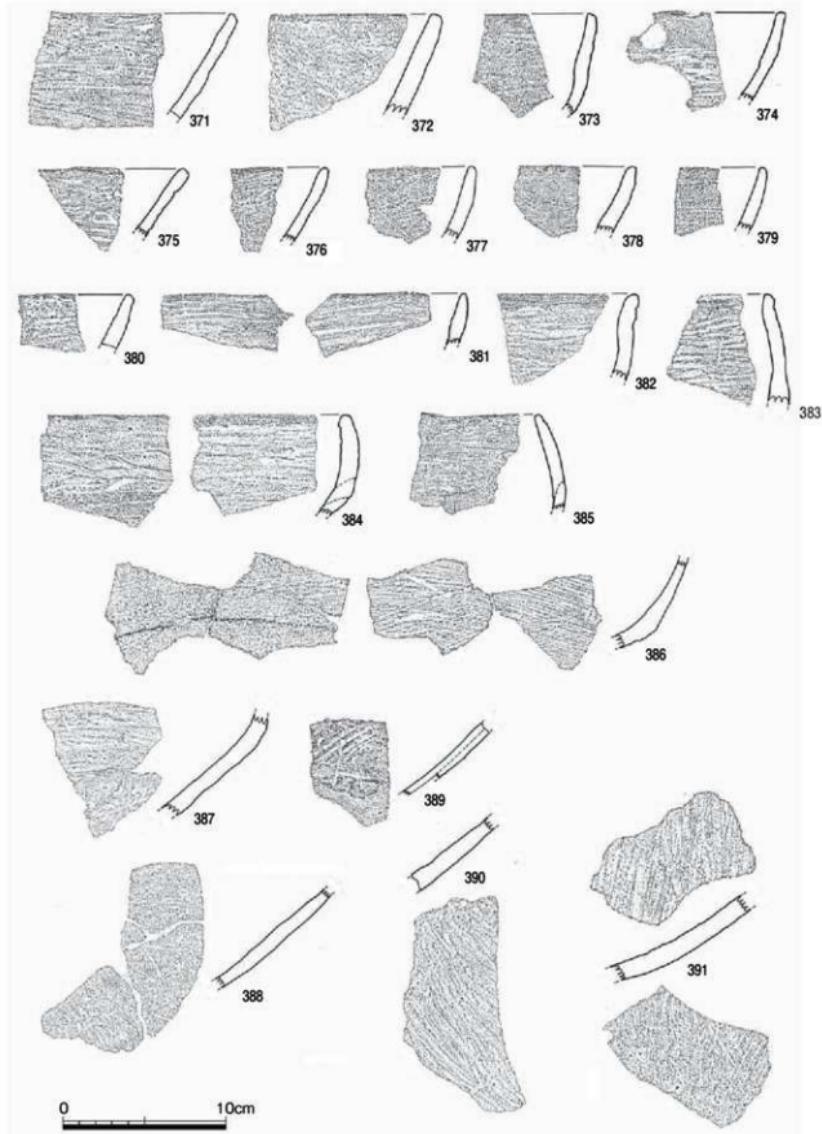
404は型取りの胴部から口縁部が立ち上がる部分で、籠を外型として網を中敷きにしている。外面、立ち上がり部分に炭化物が付着する。

406は、組織痕そのものは残存しないものの、屈曲する外面下位には擦過調整が認められ、型取り部から口縁部への境界部分を減厚したものと考える。

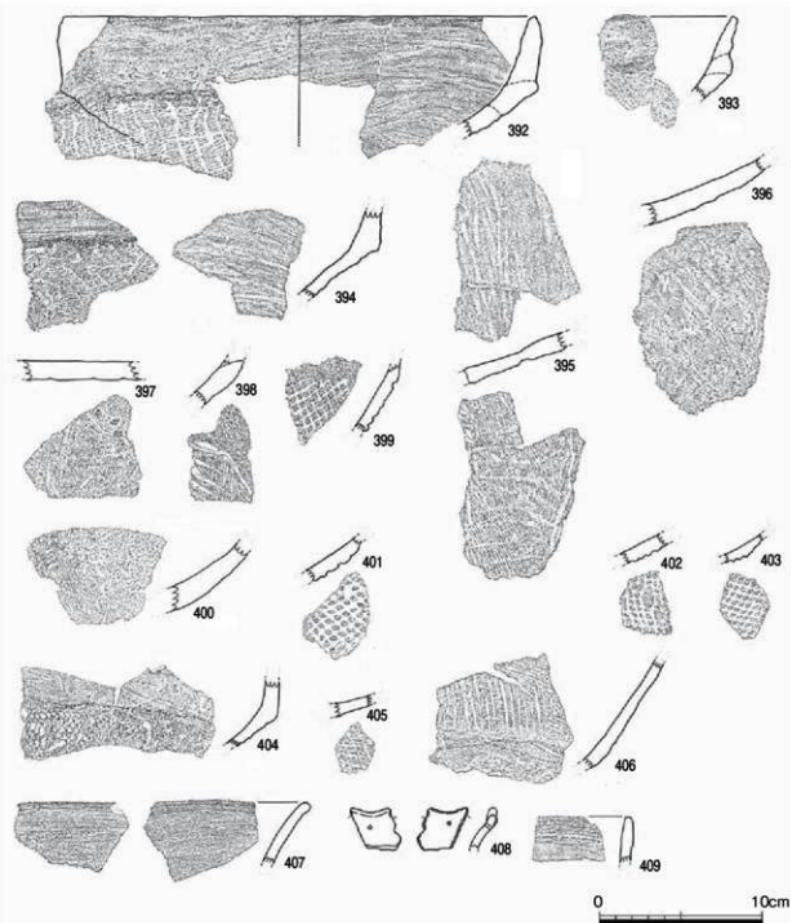
407は内外面ともに研磨調整がなされた外反する口縁部で、外面にはわずかに赤色顔料が認められる。408は小ぶりの精製土器の口縁部で、内外面ともに研磨調整が施される。口唇部にはリボン状突起がつけられ、突起下には焼成前に穿孔が行われている。409は外面が肥厚する口縁部で、傾きには不安がある。肥厚部分には横方向の貝殻条痕がみられるが、その下位と内面は研磨調整である。



第45図 G区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)



第46図 G区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)



第47図 G区土器ほか実測図② (S = 1/3)

410は内外面ともによく研磨された丸底をなす資料で、復元最大径は24.4cmを測る。外面に炭化物の付着がある。411は内外面ともに研磨調整が行われており、上位で屈曲をみせる。412は円盤貼り付けの底部で、内外面ともに研磨調整である。底径は9.4cmで、底面は平底ではなくわずかに膨らむ。413は底径7.4cmで、丸底に粘土紐をリング状に貼り付け、高台様にする。414・415は内外面ともにナデ調整で、復元底径は、414が7.2cm、415が5.5cmを測る。416は内外面ともにナデ調整である。417・418は内外面ともに研磨調整で、非常に薄手の器壁である。

419・420は高坏の資料である。

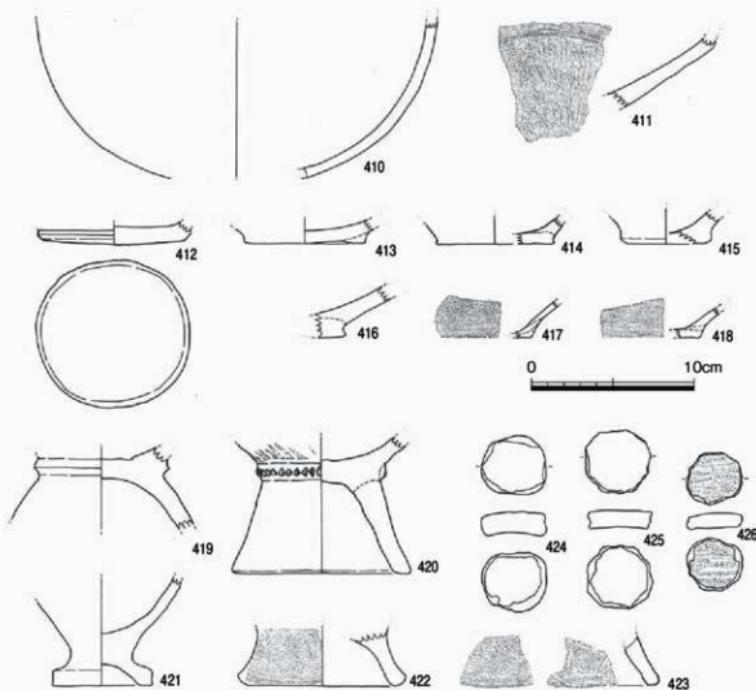
419は脚部と坏部との境界に三角突帯をもち、内外面ともに研磨調整が行われる。420は底径10.9cmを測る。坏部の外面は貝殻条痕調整、内面はナデ調整、脚部の外面はナデ調整、内面は擦過調整である。突帯にはヘラ状工具による刻目が施される。

421～423は脚台の資料である。421は内外面ともにナデ調整であるが、脚台内は擦過調整である。底径6.0cmである。422は底径10.2cmの脚台で、内外面ともにナデ調整である。

424～426は土製円盤である。いずれも粗製土器片を打ち欠いて円形に整えるが、424については、その後は断面に研磨をかけた可能性がある。

427～443は壺の資料である。

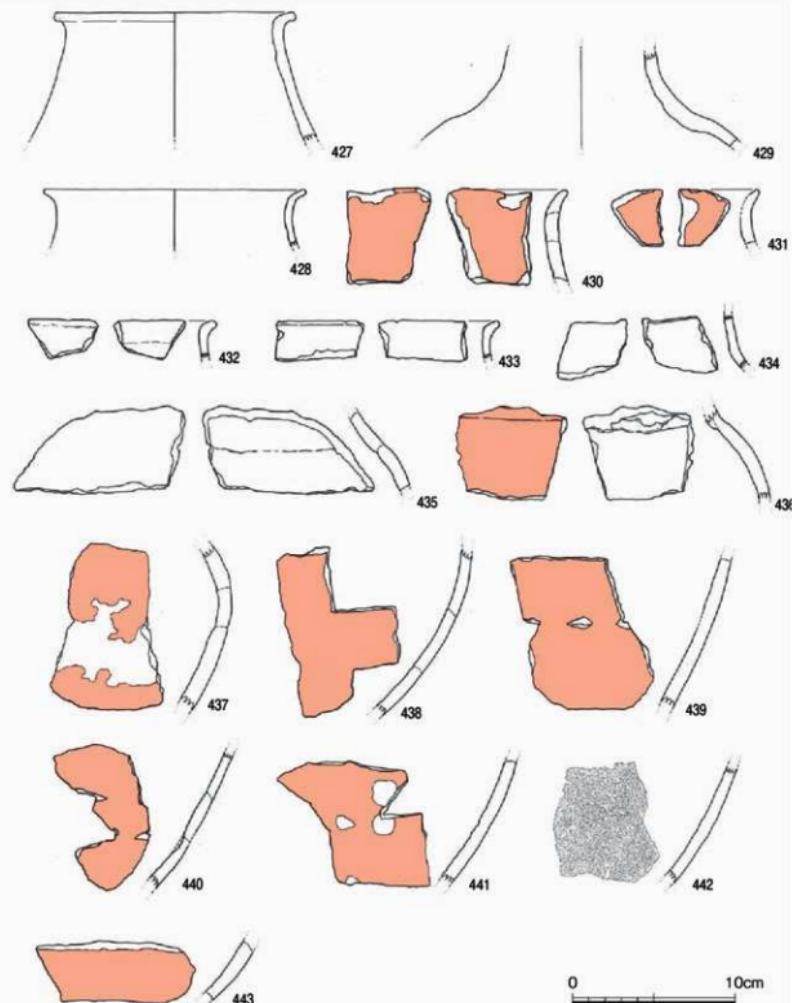
427・428は、接合はしないが同一個体の可能性がある。427は復元口径14.8cm、428は復元口径17.2cmで、口縁部は折れるように強く外反する。丹塗りは行われておらず、焼成が甘い。429は肩部から頸部にかけての資料で、外面には丹塗りの痕跡が残るが残存は悪い。内面は剥落が著しい。430・431は先細りとなって外反する口縁部資料で、内外面ともに丹塗りが施されている。432・433は焼成



第48図 G区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)

が悪く、軟質な器壁である。丹塗りは行われていない。435は胎土に砂粒を多く含む。436は肩部と頭部との接合部で、内面に段を作る。

437～443は胴部の資料である。いずれも外面は研磨調整で、丹塗りが施されている。437・438、440は粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭である。



第49図 G区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)

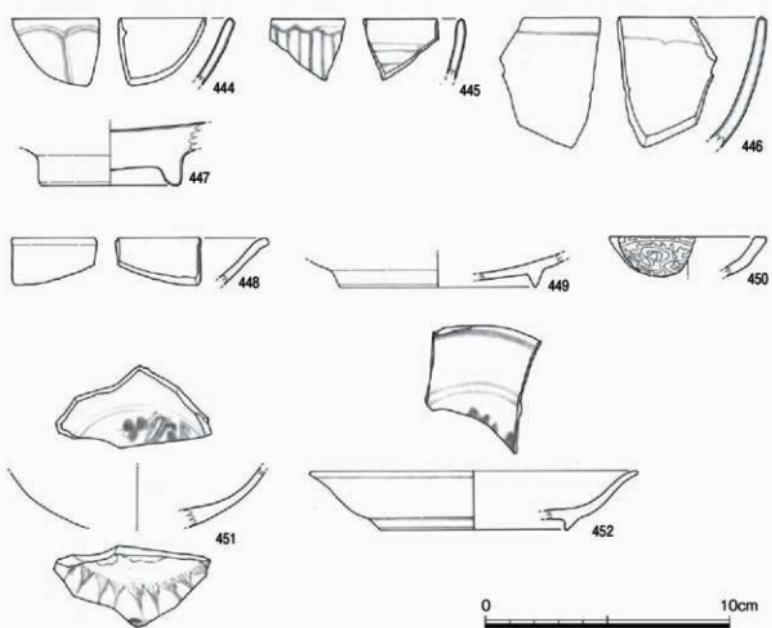
444～452は中・近世の陶磁器類である。

444～447は青磁碗の内湾する口縁部である。444は幅の広い連弁に弧状の劍頭が二重につく。445は連弁と劍頭がそろっていない。446の外面口縁部には界線が1条巡る。447は底部の資料で、底径は5.8 cmを測る。高台内は中心部を除き釉剥ぎが行われるが、高台は外外面、疊付も釉がかかる。

448・449は白磁皿である。448は端反の皿口縁部である。449は皿底部で、復元底径は8.0cmである。疊付部分には釉剥ぎが行われている。

450は型押しの白磁紅皿で、外面には蜻唐草文がみられる。復元口径は6.4cmである。

451・452は青花皿である。451は基筒底と思われ、外面には芭蕉葉文が描かれる。452は復元口径13.4 cm、復元底径7.6cmである。器高は2.4cmである。



第50図 G区土器ほか実測図◎ (S = 1/2)

第4表 G区土器ほか観察表①

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調	地土	備考
						外面	内面			
1	-	遺跡	瓦器-b	V-a	山形群層文	ナデ	灰青色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
2	-	遺跡	G40-c	V-b	山形群層文	ナデ	にぶい褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
3	-	遺跡	吉0-b	V-b	山形群層文	ナデ	浅青色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
4	-	遺跡	吉0-b	V-a	山形群層文	ナデ	にぶい褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
5	-	遺跡	G42-b	V-b	山形群層文	ナデ	にぶい褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
6	-	遺跡	H20-a	V-b	山形群層文	ナデ	にぶい褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
7	-	遺跡	G42-b	V-b	楕円群層文	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
8	-	遺跡	F0-d	V-b	楕円群層文	ナデ	にぶい褐色	灰青色	角閃石・長石・石英	
9	-	遺跡	F0-d	V-b	楕円群層文	ナデ	明青褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
10	-	遺跡	G29-c	V-b	楕円群層文	ナデ	褐色	灰青色	角閃石・長石・石英	
11	-	遺跡	H20-c	V-a	楕円群層文	ナデ	灰青褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
12	-	遺跡	G42-b	V-b	楕円群層文	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・赤色粒子	
13	-	遺跡	E45-d	V-a	楕円群層文	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
14	-	遺跡	F42-c	V-b	沈殿+ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	口唇部細目
15	-	遺跡	F43-a	V-a	沈殿+ナデ	ナデ	にぶい褐色	浅青色	角閃石・長石・石英	口唇部細目
16	-	遺跡	G43-a	V-b	沈殿+ナデ	ナデ	浅青色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	口唇部細目
17	-	遺跡	H20-b	V-b	丸点文・沈殿+ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	口唇部細目
18	-	遺跡	G40-b	V-b	丸点文・沈殿	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
19	-	遺跡	G29-d	V-b	沈殿+ナデ	ナデ	浅青色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
20	G-0121	遺跡	H20-d	H-b下	丸点文・沈殿	ナデ	明青褐色	暗灰青色	角閃石・長石・石英	
21	-	遺跡	G42-b	V-b	丸点文・沈殿	ナデ	浅青色	灰青色	角閃石・長石・石英	
22	-	遺跡	G42-b	V-b	丸点文・沈殿	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
23	-	遺跡	G40-b	V-b	丸点文+ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
24	-	遺跡	F41-c	V-b	丸点文+ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
25	-	遺跡	G41-a	V-b	丸点文+ナデ	ナデ	褐色	浅青色	角閃石・長石・石英	
26	-	遺跡	H20-d	V-b	丸点文+ナデ	ナデ	褐色	浅青色	角閃石・長石・石英	
27	-	遺跡	H20-c	V-b	丸点文+ナデ	ナデ	褐色	浅青色	角閃石・長石・石英	
28	-	遺跡	吉0-b	V-a	ナデ	ナデ	浅青色	褐色	角閃石・長石・石英	
29	-	遺跡	G40-b	V-b	丸点文+ナデ	ナデ	褐色	浅青色	角閃石・長石・石英	表面調整ナデ
30	-	遺跡	H20-d	V-b	削目+沈殿文	ナデ	明青褐色	浅青色	長石・石英	口唇部細目
31	-	遺跡	G43-d	V-b	削目+沈殿文	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石	口唇部細目
32	-	遺跡	H20-b	V-b	削目	ナデ	褐色	褐色	長石・赤色粒子	口唇部細目
33	-	遺跡	G43-a	V-b	削目+沈殿文	ナデ	褐色	黑褐色	長石・石英	
34	-	遺跡	-	-	削目+沈殿文	ナデ	明青褐色	にぶい褐色	長石・石英	
35	-	遺跡	G28-d	V-b	沈殿文	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	長石・石英	
36	G-0105 G-1280	遺跡	H20-c	H-b上 H-b上	貝冠束縫	貝冠束縫+ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	G-0148 G-0130 G-3881	遺跡	H20-c	H-b上 H-b下	貝冠束縫	貝冠束縫+ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
37	G-1458 G-1540	遺跡	吉0-b	H-b上 吉0-b	ナデ	貝冠束縫	にぶい褐色	にぶい褐色・にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	G-1910 G-0310	遺跡	吉0-b	H-b上 H-b下	貝冠束縫+珠串	珠串+ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
38	G-1909 G-1911	遺跡	吉0-b	H-b上 H-b上	貝冠束縫+珠串	珠串+ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
39	G-1600 G-1929 G-2126	遺跡	吉0-b	H-b上 H-b上 H-b下	貝冠束縫	貝冠束縫	にぶい褐色 褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	

第5表 G区土器ほか觀察表②

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考
						外面	内面	外面	内面		
40	G-1746		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上	圓通	無通、ナデ	明赤褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英	
	G-1456		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上						
	G-1720		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上						
	G-1457		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上						
41	G-1525		漆鉢	II-0-c	Ⅲb上	貝地条板	貝地条板	にぶい青褐色	暗色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
42	G-430		漆鉢	II-0-c	Ⅲb下	ナデ	ナデ	褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英	
43	G-227		漆鉢	II-0-b	Ⅲb上	圓通	無通	にぶい青褐色	青灰色	角閃石、長石、石英	
44	G-1657		漆鉢	II-0-b	Ⅲb上	貝地条板、ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	G-1620		漆鉢	II-0-b	Ⅲb上						
45	G-1644		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上	貝地条板	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
46	G-1162		漆鉢	II-0-c	Ⅲb上	貝地条板	ナデ	黑褐色	黑褐色	長石、石英、赤色粒子	
	G-3235		漆鉢	II-0-c	Ⅲb下			深青褐色	深灰色		
47	-		漆鉢	II-0-a	Ⅲa	貝地条板	貝地条板	褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
48	G-480		漆鉢	II-0-c	Ⅲb上	貝地条板	ナデ	にぶい青褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
49	G-1907		漆鉢	II-0-c	Ⅲb上	圓通	ナデ	褐色	にぶい青褐色	角閃石、長石、石英	
50	G-026		漆鉢	II-0-d	Ⅲb上	貝地条板	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
51	G-1856		漆鉢	II-0-d	Ⅲb上	圓通、ナデ	無通、ナデ	黒褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
52	G-3513		漆鉢	II-0-a	Ⅲb下	ナデ	ナデ	にぶい青褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	空起
53	G-3022		漆鉢	II-0-b	Ⅲb上	圓通	ナデ	にぶい青褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
54	G-2828		漆鉢	II-0-b	Ⅲb上	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	明赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	G-2764		漆鉢	II-0-b	Ⅲb上						
55	G-678		漆鉢	II-0-b	Ⅲb下	貝地条板、ナデ	貝地条板、ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
56	G-6634		漆鉢	II-0-c	Ⅲb下	貝地条板、ナデ	貝地条板	にぶい青褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
57	G-3220		漆鉢	II-0-c	Ⅲb下	貝地条板	貝地条板	褐色	明赤褐色	長石、石英、赤色粒子	
58	-		漆鉢	II-0-a	Ⅲa	貝地条板	ナデ	明赤褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
59	G-4566		漆鉢	II-0-c	Ⅲb下	貝地条板、ナデ	ナデ	にぶい青褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
60	G-1553		漆鉢	II-0-b	Ⅲb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、石英、赤色粒子	
61	G-1703		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上	貝地条板、ナデ	貝地条板、ナデ	黒褐色	黒褐色	長石、石英	
62	G-2517		漆鉢	II-0-a	Ⅲb下	圓通	無通	明赤褐色	明赤褐色	角閃石、長石、石英	
63	G-6227		漆鉢	II-0-b	Ⅲb下	貝地条板	ナデ	褐色	褐色	長石、石英	
64	-		漆鉢	II-0-b	Ⅲa	貝地条板、ナデ	貝地条板	明赤褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
65	G-1913		漆鉢	II-0-c	Ⅲb上	貝地条板	ナデ	黒褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英	
29	G-1579		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上						
	G-1277		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上						
	G-5772		漆鉢	II-0-d	Ⅲb上	貝地条板	貝地条板	褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	G-5724		漆鉢	II-0-d	Ⅲb上						
30	G-2331		漆鉢	II-0-b	Ⅲb下						
	67	-	漆鉢	II-0-b	Ⅲa	沈縫、ナデ	ナデ	にぶい青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英	
	68	G-1702	漆鉢	II-0-a	Ⅲb上	ナデ	貝地条板	褐色	褐色	長石、石英	
	G-1681		漆鉢	II-0-a	Ⅲb上	ナデ	貝地条板	明赤褐色	明赤褐色	長石、石英、赤色粒子	
31	70	-	漆鉢	G-627-b	Ⅲb上	沈縫、ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	71	-	漆鉢	II-0-a	-	沈縫、ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	72	G-6272	漆鉢	II-0-b	Ⅲb上	沈縫、ナデ	研磨	明赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	73	-	漆鉢	II-0-a	-	沈縫、ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
32	74	G-4364	漆鉢	II-0-b	Ⅲb上	沈縫、ナデ	貝地条板、ナデ	にぶい褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤褐色	
	75	G-4372	漆鉢	II-0-c	Ⅲb下	沈縫、ナデ	研磨	ナデ	明赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	76	G-4572	漆鉢	II-0-a	Ⅲb下	沈縫、ナデ	研磨	褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	77	G-6637	漆鉢	II-0-c	Ⅲb下	沈縫、ナデ	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英	

第6表 G区土器ほか観察表③

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調	地土	備考
						外面	内面			
78	G-5338	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb下	沈縫／ナデ	研磨	灰褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
79	G-4578	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	にふい赤褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
80	-	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱ	沈縫／研磨	研磨, ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
81	G-3616	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -e	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	にふい赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
82	G-5029	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱb下	沈縫／研磨	研磨	褐色	にふい赤褐色	長石・石英・赤色粒子	
83	G-6340	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱb下	沈縫／研磨	貝造舟板・研磨	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
84	G-3256	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	にふい赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
85	-	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱ	沈縫／ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
86	G-3900	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい赤褐色	長石・石英・赤色粒子	
87	G-1366	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb上	沈縫／研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
88	G-2452	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb下	沈縫／研磨	研磨	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
89	G-6225	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／ナデ・研磨	研磨	にふい赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
90	G-6246	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／研磨	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
91	G-6717	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／研磨	ナデ	褐色	角閃石・長石・石英		
92	G-4600	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb下	沈縫／研磨	研磨	褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
93	G-2241	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	にふい赤褐色	灰青色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
94	G-3557	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	にふい赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
95	G-6147	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／ナデ	貝造舟板・ナデ	にふい赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
96	G-1846	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb上	沈縫／ナデ	研磨	にふい褐色	にふい褐色	長石・石英・赤色粒子	
97	G-5547	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
98	G-0990	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb上	沈縫／ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
99	G-1000	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb上	沈縫／研磨	研磨	にふい赤褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
100	G-2717	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
101	G-6460	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb下	沈縫／研磨	研磨	にふい赤褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
102	G-2108	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
103	G-3742	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	灰青褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
104	G-5396	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb下	沈縫／研磨	貝造舟板・ナデ	にふい赤褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
105	G-2654	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb下	沈縫／ナデ	貝造舟板・ナデ	にふい赤褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
106	G-3446	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英	
107	G-3065	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
108	G-5479	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱb下	ナデ	貝造舟板・ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
109	G-5476	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	ナデ	研磨・ナデ	灰青褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
110	G-4593	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb下	沈縫・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
111	G-4731	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫・研磨	ナデ	にふい赤褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
112	G-1423	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱb上	沈縫／ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
113	-	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	~	沈縫／ナデ	ナデ	にふい赤褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
114	G-2181	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫／ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
115	G-1336	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -d	Ⅱb上	沈縫・研磨	ナデ	褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英	
116	G-2590	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -c	Ⅱb下	沈縫・研磨	貝造舟板・ナデ	明赤褐色	にふい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
117	G-6221	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫・研磨	研磨	褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
118	G-6445	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	沈縫・研磨	研磨	褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
119	G-4326	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -b	Ⅱb下	貝造舟板・研磨	貝造舟板・研磨	にふい赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
120	G-4414	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	ナデ	研磨	浅青褐色	角閃石・長石・石英		
121	G-6813	漆鉢	正四 <sup>o</sup> -a	Ⅱb下	貝造舟板・研磨	貝造舟板・ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	

第7表 G区土器はか觀察表④

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考
						外面	内面	外面	内面		
	122	G-6256	漆鉢	H37-d	Ⅱb下	研磨	貝殻条板・ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
		G-3722	漆鉢	H37-c	Ⅱb下						
	123	G-6567	漆鉢	H37-d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	124	G-1875	漆鉢	H37-d	Ⅱb下	ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	125	G-5564	漆鉢	H37-a	Ⅱb下	研磨	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	126	G-6068	漆鉢	H37-c	Ⅱb下	研磨	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	127	-	漆鉢	H37-b	Ⅱa	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	128	G-1007	漆鉢	H37-b	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
	129	G-2064	漆鉢	G41-a	Ⅱb下	沈焼・ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	130	G-2561	漆鉢	H37-a	Ⅱb下	沈焼・ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	131	G-6229	漆鉢	H37-a	Ⅱb下	沈焼・ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	132	G-3252	漆鉢	H37-b	Ⅱb下	沈焼・貝殻条板・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
	133	G-5633	漆鉢	H37-d	Ⅱb上	沈焼・貝殻条板	ナデ	深青褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
		G-6529			Ⅱb下						
	134	G-1729	漆鉢	H37-a	Ⅱb上	貝殻条板	貝殻条板・ナデ	褐色	にぶい褐色	長石・石英	
		G-4857			Ⅱb下						
	135	G-1421	漆鉢	H37-d	Ⅱb上	貝殻条板	貝殻条板	明赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	136	G-1519	漆鉢	H37-a	Ⅱb上	貝殻条板	貝殻条板	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	137	G-2560	漆鉢	H37-b	Ⅱb下	ナデ	研磨・ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
	138	-	漆鉢	H37-b	Ⅱ	研磨	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	139	G-1721	漆鉢	H37-a	Ⅱb上	ナデ	研磨	にぶい褐色	褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
	140	G-2722	漆鉢	H37-d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
	141	G-3045	漆鉢	H37-c	Ⅱb下	貝殻条板	ナデ	褐色	褐色	長石・石英	
	142	G-1953	漆鉢	H37-c	Ⅱb上	貝殻条板	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	143	G-9007	漆鉢	H37-a	Ⅱb下	貝殻条板	貝殻条板・ナデ	深灰色	深灰色	角閃石・長石・石英	
	144	G-2902	漆鉢	G40-c	Ⅱb下	貝殻条板・ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	145	G-3305	漆鉢	H37-d	Ⅱb下	貝殻条板	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	146	-	漆鉢	G40-d	Ⅱa	研磨・ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	147	G-5628	漆鉢	H37-c	Ⅱb下	貝殻条板	ナデ	褐色・深青褐色	にぶい褐色	長石・石英・赤色粒子	
	148	G-5629	漆鉢	H37-b	Ⅱb上	貝殻条板	貝殻条板・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	149	G-1452	漆鉢	H37-b	Ⅱb上	貝殻条板	貝殻条板・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	150	G-1706	漆鉢	G40-c	Ⅱb下	ナデ	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	151	G-2826	漆鉢	H37-b	Ⅱb下	研磨・貝殻条板	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	鉛付
	152	G-1274	漆鉢	H37-c	Ⅱb上	ナデ・ナデ・貝殻条板	ナデ	明赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	鉛付
	153	G-2901	漆鉢	H37-d	Ⅱb下	ナデ・ナデ・貝殻条板	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	鉛付
	154	G-3627	漆鉢	H37-a	Ⅱb下	貝殻条板	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	鉛付
	155	G-1365	漆鉢	H37-a	Ⅱb下	ナデ・貝殻条板	貝殻条板・ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	鉛付
	156	G-2950	漆鉢	H37-d	Ⅱb下	沈焼・貝殻条板	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
	157	G-3856	漆鉢	H37-a	Ⅱb下	研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
		G-3021									
	158	G-3026									
		G-3020									
		G-3021	甕	H37-d	Ⅱb下	前口・ナデ・貝殻条板	貝殻条板・ナデ	深青褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
		G-3022									
		G-3023									

第8表 G区土器ほか観察表⑤

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考		
						外面		内面					
						外面	内面	外面	内面				
139	G-0462			H36-d									
	G-0467			H36-d									
	G-0468	美		H36-d	Ⅲb上	削目／貝殻条痕・ナデ	擦過・ナデ	にぶい褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英			
	G-0552			H36-d									
	G-1095			H36-d									
140	G-3749												
	G-1093	美		H36-d	Ⅲb上	削目／貝殻条痕	擦過	灰青褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英			
	G-0647												
	G-2346												
	G-3276	美		H37-a	Ⅲb下	削目／貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
141	G-3346	美		H37-c	Ⅲb下	削目／貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	灰褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英			
	G-0930	美		H37-d	Ⅲb上	削目・ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	G-2313	美		H38-b	Ⅲb下	削目・ナデ	ナデ	灰青褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英			
	G-6622	美		H39-d	Ⅲb上	削目／貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英			
	G-2675	美		H39-d	Ⅲb下	削目・ナデ	ナデ	黑褐色	角閃石・長石・石英				
142	G-3647	美		H39-a	Ⅲb下	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	黑褐色	角閃石・長石・石英			
	G-3651	美		H39-c	Ⅲb上	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	長石・石英			
	G-9470	美		H36-d	Ⅲb上	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英			
	-	美		-	挫瓦	削目／貝殻条痕・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・雲母			
	G-0321	美		H37-d	Ⅲb上	削目／貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐色	角閃石・長石・石英				
143	G-2651	美		H38-a	Ⅲb下	削目／貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英			
	G-0996	美		H38-c	Ⅲb上	削目／貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英			
	-	美		-	磨土	削目／貝殻条痕	擦過・ナデ	灰青褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	-	美		-	帶面	削目／貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	長石・石英			
	G-0898	美		H37-d	Ⅲb上	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英			
144	G-2661	美		H36-d	Ⅲb上	削目／貝殻条痕	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	黑褐色	角閃石・長石・石英			
	G-0921	美		H39-d	Ⅲb上	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	黑褐色	角閃石・長石・石英・雲母			
	G-3520	美		H37-d	Ⅲb下	削目・ナデ	ナデ	黑褐色	にぶい褐色	長石・石英・雲母			
	G-5634	美		H39-c	Ⅲb下	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	黑褐色	角閃石・長石・石英			
	G-1796	美		H37-c	Ⅲb上	削目・ナデ	擦過	灰青褐色	灰青褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
145	G-0823	美		H37-d	Ⅲb上	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	オリーブ褐色	角閃石・長石・石英			
	-	美		H38-d	Ⅲ	削目・ナデ	ナデ	褐色	黃褐色	角閃石・長石・石英			
	G-3411	美		H36-d	Ⅲb下	削目・ナデ	貝殻条痕・ナデ	にぶい褐色	浅褐色	角閃石・長石・石英・雲母			
	G-1213				Ⅲb上								
	G-1225				Ⅲb上								
146	G-3659	美		H37-b	Ⅲb下	削目／薄青・ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・雲母			
	G-1225				Ⅲb上								
	G-3930				Ⅲb下								
	G-0120				Ⅲb上								
	G-0212				Ⅲb上								
147	G-2265	美		H37-c	Ⅲb上	削目・ナデ	擦過	にぶい褐色	灰青褐色	長石・石英・赤色粒子			
	G-2611			H36-d	Ⅲb下	削目・貝殻条痕・ナデ	擦過・ナデ	灰褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英			
	G-2356			H36-d	Ⅲb下	削目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	青灰色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	G-3133			H37-c	Ⅲb下								
	G-0461	美		H36-d	Ⅲb上	削目・擦過・ナデ	擦過・ナデ	灰褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英			
148	G-0470			H36-d	Ⅲb上								
	G-3074	美		H37-c	Ⅲb下	削目／貝殻条痕・ナデ	擦過・ナデ	にぶい褐色	青灰色	角閃石・長石・石英			
	G-3132			H37-c	Ⅲb上	削目・貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	青灰色	角閃石・長石・石英			
	G-1078	美		H37-c	Ⅲb上	削目・貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	青灰色	角閃石・長石・石英			
	G-1078												

第9表 G区土器はか觀察表⑥

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考
						外面	内面	外面	内面		
35	189	G-2902	甕	H37-c	Ⅲ層下	削目／ナデ	貝殻表面、ナデ	にふい青褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英	
	190	G-6401	甕	H37-c	Ⅲ層上	削目／ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい青褐色	角閃石、長石、赤色粒子	
	191	G-0528	甕	H37-c	Ⅲ層上	削目／擦過	擦過、ナデ	にふい青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英	
	192	G-3071	甕	H37-a	Ⅲ層上	削目／ナデ	貝殻表面	灰青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、赤色粒子	
	193	G-1129	甕	H37-b	Ⅲ層上	削目／ナデ	貝殻表面	灰青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英	
	-	甕	H37-c	Ⅲ	削目／ナデ	ナデ	にふい青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英		
36	G-1830				Ⅲ層上						
	G-1828				Ⅲ層上						
	G-1214				Ⅲ層上						
	G-1222	甕	H37-b		Ⅲ層上	削目／貝殻表面、ナデ、貝殻表面	ナデ	褐色	にふい褐色	長石、石英	年代測定試料1
	G-1229				Ⅲ層上						
	G-1831				Ⅲ層上						
	G-296				Ⅲ層下						
	G-3671				Ⅲ層下						
	G-1112				Ⅲ層上						
	G-3035	甕	H37-d	Ⅲ層下	削目／貝殻表面、ナデ	貝殻表面、ナデ	褐灰色	褐灰色	角閃石、長石、石英		
37	G-3111				Ⅲ層下						
	G-6616	甕	H37-a	Ⅲ層上	削目／貝殻表面	貝殻表面、ナデ	にふい青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英		
	G-4418				Ⅲ層上						
	G-5030	甕	H37-b	Ⅲ層下	削目／貝殻表面、ナデ	擦過	にふい青褐色	にふい青褐色	角閃石、長石、石英		
	G-6162				Ⅲ層上						
	G-2577	甕	H37-a	Ⅲ層下	削目／ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石、長石、石英		
	G-3869				Ⅲ層下						
	G-0035	甕	H37-d	Ⅲ層上	削目／ナデ	擦過	褐色	にふい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	G-1084				Ⅲ層下						
	G-6438	甕	H37-b	Ⅲ層上	削目／貝殻表面、ナデ	擦過、ナデ	にふい青褐色	にふい青褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
38	-	甕	-	Ⅲ	削目	貝殻表面	貝殻表面	明赤褐色	明赤褐色	角閃石、長石、重滑、赤色粒子	
	G-2601	甕	H37-c	Ⅲ層下	削目／ナデ	擦過	褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	G-3653	甕	H37-a	Ⅲ層下	削目／ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	角閃石、長石、石英		
	-	甕	H37-b	Ⅲ	削目／貝殻表面	ナデ	にふい褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	G-0479	甕	H37-d	Ⅲ層下	削目／貝殻表面、ナデ	ナデ	にふい青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、重滑		
	G-0509	甕	H37-d	Ⅲ層上	削目／貝殻表面、ナデ	貝殻表面、ナデ	にふい青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英		
	G-5267	甕	H37-c	Ⅲ層上	削目／貝殻表面	ナデ	褐色	黑褐色	角閃石、長石、石英		
	G-1318	甕	H37-c	Ⅲ層上	削目／貝殻表面、ナデ、貝殻表面	貝殻表面、ナデ、貝殻表面	にふい青褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英、重滑		
	G-0222	甕	H37-c	Ⅲ層上	削目／貝殻表面、貝殻表面、ナデ	貝殻表面、ナデ	にふい褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英		
	G-0305				Ⅲ層上						
39	G-0452	甕	H37-d	Ⅲ層上	削目／貝殻表面、貝殻表面、ナデ	貝殻表面	褐色	褐色	角閃石、長石、石英		
	G-4429				Ⅲ層-a						
	G-0332	甕	H37-c	Ⅲ層上	削目／擦過、ナデ、貝殻表面	ナデ	灰褐色	にふい青褐色	角閃石、長石、石英	鏡成井跡孔	
	G-1799				Ⅲ層-c						
	G-3610	甕	H37-c	Ⅲ層下	削目／擦過	擦過、ナデ	灰青褐色	にふい褐色	角閃石、長石、石英		
	G-3022				Ⅲ層-c						
	G-1088	甕	H37-c	Ⅲ層上	削目／ナデ	ナデ	にふい青褐色	にふい青褐色	角閃石、長石、石英		
	G-2988	甕	H37-c	Ⅲ層下	削目／ナデ	ナデ	褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英、重滑		
	-	甕	H36-b	Ⅲ	削目／貝殻表面	ナデ	褐色	にふい青褐色	角閃石、長石、石英		
	G-0468	甕	H36-d	Ⅲ層上	削目／貝殻表面、ナデ	擦過	褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英		
40	217	-	H36-b	Ⅲ	削目／ナデ	ナデ	褐色	にふい青褐色	角閃石、長石、石英		
	G-5032	甕	G40-c	Ⅲ層下	削目／ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	219	-	G42-b	Ⅲ層上	研磨	研磨	明赤褐色	角閃石、長石、重滑	赤面調整ナデ		

第10表 G区土器はか觀察表⑦

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考	
						外面	内面	外面	内面			
	220	G-2160	甕	F42-a	Ⅱb下	貝造条板・環帶	研磨	にぶい赤褐色	灰青色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査研磨	
	221	-	甕	-	底土	表面・底壁	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	222	G-1165	甕	G38-d	Ⅲ上	研毛目・研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査研磨	
	223	-	甕	-	母岩	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査研磨	
	224	G-2507	甕	H40-b	Ⅱb下	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査研磨	
	225	-	甕	G41-d	Ⅱb上	粗面・ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	226	G-2152	甕	F41-d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査研磨	
	227	G-3428	甕	G38-c	Ⅲb下	研毛目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英	既剖調査研磨	
	228	G-6338	甕	H40-b	Ⅱb下	貝造条板・研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査研磨	
	229	G-2115	甕	F40-c	Ⅱb下	研磨	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査研磨	
	230	G-3656	甕	H38-a	Ⅱb下	ナデ	ナデ	褐色	橙色	角閃石・長石・石英	既剖調査ナデ	
		G-4536		H37-a								
	231	G-6139	甕	H37-b	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	G-0415			H37-b								
39	232	G-5962	甕	G40-d	Ⅱb下	粗面	研磨	明赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤母	既剖調査研磨	
	233	G-4579	甕	F40-c	Ⅱb下	ナデ	ナデ	明赤褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英	既剖調査ナデ	
	234	-	甕	G41-a	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	G-1310											
	235	G-1797	甕	H37-c	Ⅱb上	貝造条板	ナデ	貝造条板・ナデ	褐色	角閃石・長石・石英	研72	
	G-2364											
	236	G-2147	甕	F41-d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	長石・石英	既剖調査ナデ	
	237	G-2948	甕	H37-b	Ⅱb下	貝造条板	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査ナデ	
	238	G-0556	甕	H38-c	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	239	-	甕	F43-d	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	G-3661			H38-c								
	240	G-3625	甕	H38-a	Ⅱb下	貝造条板	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査ナデ	
	G-3646			H38-a								
	241	G-0164	甕	H37-c	Ⅱb上	貝造条板	ナデ	貝造条板・ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・雲母	既剖調査ナデ
	242	G-0230	甕	H37-c	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	243	G-3458	甕	G38-d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・雲母	既剖調査ナデ	
	244	G-0391	甕	H37-b	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	245	G-0521	甕	H38-c	Ⅱb上	貝造条板	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	246	G-1459	甕	H40-a	Ⅱb上	貝造条板	ナデ	褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査貝造条	
	247	G-1722	甕	H40-a	Ⅱb上	貝造条板・粗面	ナデ	赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査滑石 年代測定試料2	
	248	G-4606	甕	G40-b	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	G-4605											
	249	G-3623	甕	H38-a	Ⅱb下	粗面	ナデ	にぶい褐色	褐褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	250	G-3641	甕	H38-a	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
40	251	G-1795	甕	H37-c	Ⅱb上							
	G-2578			H37-d	Ⅱb下							
	G-0084			H37-d	Ⅱb上	貝造条板	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査ナデ	
	G-2639			H37-d	Ⅱb下							
	252	G-0562	甕	H37-a	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	253	G-1691	甕	H40-c	Ⅱb上	貝造条板・ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	254	-	甕	F41-a	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	255	G-0600	甕	H37-a	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	既剖調査ナデ	
	256	G-1261	甕	H37-b	Ⅱb上	ナデ	-	褐灰色	褐灰色	長石・石英・赤色粒子		
	257	-	甕	230-d	Ⅱb上	貝造条板	ナデ	明赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	
	258	G-9554	甕	H37-c	Ⅱb上	貝造条板	-	褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	既剖調査ナデ	

第11表 G区土器はか觀察表⑧

区	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		粘土	備考	
						外面	内面	外面	内面			
G	259	-	鉢	-	電土 ナデ	ナデ	青赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	後田調査ナデ		
G	G-0301			H3P-d	Ⅱb上							
	G-1307			H3P-e	Ⅱb上							
	G-2036			H3P-c	Ⅱb下							
	G-3002	鉢		H3P-c	Ⅱb下	貝造基・ナデ	黒褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	G-3003			H3P-c	Ⅱb下							
	G-1801			H3P-c	Ⅱb上							
G	G-3061			H3P-c	Ⅱb下							
	G-4546	鉢	H3P-c	Ⅱb下	貝造基・ナデ・貝造基	ナデ	深青褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	G-4546	鉢	H3P-c	Ⅱb上								
G	G-1401	鉢	H3P-d	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
G	G-4728	浅鉢	G4P-a	Ⅱb下	沈鏡・研磨	研磨	青褐色	暗灰褐色	角閃石・長石・石英			
	G-3568	浅鉢	I3P-a	Ⅱb下	沈鏡・研磨	研磨	深青褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英			
	-	浅鉢	F4P-d	Ⅱb上	沈鏡・研磨	研磨	黒褐色	にふい褐色	角閃石・長石	年代測定試料3		
	G-6142	浅鉢	F4P-b	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・泥母			
	-	浅鉢	G4P-b	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・雲母			
	268	-	浅鉢	G4P-d	E	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	G-5083	浅鉢	G4L-d	Ⅱb下	沈鏡・研磨	研磨	深青褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英・雲母			
	G-1445	浅鉢	H3P-b	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英			
	G-3217	浅鉢	H3P-b	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・雲母・赤色粒子			
	G-2501	浅鉢	H3P-b	Ⅱb上	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色・黒褐色	角閃石・長石			
G	G-2779	浅鉢	F4P-a	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	-	浅鉢	I4P-a	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英			
	G-3676	浅鉢	H3P-c	Ⅱb下	沈鏡・研磨	研磨	青褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英			
	G-3467	浅鉢	G4P-d	Ⅱb下	沈鏡・研磨	研磨	褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英			
	G-1860	浅鉢	H3P-a	Ⅱb上	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	G-4302	浅鉢	H3P-a	Ⅱb下	研磨	研磨	褐色	青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	G-6075	浅鉢	E4P-c	Ⅱb下	研磨	研磨	黒褐色	灰青褐色	角閃石・長石			
	G-3442	浅鉢	G4P-d	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英			
	-	浅鉢	F4S-d	Ⅱb上	研磨	研磨	深青色	にふい褐色	角閃石・長石			
	G-4246	浅鉢	G4P-c	Ⅱb下	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	黒褐色	角閃石・長石			
G	G-5089	浅鉢	E4P-c	Ⅱb	研磨	研磨	にふい褐色	黒褐色	にふい褐色・黒色	角閃石・長石・石英		
	-	浅鉢	F4P-d	Ⅱb	沈鏡・ナデ	ナデ	深青色	にふい褐色・青灰色	角閃石・長石・石英			
	G-2217	浅鉢	G4P-b	Ⅱb	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色・青灰色	角閃石・長石・石英			
	G-5173	浅鉢	G4P-c	Ⅱb	研磨	研磨	にふい褐色・茎色	青灰色	角閃石・長石・赤色粒子			
	-	浅鉢	G4L-c	Ⅱb上	研磨	研磨	深青色	黒褐色	角閃石・長石			
	G-4621	浅鉢	G4P-c	Ⅱb下	沈鏡・研磨	研磨	褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英			
	G-6622	浅鉢	H3P-d	Ⅱb	研磨	研磨	深青褐色	黒褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	G-2120	浅鉢	F4P-c	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	黒褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	G-5406	浅鉢	F4P-a	Ⅱb下	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	G-4506	浅鉢	G3P-d	Ⅱb	研磨	研磨	黒褐色	黑色	角閃石・長石			
G	G-3386	浅鉢	I3P-a	Ⅱb	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石			
	G-6621	浅鉢	H3P-d	Ⅱb	研磨	研磨	深青褐色	黒褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	G-6622	浅鉢	F4P-c	Ⅱb	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	G-2120	浅鉢	F4P-c	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	黒褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	G-5406	浅鉢	F4P-a	Ⅱb下	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	G-4506	浅鉢	G3P-d	Ⅱb	研磨	研磨	黒褐色	黑色	角閃石・長石			
	G-3386	浅鉢	I3P-d	Ⅱb	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石			
	G-6621	浅鉢	I3P-a	Ⅱb	研磨	研磨	深青褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英			
	G-6622	浅鉢	F4P-c	Ⅱb	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	G-2120	浅鉢	F4P-c	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	黒褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
G	G-3667	浅鉢	I3P-b	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	黑色	角閃石・長石・石英			
	G-6621	浅鉢	I3P-c	Ⅱb	研磨	研磨	褐色	黑色	角閃石・長石・石英・雲母			
	G-2217	浅鉢	G4P-d	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	G-2072	浅鉢	G4P-d	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	黒褐色	角閃石			
	G-2589	浅鉢	G4P-d	Ⅱb	沈鏡・研磨	研磨	にふい褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英			

第12表 G区土器はか觀察表⑨

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考
						外面	内面	外面	内面		
300	G-1716	汽鉄	瓦器-a	II b 上	研磨		研磨	にぶい黄褐色	青灰色	角閃石、長石	
301	G-6584	瓦陶	II b -d	II b 下	研磨		研磨	灰青褐色、黒褐色	灰青褐色	角閃石、石英	
	G-6608		II b -d								
302	G-9637	瓦陶	II b -d	II b 上	研磨		研磨、ナデ	にぶい黄褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	G-1127		II b -b								
	G-6186	瓦陶	瓦器-a	II b 上	研磨		研磨	にぶい黄褐色	暗灰褐色、黃灰色	角閃石、長石、石英	
	G-6214										ヒレ状突起
304	-	瓦陶	II b -d	II b 上	沈積／研磨		研磨	褐色	にぶい褐色	角閃石、石英	
305	G-2113	瓦陶	II b -a	II b 下	沈積		研磨	にぶい黄褐色	稍灰褐色	角閃石、長石、石英	
306	G-9279	瓦陶	II b -c	II b 上	沈積／研磨		研磨	褐灰褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英	
307	-	瓦陶	II b -c	II b 上	沈積／研磨		研磨	褐色	青灰色	角閃石、長石、石英	リボン状突起
308	G-2908	汽鉄	J 35-d	II b 上	研磨		研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
309	G-3042	瓦陶	II b -c	II b 下	研磨		ナデ	黒褐色	黑色	角閃石、長石、石英	
310	G-1136	瓦陶	II b -c	II b 上	研磨		ナデ	黄褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
311	G-3432	瓦陶	G 38-d	II b 上	研磨		研磨	黒褐色	褐褐色	角閃石、長石、石英	
312	G-3639	瓦陶	II b -a	II b 上	研磨		研磨	褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英、雲母	
313	G-1729	瓦陶	II b -a	II b 上	研磨		ナデ	にぶい褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	G-4875		II b -a	II b 上							
314	G-2207	瓦陶	II b -c	II b 下	研磨		研磨	褐褐色	褐褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
315	G-9301	瓦陶	II b -d	II b 上	沈積／研磨		研磨	灰青褐色	灰青褐色	長石、石英	
316	G-5645	瓦陶	II b -d	II b 上	研磨		研磨	褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英	
	G-5646										
317	G-0061	瓦陶	II b -d								
	G-1803		II b -c								
	G-2926	瓦陶	II b -c	II b 上	研磨		擦過、ナデ	にぶい黄褐色	灰青褐色	にぶい褐色	
	G-2930		II b -c								
	G-3712		II b -d								年代測定資料
318	G-1580										
319	G-3623	瓦陶	II b -a	II b 上	研磨、擦過、研磨		擦過、研磨	褐灰色、灰青褐色	褐灰色	角閃石、長石	
	G-6726		II b -a	II b 上							
320	G-2987	瓦陶	II b -d	II b 上	研磨		研磨	にぶい黄褐色	青灰色	角閃石、長石、石英	
	G-3498		II b -a								
321	G-3526	瓦陶	II b -c	II b 上	研磨		研磨	褐色	褐色	角閃石、長石	瓦面調査研磨
	G-3613		II b -c								
322	G-1158	瓦陶	II b -d	II b 上	ナデ		ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、無酸石	
323	G-0660	瓦陶	II b -d	II b 上	ナデ		ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
324	G-3634	瓦陶	II b -a	II b 上	研磨		研磨	にぶい褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英	
325	-	瓦陶	I 36-a	I	ナデ		ナデ	褐色	褐色	角閃石、長石、石英	
326	G-2298	瓦陶	I 32-c	II b 上	研磨		ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石	
327	G-0726	瓦陶	I 37-a	II b 上	研磨		研磨	褐灰色	褐灰色	角閃石、長石、雲母	
	G-5568		I 37-a								
328	G-0472	瓦陶	I 36-d	II b 上	研磨		研磨	褐灰色	褐灰色	角閃石、石英、雲母	
329	G-3573	瓦陶	I 35-c	II b 下	研磨		研磨	にぶい黄褐色	青灰色	角閃石、長石、赤色粒子	
330	-	瓦陶	I 36-b	I	研磨		研磨	褐灰色	灰青褐色	長石、石英	
331	G-0238	瓦陶	I 37-c	II b 上	研磨、擦過		ナデ	褐灰色	褐灰色	角閃石、長石、雲母	
332	G-0659	瓦陶	I 38-b	II b 上	研磨		研磨	にぶい黄褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
333	G-3007	瓦陶	I 37-d	II b 下	研磨		研磨	褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、雲母	
334	G-4950	瓦陶	I 38-d	II b 下	研磨		研磨	褐灰色	黑褐色	角閃石、長石、石英	
335	G-5819	瓦陶	I 37-a	II b 下	研磨		研磨	褐灰色	青灰色	角閃石、長石、石英	

第13表 G区土器ほか観察表<sup>⑩</sup>

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
41	306	G-289	浅脚	J33'-d	Ⅲb下	研磨	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色、灰青褐色	角閃石、長石、石英	
	305	G-3655	浅脚	J33'-b	Ⅲb上	研磨	ナデ	灰青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	307	G-0329	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	研磨	ナデ	灰青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	308	-	浅脚	J33'-d	Ⅲb上	研磨	ナデ	灰青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	309	-	浅脚	J33'-c	Ⅱ	研磨	ナデ	にふい黄褐色	灰白色	角閃石、長石	
	310	G-5611	浅脚	J33'-a	Ⅲb上	研磨	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	角閃石、長石	
	311	G-0453	浅脚	J33'-d	Ⅲb上	研磨	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	312	G-1618	浅脚	J33'-b	Ⅲb上	研磨	ナデ	灰褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	313	G-3862	浅脚	J33'-c	Ⅲb下	研磨	ナデ	黑褐色	黑褐色	角閃石、長石、石英	
	314	G-2275	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻条板・研磨	貝殻条板、ナデ	灰褐色、にふい黄褐色	にふい赤褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	315	G-0286	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻条板	研磨、ナデ	暗灰褐色、灰青褐色	黑褐色	角閃石、長石、石英	
	316	G-6162	浅脚	J33'-d	Ⅲb上	貝殻条板・研磨	研磨、ナデ	暗灰褐色	にふい赤褐色	角閃石、長石、石英	
	317	G-3284	浅脚	J33'-a	Ⅲb下	貝殻条板・研磨	研磨、ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	年代測定試料5
	318	G-1257	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	研磨	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	319	G-0284	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻・研磨	貝殻条板、ナデ	にふい黄褐色、灰褐色	にふい黄褐色、灰褐色	角閃石、長石、石英	
	320	G-0885	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	321	G-4285	浅脚	J33'-b	Ⅲb下	ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	322	G-1322	浅脚	J33'-a	Ⅲb上	推進	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	323	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	焼成痕跡孔	
	324	G-1495	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	推進+ナデ	ナデ	にふい黄褐色	褐色	角閃石、長石、石英	
	325	-	浅脚	J33'-a	Ⅱ	貝殻条板・研磨	研磨	浅褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	326	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	327	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	328	356	浅脚	J33'-a	Ⅲb上	研磨	ナデ	にふい黄褐色	にふい赤褐色	角閃石、長石、石英	
	329	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	330	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	331	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	332	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	333	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	334	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	335	G-2164	浅脚	J33'-a	Ⅲb下	貝殻・研磨	研磨	暗灰褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	336	G-0302	浅脚	J33'-b	Ⅲb下	研磨	ナデ	暗灰褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、赤色粒子	
	337	G-3062	浅脚	J33'-d	Ⅲb下	ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	338	G-1921	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	ナデ	研磨	明赤褐色	にふい赤褐色	角閃石、長石、石英	
	339	G-0058	浅脚	J33'-d	Ⅲb上	貝殻・研磨	ナデ	灰青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	G-0223	-	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻条板・ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	年代測定試料6
	340	G-0224	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻	ナデ	にふい黄褐色、灰褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	G-0225	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英		
	341	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	342	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	343	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	344	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	345	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	346	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	347	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	348	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	349	G-4285	浅脚	J33'-b	Ⅲb下	ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	350	G-1322	浅脚	J33'-a	Ⅲb上	推進	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	351	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	焼成痕跡孔	
	352	G-1495	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	推進+ナデ	ナデ	にふい黄褐色	褐色	角閃石、長石、石英	
	353	-	浅脚	J33'-a	Ⅱ	貝殻条板・ナデ	研磨	浅褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	354	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	355	G-2164	浅脚	J33'-a	Ⅲb下	貝殻・研磨	研磨	暗灰褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	356	G-0302	浅脚	J33'-b	Ⅲb下	研磨	ナデ	暗灰褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、赤色粒子	
	357	G-3062	浅脚	J33'-d	Ⅲb下	ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	
	358	G-1921	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	ナデ	研磨	明赤褐色	にふい赤褐色	角閃石、長石、石英	
	359	G-0058	浅脚	J33'-d	Ⅲb上	貝殻・研磨	ナデ	灰青褐色	灰青褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	G-0223	-	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻条板・ナデ	ナデ	にふい黄褐色	にふい黄褐色	角閃石、長石、石英	年代測定試料6
	360	G-0224	浅脚	J33'-c	Ⅲb上	貝殻	ナデ	にふい黄褐色、灰褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	G-0225	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英		
	361	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英		
	362	-	浅脚	-	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	黒褐色	角閃石、長石、石英、雲母		
	363	G-0095	浅脚	J33'-a	Ⅲb上	貝殻・貝殻条板	貝殻条板・ナデ	にふい黄褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、石英	
	364	G-1924	浅脚	J33'-d	Ⅲb上	貝殻	ナデ	暗灰褐色	暗灰褐色	長石、石英	
	365	G-0096	浅脚	J33'-b	Ⅲb上	貝殻	ナデ	にふい黄褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	366	G-2628	浅脚	J33'-c	Ⅲb下	貝殻	ナデ	暗灰褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	367	G-2691	浅脚	J33'-a	Ⅲb下	貝殻	ナデ	貝殻条板・ナデ	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	368	G-2692	浅脚	J33'-c	Ⅲb下	貝殻	ナデ	貝殻条板・ナデ	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	G-2693	-	浅脚	J33'-a	Ⅲb下	貝殻	ナデ	貝殻条板・ナデ	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	369	G-6031	浅脚	J33'-d	Ⅲb下	貝殻	ナデ	貝殻条板・ナデ	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	370	G-6571	浅脚	J33'-b	Ⅲb下	貝殻	ナデ	貝殻条板・ナデ	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	371	G-4848	浅脚	J33'-a	Ⅲb下	貝殻条板・ナデ	貝殻条板・ナデ	にふい黄褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	372	G-3961	浅脚	J33'-a	Ⅲb下	研磨	ナデ	帶褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	373	G-3963	浅脚	J33'-c	Ⅲb下	研磨	ナデ	暗灰褐色	暗灰褐色	長石、石英	
	374	G-3679	浅脚	J33'-c	Ⅲb下	貝殻条板	貝殻条板・ナデ	暗灰褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
	375	G-3671	浅脚	J33'-c	Ⅲb下	研磨	ナデ	帶褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、雲母	
	376	-	浅脚	F33'-d	Ⅲb上	推進	ナデ	にふい黄褐色	暗灰褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	377	-	浅脚	F33'-d	Ⅲb上	推進・ナデ	推進・ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	

第14表 G区土器ほか観察表⑪

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考
						外面	内面	外面	内面		
G	328	G-1956	瓦脚	H38-d	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	長石・石英	
	329	-	瓦脚	I35-d	Ⅱb上	貝殻多孔・ナデ	ナデ	褐色	褐色	長石・石英・雲母	
	330	-	瓦脚	I40-c	Ⅱa	堆通	貝殻多孔・ナデ	褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英	
	331	G-1693	瓦脚	I40-a	Ⅱb上	貝殻多孔・ナデ	貝殻多孔・ナデ	にぶい褐色	黒褐色	長石・石英	
	332	G-1863	瓦脚	I29-d	Ⅱb上	貝殻多孔	ナデ	褐色	黄灰褐色・褐色	角閃石・長石・石英	
	333	G-1545	瓦脚	I40-b	Ⅱb上	貝殻多孔	ナデ	褐色	にぶい褐色	長石・石英	
	334	G-3798	瓦脚	I38-b	Ⅱb下	貝殻多孔・ナデ	貝殻多孔・ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	335	G-3335	瓦脚	F41-a	Ⅱb下	ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい褐色	長石・石英	
	336	G-3130	瓦脚	I37-c	Ⅱb下	堆通	貝殻多孔・ナデ	灰青褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	337	G-0958	瓦脚	I37-c	Ⅱb上	貝殻多孔・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色・灰青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
G	338	G-2568	瓦脚	I37-c	Ⅱb下	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	339	G-3086	瓦脚	I38-c	Ⅱb下	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	340	G-3687	瓦脚	I38-c	Ⅱb下	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	341	G-3727	瓦脚	I37-c	Ⅱb下	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	342	G-2558	瓦脚	I38-c	Ⅱb上	貝殻多孔	研磨	にぶい褐色	褐色	長石・石英	
	343	G-1596	瓦脚	I38-c	Ⅱb上	貝殻多孔・ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英・雲母	
	344	G-0275	瓦脚	I37-c	Ⅱb上	堆通	研磨	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒子	
	345	G-0659	瓦脚	I36-d	Ⅱb上	ナデ 細織痕(アンギン)	ナデ	灰褐色・褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	年代測定試料7
	346	G-2716	瓦脚	I37-c	Ⅱb下	ナデ 細織痕(アンギン)	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・赤色粒子	
	347	G-3518	瓦脚	I38-b	Ⅱb上	ナデ 細織痕(アンギン)	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
G	348	G-4846	瓦脚	I40-a	Ⅱb上	貝殻多孔・ナデ 細織痕(フジノ)	貝殻多孔・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	349	G-1927	瓦脚	I40-c	Ⅱb上	細織痕(アンギン)	貝殻多孔・ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	350	G-4239	瓦脚	I39-c	Ⅱb下	細織痕(アンギン)	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	351	G-0225	瓦脚	I37-c	Ⅱb上	細織痕(アンギン)・堆通・ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
	352	G-3199	瓦脚	I37-a	Ⅱb下	細織痕(アンギン)・ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色・黒褐色	角閃石・長石・石英	
	353	-	瓦脚	G41-d	Ⅱb上	細織痕(アンギン)・ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	354	-	瓦脚	I37-c	Ⅱ	細織痕(網目)	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	長石・石英	
	355	G-3646	瓦脚	I36-d	Ⅱb上	細織痕(網目)・ナデ	研磨	にぶい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英	
	356	G-3613	瓦脚	F42-d	Ⅱb上	細織痕(網目)	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	長石・石英	
	357	G-4046	瓦脚	I38-a	Ⅱb下	細織痕(網目)・ナデ	研磨	にぶい褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
G	358	G-3521	瓦脚	I37-d	Ⅱb下	細織痕(網目)	ナデ	にぶい褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
	359	G-0372	瓦脚	I37-b	Ⅱb上	貝殻多孔・ナデ 細織痕(網目)	ナデ	にぶい褐色・黒褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英	
	360	G-6314	瓦脚	I38-a	Ⅱb上	細織痕(黒目・網目)	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	361	G-4955	瓦脚	I40-c	Ⅱb上	細織痕(黒目・網目)	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	362	G-3723	瓦脚	I36-d	Ⅱb上	貝殻多孔・細織痕(アンギン)	堆通・ナデ	灰褐色	灰褐色・灰青褐色	角閃石・長石・石英	
	363	-	瓦脚	-	層面	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	赤色顔料	
	364	G-3137	瓦脚	G41-c	Ⅱb上	研磨	研磨	にぶい褐色	青褐色	角閃石・長石・石英	飛沫沾染孔・リボン状突起
	365	G-6729	瓦脚	I37-c	Ⅱb上	貝殻多孔・ナデ・研磨	研磨	暗灰褐色	暗灰褐色	角閃石・長石・石英	
	366	G-1529	瓦脚	I40-c	Ⅱb上	研磨	研磨	にぶい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英	
	367	G-4921	瓦脚	I40-c	Ⅱb下	研磨	研磨	灰青褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英	
G	368	G-4046	瓦脚	G42-b	Ⅱb下	灰褐色・研磨	ナデ	灰青褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英	
	369	G-2996	瓦脚	I37-b	Ⅱb上	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	370	G-3572	瓦脚	I37-c	Ⅱb上	研磨	研磨	にぶい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面濃黒ナデ
	371	G-6120	瓦脚	F42-c	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	底面濃黒ナデ	
	372	G-0250	瓦脚	I37-c	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	底面濃黒ナデ	
	373	G-3210	瓦脚	I35-c	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黃褐色	底面濃黒ナデ	
	374	G-2956	瓦脚	I37-a	Ⅱb上	研磨	研磨	にぶい褐色	深褐色	底面濃黒ナデ	

第15表 G区土器はか觀察表<sup>12)</sup>

区	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考
						外面	内面	外面	内面		
G	416	-	鉢	I-36-a	II	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	表面調節研磨
	419	G-630	高足鉢	I-29-a	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤母	
	420	G-3921	高足鉢	G-29-c	II b 上	貝口ナマ	ナマ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	422	G-3325	脚付	H-27-c	II b 下	ナマ	ナマ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	423	G-4011	脚付	F-25-b	II b 下	ナマ	ナマ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	424	G-1106	脚付	H-26-d	II b 上	ナマ	ナマ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
	425	G-4669	上脚付	G-26-c	II b 下	-	-	灰青褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英	
	426	G-1374	上脚付	H-29-c	II b 下	-	-	黑褐色	黑褐色	角閃石・長石・石英	
	427	-	上脚付	I-36-c	II b 下	-	-	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	428	G-3224	瓶	I-35-c	II b 下	ナマ	ナマ	褐色	明赤褐色	長石・石英	
G	429	-	瓶	I-35-c	II b 上	ナマ	ナマ	明赤褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	
	430	G-1361	瓶	H-27-d	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	長石・石英・赤色粒子	丹波
	431	G-3057	瓶	H-27-c	II b 下	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	432	G-3906	瓶	H-27-c	II b 下	研磨	研磨	褐色	褐色	長石・石英	丹波
	433	G-3100	瓶	H-27-c	II b 下	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	434	G-0658	瓶	H-28-d	II b 上	研磨	研磨	赤褐色	赤褐色	長石・石英・赤色粒子	丹波
	435	G-0518	瓶	H-28-c	II b 上	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	436	-	瓶	I-35-c	II b 上	ナマ	ナマ	褐色	褐色	長石・石英	丹波
	437	-	瓶	I-35-c	II b 上	ナマ	ナマ	褐色	にぶい褐色	長石・石英	丹波
	438	G-0271	瓶	H-27-c	II b 上	ナマ	ナマ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・赤色粒子	丹波
G	439	G-0888	瓶	H-27-c	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	440	G-0756	瓶	H-28-a	II b 上	研磨	研磨	明褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	441	G-0755	瓶	H-28-a	II b 上	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	442	G-1654	瓶	I-36-b	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	443	G-1607	瓶	I-36-b	II b 上	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・赤色粒子	丹波
	444	G-2380	瓶	I-37-a	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	445	G-0149	瓶	H-27-c	II b 上	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	446	G-0148	瓶	H-27-c	II b 上	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	447	G-0511	瓶	I-35-d	II	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹波
	448	G-2676	瓶	H-26-d	II b 下	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹波
G	449	G-3628	瓶	H-28-a	II b 下	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	450	G-3642	瓶	H-28-a	II b 下	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	451	G-2702	瓶	H-26-d	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	452	G-5661	瓶	I-37-a	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	453	G-3181	瓶	H-27-d	II b 下	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹波
	454	G-1107	瓶	H-26-d	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	455	G-1640	瓶	I-36-b	II b 上	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	456	G-0149	瓶	H-27-c	II b 上	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	457	G-0148	瓶	H-27-c	II b 上	研磨	研磨	褐色	にぶい褐色	角閃石・長石・石英	丹波
	458	G-0511	瓶	I-35-d	II	研磨	研磨	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	丹波
G	459	-	青磁瓶	I-35-d	II	透光文	-	-	-	-	
	460	-	青磁瓶	I-35-d	II	透光文	-	-	-	-	
	461	-	青磁瓶	I-35-a	II	界縞	-	-	-	-	
	462	-	青磁瓶	H-28-c	II	-	-	-	-	-	
	463	-	白磁瓶	-	サリ苗	-	-	-	-	-	
	464	-	白磁瓶	H-27-d	II	-	-	-	-	-	
	465	-	白磁瓶	H-27-d	II	-	-	-	-	-	
	466	-	白磁瓶	H-26-d	II	-	-	-	-	-	
	467	-	白磁瓶	H-26-c	II	-	-	-	-	-	
	468	-	白磁瓶	-	サリ苗	-	-	-	-	-	
30	469	-	白磁瓶	-	サリ苗	-	-	-	-	-	
	470	-	白磁瓶	-	透光文	-	-	-	-	-	
	471	-	白磁瓶	-	透光文	-	-	-	-	-	
	472	-	青花瓶	-	透光文	-	-	-	-	-	
	473	-	青花瓶	I-37-a	II	界縞	-	-	-	-	

## 石器

1～11は黒曜石の石核である。

1は上面から背面にかけて自然面を残す。いったん廃棄後自然流路などで研磨を受け、そこから再度採集されて剥離作業が行われたらしく、新旧の剥離面が確認される。2は剥離面を打面として回転させながら剥離作業を行っている。3・4は全体が剥離面で覆われており、自然面を残さない。4には白色の不純物が多く含まれる。5は爪痕状の溝がみられる自然面を残し、剥離面を打面としてその周縁を巡るように剥離作業が行われている。

6は大きな不純物がみられ、それを避けるように剥離作業を行っている。7・8は角礫素材の平坦な自然面を主な作業面としている。9は自然面がほばなくなるまで、転回させながら剥離作業を行っている。10は角礫素材で、各面に自然面が残る。11は自然面を打面として連続的に剥片の作出を行っている。

12～30はスクレイパーである。16・29は玄武岩、30は暗灰色の黒曜石、他はサヌカイトを素材とする。

12は大型で比較的薄手の素材を用い、円弧状の刃部を作出する。13は直線的な刃部形成が行われる。14はやや厚みのある素材を用い、周縁を巡って剥離が行われており、上辺は弧状をなし、直線的な下辺には両面からのより細かい調整剥離がみられる。15は大きく自然面を残す一次剥片を素材としており、両面からの作業によって直線的な刃部を作出する。

16は縦長の剥片素材の両側辺に調整剥離を行い、直線状と弧状の刃部を作出する。17は角礫素材の一辺に直接調整剥離を施し、弧状の刃部を形成する。18は比較的大型で横長の剥片素材に対して、打点付近を除去し、直線的な末端付近に細かい調整を行う。19はわずかに内湾するように細かい調整剥離がみられ、また上辺には使用によるものと思われる微細な剥離が観察される。20は上下両方に刃部形成がみられる。いずれも使用により刃潰れが観察されるが、特に上辺の摩耗が著しい。21の左側辺には両面からの加工が施される。右側辺は使用によるものか、細かい剥離が連続的に並ぶ。22は自然面を打点とする剥片素材の右側辺に調整剥離を行っている。

23は主に腹面側からの加工によって刃部を作出する。24には右側辺にやや粗めに調整剥離が施され、また左側辺下位には使用によるものか、細かい剥離が連続する。25は周縁を巡るように加工が行われる。26は厚みのある素材で、左側辺は湾入するように、右側辺は直線的に加工が行われる。27は自然面を打点とする縦長剥片を素材とするもので、両側辺に背面側からの調整が行われている。28も自然面を打点とする剥片が素材で、腹面側からの作業により右側辺から左側辺下半にかけて連続的な剥離が行われている。29は斑晶を含む粗い石材で、両側辺に調整剥離が行われる。30の左側辺には腹面側からの加工がみられる。器面全体の風化が進んでいる。

31～35は石匙である。31・32、35は暗灰色黒曜石製、33は玄武岩製、34はサヌカイト製である。

31は小型品でわずかに素材面を残すものの、全体に剥離調整が及んでいる。32は自然面を打点とする縦長剥片を素材としており、末端部を欠損する。打点付近をつまみ部とし、左側辺には細かい調整剥離が連続的に施される。33は素材剥片の打点付近は切断し、末端につまみ部を作出する。両側辺に細かい調整剥離を行う。34は横長剥片素材の資料で、対となる抉入加工がみられたため、縦型の石匙と判断した。右側辺に両面からの調整剥離がみられ、直線的な刃部とする。35はつまみ部を欠損する。素材面を残しながら周縁への加工が両面から行われる。

36は暗灰色の黒曜石を素材とする尖頭器である。全長4.9cmを測り、張り出す基部には減厚が図られている。

37～57は石鎚、58～63は石鎚未成品である。

37～45はV層出土のものであり、土器の出土傾向から縄文時代早期に属する可能性が高いものである。37・40は玄武岩、38・39、43は暗灰色黒曜石、42は灰色黒曜石、41、44・45は漆黒色黒曜石を素材としている。37は平基で先端を欠損する。38は円基、40～45は凹基のもので、43はいわゆる鍔形鎚である。41・42は両側縁を鋸歯状に作り出す。45は素材面を残す剥片鎚である。

46～57はⅢ層ほか出土のものである。46～48、53、57はサスカイト製、52、55は暗灰色黒曜石製、49～51、54は漆黒色黒曜石製、56は玄武岩製である。46～52は平基のもの、53～55は凹基のもの、56・57は内済する基部のものである。46は表裏面とも素材面を大きく残す。49は基部付近を切断している。52は小型品で、表裏面ともに素材面を残す。53は両側縁と基部に加工がみられ、表面には自然面を大きく残す。55は先端部を欠損する。

58は暗灰色黒曜石、59はサスカイト、60～63は漆黒色黒曜石を素材としている。58は先端部を尖らすことなく直線的に調整しており、別器種の可能性もある。59は先端部を作出するが、自然面が残り基部付近の加工を行っていない。60は白色の不純物が多く入る粗悪な素材のため、製作を途中で断念したものと思われる。61は両側縁に調整がみられるが、素材の減厚ができず完成に至っていない。62は一部自然面が残り、整形を断念している。63は凹基の作り出しがみられるが、素材側面に自然面があること、厚さが足りないことなどからそれ以上の調整を行っていないものと考えられる。

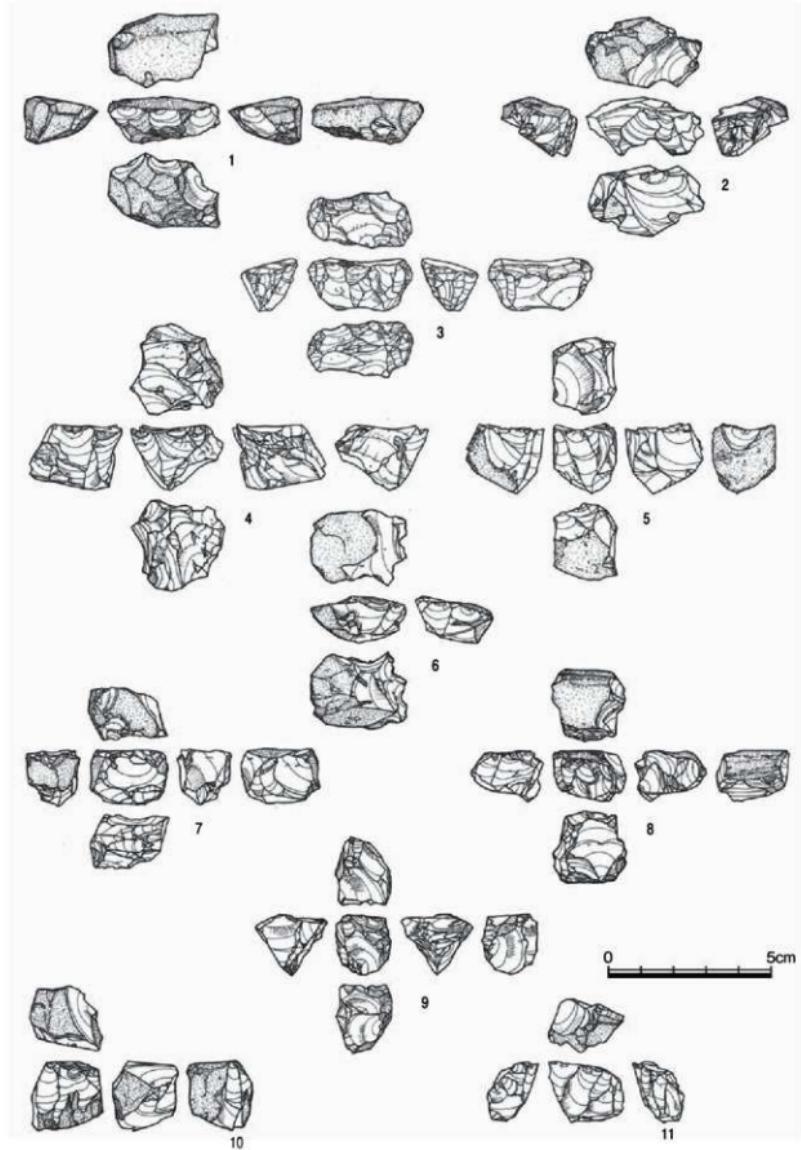
64～66は黒曜石製の石錐である。

64は幅の狭い一部自然面の残る縦長、小型の剥片を素材として腹面側から連続的に加工を加え、素材剥片の打点付近を錐部に作り出している。側辺の棱は回転運動によって摩耗する。65は基部に自然面を残し、錐部は欠損する。66は背面に自然面の残る一次剥片に左側辺は腹面側から、右側辺は背面側から調整をおこなって錐部を形成する。

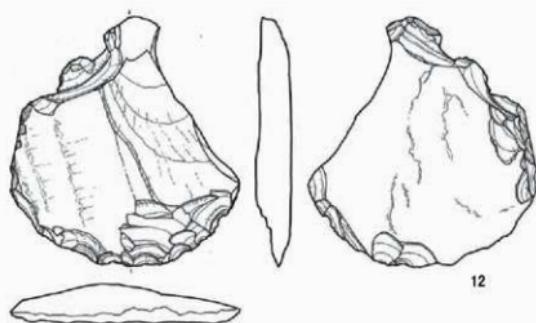
67～169は二次加工のみられる剥片、使用によると考えられる微細な剥離のある剥片である。いずれも黒曜石を素材としている。

67～109は縦長の剥片の資料である。67は背面を自然面が覆う一次剥片で、打点両脇付近に二次加工とみられる剥離が認められる。68の弧状をなす右側辺に微細な剥離が並ぶ。69は角柱状の素材で、左側辺の細かい剥離が連続する。70は自然面を打点とした先細りの剥片で、左側辺下半に微細剥離が認められる。71は背面に自然面を残す剥片で、左側辺に微細剥離がみられる。72は直線的な右側辺に微細剥離が連続する。また、左側辺下位には抉入部がみられ、二次加工である可能性がある。73はやや末広がりとなる剥片で、右側辺と自然面が残る末端部に微細剥離が連続的に認められる。74は先細りとなる剥片で、右側辺に微細な剥離が連なる。75は直線的な右側辺に細かい剥離が観察される。76は自然面で覆われた背面側の末端近くに二次加工とみられる剥離が連続する。

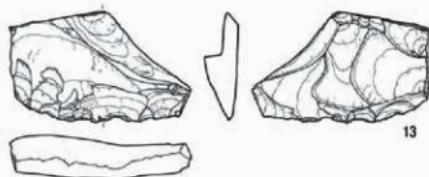
77は右側辺上半のやや膨らんだ部分に微細剥離が認められる。78は薄手の先細りとなる剥片で、両側辺に微細剥離が観察される。79は背面に棱の走る断面三角の剥片で、直線的な両側辺に微細な剥離が観察される。80は右側辺上半に二次加工とみられる剥離がみられ、その下位と左側辺には微細剥離が認められる。81は右側辺上半に微細剥離が連続する。82は末端部に自然面が残る先細りの剥片で、



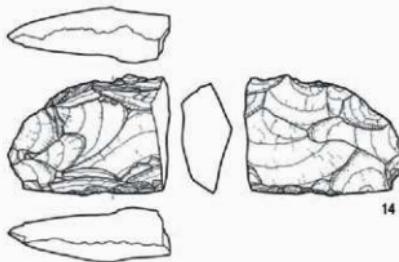
第51図 G区石器実測図① (S = 2 / 3)



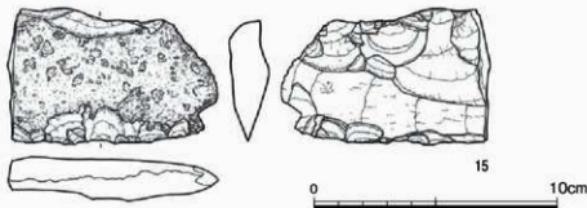
12



13

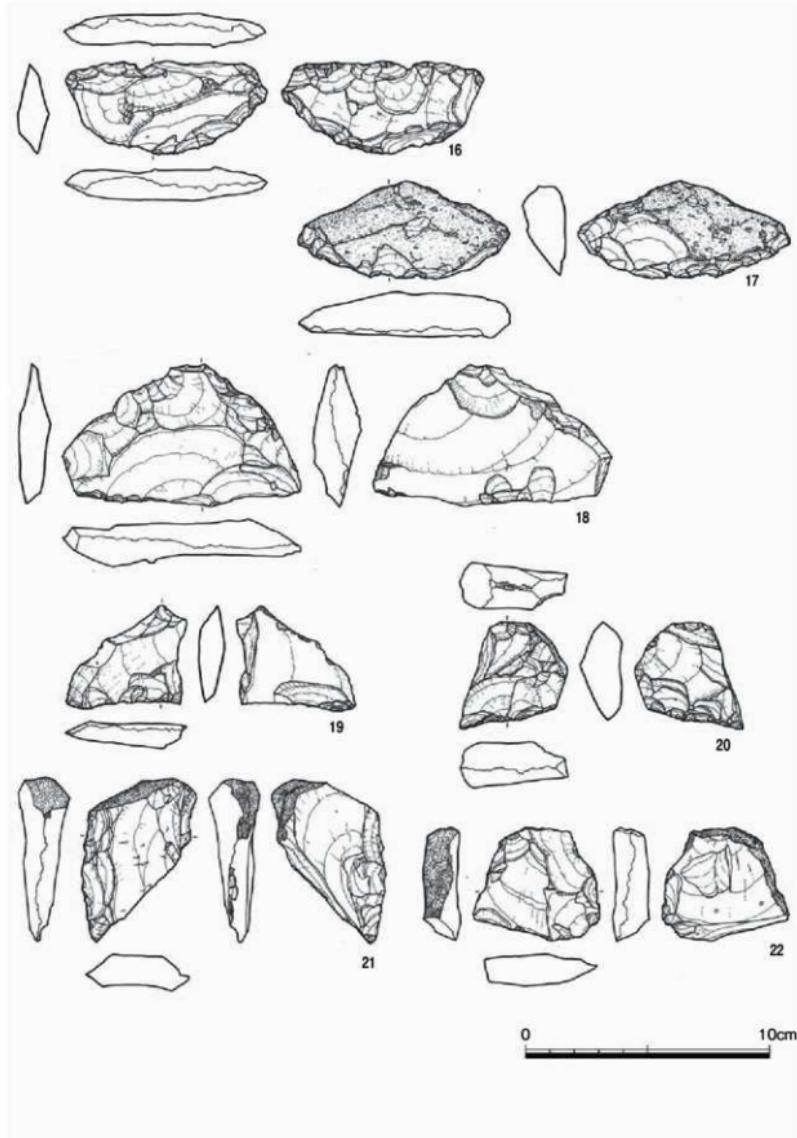


14

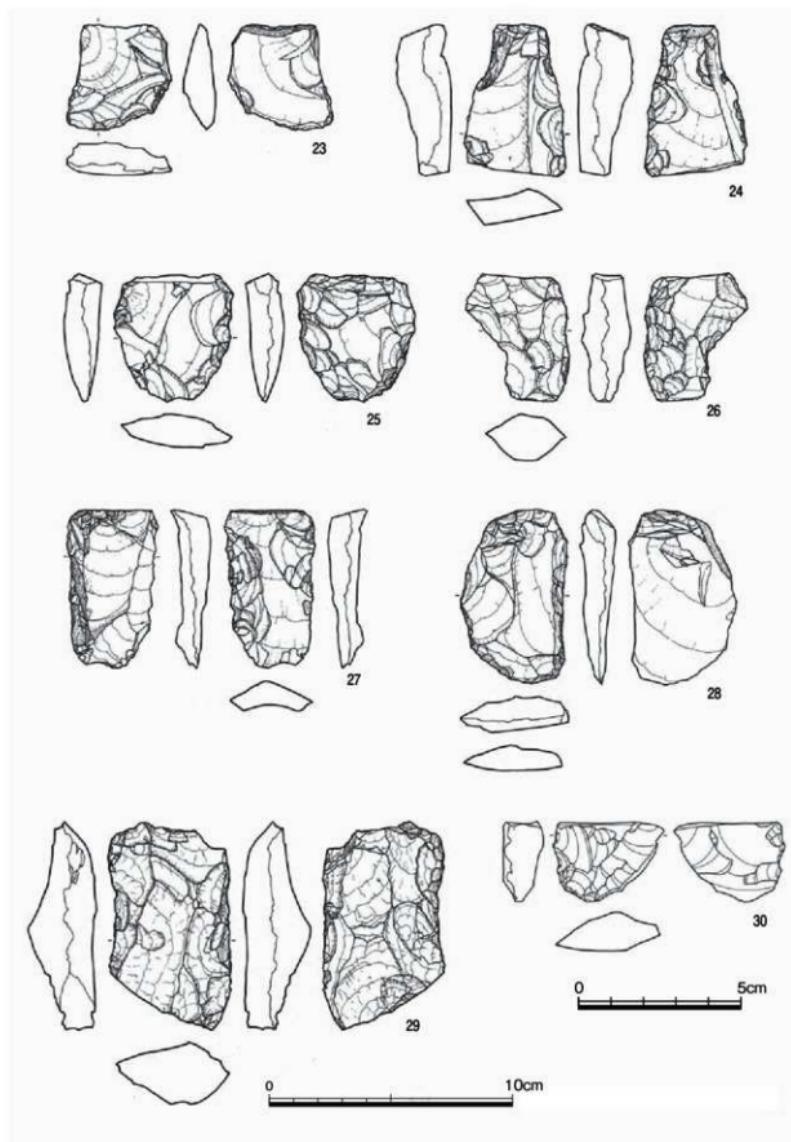


15

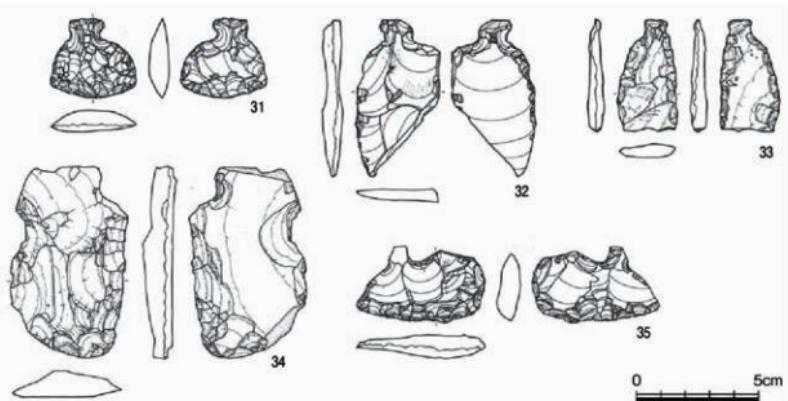
第52図 G区石器実測図② (S = 1 / 2)



第53図 G区石器実測図③ (S = 1 / 2)



第54図 G区石器実測図④ (23~29 : S = 1 / 2, 30 : S = 2 / 3)



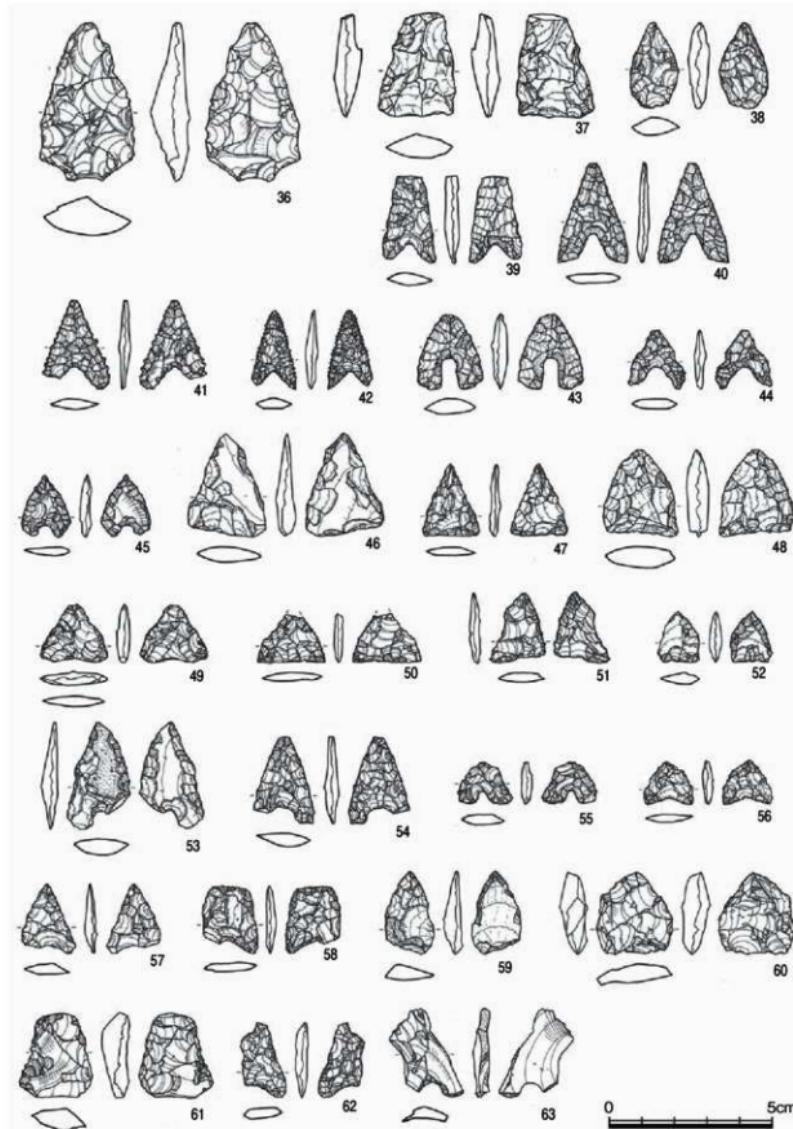
第55図 G区石器実測図⑤ (S = 1/2)

両側辺に微細剥離がみられる。

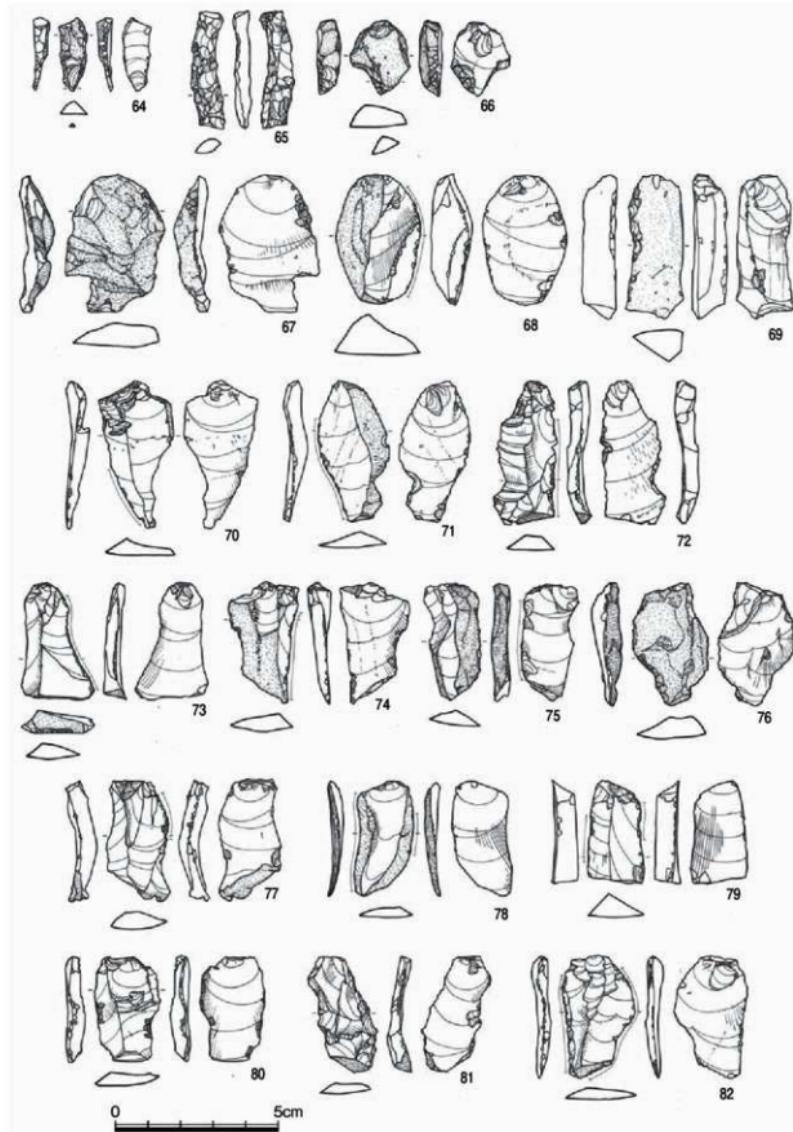
83は自然面を打点とする幅広の剥片で、内湾する左側辺に連続的な剥離が認められる。84は自然面を打点とする右側辺と末端に自然面がみられる剥片で、やや内湾する左側辺に微細な剥離が連続する。85は末端部に自然面を残し、両側辺に微細剥離が認められる。86は左側辺に自然面を残す先細りの剥片で、右側辺に微細剥離が連続する。87は両側辺、末端部、背面にそれぞれ自然面を残す剥片で、両側辺に微細剥離が認められる。88は背面に自然面を大きく残し、左側辺に不ぞろいな剥離が連続する。89は左側辺に腹面側から二次加工が行われている。

90は打点付近と末端部付近を切断した厚みのある剥片で、左側辺に微細な剥離が連続する。91は左側辺に両面からの二次加工がみられる。92は二重バテナのみられる資料である。打点付近と末端部を切断し、自然面の残る左側辺には二次加工が行われる。また、右側辺には腹面側からの微細剥離が認められる。93は打点、末端部に自然面の残る剥片で、両側辺に微細剥離がみられる。94は背面に大きく自然面を残す剥片で、内湾する右側辺に微細剥離が連続する。95は両側辺に微細剥離が観察される。96は打点付近を欠損する。微細剥離が右側辺に連続する。97は暗灰色黒曜石の剥片で、両側辺に微細剥離が連なる。98は打点付近を切断する。右側辺下半に微細剥離が認められる。99は自然面を打点とする剥片で、末端部の腹面側に微細剥離が集中する。100は非常に薄手の素材で、直線的な右側辺に微細剥離が認められる。

101~109は比較的幅の狭い綫長剥片の資料である。101は平行する両側辺に微細剥離が観察される。102は暗灰色黒曜石を素材とする幅の狭い剥片で、両側辺に微細剥離が認められる。103の腹面には二次加工とみられる剥離の連続が2か所確認できる。104は直線的な右側辺に微細剥離が連続する。105は右側辺に二次加工とみられる細かい剥離が連なる。106は末端部に微細剥離が認められる。107は幅7 mmほどで、両側辺に二次加工が行われている。108は右側辺の上半、腹面側に二次加工が施されている。109の末端部には細かい剥離が認められ、二次加工の可能性がある。



第56図 G区石器実測図⑥ (S = 2 / 3)



第57図 G区石器実測図⑦ (S = 2 / 3)

110～117は横長の剥片を素材とするものである。110は末端部には二次加工とみられる剥離が粗く入り、両側辺に微細剥離が認められる。111は縞模様の入る暗灰色の黒曜石で、末端部に細かい剥離が並ぶ。112は左側刃腹面側に連続的に二次加工が施される。113は右側刃腹面側に二次加工がみられる。114は自然面を打点とする剥片で、右側辺に微細な剥離が連続している。115・116は末端部に直線的に二次加工が行われている。117は不純物の多い石材で、弧状をなす末端部の一部に微細剥離が認められる。

118は背面に大きく自然面の残る大型の剥片で、一辺に二次加工が行われている。119は打点付近を数度の剥離で除去しており、両側辺に微細な剥離が確認できる。120は打点付近から右側辺にかけて二次加工が行われている。121は円弧状の右側辺下半に微細剥離が観察される。122の内溝する右側辺には二次加工とみられる細かい剥離が連続する。123は両側辺に微細剥離が認められる。124は左側辺に微細剥離が観察される。125は暗灰色の黒曜石剥片で右側辺に二次加工が行われており、左側辺には背面側に微細な剥離が連続する。126は自然面の大きく残る一次剥片を用い、打点付近を切除している。末端部には二次加工が施され、両側辺には微細剥離がみられる。

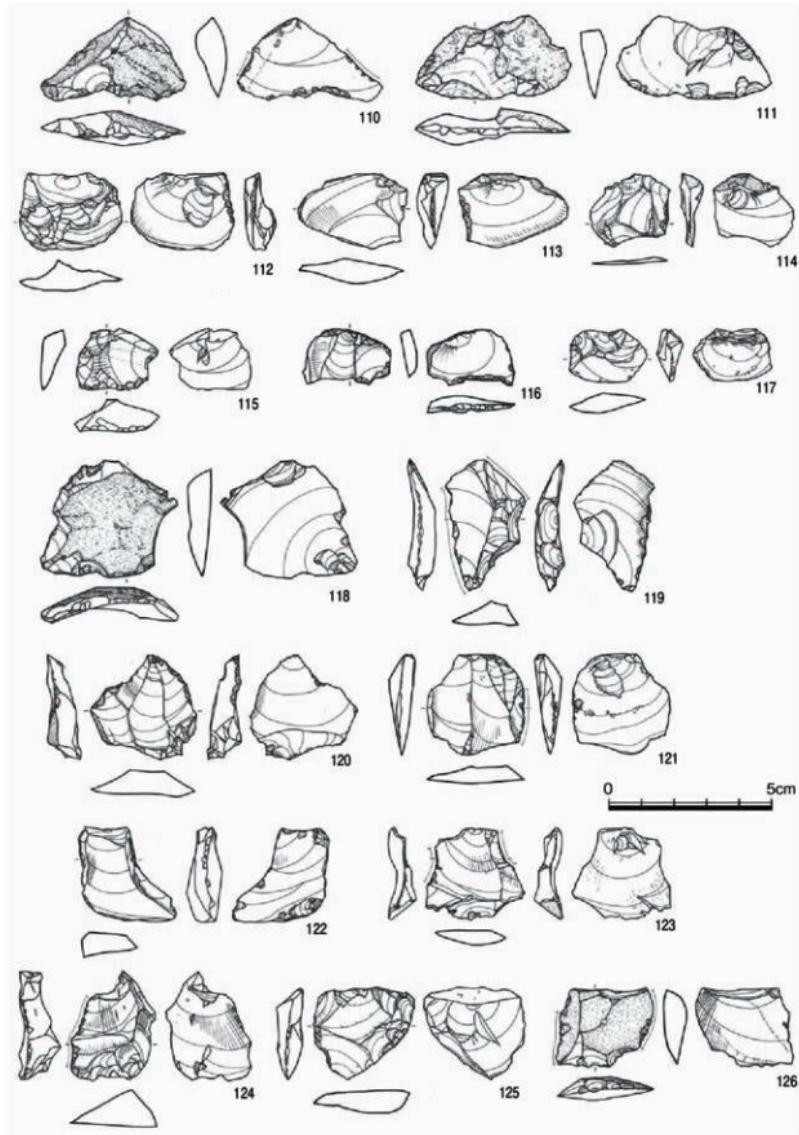
127は右側辺から末端部に自然面を残す薄手の剥片で、両側辺に微細剥離が認められる。128は自然面の残る末端部に二次加工とみられる剥離が認められる。129は右側辺に微細な剥離が連続する。130は暗灰色黒曜石を素材としており、左側辺は切断を行い、右側辺には二次加工であろうか、細かい剥離が認められる。131の末端部には微細剥離が連続する。132の右側辺には桶状の剥離が認められ、打点と末端部には剥離が集中する。133は不純物の多いやや質の悪い黒曜石で、右側辺に二次加工とみられる剥離が連続する。134は末端部にわずかに自然面を残すものの、表裏ほぼ全面に周縁から二次加工が施されている。135の末端部近くに二次加工が観察される。136は円礫状の原石から作出された剥片で、右側辺に直線的に二次加工が行われる。137は背面に原石の自然面をそのまま残しており、右側辺に微細剥離が連続する。138は背面に自然面を残す剥片で、右側辺に微細剥離が認められる。139は両側辺に微細剥離が認められ、打点付近は欠損する。140には桶状の剥離と微細剥離が認められる。141は全体を巡るように微細剥離が連続する。142は自然面を打点とする剥片で、右側辺には二次加工が連続しており、左側辺には微細剥離が認められる。

143は片方の側辺に二次加工が連続して施されている。144は両側辺に表裏両面に二次加工が行われている。145は自然面を大きく残す剥片で、打点付近に二次加工が施され、末端部には微細剥離が認められる。146は薄手の素材で、両側辺に微細剥離が観察される。147は右側辺に微細剥離がみられる。148は打点、末端部に自然面の残る剥片で、腹面側に二次加工が認められる。149は腹面側に二次加工とみられる剥離が観察される。150は自然面を打点とする剥片で、右側辺に微細剥離が連続する。

151は自然面を打点とする剥片で、末端部付近に直線的な二次加工を施す。152は二度の切断作業が行われており、急角度の二次加工が施される。また、腹面側、切断部の一辺には使用によるものと思われる微細剥離が認められる。153は打点付近を切断しており、両側辺に微細な剥離が認められる。154は自然面を大きく残す剥片で、直線的な左側辺に微細剥離が観察される。155は腹面側の片方の側辺に二次加工がみられ、もう片方に微細剥離が認められる。156は腹面側の側辺に二次加工がみられる。157は自然面の残る右側辺に二次加工がみられる。158は左側辺に二次加工とみられる剥離が連続する。159は自然面を打点とする末広がりの剥片で、内溝する左側辺と末端部に微細剥離が認められる。160は自然面を打点とする剥片で、末端部と左側への腹面側にそれぞれ微細剥離が連続する。



第58図 G区石器実測図⑥ (S = 2 / 3)

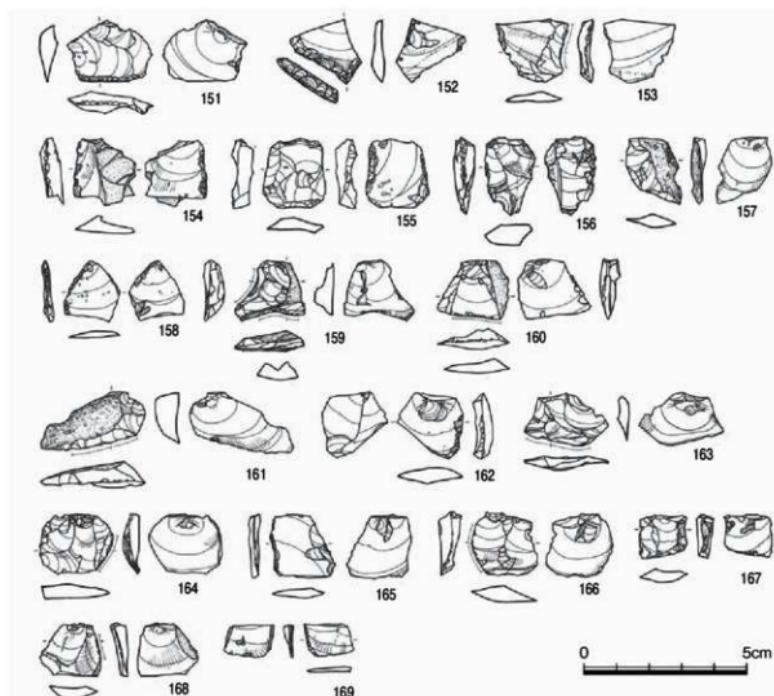


第59図 G区石器実測図⑨ (S = 2 / 3)



第60図 G区石器実測図⑩ (S = 2 / 3)

161は自然面を大きく残す剥片で、直線的な末端部に微細剥離が認められる。162は腹面側に二次加工がみられる。163は末端部に微細な剥離が観察される。164は自然面を打点としており、右側邊に微細剥離が連続する。165は暗灰色黒曜石が素材で、自然面を打点としている。右側邊に二次加工がみられる。166はカーブする左側邊に微細剥離が認められる。167は自然面を打点としており、末端部を欠く。右側邊に二次加工がみられる。168は右側年に連続する微細剥離がみられる。169は打点付近を欠く薄手の素材で、両側邊には自然面が残る。右側邊、腹面側に微細剥離が連続して認められる。

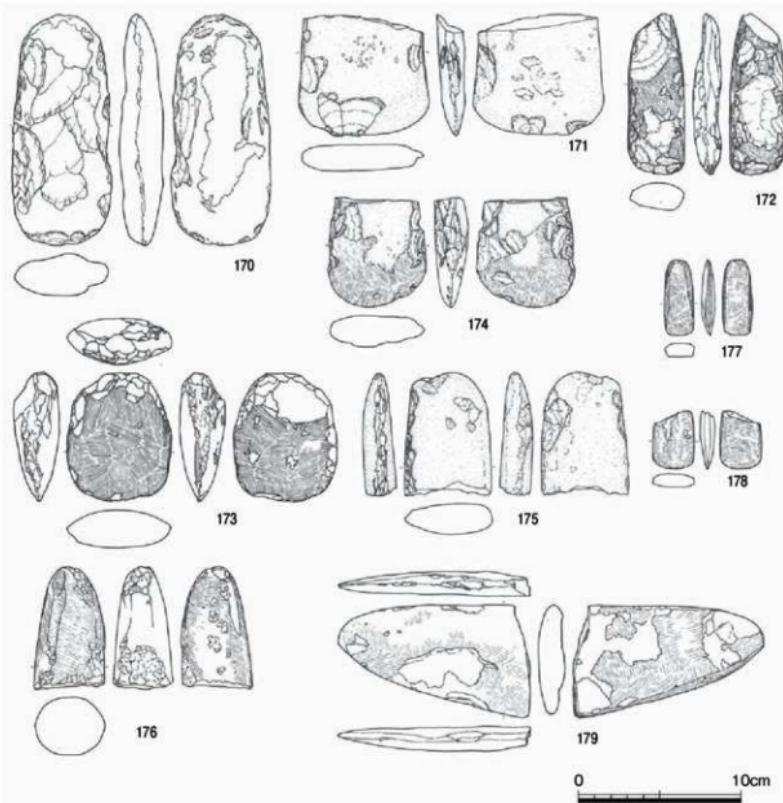


第61図 G区石器実測図① (S = 2 / 3)

170～178は磨製石斧である。

170は蛇紋岩製で、基部に対して刃部のほうがやや幅広である。刃部は使用によって強く摩滅している。171は安山岩製で、刃部の資料である。使用による刃こぼれと思われる剥離が認められる。172は頁岩製で、わずかに基部を欠く。刃部の再生を図ろうとしたものか、表裏面に細かい調整が入る。

173は砂岩製である。刃部は丹念に研ぎ出されており、刃こぼれと思われる剥離が認められる。基部側には潰痕と欠損と考えられる剥離が認められ、楔としての使用か、もしくは敲石への転用が考えられる資料である。174は安山岩を素材としており、表裏面には素材面が残る。基部を欠損しており、側辺には成形剥離が残る。研磨は刃部付近のみである。175は基部の資料で、一応磨製石斧に含めたが、打製石斧の可能性もある。比較的大粒の黒色斑晶を含む安山岩が素材で、表裏面および右側辺には素材面を残す。176は砂岩製の基部の資料で、全体に研磨が及んでいて、断面は円形に近い。刃部



第62図 G区石器実測図⑫ (S = 1 / 3)

を欠損したのちに敲石として転用され、基部と欠損断面近くに潰痕が認められる。

177・178は小型の資料で、177は頁岩製、178は蛇紋岩製である。177は両端部に刃部とみられる研ぎ出しがみられ、上端部には刃こぼれ状の細かい剥離が認められる。

179は安山岩製で成型加工のち全体を研磨しているが、刃部の研ぎ出しなどには至っておらず、器種としては不明である。磨製石包丁などの未成品の可能性もある。

180～192は打製石斧である。いずれも安山岩製である。

180はわずかに基部を欠く。表裏両面に素材面を残し、刃部側が基部よりやや幅広となる。丸く整えられた刃部は使用による摩耗が認められ、また縦方向の線条痕が走る。181は左右の両側刃が平行でやや幅の広い短冊状の形状である。片面に大きく素材面を残し、刃部には摩耗と縦方向の線条痕がみられる。

182は両面に素材面を残しており、刃部の摩耗が著しい。183は薄手の素材を用いている。184は弧状の刃部で、摩耗は刃部のみならず側面の上方まで及んでいる。185は剥片素材による小型品で、わずかに基部が刃部より幅が狭い。186は扁平な板状素材を整形しており、刃部は極端に摩耗が進んでいる。187は横長の剥片を素材としており、刃部の摩耗の状態が二重となっており、使用途中で刃部の再生が図られたものと考えられる。また、側刃を別器種として使用した可能性もある。188は表裏両面に研磨が施されている。刃部再生の調整が施されている。189は表裏両面に素材面を残す。190は砂岩製で、打製石斧としては安山岩が多用される中では異質で、刃部付近の摩耗も弱く、別器種の可能性もある。191は刃部付近の摩耗が側刃に比べると弱く、刃部の再生が図られたことがうかがわれる。192は小型品で、基部を欠損するが刃部のほうが広がる形状である。

193は安山岩製の円盤状石器である。両面とも周縁に整形剥離が行われている。

194・195は石皿である。

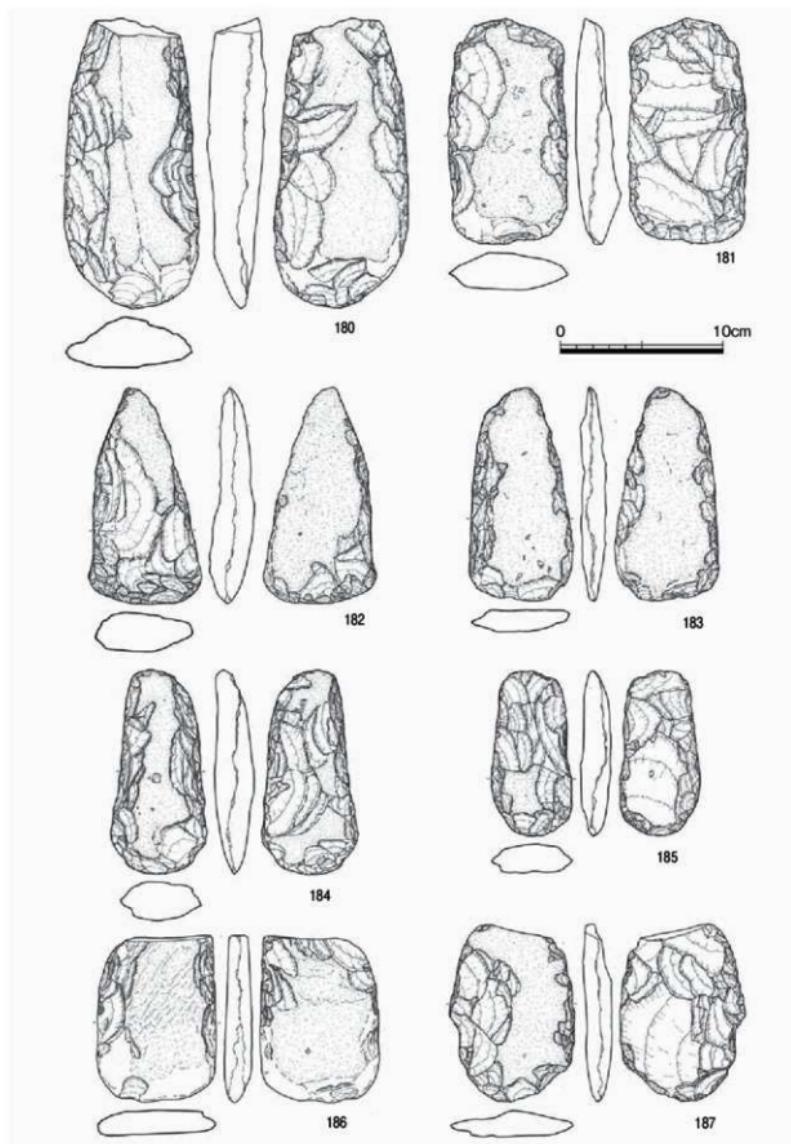
194は砂岩製で、大きく欠損するが凹部をもつ。また、裏面にも一部滑面が残っており、砥石や台石としての使用も考えられる。195は結晶片岩製で凹部をもつ。

196～215は磨石・敲石類である。196～198、200、203、205～207が安山岩、211が石英、他は砂岩が素材である。

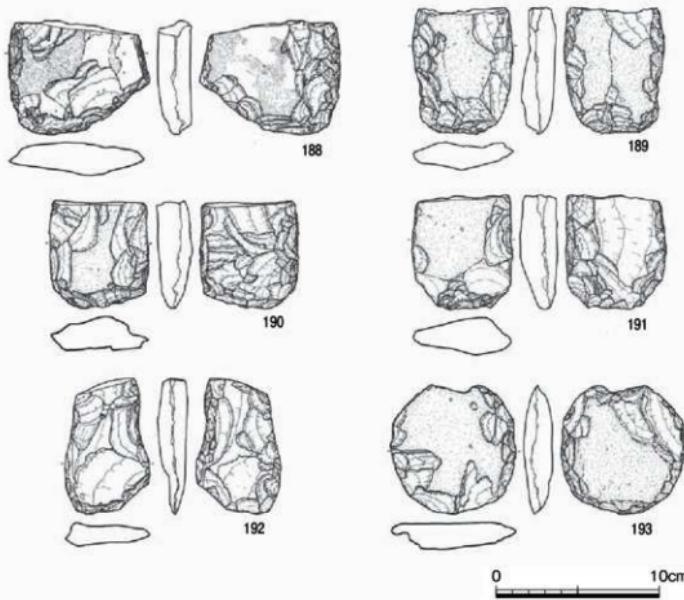
196・199は全体が滑面で覆われる。197・198は表裏両面に滑面をもち、側面には潰痕が巡る。200は断面楕円形の棒状を呈する敲石で、長軸の両端部に潰痕が認められる。201は磨石から敲石への転用品で、側面に潰痕が巡るとともに、表裏面にも潰痕がみられる。202は全体が磨り面となっている。203は周縁に潰痕がみられる。204は側面に潰痕がみられ、敲打作業によって欠損したとみられる剥離もある。205は潰痕と欠損がみられる。206・207は側面を潰痕が一周巡る。208は側面に潰痕がみられ、作業による欠損と思われる剥離が認められる。また、鋭利な対象物への打撃があつたものと推察できる線条痕が観察される。209は側面に潰痕と打撃による剥離が巡る。210は側面を潰痕が一周する。211も側面に潰痕が巡る。212～215は全体が滑面で覆われた磨石である。

216・217は玉である。

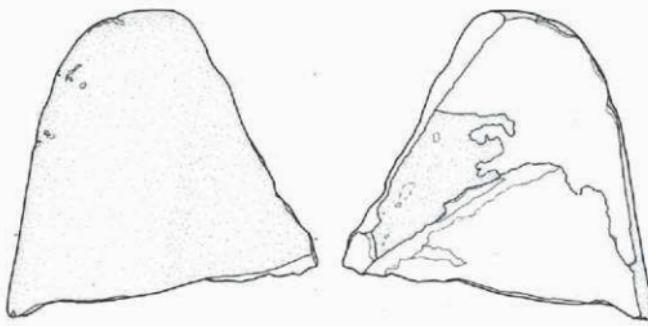
216は頁岩製で、不整形の水磨礫に楕円の孔が開く。217は緑泥岩製で全体よく研磨されている。孔は中心からずれており、二段階での穿孔が行われたらしく、途中に段をもつ。



第63図 G区石器実測図③ (S = 1 / 3)



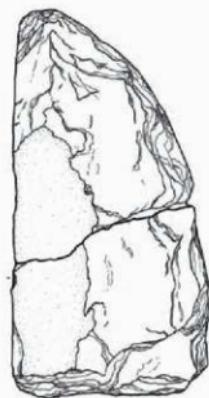
第64図 G区石器実測図④ (S = 1 / 3)



194



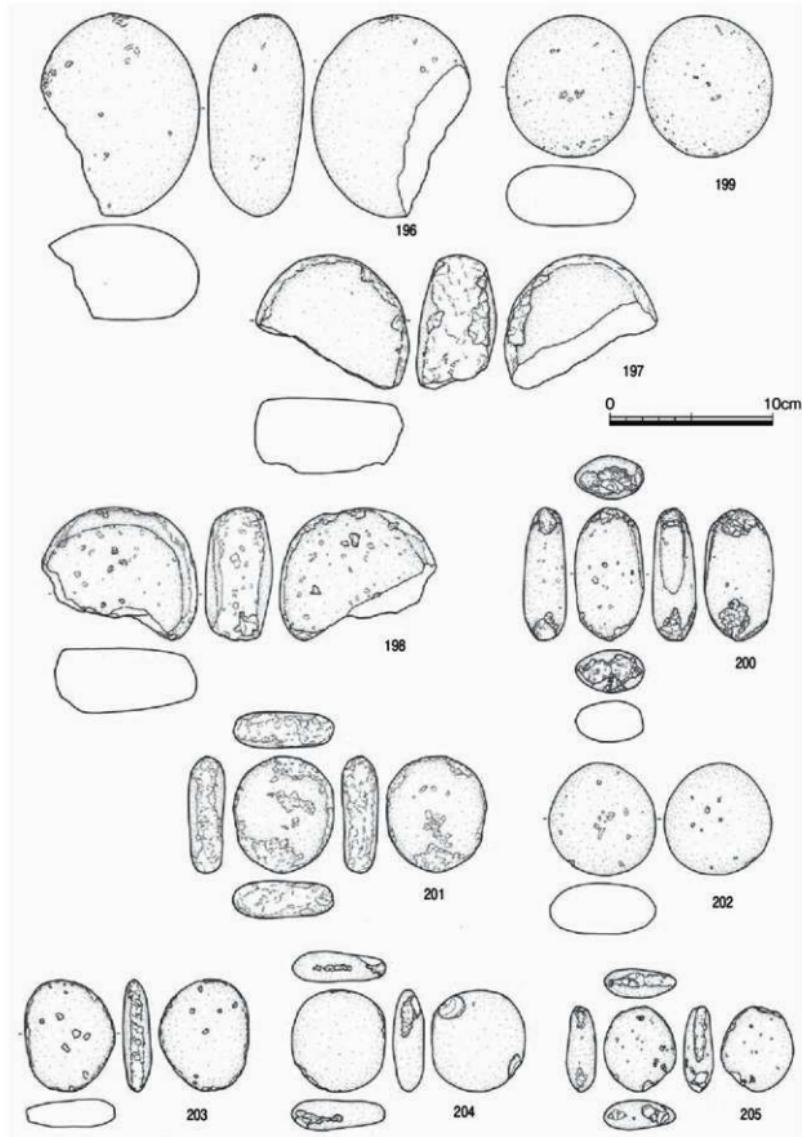
0 20cm



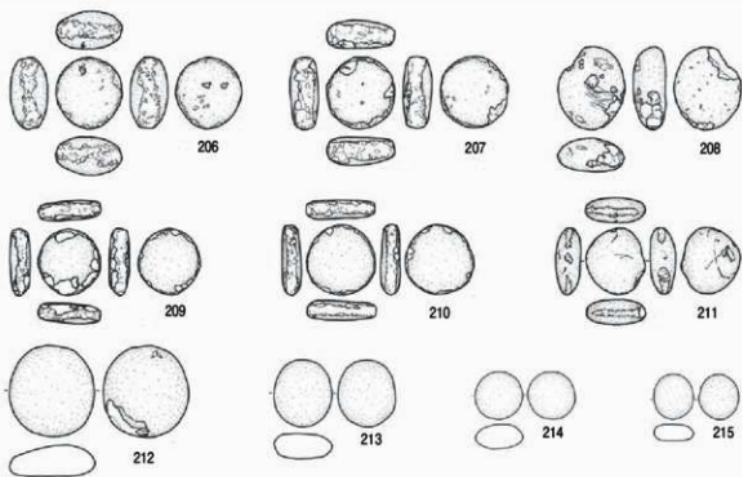
195

0 10cm

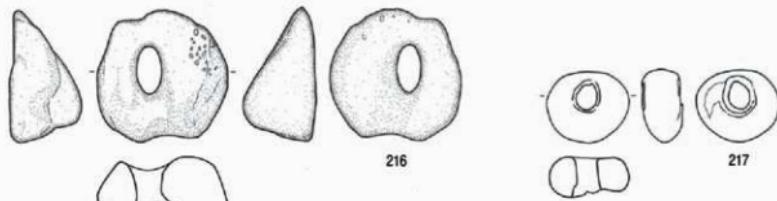
第65図 G区石器実測図⑯ (194: S = 1/4, 195: S = 1/3)



第66図 G区石器実測図⑩ (S = 1 / 3)



0 10cm



0 3cm

第67図 G区石器実測図⑦ (206~215 : S = 1/3, 216・217 : S = 1/1)

第16表 G区石器観察表①

回	番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
51	1	G-3429	石核	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 下	1.4	3.4	2.2	11.0
	2	G-1354	石核	黒曜石(漆黒色)	H37-d	Ⅲ b 上	1.8	3.6	2.2	10.1
	3	G-1053	石核	黒曜石(漆黒色)	H37-e	Ⅲ b 上	1.6	3.2	1.7	8.7
	4	G-3707	石核	黒曜石(漆黒色)	I38-a	Ⅲ b 下	2.0	2.8	2.8	13.2
	5	G-2546	石核	黒曜石(漆黒色)	H39-d	Ⅲ b 下	2.1	2.0	2.3	10.8
	6	G-5965	石核	黒曜石(漆黒色)	G41-c	Ⅲ b 下	1.5	2.9	2.4	8.7
	7	G-2136	石核	黒曜石(漆黒色)	F41-c	Ⅲ b 下	1.7	2.4	1.7	7.4
	8	G-3993	石核	黒曜石(漆黒色)	I38-b	Ⅲ b 下	1.6	2.2	2.2	7.8
	9	G-3478	石核	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 下	1.8	1.7	2.1	5.1
	10	G-1769	石核	黒曜石(漆黒色)	I36-d	Ⅲ b 上	2.1	2.2	2.0	8.5
	11	G-0173	石核	黒曜石(漆黒色)	H37-e	Ⅲ b 上	1.9	2.3	1.6	4.4
52	12	-	スクレイパー	サヌカイト	I36-b	Ⅱ	10.2	9.4	1.6	142.8
	13	G-5377	スクレイパー	サヌカイト	E46-c	Ⅲ b 下	4.6	7.5	1.8	54.2
	14	G-5045	スクレイパー	サヌカイト	I38-a	Ⅲ b 下	5.0	6.6	2.3	72.4
	15	G-0977	スクレイパー	サヌカイト	G38-c	Ⅲ b 上	5.6	8.6	1.3	89.5
	16	-	スクレイパー	玄武岩	I35-d	Ⅱ	8.2	3.8	1.4	42.8
53	17	-	スクレイパー	サヌカイト	-	搅乱	4.0	8.7	1.9	56.8
	18	G-6590	スクレイパー	サヌカイト	H39-c	Ⅲ b 下	5.8	9.8	2.0	86.0
	19	G-5783	スクレイパー	サヌカイト	H36-d	Ⅲ b 下	4.3	5.0	1.1	18.4
	20	G-0963	スクレイパー	サヌカイト	G38-d	Ⅲ b 上	4.4	4.4	1.9	33.4
	21	-	スクレイパー	サヌカイト	J35-a	Ⅲ b 上	6.7	4.7	2.1	45.3
	22	G-0612	スクレイパー	サヌカイト	H38-d	Ⅲ b 上	4.6	5.2	1.5	40.3
	23	G-5038	スクレイパー	サヌカイト	G39-d	Ⅲ b 下	4.4	4.3	1.3	25.6
54	24	G-1113	スクレイパー	サヌカイト	H37-b	Ⅲ b 上	6.2	4.2	2.3	48.9
	25	G-3131	スクレイパー	サヌカイト	H37-e	Ⅲ b 下	5.3	4.9	1.6	40.5
	26	G-4282	スクレイパー	サヌカイト	G39-c	Ⅲ b 下	5.2	4.3	2.0	38.2
	27	G-0191	スクレイパー	サヌカイト	H37-e	Ⅲ b 上	6.5	3.8	1.7	34.8
	28	G-0201	スクレイパー	サヌカイト	H37-e	Ⅲ b 上	7.2	4.4	1.5	44.2
	29	-	スクレイパー	玄武岩	I36-c	Ⅱ	8.5	5.0	2.6	111.9
	30	-	スクレイパー	黒曜石(暗灰色)	H37-d	V b	2.5	3.4	1.3	8.8
55	31	-	石匙	黒曜石(暗灰色)	H37-d	V b	3.2	3.5	0.9	8.3
	32	-	石匙	黒曜石(暗灰色)	E43-c	V a	6.4	3.5	0.9	12.6
	33	-	石匙	玄武岩	H39-d	V b	4.6	2.5	0.7	7.6
	34	G-5933	石匙	サヌカイト	H39-e	Ⅲ b 下	8.1	5.0	1.4	54.6
	35	-	石匙	黒曜石(暗灰色)	南極張部	Ⅱ	3.2	5.2	1.0	13.9
	36	-	尖頭器	黒曜石(暗灰色)	G40-d	V a	4.9	2.9	1.2	11.5
	37	-	石鏟	玄武岩	H38-b	V b	3.2	2.4	0.9	5.2
56	38	-	石鏟	黒曜石(暗灰色)	H38-e	V b	2.7	1.5	0.7	2.3
	39	-	石鏟	黒曜石(暗灰色)	G41-b	V b	2.7	1.7	0.5	1.5
	40	-	石鏟	玄武岩	H37-d	V a	3.1	2.2	3.5	1.8
	41	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	H37-e	V a	2.8	2.1	0.4	1.1
	42	-	石鏟	黒曜石(灰色)	H39-a	V a	2.9	1.4	0.5	0.7
	43	-	石鏟	黒曜石(暗灰色)	G40-d	V a	2.3	2.0	0.5	1.6
	44	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	G43-a	V b	1.9	1.8	0.4	0.6
	45	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	F43-b	V b	1.9	1.5	0.4	0.7
	46	G-3226	石鏟	サヌカイト	J35-a	Ⅲ b 下	3.2	2.4	0.5	3.4
	47	-	石鏟	サヌカイト	H38-a	Ⅱ	2.2	1.8	0.3	0.9
	48	G-4123	石鏟	サヌカイト	G39-b	Ⅲ b 下	2.7	2.3	0.6	4.0
	49	G-0005	石鏟	黒曜石(漆黒色)	H37-d	Ⅲ b 上	1.8	2.1	0.4	1.2
	50	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	H38-d	Ⅱ	1.0	2.0	0.3	0.7

第17表 G区石器観察表(2)

回	番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
	51	G-2621	石鏟	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.1	1.6	2.5	0.9
	52	G-0042	石鏟	黒曜石(暗灰色)	H37-d	Ⅲ b 上	1.6	1.3	0.4	0.6
	53	-	石鏟	サヌカイト	-	廃土	3.3	2.0	0.5	2.4
	54	G-5030	石鏟	黒曜石(漆黒色)	G39-d	Ⅲ b 下	2.7	1.9	0.4	1.5
	55	G-2063	石鏟	黒曜石(暗灰色)	G41-a	Ⅲ b 下	1.3	1.7	0.3	0.5
	56	G-4988	石鏟	玄武岩	H40-c	Ⅲ b 下	1.9	1.5	0.2	0.5
56	57	G-3319	石鏟	サヌカイト	H37-c	Ⅲ b 下	2.2	1.7	0.4	0.8
	58	-	石鏟未成品	黒曜石(暗灰色)	G42-b	表土	2.0	1.2	2.5	1.2
	59	G-0248	石鏟未成品	サヌカイト	H37-c	Ⅲ b 上	2.6	1.5	0.5	1.5
	60	G-6368	石鏟未成品	黒曜石(漆黒色)	I35-b	Ⅲ b 下	2.5	2.3	0.7	3.9
	61	G-3796	石鏟未成品	黒曜石(漆黒色)	I38-b	Ⅲ b 下	2.6	2.2	0.9	3.9
	62	-	石鏟未成品	黒曜石(漆黒色)	I38-d	Ⅱ	2.3	1.4	0.4	0.9
	63	G-2626	石鏟未成品	黒曜石(漆黒色)	H37-a	Ⅲ b 下	2.8	2.3	0.5	1.7
	64	-	石錐	黒曜石(漆黒色)	H38-a	Ⅱ	2.3	0.9	0.5	0.9
	65	-	石錐	黒曜石(漆黒色)	I36-b	Ⅱ	3.7	1.0	0.4	2.0
	66	-	石錐	黒曜石(漆黒色)	-	壁面	2.3	1.9	0.7	2.9
	67	G-5204	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	G41-a	Ⅲ b 下	4.3	3.1	1.1	9.0
	68	G-1485	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H40-a	Ⅲ b 上	4.0	2.7	1.3	11.1
	69	G-5955	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G38-d	Ⅲ b 下	4.4	1.8	1.1	7.5
	70	G-3712	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	I38-a	Ⅲ b 下	4.6	2.3	0.8	3.9
	71	G-6619	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H39-d	Ⅲ b 下	4.3	2.2	0.8	4.3
	72	-	二端I-剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅱ	4.4	2.0	0.8	4.9
57	73	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-d	Ⅱ	3.6	2.2	0.7	3.6
	74	G-6278	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-a	Ⅲ b 下	3.8	2.2	0.7	3.5
	75	G-0260	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-e	Ⅲ b 上	3.6	1.8	0.7	3.5
	76	G-0727	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-a	Ⅲ b 上	3.8	2.4	1.0	5.8
	77	G-4724	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G40-a	Ⅲ b 下	3.8	2.0	1.0	4.3
	78	G-5909	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 下	3.6	1.9	0.5	1.9
	79	G-2170	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-b	Ⅲ b 下	3.2	1.8	0.8	3.8
	80	G-3342	二端I-剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	3.3	2.0	0.4	3.3
	81	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-b	Ⅲ a	3.6	2.1	0.8	3.1
	82	G-2409	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-b	Ⅲ b 上	3.8	2.3	0.6	3.5
	83	G-5984	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	F41-c	Ⅲ b 下	3.2	3.0	0.6	4.8
	84	G-2691	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	I37-a	Ⅲ b 下	3.2	1.5	0.4	1.7
	85	G-2916	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 下	3.2	1.7	0.5	2.0
	86	G-3176	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 下	3.3	2.0	0.6	2.6
	87	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅱ	3.3	2.3	1.0	5.6
	88	G-3750	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-c	Ⅲ b 下	3.4	2.1	1.1	5.7
	89	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅱ	3.0	1.8	0.6	2.7
	90	G-5738	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 上	2.8	2.3	1.1	6.5
	91	G-3110	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.6	1.9	0.6	2.4
	92	G-0791	二端I-剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 上	2.9	1.8	0.7	2.5
	93	G-0232	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 上	2.8	1.4	0.6	1.6
	94	G-3269	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-a	Ⅲ b 下	2.8	1.7	0.8	1.5
	95	G-3831	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 下	2.6	2.2	0.7	2.1
	96	G-2062	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.5	1.4	0.6	1.4
	97	G-5866	微細剥離剥片	黒曜石(暗灰色)	H37-c	Ⅲ b 下	3.0	2.2	0.5	1.1
	98	G-3833	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 下	2.5	2.0	0.5	1.5
	99	G-4759	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G40-a	Ⅲ b 下	2.4	1.6	0.7	2.0
	100	G-4742	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G40-a	Ⅲ b 下	2.2	1.8	0.6	0.8

第18表 G区石器觀察表(③)

番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
58	101	—	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	—	標題	2.8	1.2	0.6	1.2
	102	G-5812	微細剥離剥片	黒曜石(暗灰)	H37-c	Ⅲ b 下	2.6	1.1	0.5	0.7
	103	G-6390	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 上	3.0	1.2	0.7	1.2
	104	G-2578	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G40-b	Ⅲ b 下	2.4	1.0	0.3	0.6
	105	G-1126	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-d	Ⅲ b 上	2.3	1.2	0.4	0.7
	106	G-6890	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	E37-a	Ⅲ b 上	2.4	1.2	0.4	0.8
	107	—	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	J35-d	Ⅲ b 上	2.1	0.7	0.3	0.5
	108	—	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	—	魔土	2.1	0.7	0.4	0.7
	109	G-1340	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-d	Ⅲ b 上	2.1	1.0	0.3	0.3
	110	G-6576	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 下	2.5	4.5	1.0	7.1
59	111	G-3099	微細剥離剥片	黒曜石(暗灰)	H38-b	Ⅲ b 下	2.6	4.7	1.2	8.4
	112	G-3533	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.5	3.2	1.0	5.9
	113	G-2253	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	G39-b	Ⅲ b 下	2.3	3.4	1.0	5.5
	114	G-1436	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H39-d	Ⅲ b 上	2.3	2.5	0.7	2.6
	115	—	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-a	Ⅱ	1.9	2.6	1.0	2.4
	116	G-4710	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	G40-a	Ⅲ b 下	1.8	2.7	0.5	2.1
	117	G-1248	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-a	Ⅲ b 上	1.7	2.4	0.8	2.4
	118	G-2849	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-b	Ⅲ b 下	3.7	4.2	1.0	10.6
	119	G-1629	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-b	Ⅲ b 上	4.1	2.5	0.9	5.6
	120	G-5111	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H40-b	Ⅲ b 下	3.2	3.3	1.1	7.4
60	121	G-3159	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	3.2	3.1	0.8	6.4
	122	G-3793	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-a	Ⅲ b 下	3.0	3.0	1.1	7.2
	123	G-0705	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-b	Ⅲ b 上	2.9	3.1	0.9	4.5
	124	G-6052	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G42-b	Ⅲ b 下	3.4	2.6	1.3	6.7
	125	G-6306	二極L-剥離剝片	黒曜石(暗灰)	H39-b	Ⅲ b 上	2.9	3.2	1.0	7.2
	126	G-1017	二極L-剥離剝片	黒曜石(漆黒色)	H39-b	Ⅲ b 上	1.9	3.0	0.8	5.5
	127	G-4058	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-c	Ⅲ b 下	3.1	2.8	0.7	3.2
	128	G-6071	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	E42-c	Ⅲ b 下	2.9	3.0	1.0	5.6
	129	G-3556	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.8	2.8	0.9	5.7
	130	G-1945	二次加工剥片	黒曜石(暗灰)	G39-b	Ⅲ b 上	2.6	2.5	0.9	4.4
61	131	G-6196	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H39-b	Ⅲ b 上	2.9	2.5	0.8	3.5
	132	G-4966	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H40-b	Ⅲ b 下	2.2	2.0	0.7	3.4
	133	—	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-d	Ⅱ	2.5	2.6	0.8	3.9
	134	—	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	—	魔土	2.7	2.3	0.9	5.2
	135	G-3530	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	3.0	2.2	0.9	4.5
	136	—	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H40-a	Ⅲ a	2.9	3.4	0.8	5.4
	137	—	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-d	Ⅱ	2.7	2.1	0.7	3.0
	138	G-0778	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 上	3.0	2.8	1.0	3.6
	139	G-0445	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 上	2.4	3.2	0.6	3.1
	140	—	二極L-剥離剝片	黒曜石(漆黒色)	F43-d	Ⅱ	2.7	2.8	0.5	2.7
62	141	G-3225	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J35-a	Ⅲ b 下	2.6	2.0	0.5	2.0
	142	G-0984	二極L-剥離剝片	黒曜石(漆黒色)	G38-c	Ⅲ b 上	2.4	2.0	0.6	2.3
	143	G-5511	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	E45-b	Ⅲ b 下	2.6	2.8	0.7	2.4
	144	G-2534	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	G39-d	Ⅲ b 下	2.3	2.2	0.5	2.0
	145	G-0385	二極L-剥離剝片	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 上	2.3	2.0	0.6	2.2
	146	G-2718	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 下	2.5	2.3	0.4	1.4
	147	G-0950	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G38-d	Ⅲ b 上	2.7	2.3	0.5	1.9
	148	G-5982	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	F41-c	Ⅲ b 下	2.7	2.5	0.5	2.1
	149	G-3910	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.1	2.5	1.3	3.5
	150	—	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-d	Ⅱ	2.6	2.1	0.7	2.3

第19表 G区石器観察表④

回	番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
	151	G-2801	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H38-b	Ⅲ b 下	2.0	2.6	0.7	1.9
	152	G-3951	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.0	2.2	0.9	1.2
	153	G-3560	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.0	2.3	0.5	1.8
	154	G-3365	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	2.0	1.9	0.8	2.1
	155	-	二極I-剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-b	Ⅱ	2.2	1.9	0.7	2.2
	156	G-5871	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 下	2.5	1.6	0.7	2.0
	157	G-0374	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-b	Ⅲ b 下	2.0	1.7	0.5	1.2
	158	G-2570	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	G40-a	Ⅲ b 下	1.9	1.7	0.8	0.9
	159	G-3036	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-d	Ⅲ b 下	1.9	2.2	0.7	1.9
61	160	G-3041	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H37-c	Ⅲ b 下	1.8	2.3	0.6	1.9
	161	G-2770	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H36-d	Ⅲ b 下	1.9	3.2	0.8	3.0
	162	G-1760	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-d	Ⅲ b 上	2.0	2.1	0.7	1.7
	163	G-5218	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G41-a	Ⅲ b 下	1.6	2.6	0.4	1.2
	164	G-2807	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	I36-a	Ⅲ b 下	1.9	2.3	0.5	1.9
	165	G-0937	二次加工剥片	黒曜石(暗灰色)	G39-c	Ⅲ b 上	2.0	2.0	0.3	1.4
	166	G-4922	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	H39-d	Ⅲ b 下	2.0	2.0	0.7	2.1
	167	G-4150	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	G38-b	Ⅲ b 下	1.4	1.5	0.6	0.9
	168	G-5176	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G41-c	Ⅲ b 下	1.7	1.9	0.6	1.3
	169	G-2406	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	G39-a	Ⅲ b 下	1.0	1.5	0.4	0.3
	170	-	磨製石斧	蛇紋岩	G39-c	V b	14.1	6.1	2.7	314.3
	171	-	磨製石斧	安山岩	E45-a	表土	7.5	8.0	1.7	150.6
	172	G-6371	磨製石斧	頁岩	I36-a	Ⅲ b 下	9.9	3.5	1.8	78.6
	173	G-3213	磨製石斧	砂岩	I35-c	Ⅲ b 下	8.0	6.4	2.8	202.4
62	174	-	磨製石斧	安山岩	F43-c	Ⅲ b 上	6.8	6.1	2.0	116.6
	175	-	磨製石斧	安山岩	G42-c	Ⅲ b 上	7.6	5.3	1.9	122.3
	176	G-5390	磨製石斧	砂岩	F45-d	Ⅲ b 下	7.5	4.4	3.5	154.3
	177	G-2368	磨製石斧	頁岩	H37-c	Ⅲ b 上	4.6	1.8	0.8	11.3
	178	-	磨製石斧	蛇紋岩	-	腐土	3.6	2.6	1.0	13.8
	179	G-4776	不明	安山岩	H40-b	Ⅲ b 下	6.7	11.8	1.6	159.5
	180	-	打製石斧	安山岩	E42-c	Ⅲ b 上	17.8	8.2	3.6	627.0
	181	G-4025	打製石斧	安山岩	I38-a	Ⅲ b 下	13.8	7.4	2.7	326.7
	182	G-3689	打製石斧	安山岩	H38-c	Ⅲ b 下	13.2	7.0	2.8	240.8
63	183	G-2431	打製石斧	安山岩	G40-b	Ⅲ b 下	13.1	6.4	1.6	151.4
	184	G-1234	打製石斧	安山岩	I37-b	Ⅲ b 上	12.5	5.9	2.4	208.8
	185	G-1157	打製石斧	安山岩	G38-c	Ⅲ b 上	10.1	5.0	1.9	118.8
	186	-	打製石斧	安山岩	E45-b	Ⅲ a	10.2	7.4	1.7	208.2
	187	G-4584	打製石斧	安山岩	G40-b	Ⅲ b 下	10.8	7.7	1.8	161.5
	188	G-1182	打製石斧	安山岩	H38-b	Ⅲ b 上	7.0	8.6	2.1	168.8
	189	G-4558	打製石斧	安山岩	F40-d	Ⅲ b 下	7.8	6.2	2.2	114.4
	190	G-4000	打製石斧	安山岩	H38-b	Ⅲ b 下	6.6	6.0	2.2	114.3
	191	-	打製石斧	安山岩	I38-a	Ⅱ	7.0	6.2	2.3	135.6
	192	G-2810	打製石斧	安山岩	I36-a	Ⅲ b 下	8.3	5.2	1.9	89.9
	193	G-1990	円盤状石器	安山岩	F41-d	Ⅲ b 下	7.9	7.7	1.8	125.2
64	194	G-0439	石皿	砂岩	H36-d	Ⅲ b 下	25.2	25.2	6.8	4615.6
	195	G-5451 G-4221	石皿	結晶片岩	F45-b G39-n	Ⅲ b 下	23.8	12.1	4.5	2198.3
	196	G-2660	磨石	安山岩	H38-d	Ⅲ b 下	12.5	9.7	5.8	897.1
	197	G-1905	磨石・敲石	安山岩	H40-c	Ⅲ b 上	8.2	9.3	4.9	408.4
65	198	-	磨石・敲石	安山岩	G42-a	表土	8.5	9.5	4.0	413.7
	199	G-2102	磨石	砂岩	G40-b	Ⅲ b 下	8.6	7.8	3.7	355.2
	200	G-1706	敲石	安山岩	H40-a	Ⅲ b 上	8.1	4.2	2.7	124.9

第20表 G区石器觀察表(5)

図	番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
66	201	G-4023	磨石・敲石	砂岩	H38-c	Ⅲ b 下	7.1	6.1	2.2	150.4
	202	G-2106	磨石	砂岩	G40-b	Ⅲ b 下	6.9	6.5	3.1	177.9
	203	G-3723	敲石	安山岩	H38-c	Ⅲ b 下	6.8	5.4	1.7	89.5
	204	G-2048	敲石	砂岩	G41-a	Ⅲ b 下	6.2	5.7	1.9	97.7
	205	G-0987	敲石	安山岩	G38-c	Ⅲ b 上	5.2	4.4	1.8	56.7
67	206	G-1761	敲石	安山岩	I36-d	Ⅲ b 上	4.4	4.0	2.3	52.9
	207	G-6047	敲石	安山岩	G42-b	Ⅲ b 下	4.4	4.2	1.8	44.1
	208	G-4331	敲石	砂岩	H39-b	Ⅲ b 下	5.1	4.1	2.0	48.1
	209	G-4487	敲石	砂岩	G39-c	Ⅲ b 下	4.1	3.8	1.2	28.2
	210	G-3626	敲石	砂岩	H38-a	Ⅲ b 下	4.3	4.2	1.2	33.4
	211	G-0526	敲石	石英	H38-c	Ⅲ b 上	4.0	3.6	1.1	31.7
	212	G-6083	磨石	砂岩	F42-a	Ⅲ b 下	5.6	5.2	2.0	57.6
	213	G-6038	磨石	砂岩	G42-b	Ⅲ b 下	4.1	3.6	1.5	29.2
	214	G-1030	磨石	砂岩	H39-b	Ⅲ b 上	2.9	2.9	1.0	19.0
	215	G-1509	磨石	砂岩	H40-a	Ⅲ b 上	2.8	2.5	1.0	10.3
	216	G-0174	玉	頁岩	H37-c	Ⅲ b 上	2.7	2.7	1.1	10.2
	217	G-3674	玉	綠泥岩	H37-b	Ⅲ b 下	1.5	1.7	0.8	2.9

## 5 H区の調査成果

### (1) 土層と遺構

H区は赤松谷川1号導流堤の外側に設定した調査区で、東西75m、南北12m、面積は859m<sup>2</sup>を測る。試掘・範囲確認調査の段階では、事業計画地上をすでに工事車両の通行ルートとして利用していたため、計画地の隣接地としてTP.14、TP.17を設定して調査にあたった。その結果、TP.14において打製石斧の埋納と考えられる遺構や集石が検出されたため、それらを考慮して本調査区を設定した。しかしながら、H区全体としては、後世の搅乱や削平が進んでおり、遺構・遺物の検出はさほど多くはなかった。

調査区の西部、山手部分は大きく搅乱を受けており、その搅乱土を除去するとVI層・VII層が露出する状況であった。調査区の東部は、雲仙普賢岳の平成噴火当時まで利用された舗装道路が横断していた。またそれより海手では、砂防工事の過程で道路に埋設されていた排水路の迂回水路として周辺部の削平と溝切りが行われており、遺物包含層と遺構面は消失していた。よって、遺構・遺物の検出は調査区の中央部に限られた。中央部においても、およそⅢb下層上面ほどまでは削平を受けている状況であった。

そうした中、調査区の最西部においては、両袖に石列をもつ溝が認められ、またその延長上に固結した砂礫層であるVII層中にトンネル状に掘り込む暗渠遺構が確認された。時期的には詳細は不明であるが、近世以降に設営された上水にかかわる施設ではないかと判断される。また、調査区の中央部では古墳時代の土器を埋納する土坑が確認された。



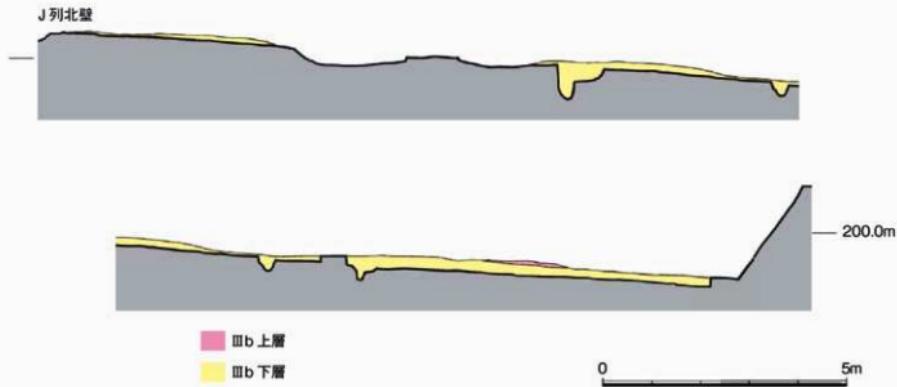
TP.14 IV層上面集石検出状況



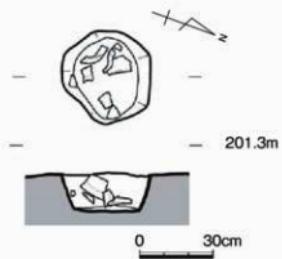
TP.14 IV層上面打製石斧検出状況

### 土坑（第69図）

III b上層上面、グリッドJ 60-aにおいて検出である。平面は直径0.38mを測る円形で、深さは15cm、底面は平坦である。遺構内からは甕と壺、2個体分の土器（第73図35・36）の出土をみた。どちらの土器も完形には復元できず、遺構の上部は削平を受けていると考えられる。古墳時代の所産である。



第68図 H区土層実測図 ( $S = 1/100$ )



第69図 H区土坑実測図 ( $S = 1/20$ )



第70図 H区N層上面造構配置図 ( $S = 1/400$ )

## (2) 出土遺物

### 土器ほか

1は縄文時代早期の押型文土器である。底部の資料で、高台状に上げ底になっており、外面には粒の細かい楕円文が斜方向に施文される。

2～34は縄文時代後・晩期及び突帯文期の資料である。

2～12は深鉢である。2はタガ状口縁で、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。3は内傾する頭部から屈曲して内面に稜を作り、外傾する口縁部へと至る。外面の文様帶の沈線は間隔が広くなり、最下位の段も不明瞭となっている。4も3同様の資料で、同一個体の可能性もある。5・6は内面に稜をもち、外面の文様帶最下位の段は不明瞭である。5の内面、稜より上位は研磨調整を施す。

7は胴部でいったん膨らみをもち、そこからわずかにすぼまって口縁部は外傾する。外面には擦過調整が施される。復元口径は46.5cm、胴部の膨らみ部分での復元径は44.3cmを測る。8は外に開く口縁部の資料で、外面は擦過調整が、内面は貝殻条痕調整のち軽いナデ調整が施される。

9は薄手の器壁で、外傾する口縁部である。10には水平方向の間隔の広い平行沈線が外面に走る。

11・12は蝶ネクタイ状の粘土塊を貼り付ける資料である。11は外面に段をもつ。

13～19は刻目突帯文土器の壺である。13は強く内傾する口縁部で、口唇部から0.9cmほど下がった位置に突帯を貼り付け、ヘラ状の工具による刻目を施す。14・15は薄手の内傾する口縁部で、突帯は断面三角で細く、口唇部に接して張り付けられる。14の刻目はヘラ状工具によるもので非常に細かい。15の刻目は細い棒状工具によるものか。16も口唇部に接して突帯が貼り付けられるが、断面は半円形である。刻目はヘラ状工具による。

17～19は胴部に突帯をもつ資料である。17は屈曲がしっかりしており、突帯にはヘラ状工具による刻目が施される。外面、屈曲部より下位は擦過調整が認められ、屈曲部より上位はナデ調整が行われ、線刻が認められる。18はヘラ状工具による刻目である。19は直線的に立ち上がる胴部で、屈曲しない。ヘラ状工具による刻目が施される。

20は胴屈曲部の資料である。外面は研磨調整が認められる。

21～25は底部の資料である。21は復元底径9.7cmを測り、外面は研磨調整、内面はナデ調整である。22は分厚い底部資料で、復元底径9.0cmを測る。底面は搔き取りによって上げ底としている。

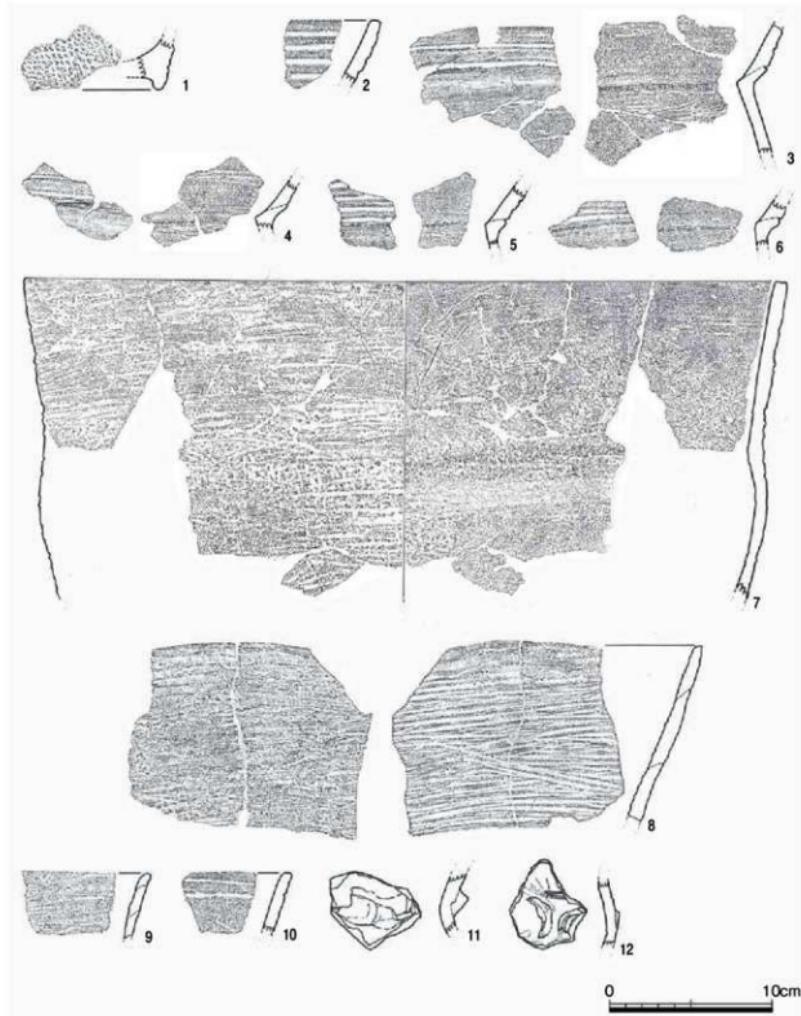
23は断面三角に張り出しをもち、底面・胴部とも比較的薄手の作りである。内外面ともにナデ調整で、底面には擦過調整を施す。24は比較的薄手の器壁で、小型品であろうか。25は断面三角の張り出しをもつ。

26～34は浅鉢の資料である。

26は大きく外反して開き、口縁部は低く立ちあがって外面に1条の沈線を引く。27は外反して大きく開き、口縁部は玉縁状となる。28は胴部から屈曲・肥厚して口縁部に至る。内外面ともに研磨調整が施されている。

29は扁球状の胴部外面上位でやや曖昧ではあるが屈曲して稜を作り、なで肩の肩部に短い頭部がついて、口縁部は丸縁となる。口縁部外面には沈線を引かない。30・31は扁球状の胴部から肩部へと至る部分の資料である。32・33はボウル状、もしくは洗面器状の器形をなす粗製浅鉢の資料である。

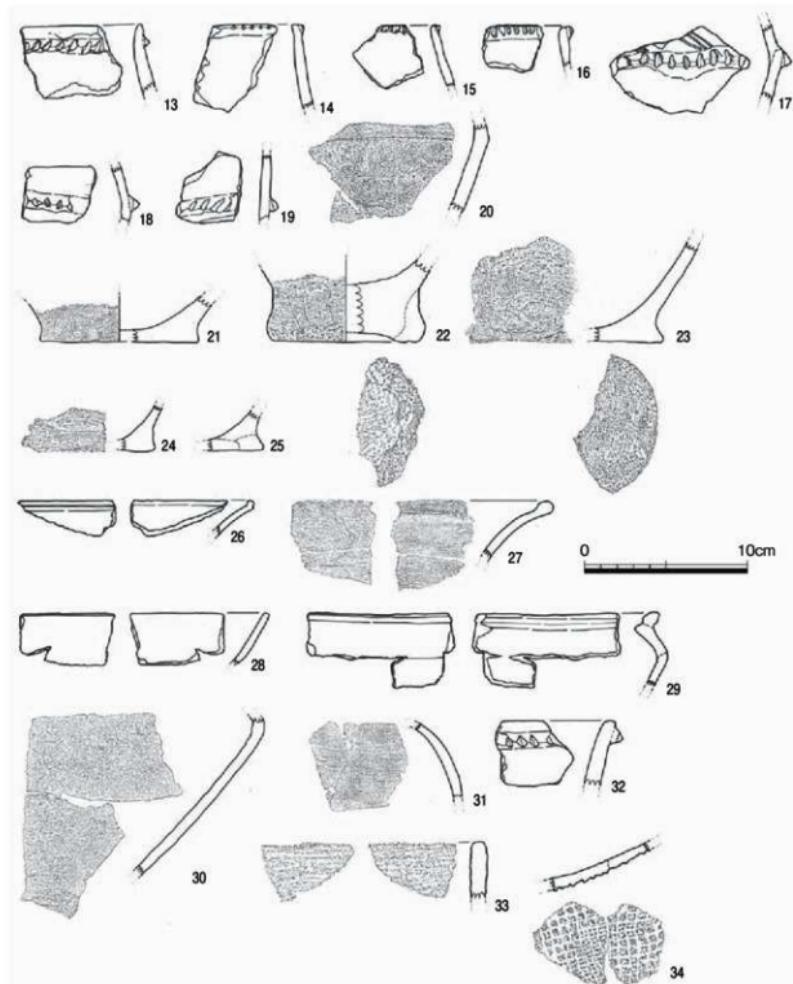
32は外面に擦過調整を残し、口唇部からやや下がった位置に張り付けた突帯にはヘラ状工具による



第71図 H区土器ほか実測図① (S = 1/3)

刻目を施す。33は内外面ともに貝殻条痕調整を明瞭に残す。外面には炭化物の付着が認められる。

34は組織痕土器である。内面はよく研磨されており、外面には網目の圧痕が残る。



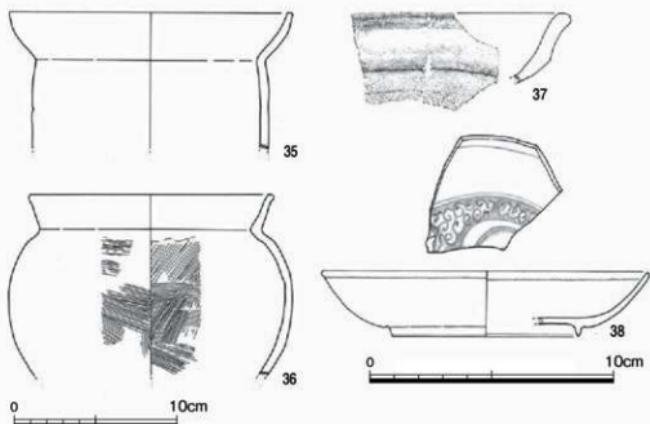
第72図 H区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)

35・36は古墳時代初頭の土師器である。

35は器壁の状態がよくないが、直立する胴部から内湾気味の口縁部が外傾する。復元口径は17.2cmを測る。36は丸い胴部で口縁部は外傾する。胴部の内外面は刷毛目調整が行われる。復元口径は14.8cm、復元胴部最大径は17.3cmである。

37は近世の瓦質焰烙である。外面胴部に棱を作り、そこから口縁部は外反する。外面の棱より上位には煤の付着が顯著である。

38は中世の青花皿で、胴部から口縁部へは内湾する。外面には口縁部と高台付け根に界線を引く。内面には口縁部に界線が、見込みには雲文が見られ、おそらく獅子も描かれていたものと思われる。疊付はヘラ削りによる釉剥ぎが行われている。復元で口径13.5cm、底径7.7cm、高さ2.7cmを測る。



第73図 H区土器ほか実測図③ (35~37: S = 1/3, 38: S = 1/2)

第21表 H区土器ほか観察表

回	番号	車上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調		地土	備考		
						外面		内面					
						外面	内面	外面	内面				
71	1	-	直鉢	-	直鉢	柳内村文化	ナデ	褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	2	-	直鉢	157-C	Ⅱ下	直鉢／ナデ	ナデ	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英			
	3	-	直鉢	157-D	Ⅱ下	直鉢／ナデ	ナデ	にふい褐色・褐灰色	明赤褐色	角閃石・長石・石英			
	4	-	直鉢	157-D	Ⅱ下	直鉢／ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	5	-	直鉢	-	直鉢	直鉢／ナデ・研磨	研磨・ナデ	灰赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	6	-	直鉢	157-D	Ⅱ下	直鉢／ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	角閃石・長石・石英			
	7	-	直鉢	160-C	Ⅱ下	貝袋条痕・直鉢	ナデ	にふい褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	8	-	直鉢	160-D	Ⅱ上	直鉢	貝袋条痕	にふい褐色・浅褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子			
	9	-	直鉢	159-C	Ⅱ下	貝袋条痕・ナデ	貝袋条痕・ナデ	にふい褐色・にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	10	-	直鉢	159-B	Ⅱ下	直鉢／ナデ	ナデ	褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	11	-	直鉢	159-A	Ⅱ下	ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	點付		
	12	-	直鉢	156-D	Ⅱ下	直鉢	貝袋条痕・ナデ	灰褐色	にふい褐色	長石・石英	點付		
72	13	-	甕	164	直鉢	直鉢・縁造・ナデ	ナデ	にふい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英・笠母			
	14	-	甕	-	直鉢	直鉢・ナデ	ナデ	明赤褐色	褐色	長石・石英			
	15	-	甕	164	直鉢	直鉢・ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・笠母			
	16	-	甕	163-64	直鉢	直鉢・ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・石英			
	17	-	甕	160-D	Ⅱ上	直鉢・ナデ・縁造	ナデ	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英	縁附		
	18	-	甕	143	直鉢	直鉢・ナデ	ナデ	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英			
	19	-	甕	160-D	Ⅱ上	直鉢・縁造・ナデ	縁造・ナデ	褐色	明赤褐色	長石・石英・赤色粒子			
	20	-	直鉢	157-D	Ⅱ下	研磨	研磨	にふい褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英			
	21	-	直鉢	158-B	Ⅱ下	研磨	ナデ	にふい褐色・明赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	此前調整研磨		
	22	-	直鉢	156-D	Ⅱ下	ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	此前調整縁造		
	23	-	直鉢	143	直鉢	ナデ	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・笠母	此前調整縁造		
	24	-	直鉢	158-B	Ⅱ下	貝袋条痕	ナデ	にふい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英・笠母	此前調整ナデ		
73	25	-	直鉢	158-D	Ⅱ下	ナデ	ナデ	明赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	此前調整ナデ		
	26	-	直鉢	157-D	Ⅱ下	直鉢・縫隙	研磨	灰褐色・縫隙色	灰褐色・褐灰色	長石			
	27	-	直鉢	156-D	Ⅱ上	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	28	-	直鉢	157-D	Ⅱ下	研磨	研磨	にふい褐色・灰褐色	黑色	長石・蜜母			
	29	-	直鉢	158-B	Ⅱ下	研磨	研磨	浅黄色・青灰色	にふい褐色・灰褐色	角閃石・長石・石英			
	30	-	直鉢	156-D	Ⅱ下	研磨	研磨	褐色	にふい褐色	角閃石・長石			
	31	-	直鉢	160-D	Ⅱ下	研磨	研磨	にふい褐色・褐灰色	灰褐色	長石・石英			
	32	-	直鉢	164	直鉢	直鉢・縁造	ナデ	にふい褐色・にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	33	-	直鉢	160-A	Ⅱ下	貝袋条痕	貝袋条痕	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英			
	34	-	直鉢	156-D	Ⅱ下	細織目(網目)	研磨	にふい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英			
	35	-	甕	-	-	-	-	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	此前内出土		
	36	-	甕	-	-	研毛目	研毛目	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	此前内出土		
	37	-	短甕	-	直鉢	ナデ	ナデ	-	-	赤色粒子			
	38	-	青花直	158-c	Ⅱ	单線	单線・笠文・玉状飾子	-	-	-			

## 石器

1～4は黒曜石の石核である。

1は白色の不純物を多く含む質の悪い角礫が素材で、そのためか作業面は限られ、自然面を大きく残す。2～4は限界まで剥離作業を行った残核でありながら、いずれも自然面を残す。

5・6はサスカイトを素材とするスクレイパーである。

5は背面に自然面を残す縦長の剥片を用い、その打点付近から右側辺にかけて表裏両面からの剥離作業によって刃部を形成する。6はヘラ状の形状をなすもので、周縁に丁寧な調整剥離を行っている。

7～11は石鎚である。10はサスカイト製、他は黒曜石製である。

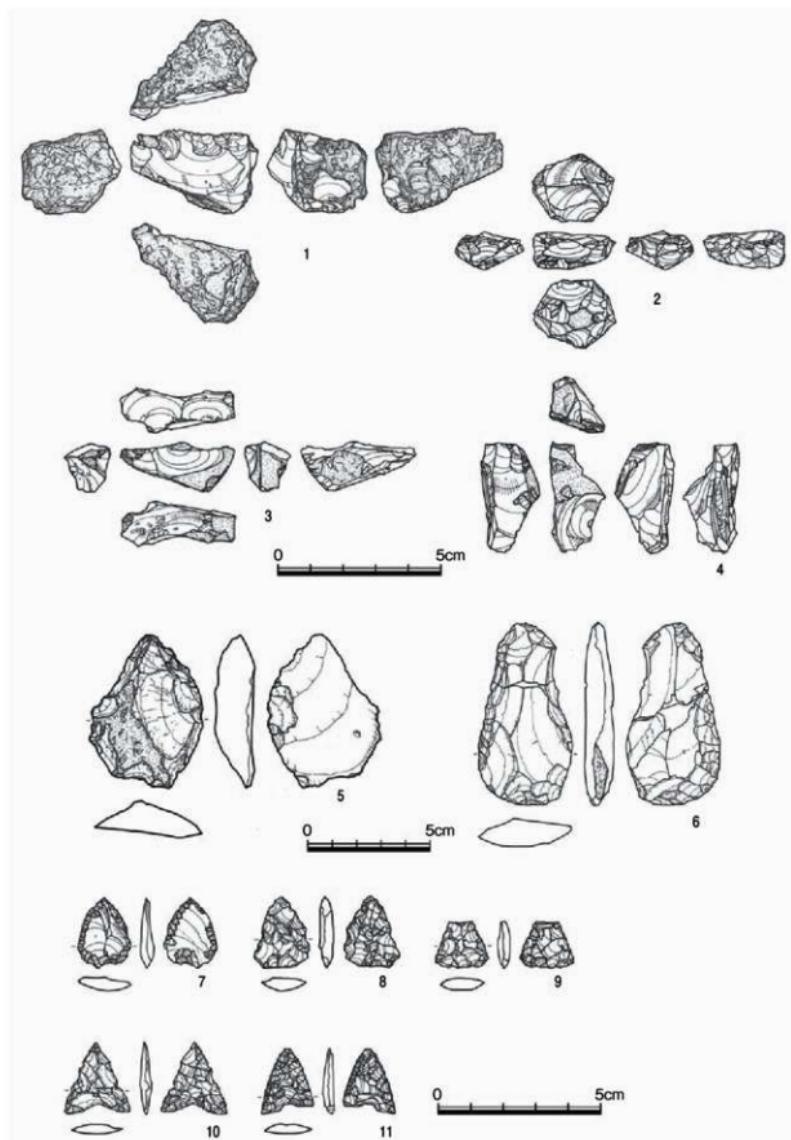
7は剥片鎌で表裏両面に素材面を残す。左右の側縁と基部に連続的な加工が行われる。8・9は平基のものである。9は白色の不純物を多く含み、先端は欠損する。10は基部を抉入させる。11は両方の脚部を欠損するが、しっかりとした凹基式である。

12～32は二次加工のみられる剥片、微細剥離のみられる剥片である。いずれも黒曜石を素材とする。

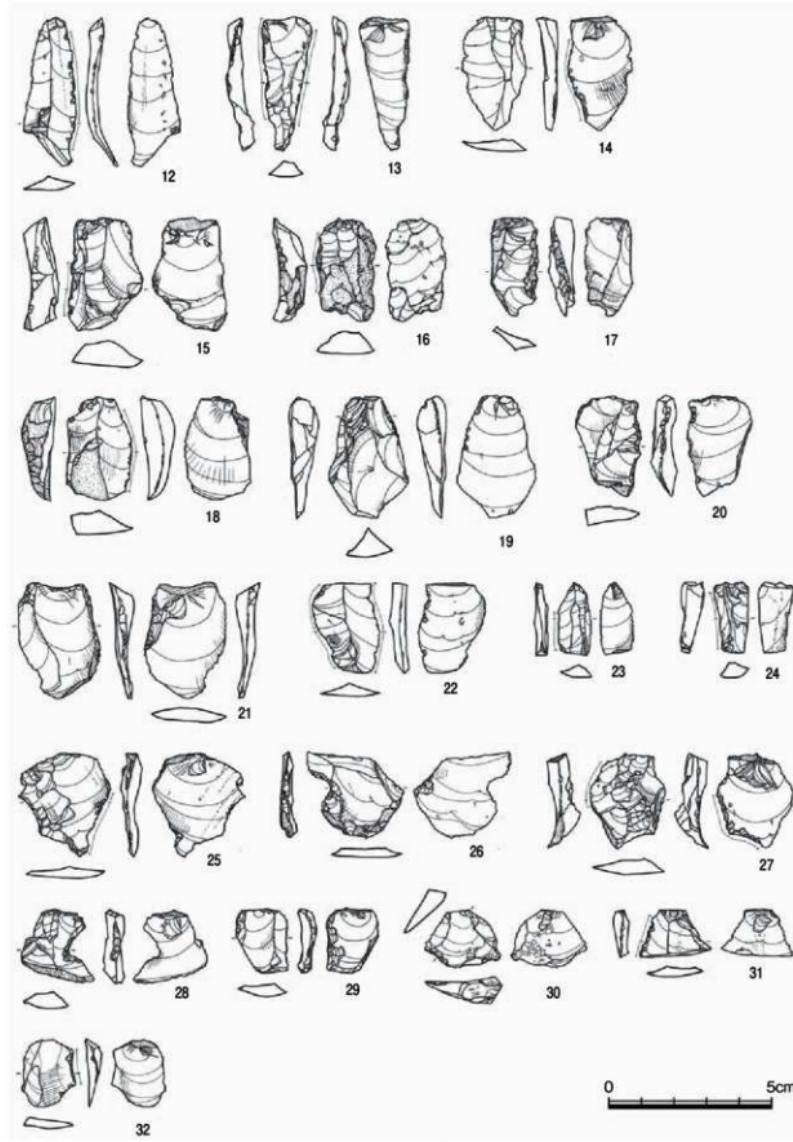
12～23は縦長の剥片を用いているものである。12は右側辺に微細な剥離が連続的にみられる。13は先細りとなる剥片で、両側辺に微細な剥離が認められる。14は右側辺の腹面側に微細剥離が連続する。15は自然面を打面として作出された比較的厚手の素材で、左側辺下半に微細剥離が認められる。16は自然面を大きく残し、白色の不純物を多く含む素材で、左側辺に微細な剥離が認められる。17の右側辺には二次加工とみられる剥離が連続する。

18は末端付近と左側辺に自然面をもち、弧状をなす右側辺に微細剥離が観察される。また、急角度をなす左側辺にも使用によるものか剥離の集中がみられる。19は右側辺の打点近くに微細剥離が連続する。20は自然面を打面とする剥片で、右側辺から末端にかけても細く自然面が残る。右側辺の上半に二次加工と思われる剥離がみられる。22は末端に自然面を残し、打点付近は欠損する。右側辺に微細な剥離が認められる。23は非常に小型の剥片で、末端は欠損する。直線的な左側辺に微細剥離が認められる。

24はやや内湾する左側辺に微細な剥離が認められる。25は自然面を打面とする剥片で、右側辺に微細剥離がみられる。26は左側辺に抉入するように二次加工が行われる。27は自然面を打面としており、左右両側辺に微細な剥離が認められる。28は自然面を打面とし、末端にも自然面をもつ。右側辺に抉入する二次加工がみられ、石鎚の未成品であることも考えられる。29は自然面を打面としており、右側辺に背面側からの二次加工がみられる。30は白色の不純物が多く入る。末端部に二次加工であろうか、剥離がみられる。31は末広がりの剥片素材で、末端部を欠損する。左側辺に微細な剥離が連続する。32は自然面を打面とする小型の剥片で、右側辺に微細剥離が連続している。



第74図 H区石器実測図① (1~4, 7~11: S = 2/3, 5・6: S = 1/2)



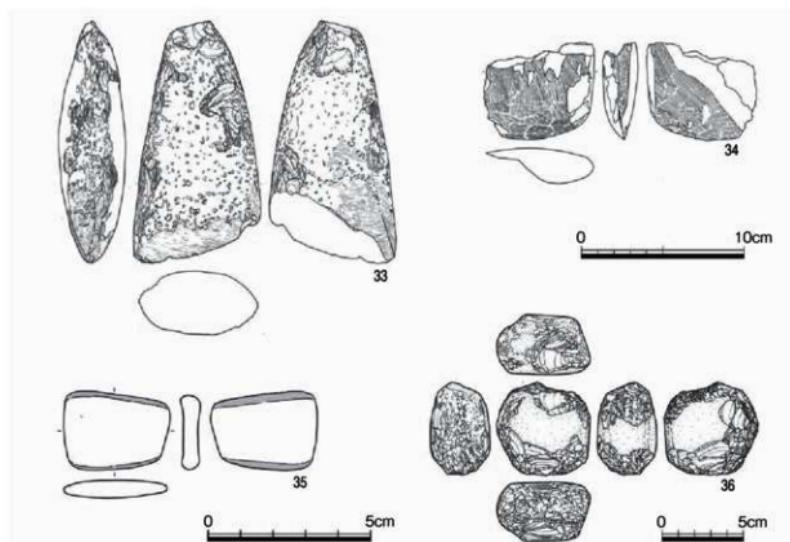
第75図 H区石器実測図② (S = 2 / 3)

33・34は磨製石斧である。

33は頁岩製で、刃部を欠く。基部がすばまり断面は梢円となる。左右の側面には成型剥離と敲打痕が残る。34は刃部の資料で、蛇紋岩製である。

35は磨石である。頁岩製と思われ、全体滑面で覆われるが、使用によるものか、上辺と下辺が変色して黒色を呈する。

36は頁岩製の敲石で、水磨円礫の自然面を残し、使用による剥離と敲打痕が側面を巡る。



第76図 H区石器実測図③ (33・34: S = 1/3, 35: S = 2/3, 36: S = 1/3)

第22表 H区石器観察表

団	番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
74	1	-	石核	黒曜石(漆黒色)	164	擾乱	2.1	4.0	3.1	20.4
	2	-	石核	黒曜石(漆黒色)	J58-b	II	1.2	2.5	2.1	5.6
	3	-	石核	黒曜石(漆黒色)	164	擾乱	1.5	3.5	1.5	5.2
	4	-	石核	黒曜石(漆黒色)	J59-d	Ⅲ b 下	3.4	2.1	1.7	6.5
	5	-	スクレイバー	サヌカイト	J56-d	Ⅲ b 下	6.3	4.6	1.5	38.3
	6	-	スクレイバー	サヌカイト	トレンチ3	V b	7.5	3.9	1.2	34.1
	7	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	J59-c	II	2.2	1.7	0.5	1.1
	8	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	-	擾乱	2.2	1.7	0.7	1.4
	9	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	-	擾乱	1.5	1.7	0.4	0.9
	10	-	石鏟	サヌカイト	J59-b	II	2.3	2.1	0.4	0.9
	11	-	石鏟	黒曜石(漆黒色)	J60-c	Ⅲ b 下	2.0	1.6	0.3	0.8
75	12	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J57-c	Ⅲ b 下	4.6	1.6	1.0	2.6
	13	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	-	壤土	4.1	1.6	0.8	2.8
	14	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J56-c	Ⅲ b 上	3.5	2.0	0.7	3.0
	15	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	163	擾乱	3.5	2.3	1.1	7.6
	16	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J59-a	Ⅲ b 下	3.2	1.8	1.1	4.8
	17	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	J57-d	Ⅲ b 下	3.1	1.5	0.8	2.9
	18	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	-	擾乱	3.2	2.0	1.0	5.8
	19	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J58-c	Ⅲ a	3.8	2.4	0.9	6.3
	20	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J57-c	II	3.1	2.0	0.8	4.4
	21	-	二次加工・輪縫片	黒曜石(漆黒色)	J58-b	II	3.6	2.5	0.8	4.3
	22	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	-	壤土	2.8	2.1	0.5	2.4
	23	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J60-d	II	2.2	1.0	0.4	1.0
	24	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J59-a	Ⅲ b 上	2.2	1.1	0.7	1.3
	25	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J57-d	Ⅲ b 下	3.2	2.9	6.5	3.5
	26	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	-	壤土	2.6	3.0	0.5	2.7
	27	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J57-d	II	2.9	2.3	1.0	4.5
	28	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	J59-a	II	2.3	2.3	0.6	2.1
	29	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	J58-d	II	2.0	1.6	0.6	1.8
76	30	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	J60-c	Ⅲ b 下	1.8	2.3	0.9	2.6
	31	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J56-c	Ⅲ b 下	1.5	2.2	0.5	1.2
	32	-	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	J58-b	Ⅲ b 下	2.1	1.7	0.5	1.4
	33	-	磨製石斧	頁岩	J58-b	Ⅲ b 下	14.9	7.8	4.2	538.8
	34	-	磨製石斧	蛇紋岩	トレンチ2	V a	6.0	6.8	2.1	90.0
	35	-	磨石	頁岩	J56-c	Ⅲ b 上	2.5	3.3	0.6	7.7
	36	-	敲石	頁岩	J59-b	II	5.6	5.7	3.6	174.5

## 6 アイ区の調査成果

### (1) 土層と遺構

I 区は、F～H 区の本調査を実施した平成20年度において雲仙復興事務所により資材搬入路工事の計画に見直しが図られ、通行する運搬車両の待避所として追加工事が必要となった区域である。隣接する G 区において良好に遺構・遺物が検出されたことを受けて、本調査を実施した。調査区は南北38m、東西30m の面積808m<sup>2</sup>である。

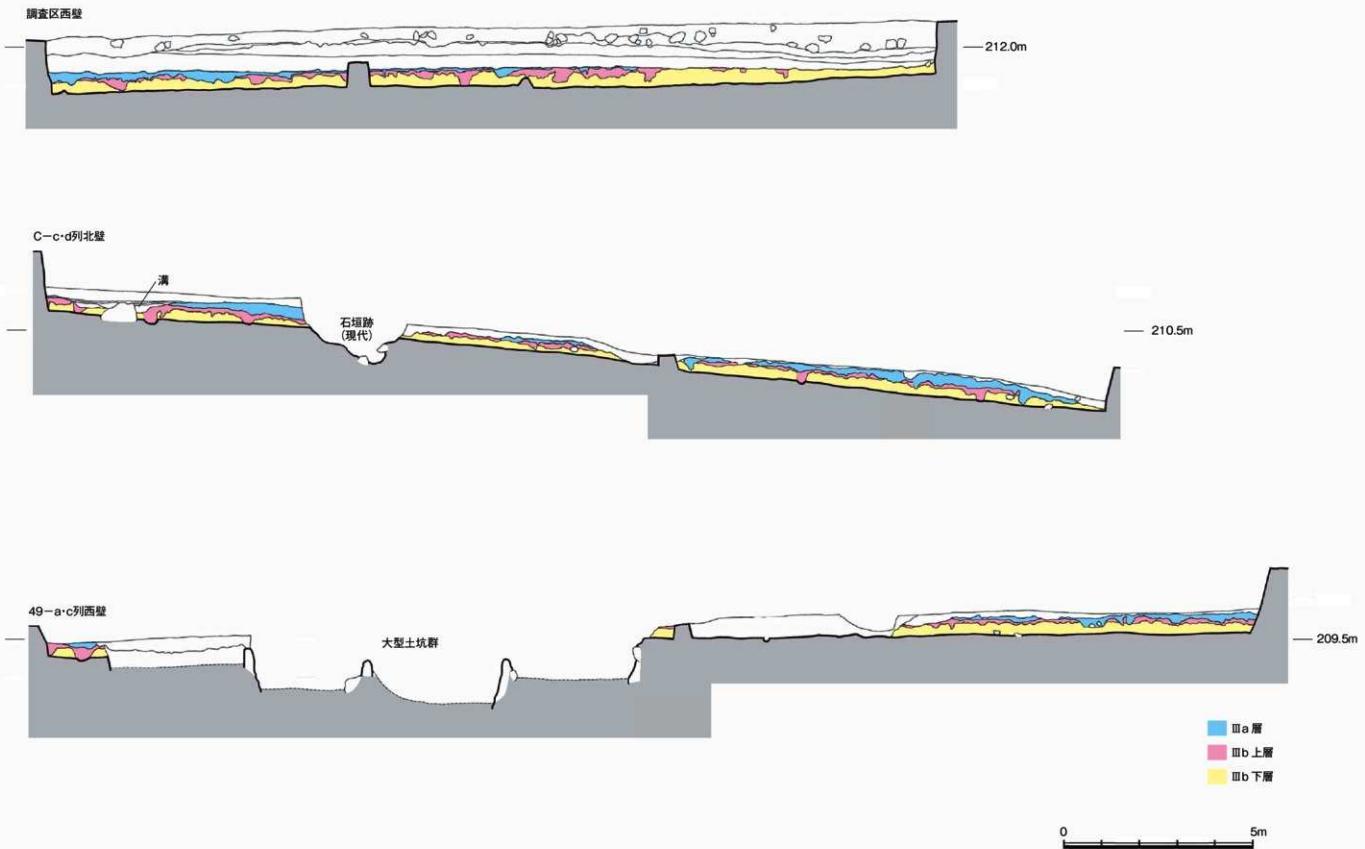
調査区内では、雲仙普賢岳平成噴火当時までの耕作地や民家敷地の区画と考えられる南北と東西に走る石垣が表土剥ぎの段階で検出され、それらによって多少の搅乱は認められた。また調査区の海手、東壁沿いにおいても宅地造成のための削平がみられた。ただそれらによる遺跡への影響は限定的で、全体としてはⅢ a 層からⅢ b 下層まで良好に残存している状況であった。層厚は、Ⅲ a 層が残りのよいところで30cm 程度、Ⅲ b 上層が10～20cm 程度、Ⅲ b 下層が20～40cm 程度である。

遺構面としては、南北に走る溝が調査区西壁に沿って検出されたが、検出面、埋土から近世のものと判断した。幅約2.0m、深さ約20cm であった。調査区の南側では、Ⅶ層に掘り込む大型の土坑が連なって検出された。Ⅲ b 下層上面、Ⅳ層上面において遺構の検出作業を行ったが、表土剥ぎ前にはメダケの繁茂する状況であり、その影響が非常に強くみられた。図化した大部分のピットがメダケの地下茎、根による土層の黒色化であると考える。

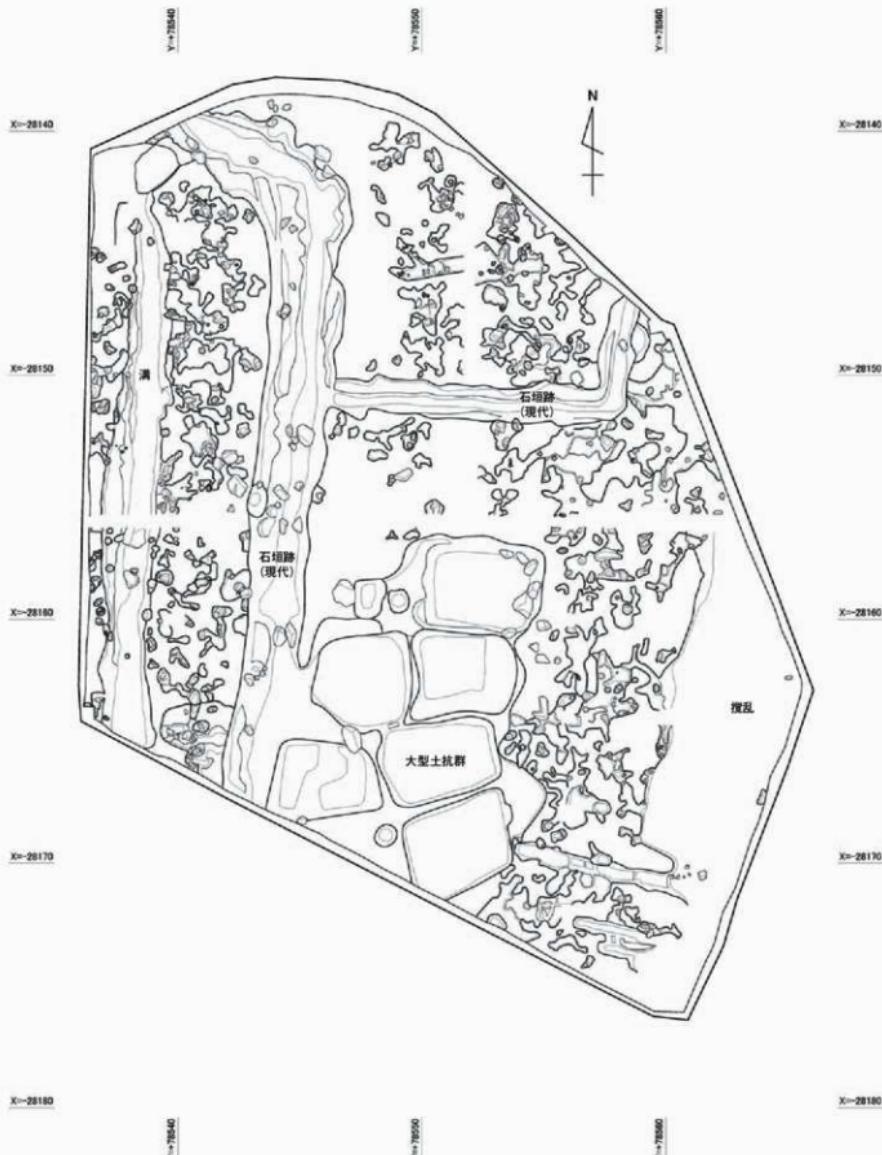
### 大型土坑群

調査区南部において、近接する大型の土坑 6 基を確認した。いずれも長軸3m 程度、短軸2m 程度であり、長軸を傾斜方向である東西に取っている。遺構の深さについては、深度と土量が人力掘削の調査計画では困難と判断し完掘していないため、不明である。各土坑はそれぞれ土石流堆積である固結した砂礫層（Ⅶ層）を掘り込んでおり、また掘り残した部分を壁面として他の土坑とも共有している。

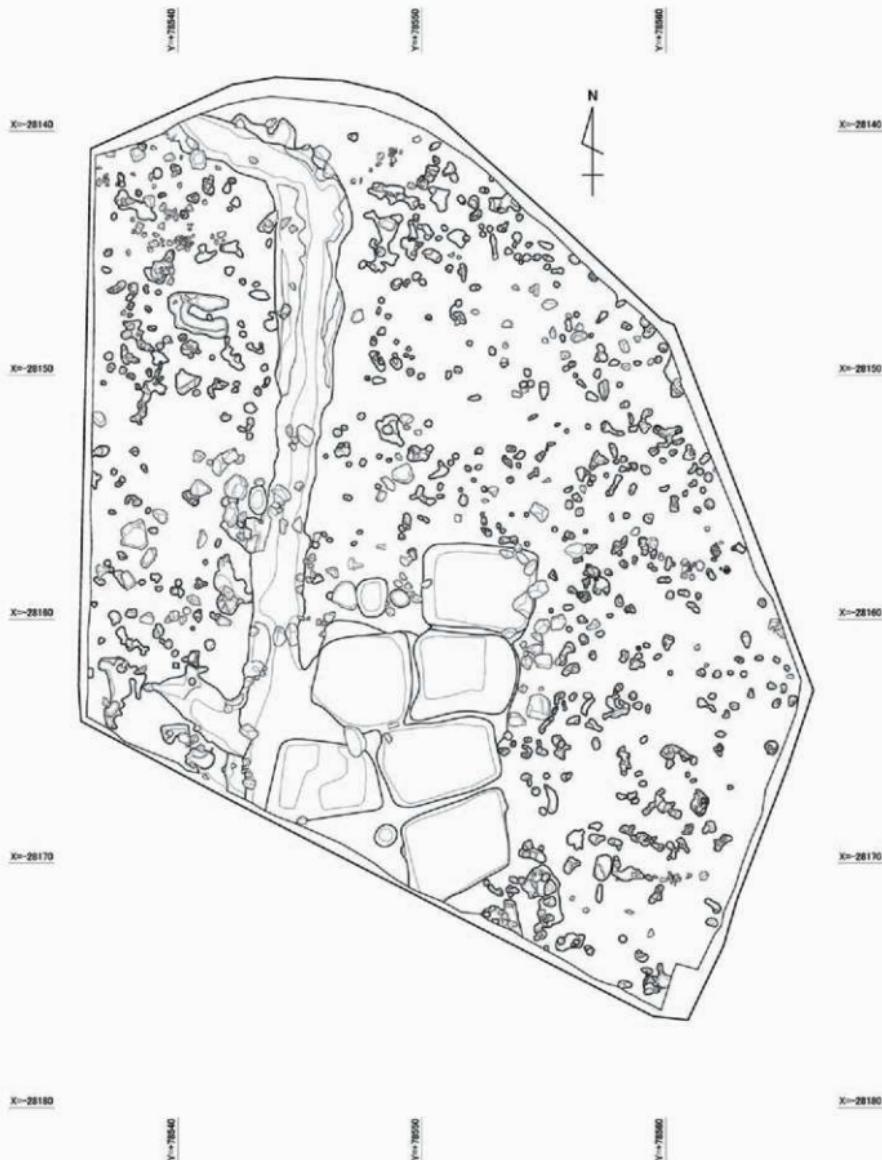
類似の遺構が平成16年度に実施した権現脇遺跡第2次本調査のD区において確認されており、また権現脇遺跡と同じく南島原市深江町に所在する諏訪ノ上遺跡でも検出例がある。



第77図 I区土層実測図 ( $S = 1/100$ )



第78図 I区IIIb下層上面遺構配置図 ( $S = 1/200$ )



第79図 I区IV層上面構造配置図 (S = 1/200)

## (2) 出土遺物

### 土器ほか

1~200は縄文時代後・晩期から突帯文期にかけての資料である。

1~77は深鉢の資料である。

1・3は口唇部を丸く整える。2は、外面が縱方向の、内面が横方向の貝殻条痕調整である。口唇部上端をナデ調整によって平坦に整える。4は比較的薄手の器壁で、外面には炭化物の付着がある。

5~8は口唇部上端をなすことによって平坦にする。

7~12はやや内湾する資料である。7は外面に貝殻条痕調整が明瞭に残り、口唇部は平坦である。

11は内外面ともに横方向の擦過調整を行う。12は外面が擦過調整、内面がナデ調整で、口唇部上端を平坦に整える。外面には炭化物の付着が認められる。

13~18は内傾する資料で、口唇部上端をナデ調整で平坦に作り出す。17の外面は横方向の貝殻条痕調整を明瞭に残す。19は内外面ともにナデ調整で、口唇部上端を平坦に整える。

20・21は口縁部に突起をもつ資料である。20は内外面ともに横方向の擦過調整が観察される。21は内外面に段を作つて先割れの突起がつき、外面には2条の沈線が引かれる。

22は波状の口縁となるものか、外面に段を設ける。23は口縁部が肥厚しており、突起である可能性もある。

24は胴上位で屈曲する小型品で、屈曲部から口縁部は外反する。内外面ともにナデ調整が施される。鉢となる可能性もある。

25~33は胴部の資料である。25は、外面は横方向の擦過調整、内面がナデ調整で、内面下位には炭化物の付着がある。26は屈曲部から下位の資料である。3cm程度の幅で接合しており、粘土紐積み上げの痕跡が明瞭である。27・28は、外面には貝殻条痕調整がそのまま残るが、内面は丁寧にナデ調整が行われている。

29~33は屈曲部の資料である。29は擦過調整によって削り出すようにして外面に稜を作る。30・31には外面に炭化物の付着がある。33はやや薄手の器壁である。

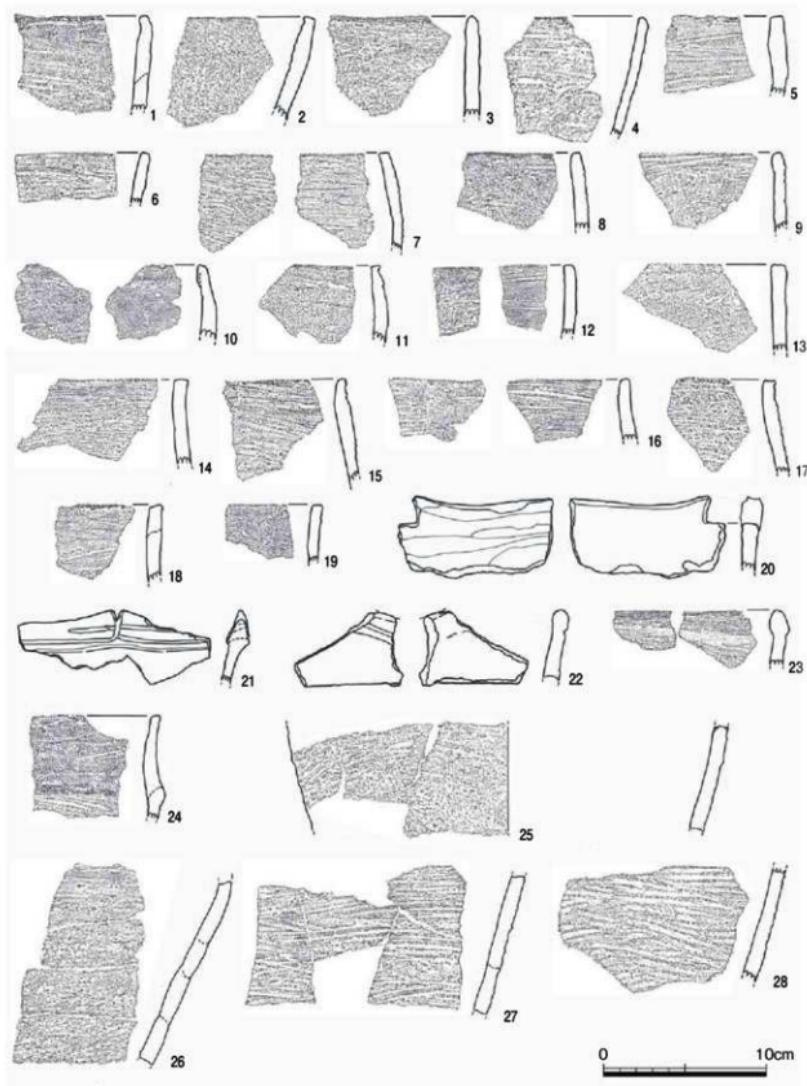
34~65は口縁がいわゆるタガ状口縁となる資料である。34は外反する頸部に分厚くやや先細りとなる口縁部がつく。外面に沈線は引かない。35は外面に2条の沈線を引き、口唇部上端を平坦に整える。36は薄手の作りで、大きく外反する頸部にやや内湾、先細りとなる口縁部が直立する。外面に3条の沈線が引かれる。37は直立する口縁部で、2条の沈線を引く。

38・39は外反する頸部に内傾する口縁部が乗る。

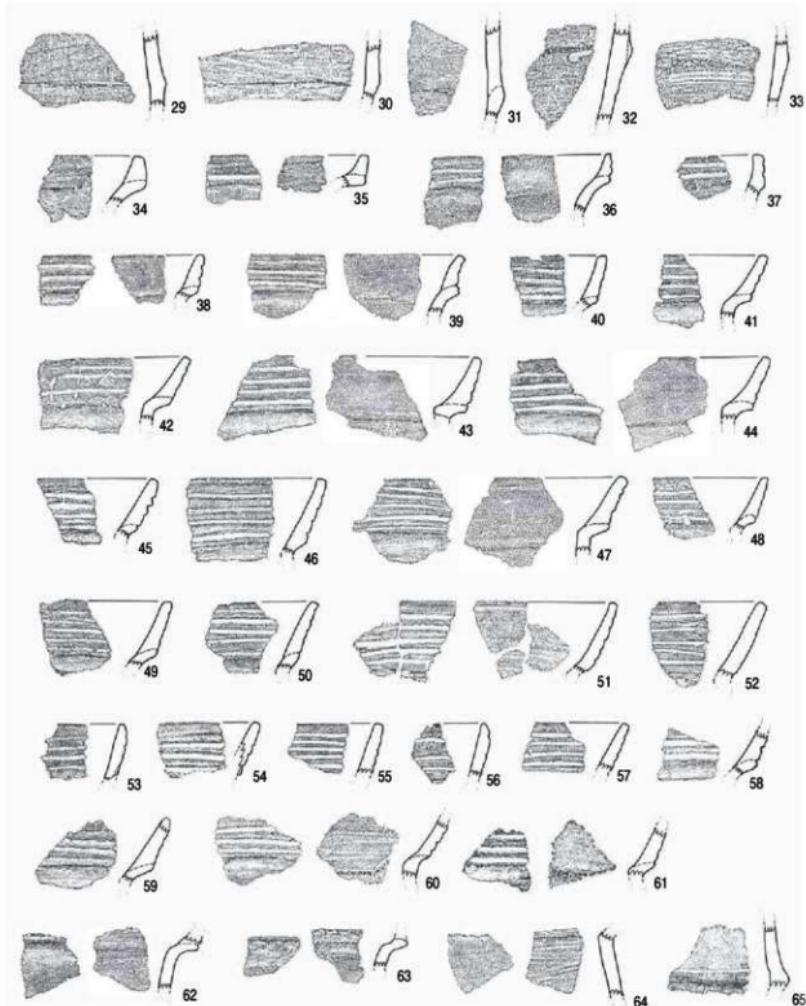
41~44、47は頸部の上端を屈曲させ、そこに口縁部を積み上げるため、内面の頸部と口縁部の境界に稜を作るものである。41は内外面ともによく研磨調整を施している。42は内外面ともにナデ調整で、外面には炭化物の付着がある。43は外面と内面の口唇部から2cmほどに研磨調整を施す。44は内外面ともに研磨調整を行う。53~57は口縁部最下段の張り出しを欠く。

62~64は頸部の資料である。64の外面はよく研磨する。65は胴部から頸部へと至る屈曲部の資料で、内外面ともに丁寧に研磨調整が施され、外面の屈曲部直上には沈線が1条巡る。

66~77は肩部を作るか、胴部でいったんすぼまって口縁部が大きく開く器形の深鉢である。66~69は大きく外反する口縁部の資料である。66の外面には間隔の広い平行沈線が横走する。67の内面は擦



第80図 I区土器ほか実測図① (S = 1 / 3)



第81図 I区土器ほか実測図② (S = 1 / 3)

過調整が明瞭に残る。69の外面には貝殻条痕調整が明瞭である。

70～73は66～69の口縁部の下部となるような資料で、外面に段を作るものである。70は外面ともにナデ調整であるが、内面の屈曲部より下位は掠過調整が残る。71・72は外面の段より上位に貝殻条痕調整を施しているが、段より下位はナデ調整である。

74～76は粘土塊の貼り付けをもつ資料である。74はリボン状突起である。75・76は短い粘土紐の貼り付けにヘラ状工具による刻目が施される。77は胴部の資料で、屈曲は緩い。

78・79は刻目突帯文土器である。78の突帯は細く、あるいは口唇部のつまみ出しによるものかもしれない。外面には横方向の貝殻条痕調整が観察される。刻目は爪先によるものか。79は胴屈曲の資料で、屈曲は弱い。外面には横方向の貝殻条痕調整が施され、刻目は指先によるものと思われる。

80～108は底部の資料である。

80～88は断面張り出しをもたず、比較的丁寧な作りのもの、89～96はしっかりとした断面張り出しをもつもの、97～100は断面張り出しをもたず80～88の形状に似るが、比較的粗い作りのもの、101～108は厚底のものである。

80～88はいずれも平底である。84の底径9.8cmである。85は復元底径8.7cm、87は復元底径7.5cmを測る。84は内底面が平坦である。85・86の底面及び内面は研磨調整が施されている。

90は上げ底となっており、内面は器面の剥落が著しい。91の外面は、底部はナデ調整であるが、胴部の立ち上がり部分は縱方向の貝殻条痕調整である。底面には丁寧な研磨調整が施されている。94の外面端部には工具痕のようなくほみが見られ、意図的なものかは判然としないが、製作台からの取り外し作業の痕跡とも考えられる。89の復元底径は10.9cmである。90の復元底径は10.1cm、91の復元底径は9.4cmである。また、92の復元底径は9.1cm、93の復元底径は7.7cmである。97の復元底径は11.7cm、98の復元底径は9.3cm、99の復元底径は8.0cmである。

101は底面を削り出して上げ底とする。102は内面に炭化物の付着が認められる。

104は底部と胴部との境界のくびれが強く、底面は上げ底となる。105の底面はわずかに上げ底となっており、組織痕の可能性がある圧痕が認められる。106は底径のわりに非常に厚い底部で、上げ底となっている。あるいは脚台を意識したものか。107の底面中央部には掠過調整が認められる。108の内面には炭化物が付着する。復元底径は、101が9.8cm、102が8.4cm、103が8.2cm、104が8.2cm、である。また、105が7.7cm、106が7.0cm、107が6.5cmである。

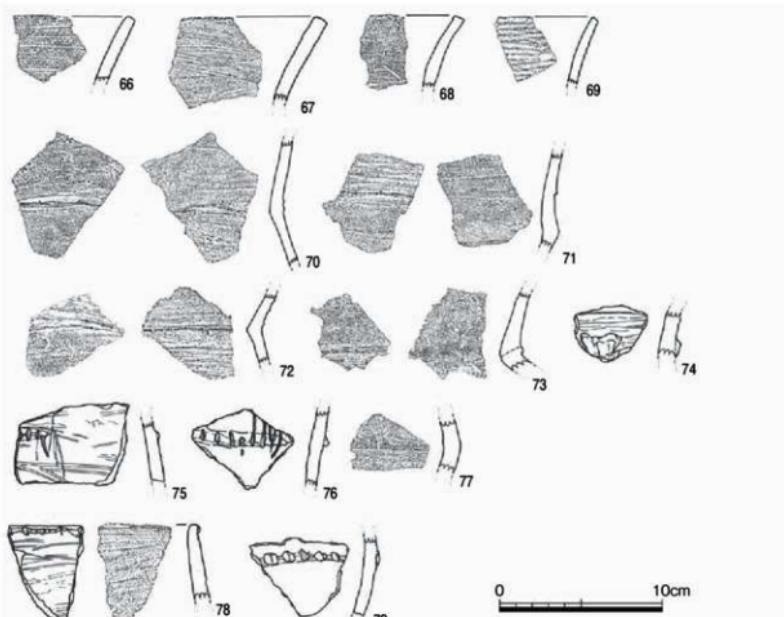
109～200は浅鉢の資料である。

109～120は大きく外反する頭部に短い口縁部が立ち上がるるものである。109は強く外反する頭部に比較的幅の広い口縁部が直立し、外面には2本の平行沈線間を短い斜沈線で充填している。110～120は大きく開いて外反する頭部に玉縁状の口縁部が立ち上がるようにつき、口縁部外面には沈線を1条引く。

121は大きく開いて外反する頭部から口縁部の資料であるが、口縁部は立ち上がることなく、内外に1条ずつの沈線を引く。122は大きく開く頭部の資料で、口縁部を欠く。

123～130は短い外開きの頭部で、口縁部内面には段をもつ資料である。124～128の浅い器形と129・130の深い器形が見られる。

132～134は扁球状の胴部をもつ資料である。132は胴部下半と頭部の両方が粘土紐積み上げの接合



第82図 I区土器ほか実測図③ (S = 1/3)

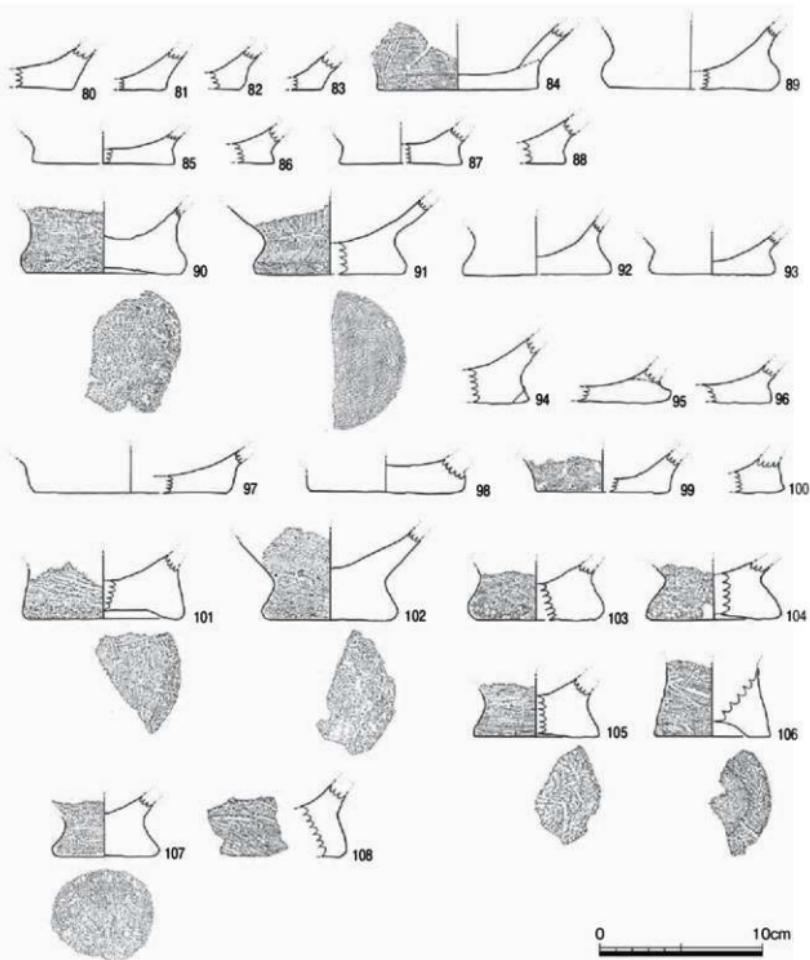
部から剥落する。133も頸部が接合部から剥落する。134はなで肩で、やや長めの頸部をもつものと思われる。肩部と頸部の境界付近にわずかに赤色顔料が残存する。136は肩部の外面に段を設ける。137はなで肩で、外面に赤色顔料の塗付が認められる。また、外面には炭化物の付着がある。138は外面に段をもつ資料である。

139は小型品であるが、長めの頸部に丸縁の口縁がつく。外面、口縁部と頸部付け根に沈線を引く。140～144は波状口縁となる資料である。140は胴部で屈曲し、口縁部外面で段を作る。141も口縁部外面で段を設ける。142は内外面ともに段を作る。143はヒレ状の突起をもつ。144は口縁部と胴部でそれぞれ太めの沈線を引いて段を強調する。145～147は口縁部を欠くが、外面に段を設けており、140～144同様、波状口縁の資料とみてよからう。148は144と外面の段の作りなどが似るが、口縁部と胴部の段が平行であることから平口縁とした。

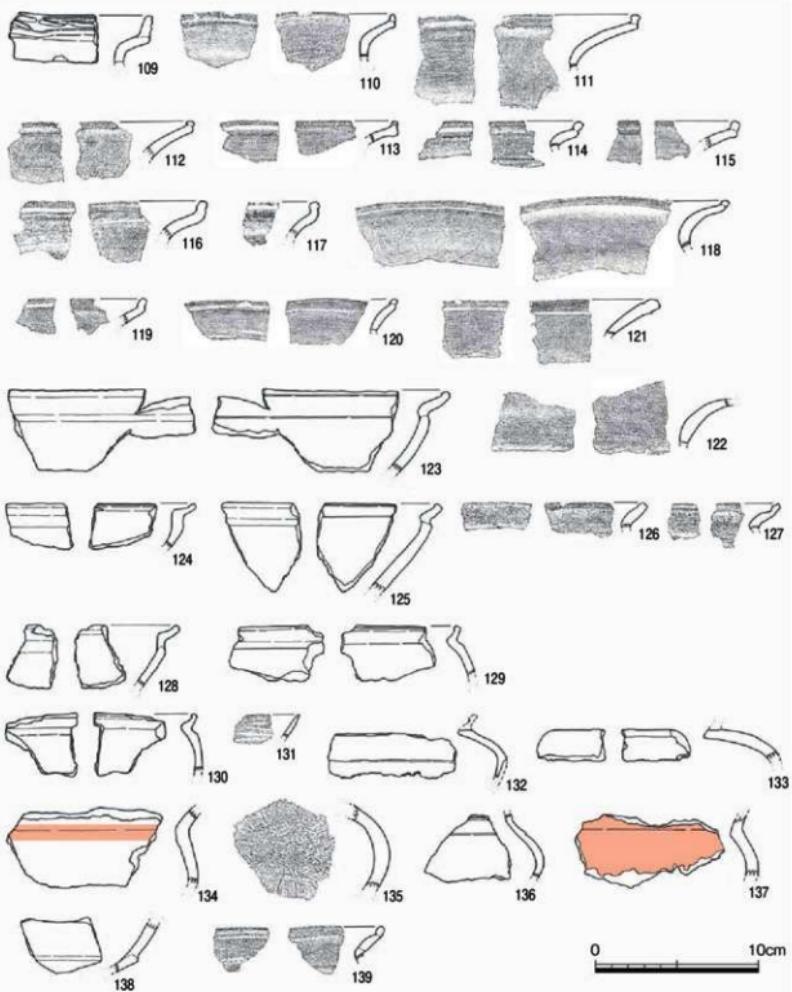
149は外反する頸部で、口縁部は波状になるものと思われ、突起をもつ。150は外反して大きく開く口縁部で、口唇部はやや肥厚する。151は胴部で屈曲し、口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。

152は比較的緩く屈曲する胴部の資料である。153は大きく開く胴部から強い屈曲がみられる。154は胴部で段を作り、その上下に削り出しの文様を施す。

155は底部の資料である。底面、内外面ともに研磨調整が施される。



第83図 I区土器ほか実測図④ (S = 1/3)



第84図 I区土器ほか実測図⑤ (S = 1/3)

156～182はボウル状、あるいは洗面器状の器形をなす資料である。156は口縁部下で屈曲する資料であるが、内外面ともに研磨調整が施され、外面屈曲部より上位には赤色顔料が塗られる。157は内外面ともに研磨調整が施されており、外面には炭化物の付着が認められる。158は外傾する口縁部で、口唇部外面の直下を指ナデしたことによりわずかに外反する。159はわずかに内湾し、外面に炭化物が付着する。160は外面に貝殻条痕調整が、内面に擦過調整が残り、外面には炭化物が付着する。

161の口唇部は粘土を貼り付けることにより突帯状となっている。内外面に炭化物が付着する。162は外傾が強く、外面には炭化物が認められる。163は内湾する資料で、内外面ともに擦過調整のうちナデ調整を施している。164は外面ともにやや粗い研磨調整が施される。165は直立させて図化したが、頗りには不安があり深鉢である可能性も残る。内外面ともに擦過調整を行う。166は内外面ともに擦過調整が観察され、外面には炭化物の付着が認められる。167は大きく口縁部が開く器形の深鉢である可能性もある。内外面ともにナデ調整であるが、内面の下部には擦過調整がみられる。

168は厚手でやや内湾する資料である。169はヒレ状の突起をもつ資料である。170は内傾、内湾する比較的小ぶりの口径になる資料である。外面はナデ調整で炭化物が付着し、内面には擦過調整が施される。171は外面が擦過調整、内面は貝殻条痕調整のうち丁寧にナデ調整を施している。172は外面に貝殻条痕調整が残り、炭化物の付着がある。173は口唇部上面を平坦に整える資料で、外面は擦過調整、内面は丁寧なナデ調整である。外面に炭化物が観察される。174は外面に擦過調整を残す。175はやや小ぶりの資料と思われ、貝殻条痕調整の施された外面には炭化物が付着する。

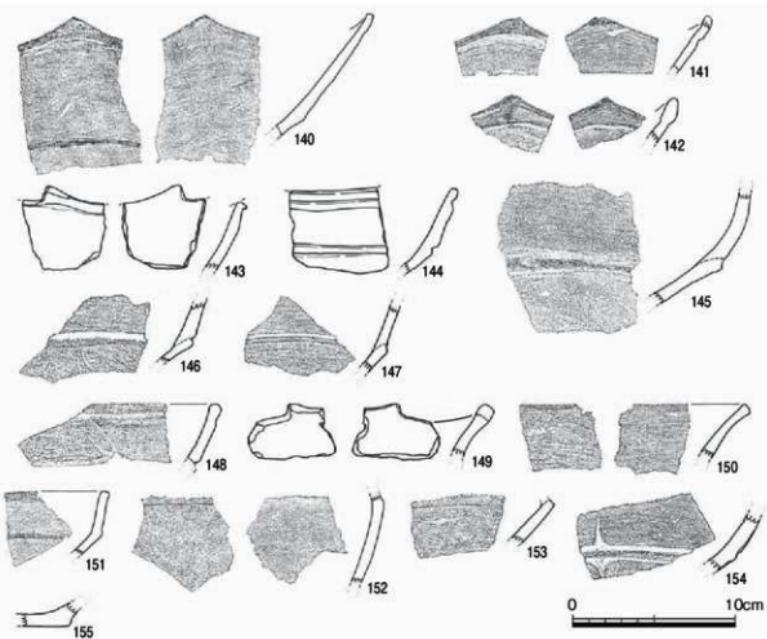
176は内面に刷毛目調整が明瞭である。外面には炭化物が付着する。177は内面のナデ調整が丁寧である。178は内湾する資料で、貝殻条痕調整をそのまま残す外面には炭化物の付着が認められる。179は、口唇部を平坦に整えており、外面は擦過調整、内面はナデ調整である。

180・181は内湾する資料である。180の外面は器壁を搔き削るような擦過調整が認められ、内面には研磨調整が施される。外面には炭化物が付着する。181は外面ともに器面を搔き削るような擦過調整が行われている。182は屈曲して強めに内傾する資料で、外面は貝殻条痕調整のうちナデ調整、内面は擦過調整が行われている。

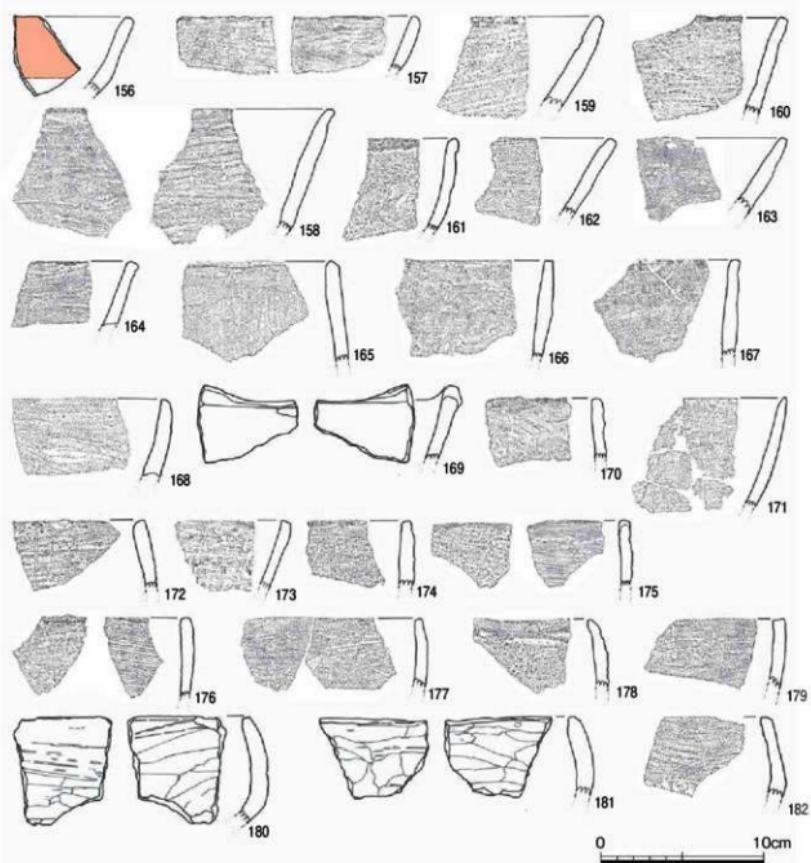
183～200は組織痕土器である。184・184は型取り部分より上位に輪積み成形された口縁部の資料である。型取り部分との境界が段となっており、段下にわずかに組織痕が観察でき、アンギンとみられるが明瞭でない。184の外面には炭化物が付着する。

185～194はアンギンの資料である。185は、外面は底面付近を擦過調整によって均し、内面は丁寧なナデ調整を施す。外面には炭化物が付着する。186のアンギンは経糸間が約2.0cmと幅広である。内面は丁寧にナデ調整を行う。187の内面は研磨調整が行われている。188は外面に炭化物が付着する。189は底部から胴部への立ち上がりが明瞭である。191は内面に炭化物が付着する。192は内面に研磨調整が施される。

195～200は網目の資料である。195は整形後に外面に貝殻条痕調整を行って器面を均すが、わずかに網目が観察される。外面には炭化物の付着が顕著である。196は口縁部の立ち上がり部分で、段下に網目が認められる。内面は丁寧なナデ調整である。197は非常に目の細かい網目である。199の内面は丁寧なナデ調整が行われる。



第85図 I区土器ほか実測図⑥ (S = 1/3)



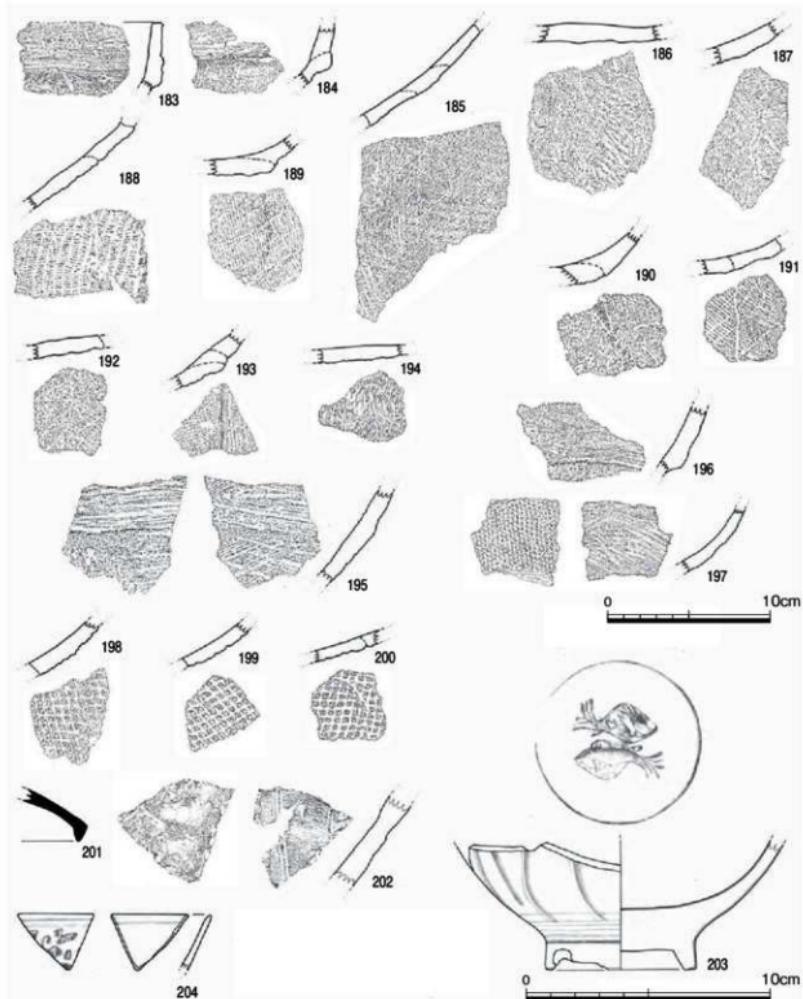
第86図 I区土器ほか実測図⑦ (S = 1 / 3)

201は須恵器の坏蓋である。

202は瓦質の擂鉢である。外面には指頭圧痕が残り、内面にはクシ目が入る。

203は青磁碗である。豊付まで釉がかかり、高台内は露胎である。外面胴部には連弁文をもち、見込には界線内に双魚がみられる。復元底径は6.2cmである。

204は青花碗である。外面に丸文を描く。



第87図 I区土器ほか実測図⑧ (183~202 : S = 1/3, 203・204 : S = 1/2)

第23表 I 区土器はか觀察表①

回	番号	取上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調	地土	備考
						外面	内面			
	1	I-1189	深鉢	A8-c-d	Ⅱ上	貝造条板・ナデ	ナデ	明黄褐色・黒色	黒色	角閃石・長石・石英
	2	-	深鉢	C8-b-c	性質	貝造条板	滑色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	3	-	深鉢	A8-c-c	Ⅱ	ナデ	ナデ	褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英
	4	I-1398	深鉢	A8-c-c	Ⅱ上	貝造条板	滑道・ナデ	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	
	5	I-3421	深鉢	A8-c-d	Ⅱ上	滑道	滑道	褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英
	6	I-1896	深鉢	A8-a	Ⅱ上	貝造条板	貝造条板・ナデ	にふい・青褐色・黒色	黒色	角閃石・長石・石英
	7	-	深鉢	B8-c-c	性質	貝造条板	貝造条板・ナデ	褐色	黒色	長石・石英
	8	I-1062	深鉢	C8-c-d	Ⅱ上	滑道	ナデ	褐色	褐色・にふい・青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	9	I-1462	深鉢	A8-c-c	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英
	10	I-2694	深鉢	A8-c-a	Ⅱ上	ナデ	ナデ	灰褐色・にふい・青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
	11	I-1060	深鉢	C8-c-c	Ⅱ上	滑道	滑道・ナデ	にふい・褐色	褐灰色	長石・石英
	12	I-1053	深鉢	C8-c-d	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	黑色	角閃石・長石・石英
	13	-	深鉢	A8-b	Ⅱ	滑道・ナデ	滑道	黒色	黒褐色	角閃石・長石・石英
	14	-	深鉢	B8-c-a	Ⅱ	滑道・ナデ	ナデ	褐灰褐色	角閃石・長石・石英	
	15	I-0752	深鉢	C8-c-c	Ⅱ上	貝造条板	貝造条板・ナデ	灰褐色・にふい・青褐色	浅黄色	角閃石・長石・石英
	16	I-0753	深鉢	D8-a	Ⅱ上	滑道	滑道・ナデ	にふい・褐色	角閃石・長石・石英	
	17	I-2859	深鉢	D8-a	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英
	18	I-1154	深鉢	C8-b	Ⅱ上	貝造条板・ナデ	ナデ	褐灰褐色	褐灰褐色・にふい・青褐色	角閃石・長石・石英
	19	I-0721	深鉢	A8-c	Ⅱ上	ナデ	ナデ	にふい・褐色	長石・石英・赤色粒子	
	20	-	深鉢	B8-a	性質	滑道	滑道	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	ヒレ状鉄
	21	-	深鉢	A8-c-d	Ⅱ上	沈道・ナデ・貝造条板	ナデ	にふい・青褐色・赤褐色	にふい・青褐色・にふい・黃褐色	角閃石・長石・石英
	22	-	深鉢	D8-c-c	性質	滑道・ナデ	滑道	にふい・褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	23	I-2358	深鉢	A8-b	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	褐灰褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英
	1-1489	-	深鉢	D8-b	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	灰褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英
	24	I-0954	深鉢	D8-c-d	Ⅱ上	貝造条板・ナデ	貝造条板・ナデ	にふい・青褐色	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英
	1-2528	-	深鉢	B8-b	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英
	25	I-2516	深鉢	D8-b-d	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	
	1-2002	-	深鉢	D8-c-d	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	
	1-1202	-	深鉢	A8-c-d	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	
	1-1437	-	深鉢	A8-b	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	
	1-1463	-	深鉢	A8-c	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	
	1-2352	-	深鉢	A8-d	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英	
	1-0600	-	深鉢	B8-c-b	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英
	27	I-1614	深鉢	B8-b	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英
	1-1455	-	深鉢	B8-c	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英
	28	I-2581	深鉢	A8-c	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	にふい・青褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英
	29	I-1653	深鉢	B8-b	Ⅱ上	滑道	ナデ	褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英
	30	I-2865	深鉢	A8-c-c	Ⅱ上	貝造条板	ナデ	褐灰褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英
	31	I-2291	深鉢	D8-c-b	Ⅱ上	滑道	ナデ	にふい・褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英
	32	I-1976	深鉢	D8-b	Ⅱ上	滑道	ナデ	浅青褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英
	33	I-1224	深鉢	B8-b	Ⅱ上	滑道	ナデ	褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英
	34	I-1803	深鉢	A8-c-c	Ⅱ上	ナデ	研磨	褐灰褐色・青褐色	褐色・青褐色	角閃石・長石・石英
	35	I-1705	深鉢	D8-c-a	Ⅱ上	沈道・ナデ	ナデ	褐色	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英
	36	I-1653	深鉢	D8-c-c	Ⅱ上	沈道・ナデ	ナデ	褐色・青褐色	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	37	I-1174	深鉢	C8-b-a	Ⅱ上	沈道・ナデ	ナデ	にふい・褐色	にふい・褐色	角閃石・長石・石英
	38	I-1567	深鉢	D8-c-b	Ⅱ上	沈道・ナデ	ナデ	にふい・褐色	にふい・青褐色	角閃石・長石・石英
	39	I-2140	深鉢	C8-c-d	Ⅱ上	沈道・ナデ	ナデ	褐色	褐色・にふい・青褐色	角閃石・長石・石英
	40	I-1074	深鉢	E8-b	Ⅱ上	沈道・ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
	41	I-3224	深鉢	D8-b	Ⅱ上	沈道・ナデ	研磨	褐色	褐色	長石・石英・赤色粒子
	42	I-2300	深鉢	D8-c-d	Ⅱ上	沈道・ナデ	ナデ	にふい・褐色	褐褐色	角閃石・長石・石英

第24表 I 区土器はか観察表②

回	番号	取上番号	器種	グリッド	層位	文様・質理		色調		地土	備考	
						外面	内面	外面	内面			
	43	I-0964	深鉢	D9-d	Ⅱb上	沈鉢／研磨	研磨、ナデ	にぶい褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	44	I-0858	深鉢	D7-e	Ⅱb上	沈鉢／研磨	研磨、ナデ	にぶい褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	45	I-2898	深鉢	C30-a	Ⅱb下	沈鉢／ナデ	ナデ	にぶい褐色	明褐色	角閃石、長石、石英		
	46	I-0196	深鉢	D7-b	Ⅱb上	沈鉢／ナデ	ナデ	にぶい褐色	明褐色、にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	47	I-2305	深鉢	D7-b	Ⅱb下	沈鉢／研磨	研磨、ナデ	褐色	灰褐色、灰青褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	48	-	深鉢	C7-d	Ⅱa	沈鉢／研磨	ナデ	にぶい褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	49	I-0037	深鉢	C7-b	Ⅱb上	沈鉢／ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	50	I-3310	深鉢	E9-b	Ⅱb下	沈鉢／研磨	ナデ	にぶい褐色	明褐色	角閃石、長石、石英		
		I-1499		D7-g	a							
	51	I-1956	深鉢	D7-g	b	Ⅱb下	沈鉢／ナデ	研磨	褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	I-2247			D7-g	b							
	52	I-2335	深鉢	A8-d	Ⅱb下	沈鉢／ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	53	I-1562	深鉢	C7-g	b	Ⅱb下	沈鉢／ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	54	-	深鉢	C7-g	a	Ⅱ	沈鉢／ナデ・研磨	日没条痕・研磨	褐色	にぶい褐色	長石、石英、赤色粒子	
	55	I-1872	深鉢	C7-g	c	Ⅱb下	沈鉢／研磨	研磨	にぶい褐色	褐色	角閃石、長石、石英	
	56	I-1313	深鉢	E9-a	Ⅱb上	沈鉢／ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	57	I-3192	深鉢	C7-d	d	Ⅱb下	沈鉢／研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	58	I-0955	深鉢	D9-d	e	Ⅱb上	沈鉢／ナデ	研磨	明褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	59	I-2296	深鉢	D7-h	f	Ⅱb下	沈鉢／ナデ	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	60	I-0156	深鉢	C7-g	a	Ⅱb上	沈鉢／ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	61	-	深鉢	D9-b	g	Ⅱa	沈鉢／ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	62	I-3021	深鉢	C7-g	c	Ⅱb下	沈鉢／研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	63	I-1649	深鉢	D7-g	a	Ⅱb下	研磨	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石	
	64	I-3141	深鉢	D7-c	c	Ⅱb下	研磨	日没条痕・ナデ	にぶい褐色	明褐色	角閃石、長石、石英	
	65	-	深鉢	A8-b	a	Ⅱ	沈鉢／研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	66	I-1549	深鉢	C7-g	a	Ⅱb下	沈鉢／ナデ	ナデ	褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	67	-	深鉢	D9-b	c	浅灰	研磨・ナデ	研磨	褐色	褐色	長石、石英	
	68	I-2114	深鉢	B8-b	g	Ⅱb上	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	長石、石英	
	69	I-2798	深鉢	C7-b	b	貝塚条痕	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	70	I-1713	深鉢	D7-g	a	Ⅱb下	ナデ	ナデ	明褐色	褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	71	I-1641	深鉢	B7-d	d	Ⅱb下	貝塚条痕・ナデ、ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	72	I-1616	深鉢	B7-g	c	Ⅱb下	貝塚条痕・ナデ	ナデ、研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	73	I-3406	深鉢	C7-g	d	Ⅱb下	ナデ	ナデ	浅褐色	褐色	にぶい褐色	
	74	I-0415	深鉢	B7-g	d	Ⅱb上	貝塚条痕	ナデ	明褐色	褐色	角閃石、長石	廻付
	75	-	深鉢	A8-d	d	Ⅱ	貝塚条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	76	I-0649	深鉢	A8-b	b	Ⅱb上	ナデ	研磨・ナデ	にぶい褐色	褐色	角閃石、長石、石英	廻付
	77	I-2155	深鉢	C7-g	c	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	
	78	I-3448	甕	C7-g	b	Ⅱb下	貝塚条痕	研磨	灰褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	
	79	I-0680	甕	B8-b	a	Ⅱb上	貝塚・研磨	ナデ	にぶい褐色	浅褐色	角閃石、長石、石英	
	80	I-2695	甕	B8-c	c	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	既底調整ナデ
	81	I-1859	甕	B8-d	b	Ⅱb下	ナデ	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石、長石、石英	既底調整ナデ
	82	I-3410	甕	B8-c	c	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	既底調整ナデ
	83	I-3340	甕	B8-c	D9-c	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	既底調整ナデ
	84	-	甕	B8-c	C8-b	Ⅱb下	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	既底調整研磨
	85	I-0280	甕	B8-a	D7-g	Ⅱb上	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	既底調整ナデ
	86	I-2316	甕	B8-b	D7-g	Ⅱb上	ナデ	研磨	褐色	褐色	角閃石、長石、石英	既底調整研磨
	87	I-0022	甕	B8-b	C7-b	Ⅱb上	ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	既底調整ナデ
	88	I-1601	甕	B8-d	D7-e	Ⅱb下	ナデ	研磨	浅褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	既底調整研磨
	89	-	甕	B8-b	D8-b	Ⅱ	研磨	ナデ	褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英	既底調整ナデ

第25表 I 区土器はか觀察表③

回	番号	取上番号	器種	グリッド	層位	文様・調査		色調	地土	備考		
						外面	内面					
	90	-	BB-手	E05-b	II	滑面、ナテ	ナテ	明赤褐色	褐灰土	角閃石、長石、石英	前田調査者ナメ	
	91	I-3326	BB-手	E05-d	II	貝地板、ナテ	ナテ	にぶい赤褐色	灰青色	角閃石、長石、石英	前田調査研磨	
	92	I-6960	BB-手	B05-a	II	ナテ	ナテ	明赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	前田調査ナメ	
	93	I-8873	BB-手	D05-d	II	ナテ	ナテ	明赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	前田調査ナメ	
	94	I-1719	BB-手	B05-a	II	ナテ	ナテ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	前田調査ナメ	
	95	I-6980	BB-手	D07-a	II	ナテ	ナテ	滑面	滑面	角閃石、長石、赤色粒子	前田調査ナメ	
	96	I-2594	BB-手	C30-a	II	ナテ	ナテ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	前田調査研磨	
	97	-	BB-手	C05-d	II	ナテ	ナテ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	長石、石英	前田調査ナメ	
	98	-	BB-手	E05-d	II	模様	ナテ	明赤褐色	滑面	角閃石、長石、石英	前田調査ナメ	
	99	-	BB-手	C30-a	II	ナテ	ナテ	滑面	滑面	角閃石、長石、石英	前田調査ナメ	
	100	-	BB-手	E05-d	II	ナテ	ナテ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石、長石、赤色粒子	前田調査ナメ	
	101	-	BB-手	C30-c	II	ナテ	ナテ	明赤褐色	にぶい褐色	長石、石英	前田調査研磨	
	102	I-2882	BB-手	A05-d	II	ナテ	ナテ	灰褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英、赤色粒子	前田調査ナメ	
	103	-	BB-手	B05-c	II	ナテ	ナテ	滑面	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英	前田調査ナメ	
	104	-	BB-手	A05-d	II	ナテ	ナテ	滑面	滑面	角閃石、長石、石英、赤色粒子	前田調査ナメ	
	105	-	BB-手	B05-c	II	ナテ	ナテ	明赤褐色	滑面	長石、石英、赤色粒子	前田調査ナメ	
	106	-	BB-手	A07-b	II	ナテ	-	滑面	-	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	107	I-3578	BB-手	B05-a	II	ナテ	ナテ	滑面	滑面	角閃石、長石、石英	前田調査研磨	
	108	I-1587	BB-手	C05-d	II	模様+ナテ	ナテ	灰青色	にぶい赤褐色	角閃石、長石、石英		
	109	I-3280	浅鉢	D07-a	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	灰青褐色	角閃石、長石、石英		
	110	-	浅鉢	-	奥土	浅鉢	研磨	にぶい褐色	褐灰色	角閃石、長石、石英、赤色粒子		
	111	I-1027	浅鉢	C07-a	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	112	I-0089	浅鉢	C07-d	II	ナテ	研磨	滑面	褐灰色	角閃石、長石、石英		
	113	I-3324	浅鉢	C05-d	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石、長石	
	114	I-1405	浅鉢	D05-b	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	にぶい褐色、にぶい赤褐色	にぶい褐色、赤黄色	角閃石、長石、黒鉄	
	115	-	浅鉢	D05-b	II	模様	沈面/研磨	研磨	にぶい赤褐色	角閃石、長石		
	116	I-0771	浅鉢	D05-a	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	117	-	浅鉢	D05-b	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	にぶい赤褐色	長石、石英、赤色粒子		
	118	I-1778	浅鉢	D07-b	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	明赤褐色	角閃石、長石、石英		
	119	I-0996	浅鉢	D05-b	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石、長石	
	120	I-0853	浅鉢	D05-c	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	灰灰色	滑面	石英	
	121	I-2106	浅鉢	D07-b	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	にぶい赤褐色、滑面	角閃石、長石、石英		
	122	I-2697	浅鉢	D05-c	II	ナテ	研磨	滑面	滑面	角閃石、長石		
	123	I-3200	浅鉢	C07-d	II	ナテ	研磨	褐色	灰褐色	角閃石、長石、石英		
	124	I-1988	浅鉢	D07-b	II	ナテ	研磨	研磨	にぶい赤褐色、褐灰色	角閃石、長石、石英		
	125	I-2187	浅鉢	C07-c	II	ナテ	研磨	研磨	にぶい赤褐色、褐灰色	角閃石、長石、石英		
	126	I-1613	浅鉢	D07-c	II	ナテ	研磨	研磨	鈍赤褐色	角閃石、長石、石英		
	127	I-2010	浅鉢	D07-b	II	ナテ	研磨	研磨	にぶい赤褐色、にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	128	I-2569	浅鉢	C07-d	II	ナテ	研磨	研磨	にぶい褐色	長石、石英		
	129	I-0405	浅鉢	C07-a	II	ナテ	研磨	研磨	にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	130	I-3145	浅鉢	D05-b	II	ナテ	研磨	研磨	滑面	角閃石、長石、滑面		
	131	-	浅鉢	D05-b	II	ナテ	研磨	研磨	にぶい赤褐色	角閃石、長石		
	132	I-0605	浅鉢	D07-b	II	ナテ	沈面/研磨	研磨	滑面	にぶい褐色	角閃石、長石、石英	
	133	I-2482	浅鉢	A05-c	II	ナテ	研磨	滑面	滑面	角閃石、長石、石英		
	134	-	浅鉢	-	泥付	研磨	研磨	滑面	滑面	角閃石、長石		
	135	-	浅鉢	-	模様	研磨	研磨	滑面	滑面	角閃石、長石、石英		
	136	I-2757	浅鉢	D05-b	II	ナテ	研磨	研磨	にぶい褐色	角閃石、長石、石英		
	137	-	浅鉢	C05-b	II	ナテ	研磨	研磨	黑色	角閃石、長石、石英	赤色顔料	
	138	I-3442	浅鉢	C05-b	II	ナテ	研磨	研磨	滑面	明赤褐色	角閃石、長石、石英	

第26表 I 区土器はか観察表④

回	番号	取上番号	器種	グリッド	層位	文様・質理		色調		地土	備考	
						外面	内面	外面	内面			
84	139	I-C236	瓦脚	D-G-h	Ⅲ上ト	沈縫・研磨	研磨	にふい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英		
	140	I-2560	瓦脚	A-B-c	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英・紫輝		
	141	I-2810	瓦脚	C-D-d	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	142	I-3291	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	研磨	研磨	褐灰青色	灰青色	角閃石・長石・石英		
	143	I-1128	瓦脚	C-D-a	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	ヒレ状変形	
	144	-	瓦脚	C-E-b	Ⅲ	円錐・研磨	研磨	褐色	灰青色	角閃石・長石・石英		
	145	I-2345	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英		
	146	-	瓦脚	B-G-c	Ⅱ	研磨	研磨	にふい褐色	灰青褐色	角閃石・長石・石英		
	147	-	瓦脚	D-E-a	Ⅱ	沈縫・研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	148	-	瓦脚	C-D-a	Ⅲ	沈縫・研磨	研磨	にふい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英		
	149	-	瓦脚	C-E-b	Ⅲ	研磨	研磨	にふい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英	リボン状変形	
	150	-	瓦脚	C-D-d	Ⅱ	研磨	研磨	にふい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英		
	151	I-3274	瓦脚	D-E-d	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英		
	152	I-1875	瓦脚	C-E-e	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・紫輝		
	153	I-2236	瓦脚	C-G-h	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色・にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	154	-	瓦脚	D-G-a	Ⅱ	沈縫・研磨	ナデ	褐灰青色	角閃石・長石・石英			
	155	I-2476	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	研磨	ナデ	褐色	褐灰色	角閃石・長石・石英	直面調整研磨	
	156	-	瓦脚	C-G-a	Ⅱ	研磨	研磨	褐灰色	褐灰色	角閃石・長石・赤色粒子		
	157	I-2555	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	研磨	貝殻接着・研磨	にふい褐色・褐灰色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	158	I-0691	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	ナデ	貝殻接着・ナデ	浅黄褐色・にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子		
	159	I-3214	瓦脚	C-E-d	Ⅱ下ト	貝殻接着・ナデ	貝殻接着・ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子		
	160	I-2721	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	貝殻接着	研磨・ナデ	にふい褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英		
	161	-	瓦脚	D-E-d	Ⅱ	ナデ	研磨	褐色	黄石	角閃石・長石		
	162	-	瓦脚	-	複数	薄邊・ナデ	貝殻接着・ナデ	にふい赤褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	163	I-1432	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	薄邊・ナデ	研磨・ナデ	にふい褐色・にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・紫輝		
	164	I-3412	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	ナデ	研磨	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	165	I-2789	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	薄邊	研磨	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	166	I-1701	瓦脚	B-G-h	Ⅱ下ト	研磨	研磨	にふい褐色・灰褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	167	I-1515	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	ナデ	ナデ	褐色・灰褐色	黄灰色	角閃石・長石・石英		
	168	I-2101	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	ナデ	貝殻接着・ナデ	研磨・ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子	
	169	I-2492	瓦脚	-	ナデ	貝殻接着	研磨	明黄色	灰褐色	角閃石・長石・石英	ヒレ状変形	
	170	I-1197	瓦脚	C-E-d	Ⅱ下ト	貝殻接着・ナデ	研磨	にふい褐色	浅黄色	角閃石・長石・石英		
	171	I-0851	瓦脚	E-F-a	Ⅱ下ト	薄邊	貝殻接着・ナデ	灰褐色	灰褐色	長石・石英		
	172	I-3231	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	貝殻接着	ナデ	褐灰色・にふい褐色	にふい褐色	長石・石英		
	173	-	瓦脚	C-E-b	Ⅱ	薄邊	ナデ	褐褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	174	I-1048	瓦脚	C-E-d	Ⅱ下ト	薄邊	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	175	I-2609	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	貝殻接着	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	176	I-2727	瓦脚	D-E-d	Ⅱ下ト	薄邊・ナデ	研磨	灰褐色	明褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子		
	177	I-2765	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	薄邊・ナデ	ナデ	灰褐色・にふい褐色	にふい褐色	長石・石英・赤色粒子		
	178	I-2781	瓦脚	C-E-b	Ⅱ下ト	研磨	ナデ	浅黄色・褐灰色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	179	I-0631	瓦脚	A-B-d	Ⅱ下ト	研磨・ナデ	ナデ	黑褐色	にふい褐色	角閃石・長石・赤色粒子		
	180	-	瓦脚	D-E-d	Ⅱ	複数	研磨	にふい赤褐色	にふい褐色	長石・石英・紫輝		
	181	-	瓦脚	C-E-d	Ⅲ	薄邊	研磨	にふい褐色	黑褐色	長石・石英・紫輝		
	182	-	瓦脚	E-F-a	Ⅱ	貝殻接着・ナデ	研磨	褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英		
	183	-	瓦脚	C-E-b	Ⅲ	複数・織繩	ナデ	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英		
	184	I-2561	瓦脚	A-B-c	Ⅱ下ト	貝殻接着・織繩(アンギン)	ナデ	にふい褐色	浅褐色	角閃石・長石・石英		
	185	-	瓦脚	D-E-c	Ⅲ	複数・織繩(アンギン)	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英・紫輝		

第27表 I 区土器ほか觀察表(5)

図 番号	取上番号	器種	グリッド	層位	文様・質理		色調		地土	備考
					外面	内面	外面	内面		
186	-	浅鉢	I -	複瓦	織錦面 (アンギン) ナデ	ナデ	褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
187	I - 3287	浅鉢	C 仰 - z	貝口下	織錦面 (アンギン)	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英・並緋	
188	I - 2501	浅鉢	A 透 - b	貝口下	織錦面 (アンギン)	ナデ	褐灰褐色	灰青褐色	長石・石英	
189	I - 2996	浅鉢	A 透 - d	貝口下	織錦面 (アンギン)	ナデ	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
190	-	浅鉢	A G - b	貝口下	織錦面 (アンギン)	ナデ	褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
191	I - 2497	浅鉢	B 透 - b	貝口下	織錦面 (アンギン)	ナデ	褐色	褐灰褐色	角閃石・長石・石英	
192	-	浅鉢	B 透 - a	性瓦	織錦面 (アンギン)	研磨	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
193	I - 2726	浅鉢	B 透 - c	貝口下	織錦面 (アンギン)	ナデ	褐色	浅褐色	角閃石・長石・石英	
194	I - 2350	浅鉢	A 透 - d	貝口下	織錦面 (アンギン)	研磨・ナデ	にふい褐色	灰青褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英
195	I - 0790	浅鉢	B 仰 - a	貝口上	貝沿条痕、織錦面 (網目)	貝沿条痕	にふい褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
196	-	浅鉢	B 仰 - a	複瓦	複瓦 + ナデ、織錦面 (網目)	ナデ	にふい褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
197	I - 3287	浅鉢	A 仰 - d	貝口下	織錦面 (網目)	貝沿条痕・研磨	にふい褐色	褐色	長石・石英	
198	-	浅鉢	B 仰 - b	II	織錦面 (網目)	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石・長石・石英	
199	-	浅鉢	B 仰 - a	II	織錦面 (網目)	ナデ	明褐色	にふい褐色	角閃石・長石・石英	
200	-	浅鉢	C G - a	II	織錦面 (網目)	ナデ	褐色	褐色	角閃石・長石・石英	
201	-	円盤	D G - a	II	透軸ナデ	透軸ナデ	褐色	灰色	石英	
202	-	浅鉢	C G - d	II	ナデ	ナデ	褐色	灰白色	長石	
203	-	圓錐形	C G - a	II	透軸ナデ	透軸・从魚	可融灰化	明褐色	-	
204	-	青花瓶	B G - a	II	青花・丸を三つ組合した文	青花	-	-	-	

## 石器

1～7は石核である。1・2はサヌカイト、3～7は黒曜石である。

1はおもに自然面を打面として多方向から剥片の作出を行っている。背面には自然面が大きく残る。

2は自然面がほぼなくなるまで作業を行っており、残核である。3は角礫素材から作出された一次剥片に対して、打面を転換しながらごく小さい剥片を作出する。4は3cm大の角礫を素材とし、平坦な自然面を打面として作業を行っている。5・6は全面が剥離面で覆われた残核である。7は角礫を素材としており、おもに平坦な自然面から剥片の作出を行っている。

8～17はスクリイバーである。10は無斑品質の安山岩、15は浅黄色の不純物を含む玄武岩、17は黒曜石を素材としており、残りはいわゆるサヌカイトである。

8は自然面を断面として作出された横長の剥片を素材とし、その末端部に粗い剥離を両面から入れている。あるいは縦型の石匙の未成品である可能性もある。9は自然面を打面として作出された縦長の剥片素材に対して、左側辺は腹面から、右側辺は背面からの加工が行われている。10は薄手の素材の直線的な末端部に細かい剥離が連続しており、使用による剥離である可能性もある。11は厚手の縦長の剥片を素材とし、その片方の側辺に表裏面から調整剥離を行ってやや弧状となる刃部を形成する。刃部は使用による摩耗が著しい。

12は片面に大きく自然面を残し、両面からの加工で弧状の刃部をなす。13は自然面を打面とする縦長剥片を用いており、末端近くの側縁に剥離が認められる。14も自然面を打面とする縦長剥片素材で、片方の側辺に連続的な剥離が認められる。15は浅黄色の不純物を多く含む石材で、打点付近を含む二辺を切断する。16は剥離が周縁を巡る。17は比較的大型の縦長剥片で、背面と末端部に自然面を残している。両側辺に主に腹面側からの連続的な剥離が認められ、右側辺は抉入部がみられる。

18～21は石錐である。18・19・20がサヌカイト製、21が黒曜石製である。

18は大きく自然面を残す。19は両端が錐部で、どちらも使用による摩滅が観察される。21は素材剥片の打点付近に加工を行って錐部としている。

22～24は石鎌、25・26は石鎌未成品である。24は暗灰色黒曜石製、他は漆黒色黒曜石製である。

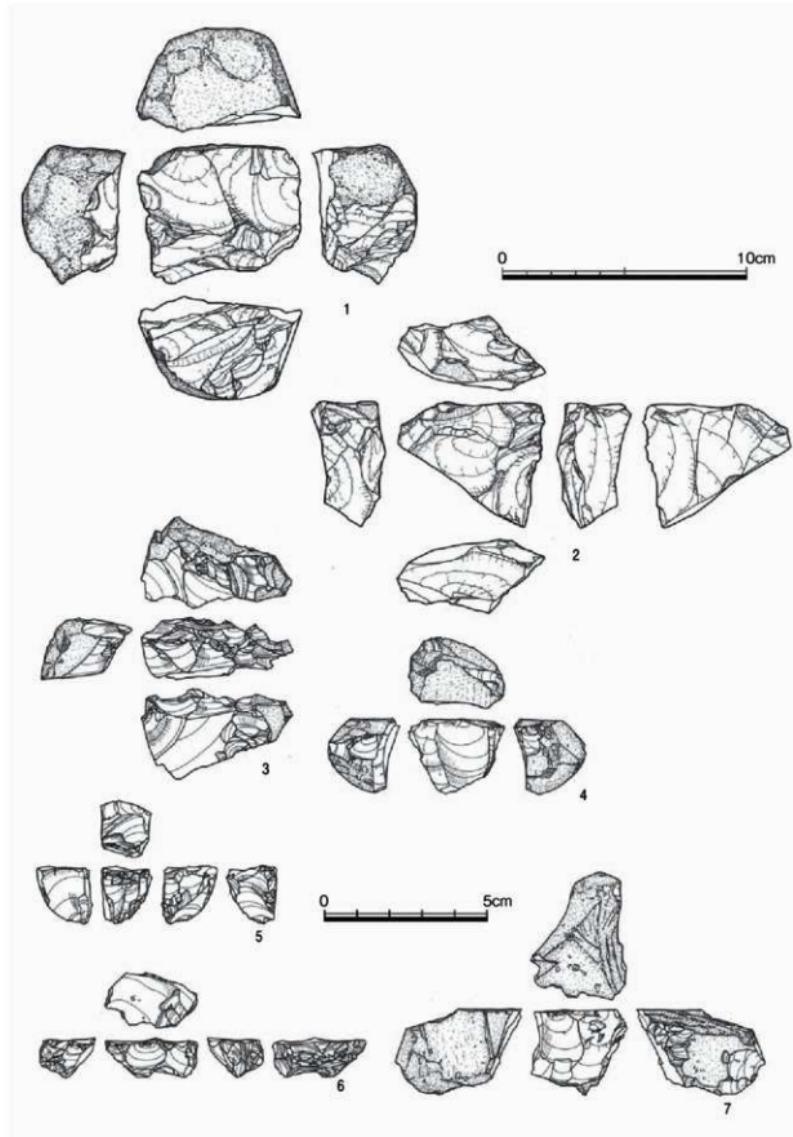
22・23は脚部付近を欠損する。24は基部を深く抉入させ、脚部は尖らせる。25は脚部・基部を作り出している。

27～59は漆黒色黒曜石を素材とする二次加工のみられる剥片。使用によると考えられる微細剥離のみられる剥片である。

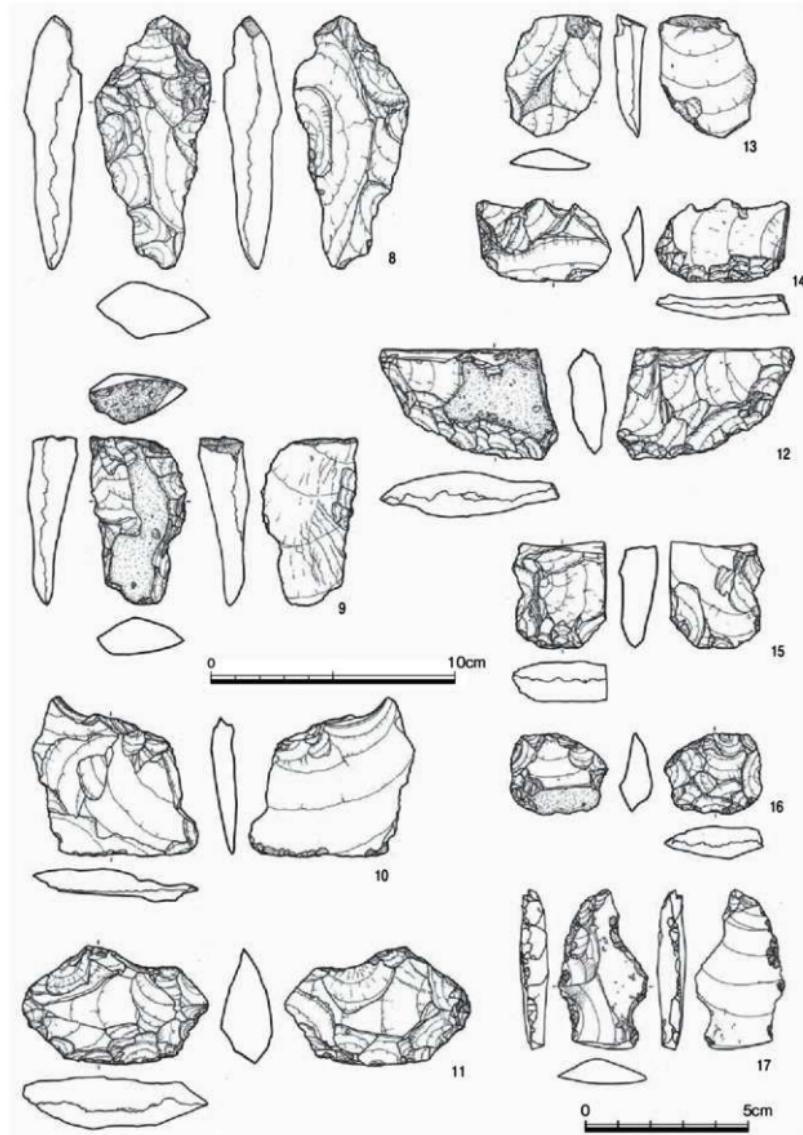
27は分厚い素材の末端部に連続的な微細剥離が認められる。28は末端付近に自然面が残り、左側辺に連続的な二次加工が認められる。

29～44は縦長剥片を素材としている。29は打面と末端部には自然面が残り、右側辺に微細な剥離が認められる。30は両側辺と末端部に自然面が残り、末端部に細かい剥離が観察される。31は左側辺の中ほどに微細な剥離が連続する。32は両側辺に微細な剥離が認められる。33は比較的大きめの剥片素材で、両側辺に刃こぼれ状の微細な剥離が認められる。34・35は両側辺に微細な剥離が連続する。36は末端部に微細な剥離が認められる。37は末端部に自然面を残し、腹面側に微細な剥離が認められる。38は左側辺下半に連続的な微細剥離が観察される。39も左側辺下半に微細な剥離の連続がみられる。

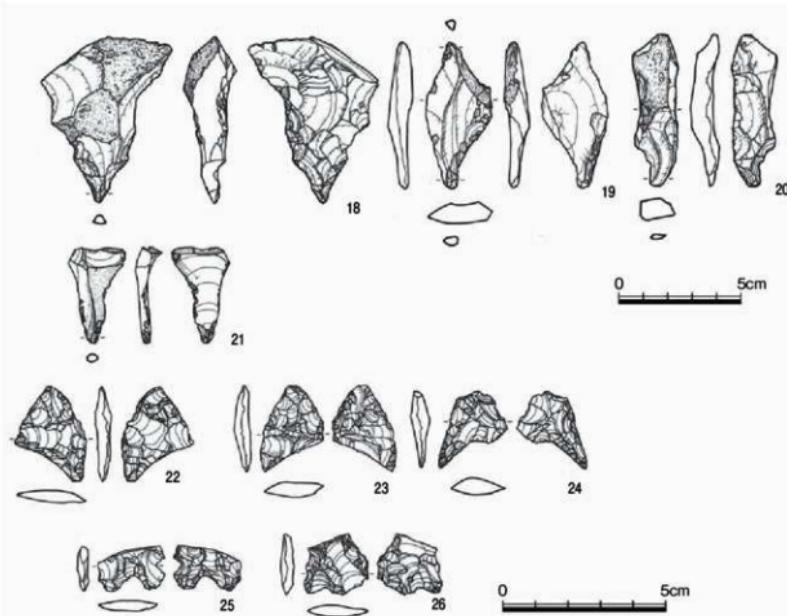
40は不純物の多い素材を用いており、右側辺に微細な剥離が認められる。41は小型の剥片で、右側辺に微細な剥離が連続する。42は右側辺に自然面をとどめており、左側辺に刃こぼれ状に微細な剥離が並ぶ。43は末端部に自然面を残す剥片で、右側辺に微細な剥離が認められる。44は小型の剥片で、末端部に微細な剥離が観察される。



第88図 I区石器実測図① (1・2 : S = 1/2, 3~7 : S = 2/3)



第89図 I区石器実測図② (8~16: S = 1/2, 17: S = 2/3)

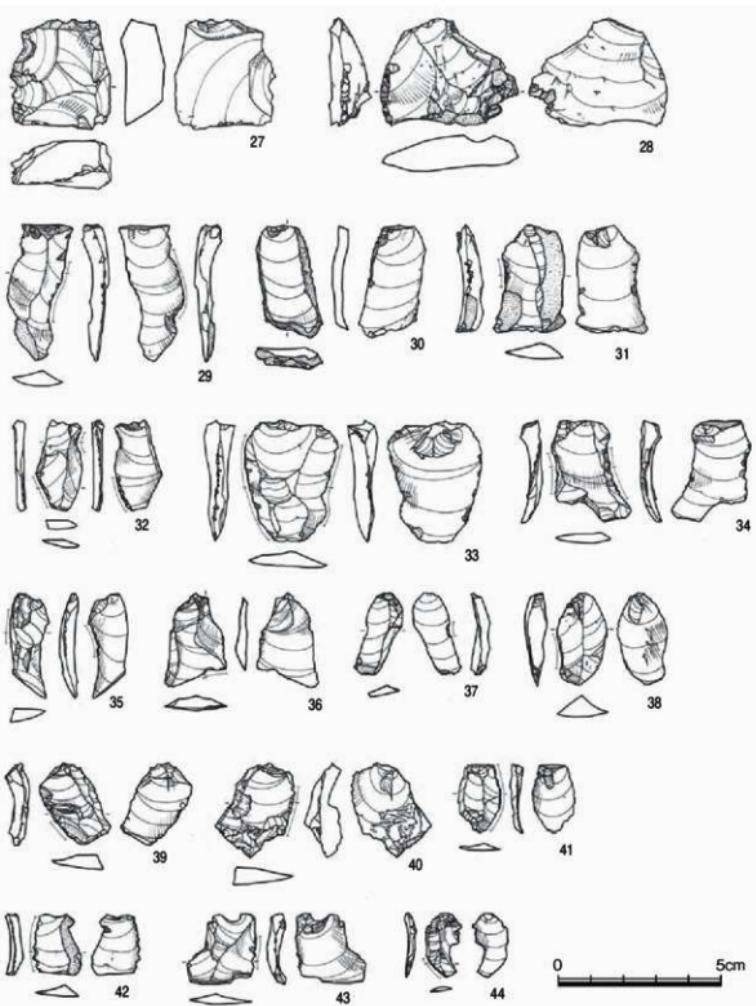


第90図 I区石器実測図③ (18~19~20: S = 1/2, 21~26: S = 2/3)

45はやや弧状をなす左側辺に連続的な微細剥離が認められる。46は自然面を打面とする剥片で、末端部にもわずかに自然面が残る。左側辺に微細な剥離がみられる。47は直線的な左側辺の背面側に微細な剥離が連続する。48は小型の剥片で、右側辺に微細剥離が認められる。49は不純物のない良質な素材を用いた幅広の剥片で、右側辺に連続的に微細な剥離が認められる。50は背面に大きく自然面を残しており、右側辺の下半に微細な剥離が背面側に入る。51は末端部に自然面を残しており、右側辺の末端部近くに微細剥離が認められる。52は左側辺に微細剥離が認められる。53は背面が自然面の一次剥片で、打点付近は切断している。右側辺に連続的な剥離が認められる。54は左側辺に二次加工とみられる剥離がみられる。55は右側辺の打点近くに微細な剥離が観察される。56は自然面を打点とする小型の剥片で、末端部は欠損する。右側辺に微細な剥離が認められる。57は打点付近を切断しており、右側辺に微細な剥離がみられる。58は右側辺に自然面がみられ、やや内済する左側辺に微細剥離が認められる。59は直線的な末端部に微細剥離が連続する。

60~62は磨製石斧である。

60は安山岩製で、基部を欠く。61は砂岩製で、基部を欠損する。62は基部の資料で、頁岩製である。研磨以前の剥離整形、敲打整形が一部観察される。



第91図 I区石器実測図④ (S = 2 / 3)

63～74は打製石斧である。64は頁岩製、67は玄武岩製で、ほかはいずれも安山岩を素材としている。

63は基部をわずかに欠損している。65は全長9.7cmと小ぶりである。66～68はわずかに基部がすりぼまる形状である。66は基部を欠損し、刃部および側刃の摩耗が顕著である。67は横長の剥片を素材として用いている。刃部の摩耗は進んでいるが、後に両側刃の加工が行われており、打製石包丁など別器種に転用した可能性もある。68は横長の剥片を素材としている。

69～71は基部を欠損している。70は表裏面に研磨が施されている。72は刃部付近を欠損する。表裏面ともに素材の自然面を残す。73は刃部を欠損するが、撥形を呈する。片面に大きく素材の自然面を残す。74は薄手の板状素材の縁辺に整形加工を行っているため、表裏面ともに大きく自然面が占める。刃部は欠損する。

75～77は打製石包丁である。いずれも安山岩を素材とする。

75は片面に大きく自然面を残しており、刃部と思われる長軸方向の両辺は短軸方向の側刃に比べて摩耗が進行している。76は薄手の剥片素材で、片面には大きく自然面を残している。77は非常に薄手の板状素材で、表裏面ともに自然面が大きく占める。右側刃に剥離調整が施されており、また残り二辺にも使用によるものと思われる剥離が認められる。

78は円盤状石器である。

78は砂岩製で周辺を剥離が巡っており、潰瘍状の部分もみられるため、あるいは敲石としての使用も考えられよう。

79は結晶片岩製で側面に摩耗がみられ、これが使用によるものか、整形なのかは定かではなく、器種としては断定ができない。

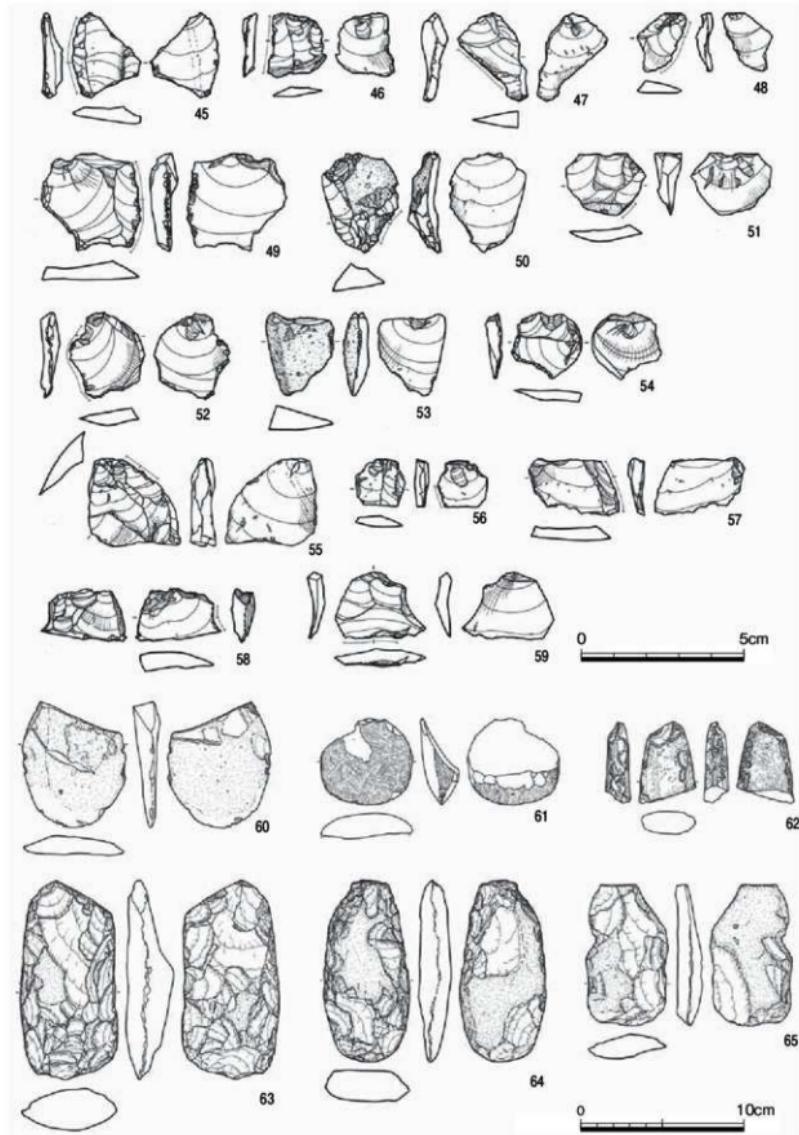
80・81は石錘である。80は安山岩製、81は砂岩製である。どちらも扁平な石材の両端に抉りを入れる。81は両側刃および表裏面に潰瘍が認められ、敲石からの転用が考えられる。

82は有孔円盤状石器である。扁平な結晶片岩の側面と中央の孔の部分に研磨が認められる。

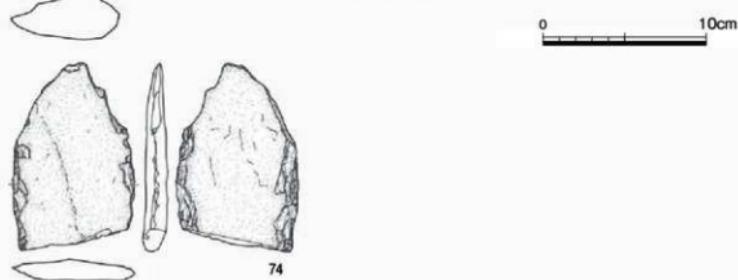
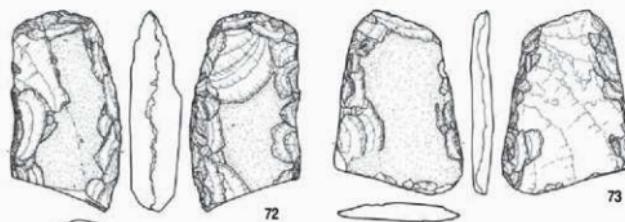
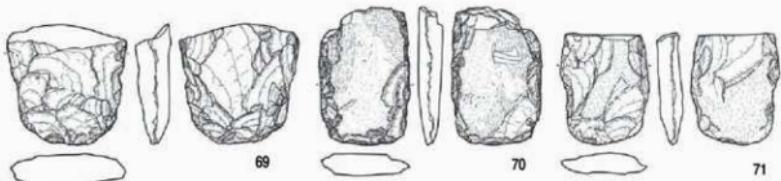
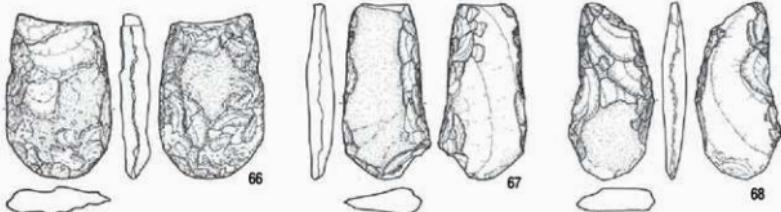
83は砂岩製の石皿である。板状の剥離によって全体像はうかがい知れないが、磨り面が観察される。

84は安山岩製の砥石である。厚さ17.4cmと非常に厚く、周縁は大きく欠損しているが、わずかに研ぎ面を残す。85は安山岩製の砥石・台石である。片面に研ぎ面と台石としての使用時の衝撃によるものと考えられる剥離がみられる。

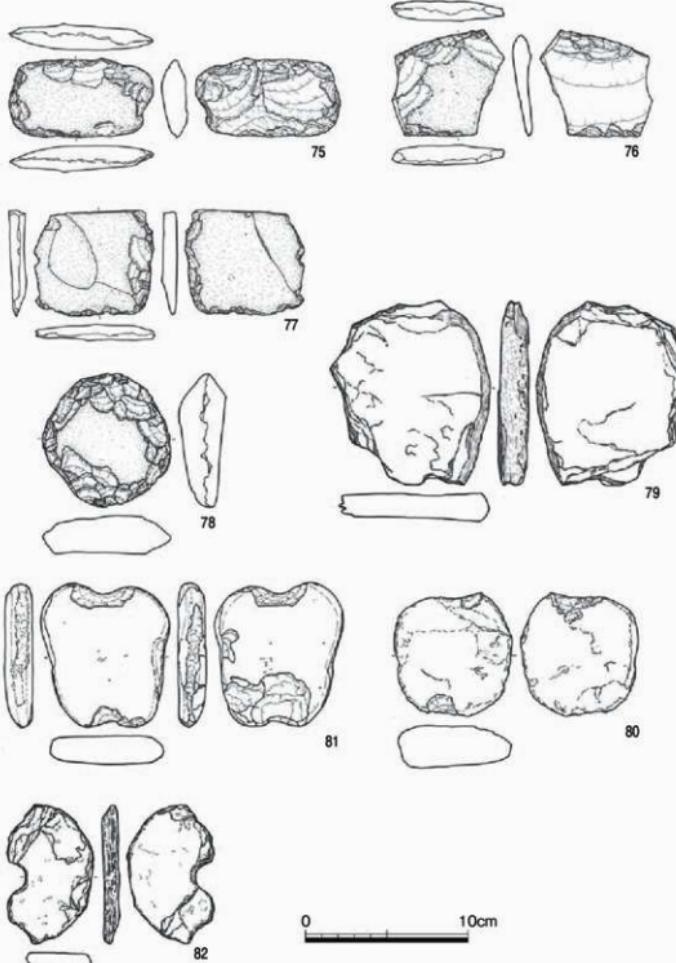
86は砂岩製の石皿で、表裏面それぞれにわずかに磨り面が残る。



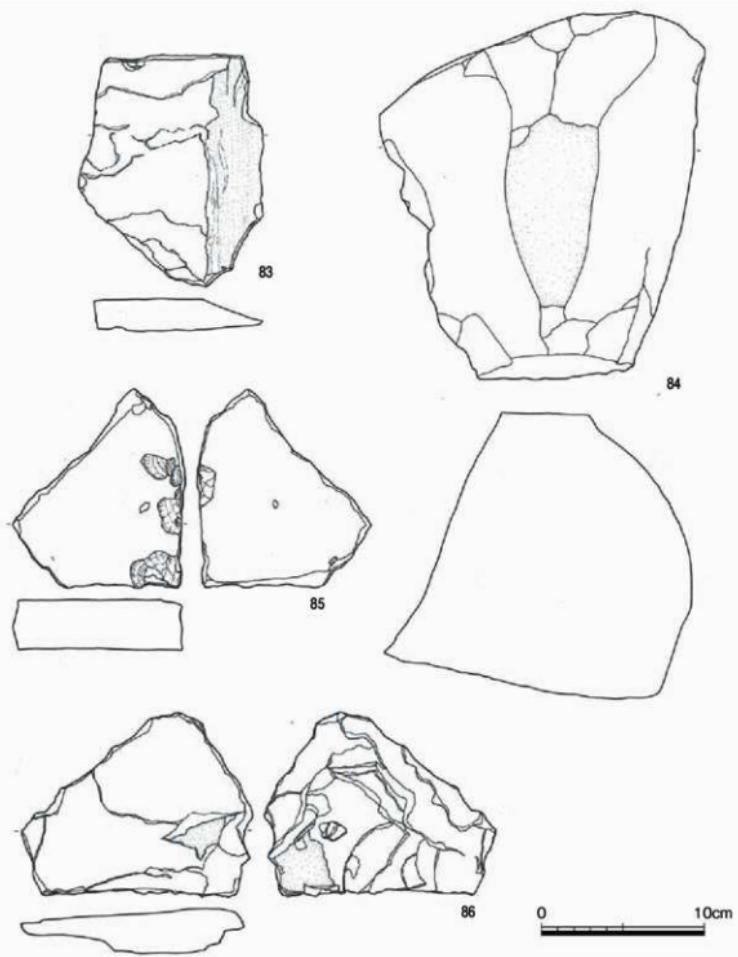
第92図 I区石器実測図⑤ (45~59 : S = 2 / 3, 60~65 : S = 1 / 3)



第93図 I区石器実測図⑥ (S = 1 / 3)



第94図 I区石器実測図⑦ (S = 1 / 3)



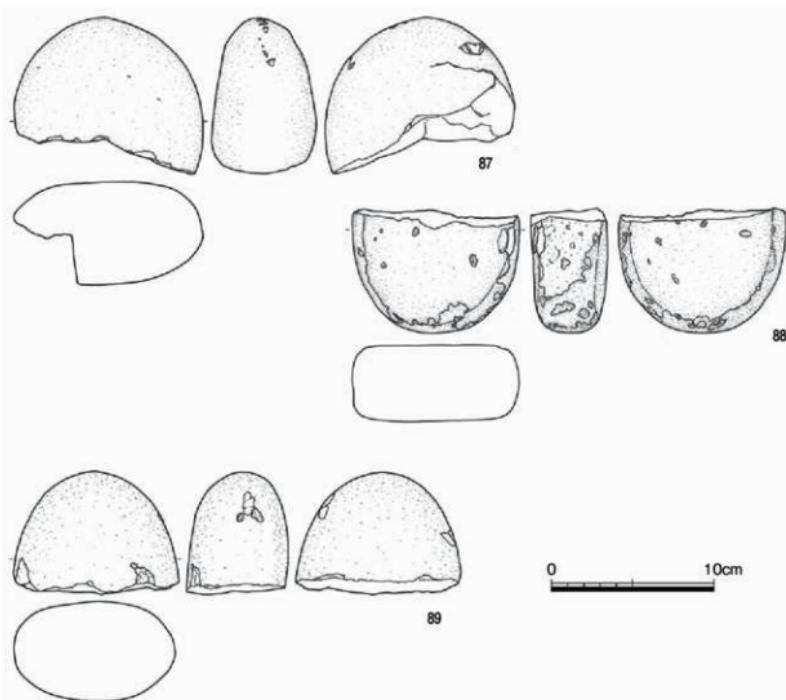
第95図 I区石器実測図⑧ (S = 1/3)

87～100は磨石・敲石の類である。

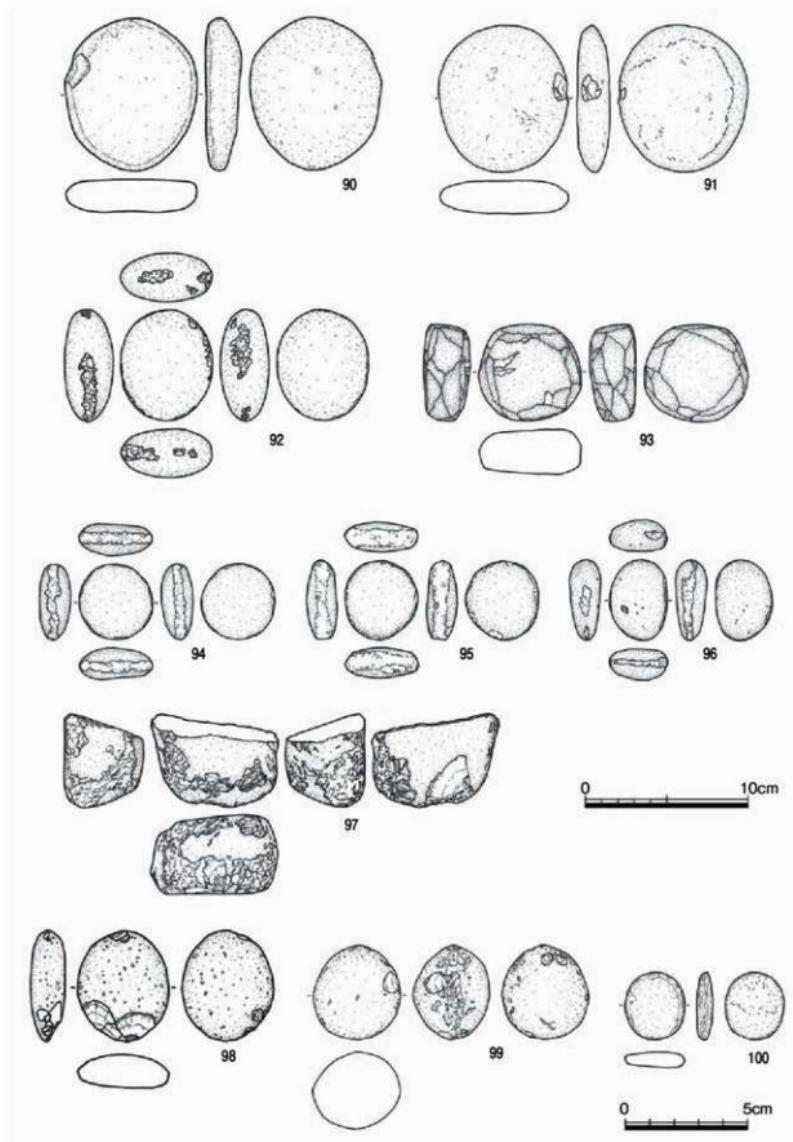
87は砂岩製の磨石である。表裏面に磨り面をもつ。88は安山岩製で、表裏面が磨り面として平坦面を形成し、側面は潰痕が観察される。89は砂岩製の磨石で、表裏面に磨り面をもつ。90・91は扁平な形状である。

90は砂岩製で、表裏面に滑面をもつ。91は安山岩製で、明瞭な滑面の形成には至っていない。92はきめの細かい砂岩製で、表裏面ともに磨り面を形成するとともに側面には潰痕が認められる。93は砂岩製で、表裏面ともに磨り面をもち、側面は砥石としての使用のためか面取したように多面体状となっている。94～96は表裏面に磨り面、側面に潰痕をもつ。94は砂岩製、95は安山岩製、96は頁岩製である。

97は頁岩亜円礫の敲石で、稜線上に潰痕が集中する。98は扁平な安山岩の敲石で、敲打による剥離が認められる。99は球状の頁岩を用いた敲石で、潰痕が一周する。100は緑色片岩の磨石で、側面に磨り面が巡る。



第96図 I区石器実測図⑨ (S = 1 / 3)



第97図 I区石器実測図⑩ (90~97: S = 1/3, 98・99・100: S = 1/2)

第28表 I 区石器観察表①

回	番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
88	1	I-1173	石核	サヌカイト	C50-a	Ⅲ b 上	5.7	6.7	4.2	171.6
	2	I-2391	石核	サヌカイト	A48-d	Ⅲ b 下	5.1	6.0	3.1	70.2
	3	I-3024	石核	黒曜石(漆黒色)	A49-c	Ⅲ b 下	1.9	4.6	2.8	17.0
	4	I-0391	石核	黒曜石(漆黒色)	B47-b	Ⅲ b 上	2.3	3.0	2.2	12.9
	5	I-3072	石核	黒曜石(漆黒色)	B49-a	Ⅲ b 下	1.8	1.6	1.7	4.2
	6	I-0660	石核	黒曜石(漆黒色)	A48-d	Ⅲ b 上	1.2	2.9	1.7	5.0
	7	I-2969	石核	黒曜石(漆黒色)	A48-d	Ⅲ b 下	2.6	2.9	3.9	21.6
89	8	I-2589	スクレイパー	サヌカイト	A49-c	Ⅲ b 下	10.3	4.7	2.4	75.3
	9	I-2451	スクレイパー	サヌカイト	B48-d	Ⅲ b 下	6.9	4.0	2.1	47.4
	10	I-1672	スクレイパー	安山岩	B47-d	Ⅲ b 下	6.5	6.7	1.4	35.9
	11	I-1429	スクレイパー	サヌカイト	A48-d	Ⅲ b 上	4.9	7.6	2.2	69.9
	12	-	スクレイパー	サヌカイト	B48-a	搅乱	4.5	7.3	1.9	59.9
	13	I-2570	スクレイパー	サヌカイト	A48-a	Ⅲ b 下	5.0	4.0	1.3	19.0
	14	-	スクレイパー	サヌカイト	D49-a	搅乱	3.4	5.5	1.0	16.2
90	15	I-2518	スクレイパー	玄武岩	D47-c	Ⅲ b 上	1.4	3.9	1.7	34.1
	16	I-1302	スクレイパー	サヌカイト	D49-c	Ⅲ b 上	3.3	4.0	1.3	17.2
	17	I-2615	スクレイパー	黒曜石	B49-a	Ⅲ b 下	4.9	2.8	0.9	9.4
	18	-	石鏃	サヌカイト	C47-d	Ⅱ	6.8	5.3	2.2	42.6
	19	I-0653	石鏃	サヌカイト	A48-d	Ⅲ b 上	6.0	2.7	1.0	10.7
	20	I-3105	石鏃	サヌカイト	E49-c	Ⅲ b 下	6.2	1.9	1.2	11.7
	21	-	石鏃	黒曜石(漆黒色)	-	廻土	3.0	1.8	0.8	1.6
91	22	I-3261	石鏃	黒曜石(漆黒色)	B49-b	Ⅲ b 下	2.9	2.2	0.4	1.9
	23	I-1201	石鏃	黒曜石(漆黒色)	B49-d	Ⅲ b 上	2.7	2.0	0.5	1.7
	24	-	石鏃	黒曜石(暗灰色)	B47-a	Ⅱ	1.4	2.1	0.5	1.6
	25	-	石鏃未成品	黒曜石(漆黒色)	B47-d	Ⅱ	1.4	2.1	0.3	0.9
	26	-	石鏃未成品	黒曜石(漆黒色)	B47-b	Ⅱ	1.9	2.0	0.4	1.4
	27	I-0320	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A47-d	Ⅲ b 上	3.4	3.1	1.4	15.8
	28	-	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	C49-d	Ⅲ a	3.5	4.3	1.5	12.3
92	29	I-1999	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D47-b	Ⅲ b 下	4.2	2.0	0.8	3.0
	30	I-0727	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	B49-a	Ⅲ b 上	3.4	2.0	0.7	3.9
	31	I-0781	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	B49-a	Ⅲ b 上	3.3	2.2	0.8	4.2
	32	I-1247	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D49-b	Ⅲ b 上	2.8	1.5	0.4	1.3
	33	I-3430	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	B48-b	Ⅲ b 下	3.6	2.9	0.9	7.0
	34	I-2388	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A48-d	Ⅲ b 下	3.1	2.4	0.7	2.5
	35	I-0167	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D47-b	Ⅲ b 上	3.2	1.2	0.6	1.4
93	36	I-1832	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A47-d	Ⅲ b 下	2.9	1.9	0.4	1.6
	37	I-3326	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	E49-d	Ⅲ b 下	2.5	1.5	0.7	0.9
	38	I-0023	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	C47-b	Ⅲ b 上	2.8	1.6	0.7	2.1
	39	I-1664	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	B47-d	Ⅲ b 下	2.5	2.2	0.8	2.4
	40	I-2168	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D47-a	Ⅲ b 下	2.8	2.5	1.2	4.0
	41	I-3351	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A48-c	Ⅲ b 下	2.1	1.3	0.4	0.7
	42	I-0101	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	C47-d	Ⅲ b 上	1.9	1.5	0.5	1.0
94	43	I-2205	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	C47-d	Ⅲ b 下	2.1	2.2	0.6	1.7
	44	I-0485	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	B47-c	Ⅲ b 上	2.0	1.1	0.4	0.5
	45	I-2063	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	C47-d	Ⅲ b 下	2.6	2.1	0.7	2.0
	46	I-2349	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A48-d	Ⅲ b 下	2.0	1.8	0.5	1.2
	47	I-1123	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	C49-a	Ⅲ b 上	2.7	2.1	0.8	2.5
	48	I-1424	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A48-b	Ⅲ b 上	1.8	1.6	0.5	0.8
	49	I-1228	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D50-a	Ⅲ b 上	3.0	3.1	0.8	6.5
95	50	I-0883	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	E49-a	Ⅲ b 上	3.1	2.3	1.0	4.3

第29表 I 区石器観察表(2)

回	番号	取上番号	器種	石材	グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
92	51	I-3394	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A49-c	Ⅲ b 下	1.9	2.5	0.8	2.8
	52	I-0154	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D47-b	Ⅲ b 上	2.6	2.3	0.6	2.6
	53	I-2634	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	B49-a	Ⅲ b 下	2.5	2.0	0.8	3.5
	54	I-2659	二次加工剥片	黒曜石(漆黒色)	B49-a	Ⅲ b 下	2.0	2.2	0.8	1.8
	55	I-3037	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A49-c	Ⅲ b 下	2.7	2.8	0.8	4.9
	56	I-0801	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	B49-c	Ⅲ b 上	1.5	1.5	0.5	0.9
	57	I-0990	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D49-b	Ⅲ b 上	1.8	2.8	0.5	2.1
	58	I-0935	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	D49-c	Ⅲ b 上	1.6	2.6	0.7	2.2
	59	I-3051	微細剥離剥片	黒曜石(漆黒色)	A49-c	Ⅲ b 下	2.0	2.8	0.5	1.8
	60	-	磨製石斧	安山岩	D47-b	Ⅱ	7.7	6.3	1.6	67.0
93	61	-	磨製石斧	砂岩	E50-a	複乱	5.3	5.6	2.4	56.7
	62	I-0017	磨製石斧	頁岩	C47-b	Ⅲ b 上	5.0	3.5	1.5	34.4
	63	I-0773	打製石斧	安山岩	B49-a	Ⅲ b 上	12.2	6.0	3.0	231.3
	64	I-0785	打製石斧	頁岩	B49-a	Ⅲ b 上	11.1	5.3	2.1	159.1
	65	-	打製石斧	安山岩	D48-c	複乱	8.7	5.0	1.6	79.1
	66	I-2733	打製石斧	安山岩	B49-d	Ⅲ b 下	10.1	6.5	1.9	165.5
	67	-	打製石斧	玄武岩	東北向石版	複乱	10.8	5.4	1.7	111.0
	68	I-2460	打製石斧	安山岩	B48-d	Ⅲ b 下	10.9	5.3	1.5	98.0
	69	I-1083	打製石斧	安山岩	E49-d	Ⅲ b 上	7.4	7.4	2.3	134.6
	70	-	打製石斧	安山岩	E50-a	複乱	8.5	5.6	1.6	104.0
94	71	-	打製石斧	安山岩	D50-d	複乱	6.9	5.5	1.6	74.7
	72	I-2495	打製石斧	安山岩	A48-c	Ⅲ b 下	12.3	6.8	3.2	319.0
	73	-	打製石斧	安山岩	D50-c	Ⅱ	11.3	7.9	1.4	157.1
	74	-	打製石斧	安山岩	D50-b	複乱	11.6	7.5	1.5	152.1
	75	I-1795	打製石包丁	安山岩	B47-b	Ⅲ b 下	4.9	8.9	1.6	83.4
	76	I-0848	打製石包丁	安山岩	E49-c	Ⅲ b 上	6.6	6.9	1.2	58.7
	77	-	打製石包丁	安山岩	C50-c	Ⅱ	6.5	7.3	1.1	60.4
	78	I-2360	円盤状石器	砂岩	A48-d	Ⅲ b 下	8.2	7.8	2.9	181.5
	79	-	不明	結晶片岩	D49-b	Ⅲ a	11.3	9.6	1.8	295.9
95	80	I-1529	石鍤	安山岩	C47-a	Ⅲ b 下	7.6	7.2	2.6	160.6
	81	-	石鍤	砂岩	D48-c	複乱	8.8	7.9	2.3	193.6
	82	I-1130	舟形円盤状石器	結晶片岩	C49-a	Ⅲ b 上	8.5	5.3	1.1	54.4
	83	-	石皿	砂岩	D49-c	複乱	14.2	11.3	2.0	412.2
	84	I-1135	砥石	安山岩	C49-a	Ⅲ b 上	19.7	22.6	17.4	9713.3
	85	-	砥石・台石	安山岩	B48-b	Ⅱ	12.1	10.6	3.0	596.2
	86	I-1137	石皿	砂岩	C49-b	Ⅲ b 上	11.3	14.1	2.7	384.0
	87	I-1152	磨石	砂岩	C49-b	Ⅲ b 上	9.6	11.6	6.4	753.1
96	88	-	磨石・敲石	安山岩	B48-a	複乱	7.6	10.2	4.7	627.0
	89	I-1344	磨石	砂岩	D47-d	Ⅲ b 上	7.5	10.0	6.0	614.6
	90	I-0938	磨石	砂岩	D49-c	Ⅲ b 上	9.3	8.0	2.2	233.1
	91	I-3245	磨石	安山岩	C50-c	Ⅲ b 下	9.0	7.9	2.0	207.3
	92	-	磨石・敲石	砂岩	C50-c	Ⅲ a	6.8	5.6	3.0	154.0
	93	-	磨石・砥石	砂岩	D50-b	複乱	6.0	6.3	3.3	146.3
	94	-	磨石・敲石	砂岩	B49-b	Ⅱ	4.6	4.5	1.9	57.7
97	95	I-2620	磨石・敲石	安山岩	B49-a	Ⅲ b 下	4.8	5.0	1.9	59.3
	96	-	磨石・敲石	頁岩	C49-b	Ⅲ a	4.9	3.5	1.9	47.1
	97	I-2443	敲石	頁岩	B48-b	Ⅲ b 下	5.7	7.8	4.8	308.9
	98	-	敲石	安山岩	C48-a	Ⅱ	4.5	3.7	1.4	25.7
	99	I-0682	敲石	頁岩	B48-b	Ⅲ b 上	3.9	3.6	3.2	52.6
	100	I-2666	磨石	綠色片岩	B49-a	Ⅲ b 下	2.8	2.4	0.6	6.8

# 第V章 自然科学分析（放射性炭素年代測定）

株式会社古環境研究所

## 1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤さらには土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村、2003）。

今回の分析調査では、権現脇遺跡の発掘調査で出土した土器の年代に関する情報を得る目的で、放射性炭素年代測定を実施した。

## 2 試料

試料は、土器付着炭化物7点である。試料の詳細を表1に示す。

第30表 測定試料及び処理

試料番号	試料の詳細 出土グリッド	試料の種類 出土層位	前処理・調整	測定法	
1	H37-c	Ⅲ b 上層	土器付着炭化物（外側）	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
2	H40-a	Ⅲ b 上層	土器付着炭化物（内側）	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
3	F43-d	Ⅲ b 上層	土器付着炭化物（外側）	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
4	H37-d	Ⅲ b 上層	土器付着炭化物（外側）	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
5	H37-a	Ⅲ b 下層	土器付着炭化物（外側）	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
6	H37-c	Ⅲ b 上層	土器付着炭化物（外側）	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
7	H36-d	Ⅲ b 下層	土器付着炭化物（外側）	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS

\*AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

## 3 方法

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。グラファイトを内径1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法は、加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。 $\delta^{14}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である。

<sup>14</sup>C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中<sup>14</sup>C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0 yrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。<sup>14</sup>C 年代は  $\delta^{14}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。<sup>14</sup>C 年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の<sup>14</sup>C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

曆年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。曆年較正年代は、<sup>14</sup>C 年代に対応する較正曲線上の曆年年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C 年代、横軸が曆年較正年代を表す。曆年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$  補正を行い、下 1 術を丸めない<sup>14</sup>C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al., 2013) を用い、OxCalv4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey, 2009) を使用する。曆年較正年代は、<sup>14</sup>C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

#### 4 結果

年代測定および曆年較正結果の一覧を表 2、各試料の曆年較正結果を図 1 に示す。

今回年代測定を実施した土器付着炭化物の年代値（補正年代）は、 $3,070 \pm 30$  yrBP (試料番号 3) ~  $2,580 \pm 20$  yrBP (試料番号 1) の年代範囲であり、490 年の年代幅がある。

第31表 測定結果

試料 番号	測定No (IAAA-)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代 (年 BP)	<sup>14</sup> C 年代 (年 BP)	曆年代 (西暦)	
					$1\sigma$ (68.2%確率)	$2\sigma$ (95.4%確率)
1	191707	$-24.81 \pm 0.23$	$2582 \pm 24$	$2580 \pm 20$	801 cal BC ~ 778 cal BC (68.2%)	810 cal BC ~ 762 cal BC (95.4%)
2	191708	$-23.44 \pm 0.25$	$2838 \pm 25$	$2840 \pm 30$	1024 cal BC ~ 971 cal BC (48.9%) 961 cal BC ~ 936 cal BC (19.3%)	1082 cal BC ~ 1080 cal BC (0.3%) 1074 cal BC ~ 1065 cal BC (1.0%) 1057 cal BC ~ 916 cal BC (94.1%)
3	191709	$-26.02 \pm 0.28$	$3069 \pm 25$	$3070 \pm 30$	1391 cal BC ~ 1336 cal BC (41.5%) 1323 cal BC ~ 1289 cal BC (26.7%)	1409 cal BC ~ 1264 cal BC (95.4%)
4	191710	$-27.50 \pm 0.26$	$2589 \pm 25$	$2590 \pm 30$	803 cal BC ~ 783 cal BC (68.2%)	811 cal BC ~ 766 cal BC (95.4%)
5	191711	$-25.78 \pm 0.26$	$2595 \pm 24$	$2600 \pm 20$	805 cal BC ~ 786 cal BC (68.2%)	810 cal BC ~ 771 cal BC (95.4%)
6	191712	$-27.88 \pm 0.28$	$3660 \pm 24$	$2660 \pm 20$	828 cal BC ~ 803 cal BC (68.2%)	894 cal BC ~ 874 cal BC (4.4%) 846 cal BC ~ 796 cal BC (91.0%)
7	191713	$-25.25 \pm 0.25$	$2615 \pm 25$	$2620 \pm 30$	809 cal BC ~ 792 cal BC (68.2%)	822 cal BC ~ 778 cal BC (95.4%)

BP : Before Physics (Present), BC : 紀元前

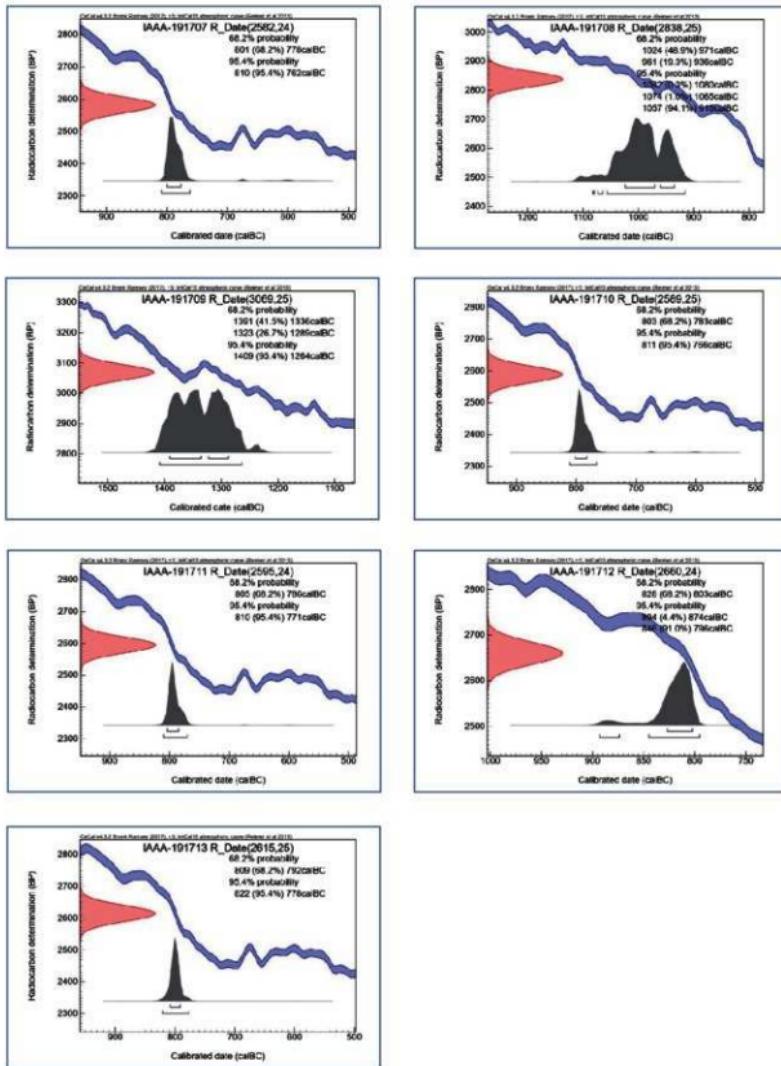
#### 5 考察

試料番号 1 の年代値は、 $2,580 \pm 20$  yrBP (2 $\sigma$  曆年較正年代で 810 cal BC ~ 762 cal BC) で、今回測定した試料の中で最も新しい年代を示した。試料番号 2 の年代値は、 $2,840 \pm 30$  yrBP (2 $\sigma$  曆年較正年代で 1,082 cal BC ~ 1,080 cal BC, 1,074 cal BC ~ 1,065 cal BC, 1,057 cal BC ~ 916 cal BC) を示した。試料番号 3 の年代値は、 $3,070 \pm 30$  yrBP (2 $\sigma$  曆年較正年代で 1,409 cal BC ~ 1,264 cal BC) で、今回

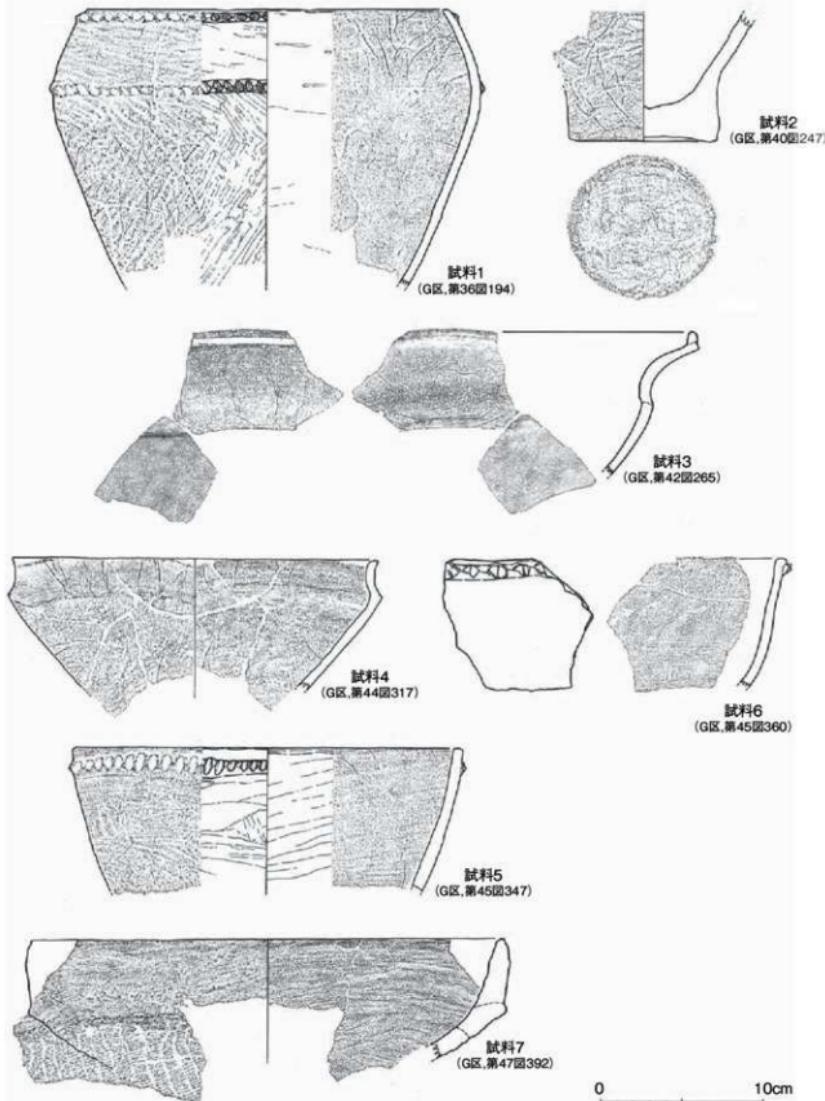
測定した試料の中で最も古い年代を示した。試料番号4は、 $2,590 \pm 30$ yrBP（ $2\sigma$ 暦年較正年代で811cal BC – 766cal BC）。試料番号5は、 $2,600 \pm 20$ yrBP（ $2\sigma$ 暦年較正年代で810cal BC – 771cal BC）。試料番号6は、 $2,660 \pm 20$ yrBP（ $2\sigma$ 暦年較正年代で894cal BC – 874cal BC、846cal BC – 796cal BC）。試料番号7は、 $2,620 \pm 30$ yrBP（ $2\sigma$ 暦年較正年代で822cal BC – 778cal BC）を示した。

#### 【参考文献】

- Bronk Ramsey, C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), p.337-360.
- 中村俊夫, 2003, 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル, 同成社, p. 301-322.
- Reimer, P.J. et al., 2013, IntCal 13 and Marine 13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), p.1869-1887.
- Sakamoto, M., Immura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T., Sahara, M.: Radiocarbon calibration for Japanese wood samples. Radiocarbon, 45(1), 81-89, 200 p.
- Stuiver, M. and Polach, H.A., 1977, Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363.



第98図 曆年較正年代グラフ



第99図 試料採取土器実測図 (S = 1 / 3)

## 第VI章 まとめ

雲仙普賢岳東麓に位置する権現脇遺跡では、これまで普賢岳平成噴火以降に赤松谷川・水無川流域一帯で実施されてきた大規模な砂防工事に伴って発掘調査が継続的に行われてきた。いまだ普賢岳の山頂には溶岩ドームが残り大地震などがあれば崩落の可能性もあって、ふもとの集落は岩屑だれの危険にさらされている。権現脇遺跡の一部も今もって警戒区域（無人区域）の指定範囲内に含まれ、人の入城は禁止されている状況にある。

そうしたなか、今回第4次となる権現脇遺跡における発掘調査では、赤松谷川・水無川右岸部において長距離の道路建設が計画されたことで、赤松谷川1・2号導流堤建設時の範囲確認調査では成果に恵まれず本調査実施に至らなかった赤松谷川2号導流堤下流側部分の隣接地（G区・I区）や赤松谷川1号導流堤の隣接地（H区）の状況についても把握することができた。また、東西1.2kmと非常に広範囲に展開する遺跡の、高標高域（F区）から低標高域（H区）にわたって成果を得ることができた点でも意義が大きい。

まず、F区については標高250mを超える地点であり、赤松谷川3号導流堤の内部が警戒区域内であるということを考えれば、現段階で発掘調査によって得られる権現脇遺跡の最も標高の高い部分での情報となろう。出土遺物を見てみると、肥後地方でいうところの古閑式に属するタガ状の口縁部文様帶に平行する沈線を引く深鉢（第14図5～10）、口縁部内面に段をもつ浅鉢（第14図31）、黒川式に属する外開きの口縁部に弧状の沈線や間隔の広い沈線を引く深鉢（第14図16～18）、短い頭部に丸縁の口縁部で胴部は扁球状をなすと思われる浅鉢（第14図32・33）があり、大きく2時期に分かれるとみてよかろう。第14図19は内外面に擦過調整を残しながらも突帯は口唇部に接して張り付けられ、刻目も方向を互い違いに施しており、こうした類例を権現脇遺跡の出土遺物のなかに見出すことはできないが、突帯文期よりは古い時期の資料と考えておきたい。

G区については、縄文時代早期、縄文時代後・晚期、突帯文期の充実した遺物の検出をみた。

縄文時代早期の土器には、山形文と捺円文からなる押型文土器の一群（第26図1～13）、捺糸文と沈線文からなる塞ノ神式土器の一群（第26図14～29）、刻目突帯と沈線文、口唇部に刻目を施す妙見・天道ヶ尾式土器の一群（第26図30～35）がみられる。そのほとんどがV a層・V b層からの出土に限られており、雲仙眉山の火山噴出物であるIV層にバックされている状況であった。

縄文時代後・晚期及び突帯文期の主体的に出土したⅢ b上層・Ⅲ b下層については、遺物1点ごとに出土地点の座標観測による記録を行った。内訳について若干整理をしておきたい。

G区Ⅲ b上層・Ⅲ b下層における出土位置記録分の点数は、自然疊や土塊、植物片などの誤認取り上げによるものを除くと全部で6,481点となり。Ⅲ b上層出土のものが2,348点（36.2%）、Ⅲ b下層出土のものが4,133点（63.8%）である。ただし、第100図を見てわかるとおりⅢ b上層は40列以東において、Ⅲ b下層は43・44列付近において後世の削平を受けており、Ⅲ b上層・Ⅲ b下層間の比率は本来の遺物の組成を正確には反映していないので注意が必要である。土器について時期別にみてみると、縄文時代後期から突帯文期にかけてのものが5,064点（99.3%）とそのほとんどを占めている。Ⅲ b上層・Ⅲ b下層から出土した石器についてもほぼこの時期のものとみてよかろう。

つぎに縄文時代後期から突帯文期の土器の出土点数と層位的な組成について、主要器種を取り上げ

てみておきたい。器種分類は『椎現脇遺跡』

(2006) に従って設定し、平面分布と合わせて第101図・第102図に示したので、参照されたい。

深鉢C類・浅鉢C類は、肥後地方でいうところの天城式・古闕式にあたるもので、縄文時代後期末から縄文時代晚期初頭に位置づけられるものである。椎現脇遺跡G区の出土遺物をみてみると、深鉢C類の口縁部資料のうち、そのほとんどが外傾・長大化して沈線の多条化も進んでいることから、古闕式に相当するものが大半であると考える。Ⅲ b 上層における出土比率は、深鉢C類が86.3%、浅鉢C類が90.9%である。深鉢D類は黒川式、島原半島でいうところの礫石原式に相当するもので、縄文時代晚期に位置づけられるものである。出土

比率はⅢ b 上層が29.8%、Ⅲ b 下層が70.2%となっている。以上、縄文時代後・晚期の土器資料については、Ⅲ b 下層のほうからの出土が多い。

深鉢E類（刻目突帯文土器壺）と浅鉢J類は突帯文期に位置づけられる。深鉢E類が65.0%、浅鉢J類が60.0%と出土の比重はⅢ b 上層に移る。浅鉢M類は一般的に黒川式に伴うとされるが、島原半島においては突帯文期まで残存することが從来指摘されてきている。Ⅲ b 上層での出土比率が59.2%と突帯文期の資料と近い値を示していることは、このことを裏付ける出土状況ととらえてよからう。

H区については、遺物量は少ないものの縄文時代後・晚期、突帯文期、古墳時代、中世と断続的に利用されてきたことがうかがわれる。突帯文期の資料のなかに第72図14～16のような口縁部突帯を口唇部に接して貼り付ける資料があることは、縄文時代早期にいたん途絶え、縄文時代後期から再開される椎現脇遺跡の土地利用が、突帯文期の比較的新しい段階まで継続することを示している。

I区はG区と隣接する調査区であるが、G区での突帯文期の資料の出土が調査区の山手、西側部分に限られ、海手へは広がらなかったのと同様に、I区においても突帯文期の資料の出土はほとんどみられなかった。過去の調査においても、縄文時代後・晚期の資料が比較的広範囲で出土するのに対して、突帯文期の資料は限定的な範囲での出土にとどまっていた。このことは、縄文時代末期から弥生時代初頭にかけての椎現脇遺跡における集落規模や生活形態の変遷を反映している可能性がある。

また、各調査区において縄文時代後・晚期及び突帯文期の遺物包含層であるⅢ b 上・下層の下位で、雲仙眉山の噴火活動による火山噴出物であるIV層（椎現脇火碎サージ）を確認した。この堆積層には倒木痕が伴うことが過去の調査で判明しているが、今回もG区において2基の倒木痕を検出した。倒木痕は北から南へと倒れており、遺跡の北にそびえる眉山から噴火の爆風が遺跡方面に及んだことを示しており、その風圧の大きさを表すものである。

#### 【参考文献】

本多 和典編 2006 『椎現脇遺跡』深江町文化財報告書第2集 深江町教育委員会

第32表 G区出土遺物内訳（出土位置記録分）

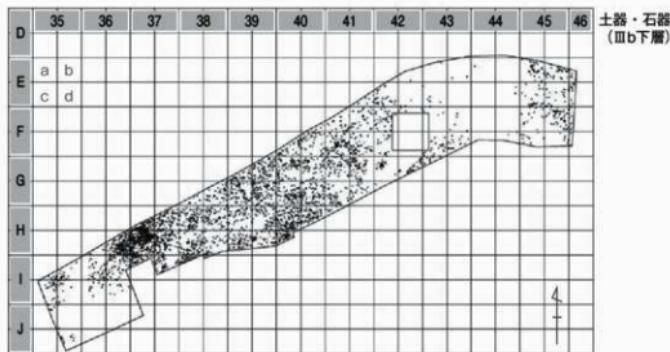
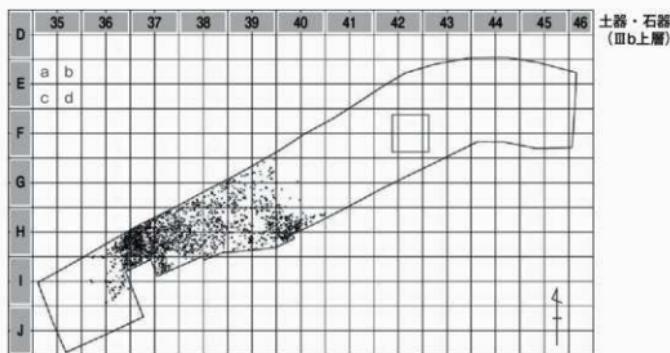
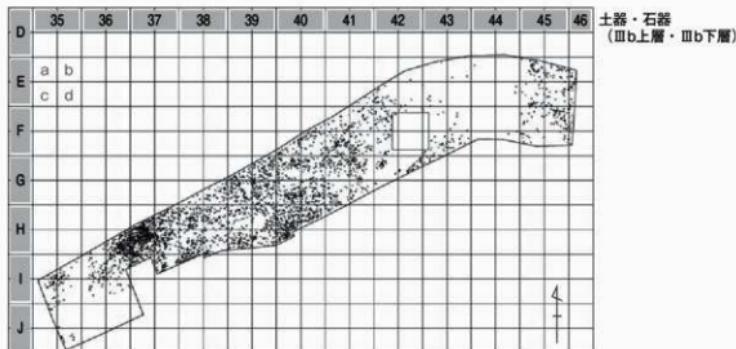
種別	Ⅲ b 上層	Ⅲ b 下層	計
土器	1,845(36.1%)	3,261(63.9%)	5,106
石器	499(36.5%)	869(63.5%)	1,368
陶磁器	2,66(7.7%)	1,33(3.3%)	3
鉄滓	2(50.0%)	2(50.0%)	4
計	2,348(36.2%)	4,133(63.8%)	6,481

第33表 G区出土土器時期別内訳（出土位置記録分）

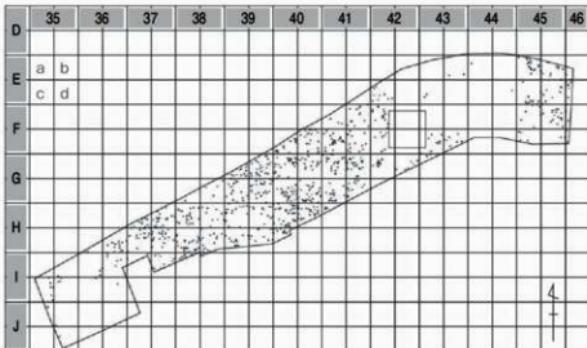
時期	Ⅲ b 上層	Ⅲ b 下層	計
縄文時代早期	1( 5.9%)	16(94.1%)	17
縄文時代中期～突帯文期	1,801(36.1%)	3,234(63.9%)	5,064
弥生後半期～古墳時代	2(40.0%)	3(60.0%)	5
中・近世	9(69.2%)	4(30.8%)	13
不明	7(100.0%)	0(0.0%)	7
計	1,849(36.2%)	3,257(63.8%)	5,106

第34表 G区縄文時代後期～突帯文期出土土器器種別内訳  
(出土位置記録分・抜粋)

種別	Ⅲ b 上層	Ⅲ b 下層	計
深鉢C類	138(13.7%)	871(86.3%)	1,009
深鉢D類	14(29.8%)	33(70.2%)	47
深鉢E類	132(65.0%)	71(35.0%)	203
浅鉢C類	2(9.1%)	20(90.9%)	22
浅鉢D類	36(60.0%)	24(40.0%)	60
浅鉢E類	29(59.2%)	20(40.8%)	49



第100図 G区遺物分布図① (S = 1/800)

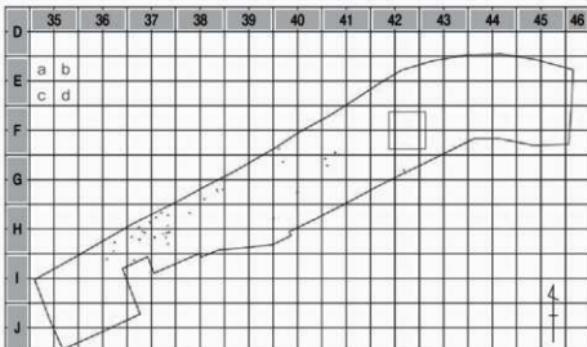


深鉢C類  
(IIIb上層・IIIb下層)



制部で屈曲し、頭部からタガ状口縁といわれる口縁部文様帯に至るもの。口縁部文様帯には数種の幾何文を引き場合が多い。外面は貝殻表面調整のうち丁寧なナデ調整が細かい研磨調整を行っており、赤褐色系の特徴的な器面色調であるため、副部片であっても他の深鉢類と判別がつきやすい。

【分布】  
調査区全体から出土がみられる。

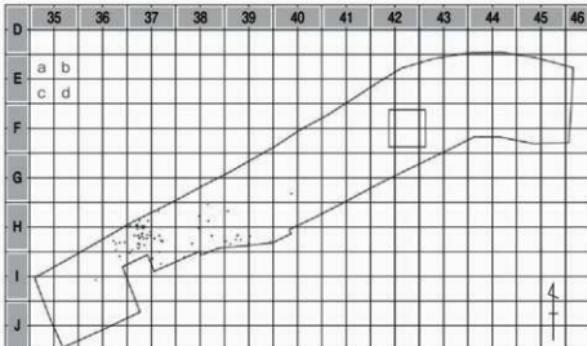


深鉢D類  
(IIIb上層・IIIb下層)

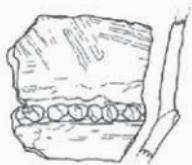


大きく開く口縁部で、外面には間隔の広い平行水波線が弧状の沈窓を引き場合がある。副部は、明確に屈曲して肩部を作るもないといたん極くすばまのみのものがあり、しばしば難トクサ状突起などの粘土塊の貼付文をもつ。

【分布】  
37m付近に若干の集中的な出土がみられる。調査区東部からの出土はみられない。



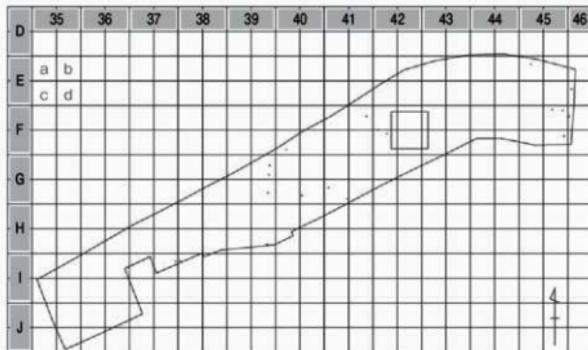
深鉢E類 (刻目突帯文土器窓)  
(IIIb上層・IIIb下層)



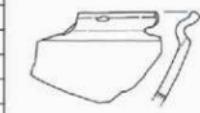
刻目突帯文土器の窓である。副部では縄文時代晩期のものと判別がつきにくいため、深鉢類として整理している。

【分布】  
H37-a-c付近において集中的な出土がみられ、H39-c付近においても若干のまとまった出土がある。調査区東半部からの出土はみられない。

第101図 G区遺物分布図② (S = 1/800)



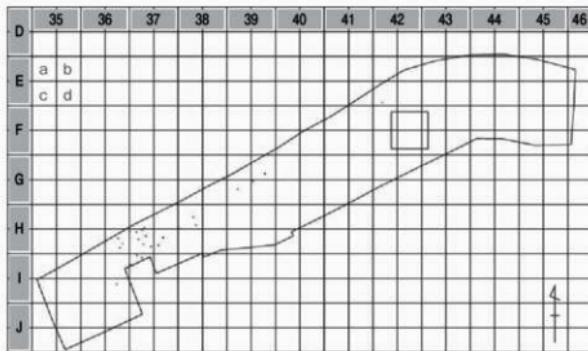
浅鉢C類  
(IIIb上層・IIIb下層)



半球状の胴部に短い頸部がつき、口縁部内面に段をもつもの。

【分布】

出土は散在的で、調査区西部からの出土はごくわずかである。



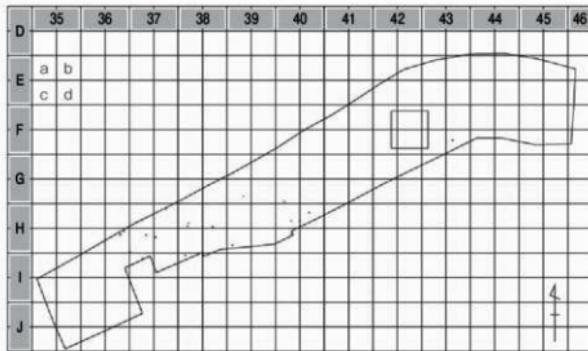
浅鉢J類  
(IIIb上層・IIIb下層)



逆「U」字状に屈曲する胴部から内傾する口縁部に至るもの。口唇部は先細りとなって外反したり、外縁部に段を作ったりする。

【分布】

多くが調査区西半部からの出土であり、H37-c付近において集中的な出土がみられる。



浅鉢M類  
(IIIb上層・IIIb下層)



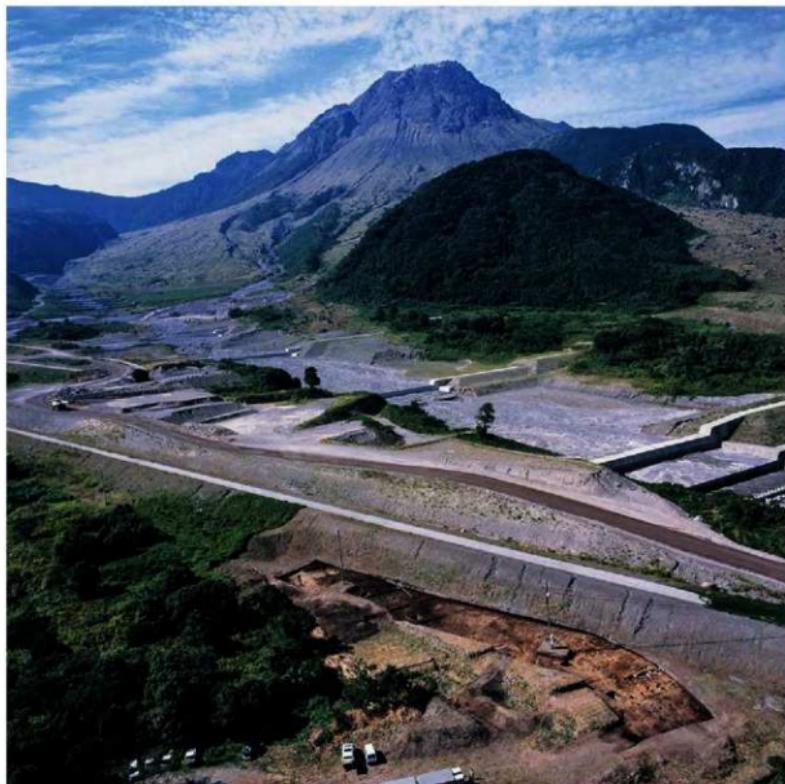
型取り成型によって製作される組織痕土器。アンギン目、網目、亂目があり、網目と亂目が重なって認められるものもある。

【分布】

多くが調査区西半部からの散在的な出土であり、調査区東半部からの出土はごくわずかである。

第102図 G区遺物分布図③ (S = 1/800)

# 図 版



權現院遺跡と平成新山

図版 2



TP. 1 北壁



TP. 2 北壁



TP. 3 南壁



TP. 4 南壁



TP. 5 西壁



TP. 6 西壁



TP. 7 西壁



TP. 8 西壁

試掘・確認調査①



TP. 9 北壁



TP. 10 西壁



TP. 11 西壁



TP. 12 西壁



TP. 13 南壁



TP. 14 南壁



TP. 15 南壁



TP. 16 東壁

試掘・確認調査②

図版 4



TP. 17 南壁



TP. 18 南壁



TP. 19 南壁



TP. 20 北壁



TP. 21 南壁



TP. 22 西壁



TP. 23 南壁



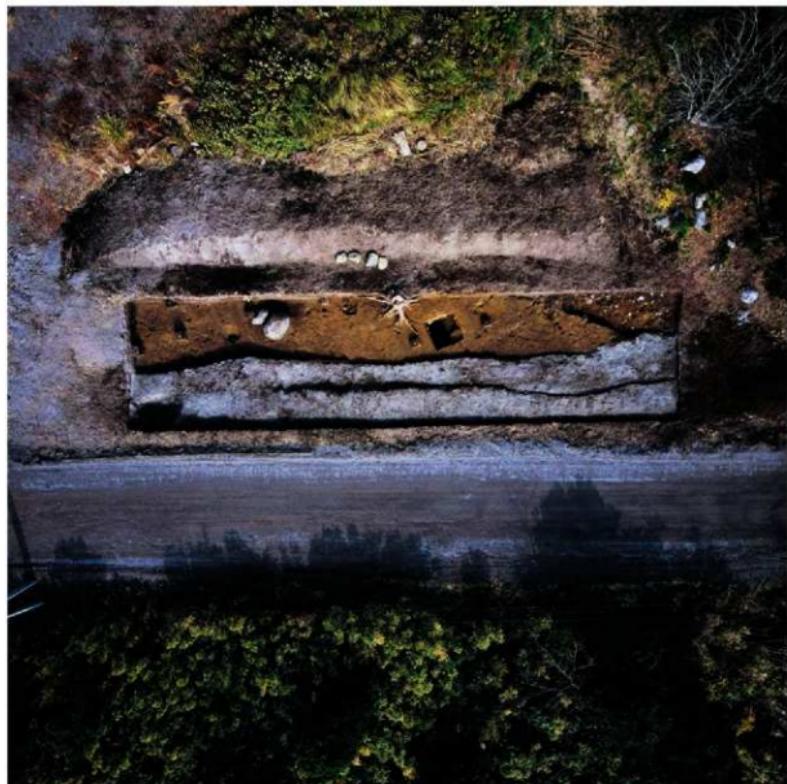
TP. 24 南壁

試掘・確認調査③



赤松谷川 3号導流堤（手前）・2号導流堤（奥）とF区

図版 6



F区全景

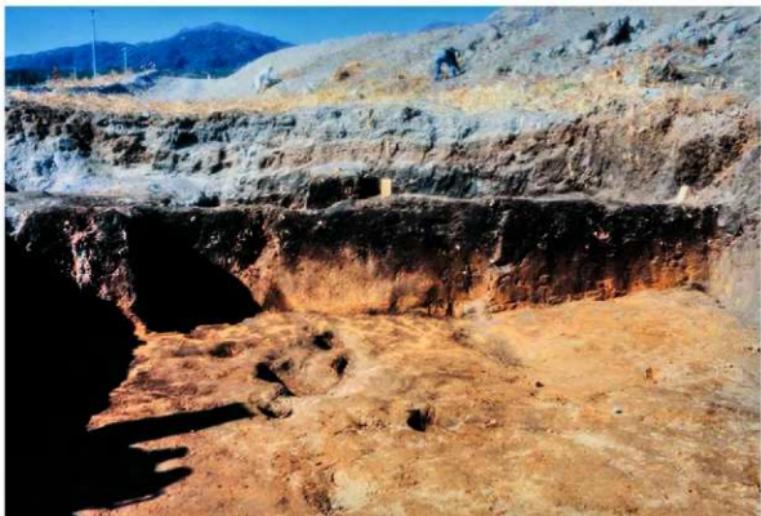


F区IV層上面（南東から）



F区IV層上面（北西から）

F区IV層上面完掘状況



F 区78-b · d 列西壁土层



F 区遗物出土状况

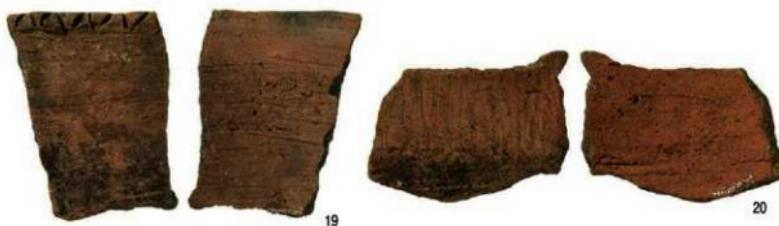
図版 8



F 区土器ほか①

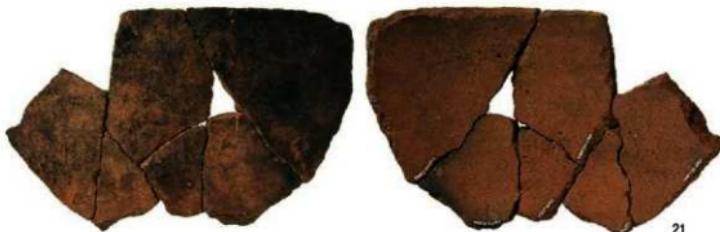


18



19

20



21



22



23



24



25



26

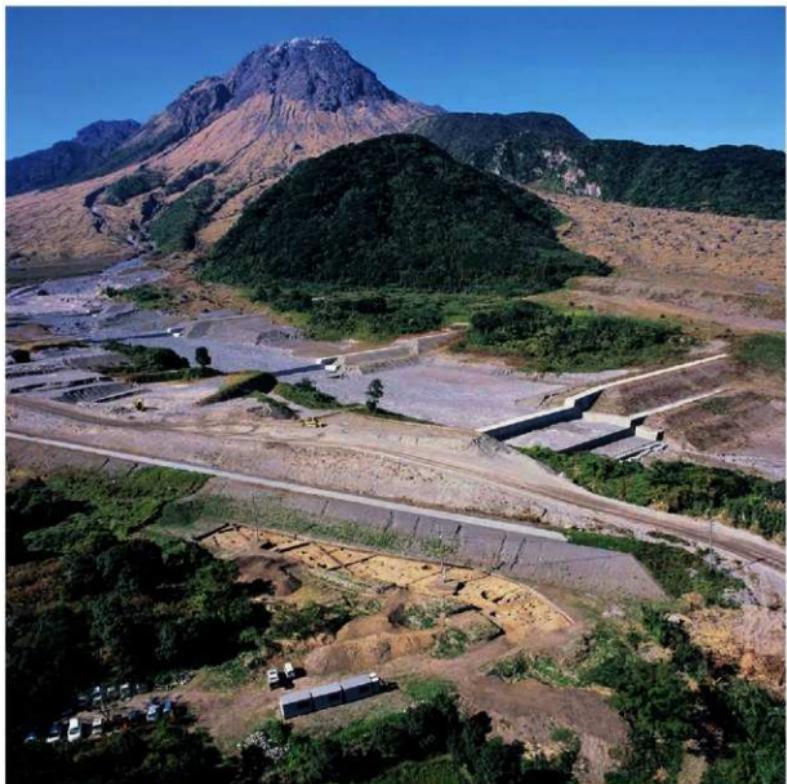


27

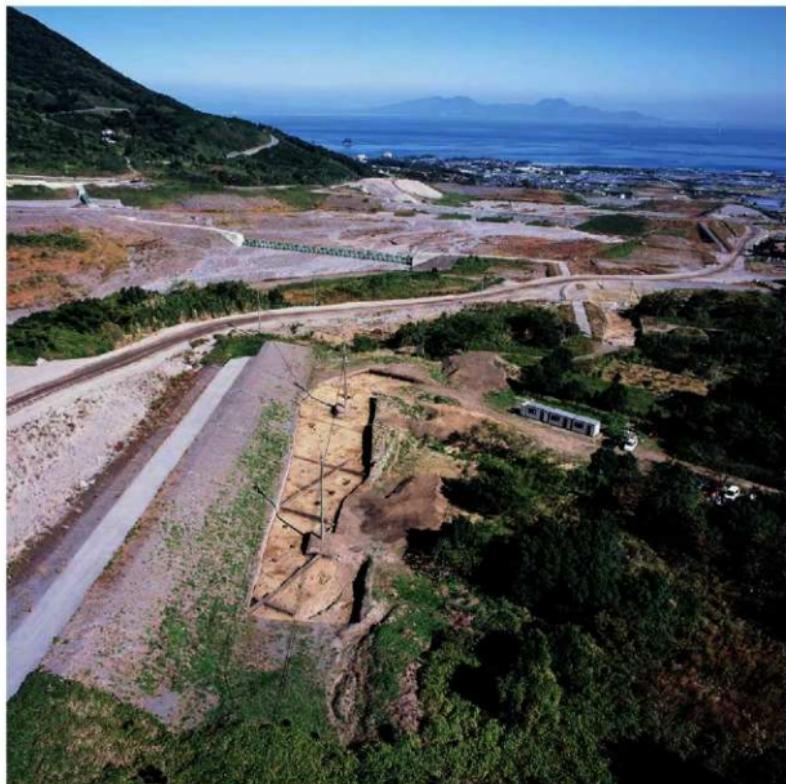
F 区土器ほか②



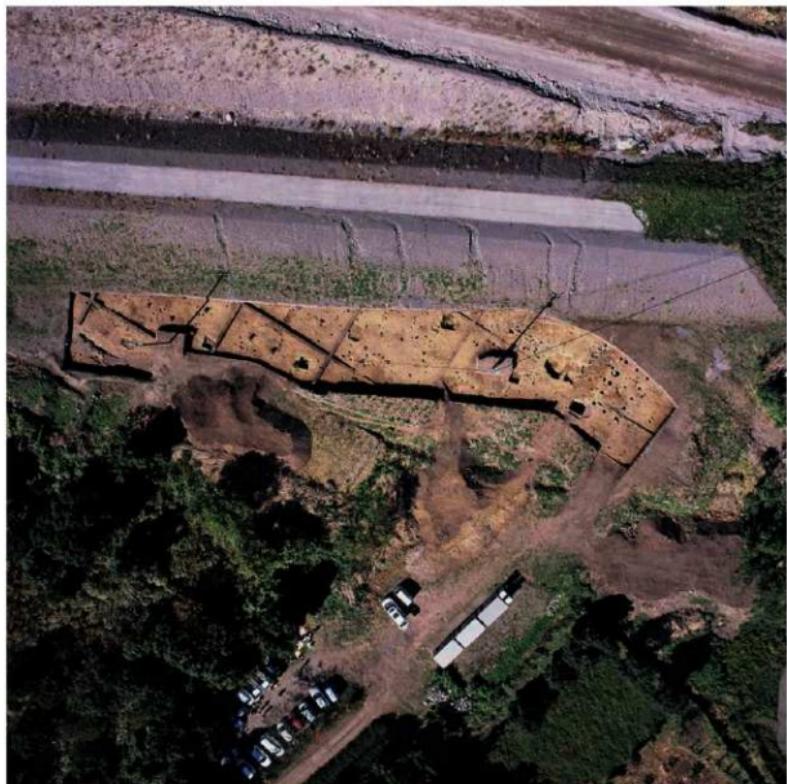
F区土器ほか③・石器



平成新山とG区



赤松谷川 2号導流堤と G 区



G区全景



G区IV層上面（西から）



G区IV層上面（東から）

G区IV層上面完掘状況



H38-a 西壁

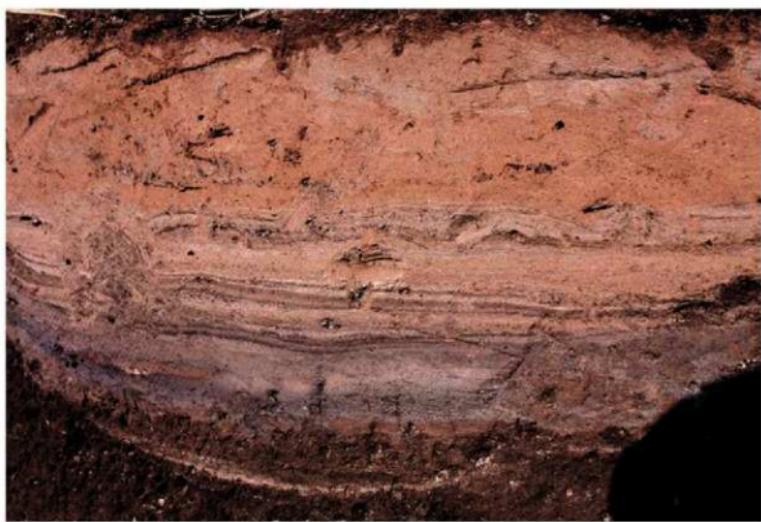


H38-b 北壁

G区土層



タバコ畑間の火山灰堆積



火山灰堆積拡大

G区雲仙普賢岳平成噴火火山灰堆積状況



掘立柱建物



溝（北から）



土坑1（南から）

G区遺構検出状況①



土坑2（東から）



土坑2内炭化物出土状況（南から）



土坑3（南から）



土坑4（東から）



土坑5（東から）



土坑6（南から）

G区遺構検出状況②

図版18



G 40検出倒木痕（東から）



F 41-b 検出倒木痕（東から）

G区倒木痕検出状況



H37-a・c 列III b 上層（南から）



40列III b 下層（南から）

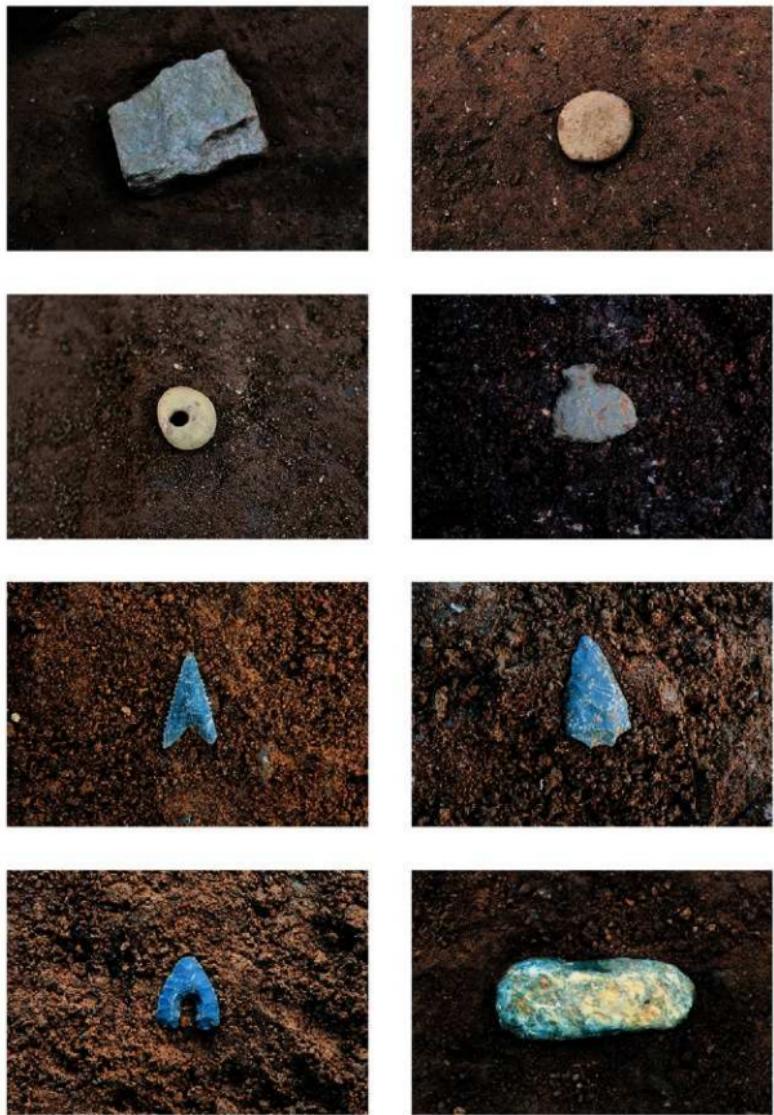
G区遺物検出状況



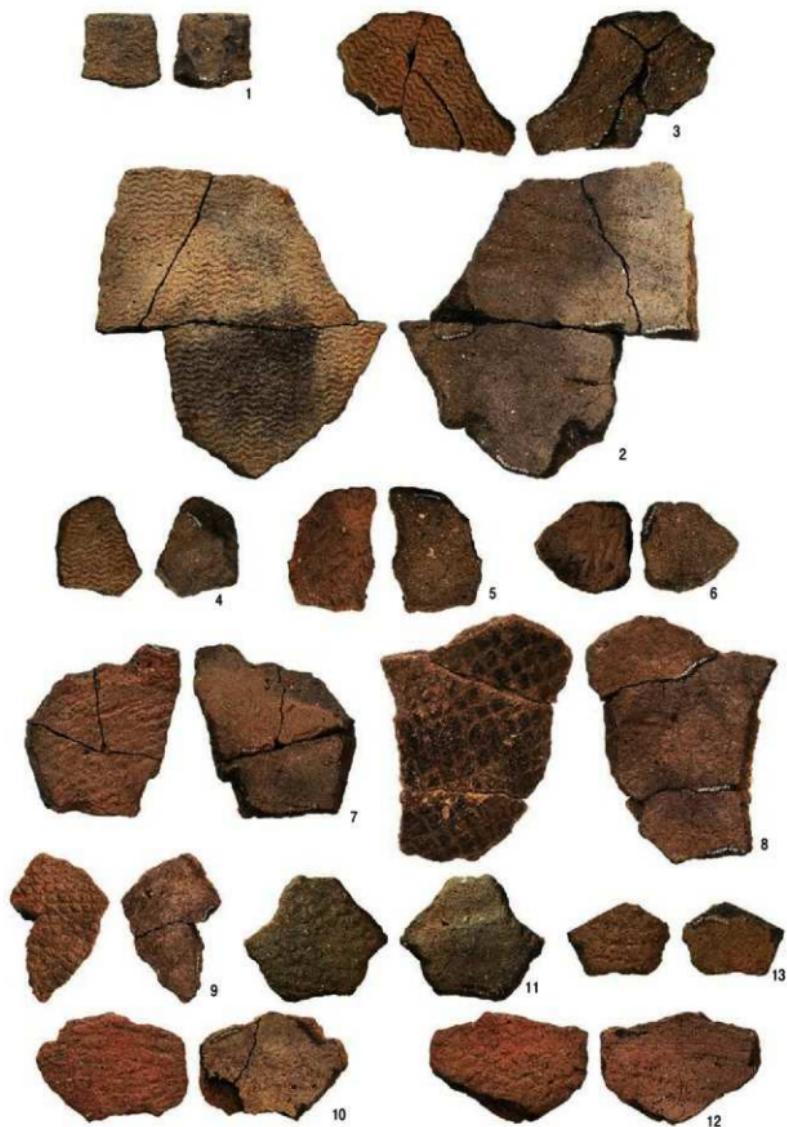
G区遺物出土状況①



G区遗物出土状况②



G区遺物出土状況③



G区土器ほか①



G区土器ほか②



39

G区土器はか③



36



37

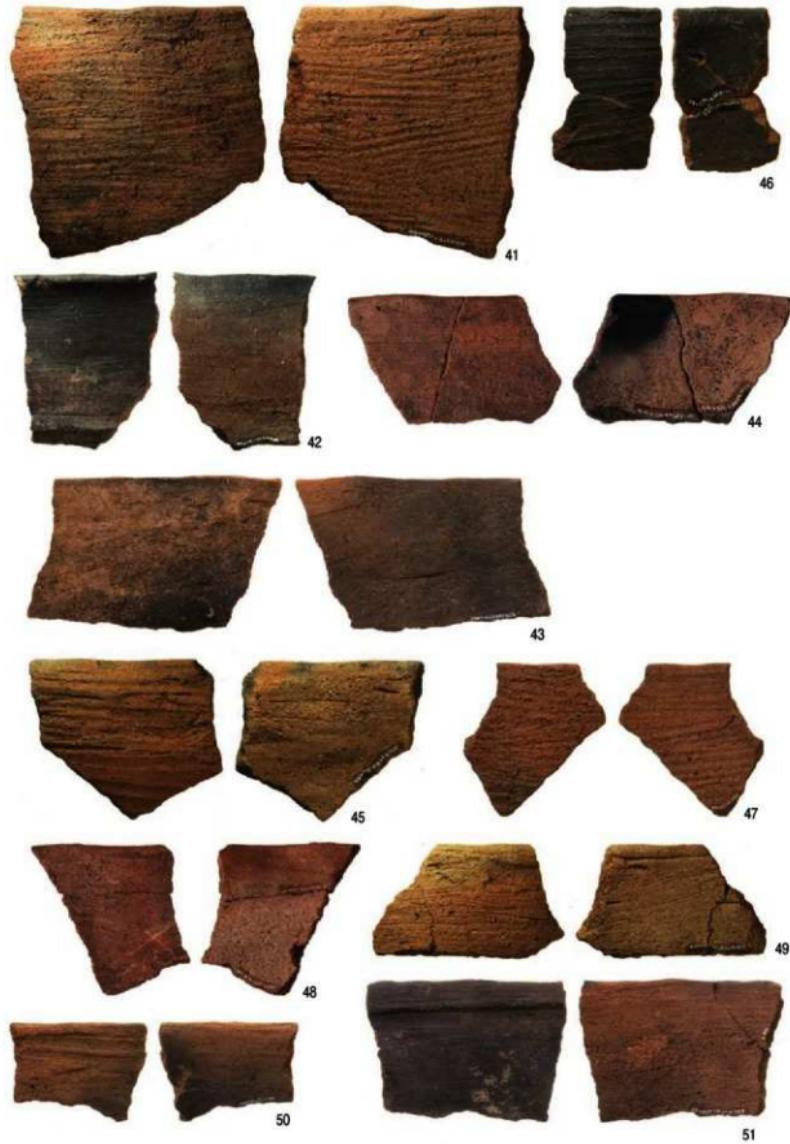


38



40

G区土器ほか④



G区土器ほか⑤

図版28



G 区土器ほか⑥

66

G区土器はか(?)



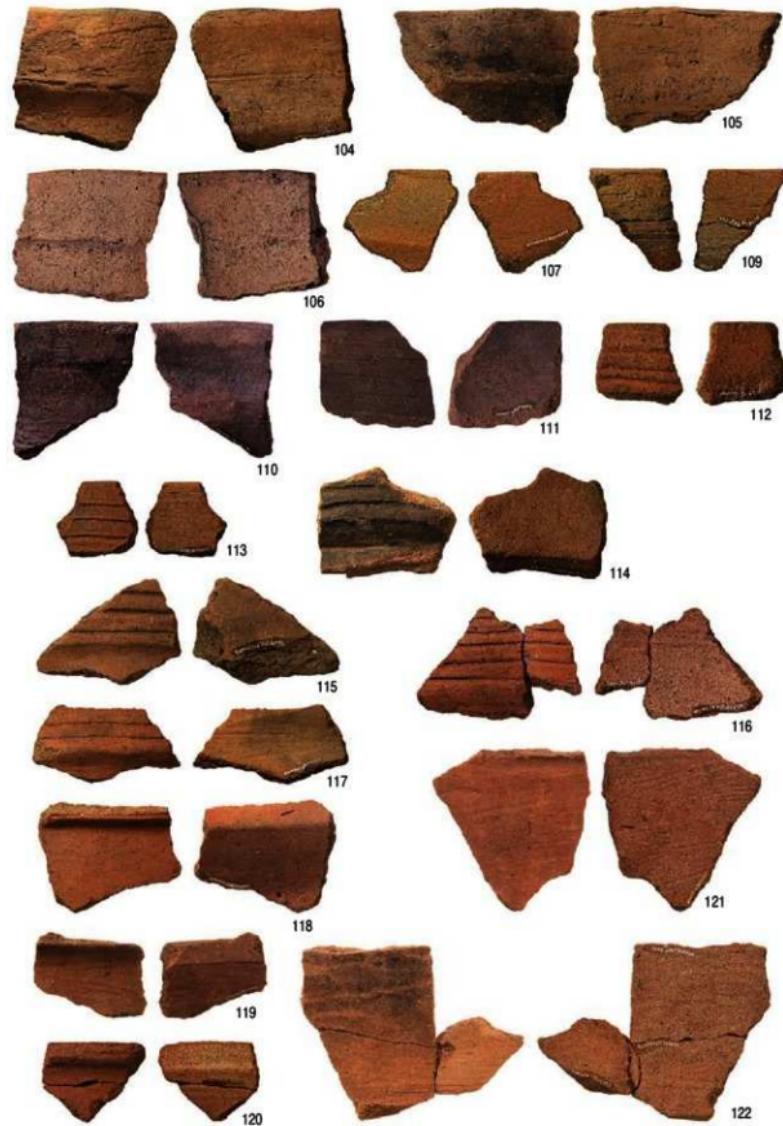


G区土器ほか⑧



G区土器ほか⑨

図版32



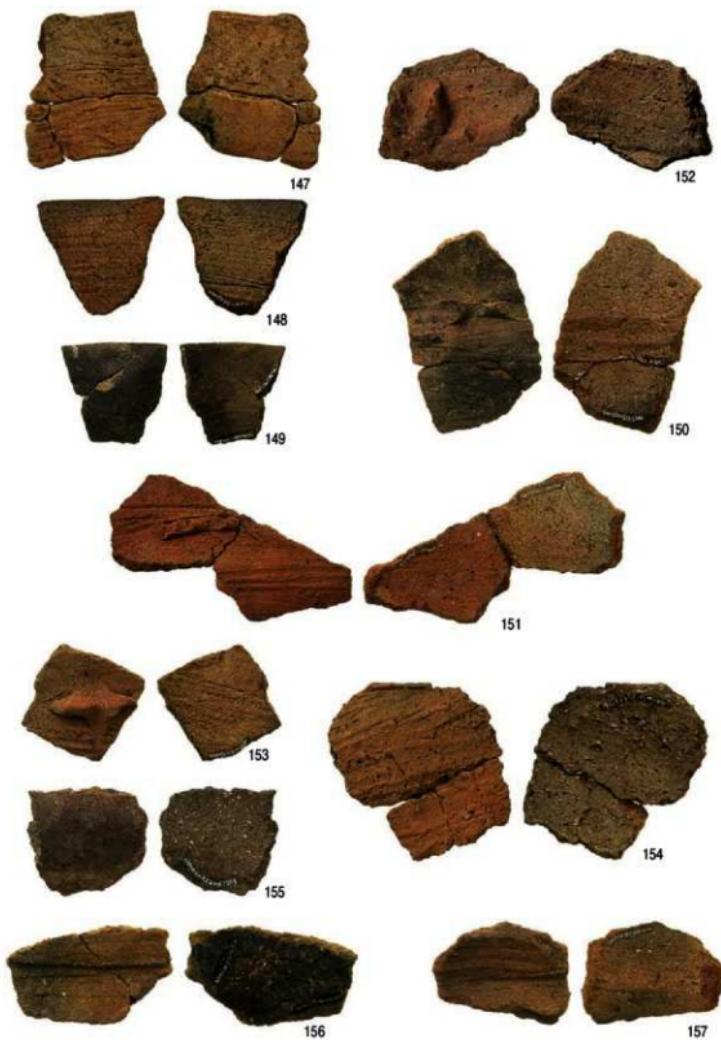
G区土器ほか⑩



G区土器ほか⑪



G区土器ほか②



G 区土器ほか⑬



158



159

G 区土器ほか⑭



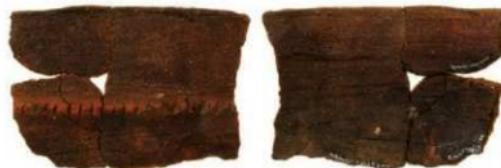
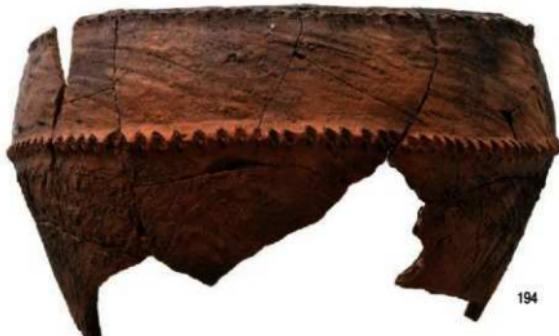
G区土器ほか<sup>15</sup>



G区土器ほか16



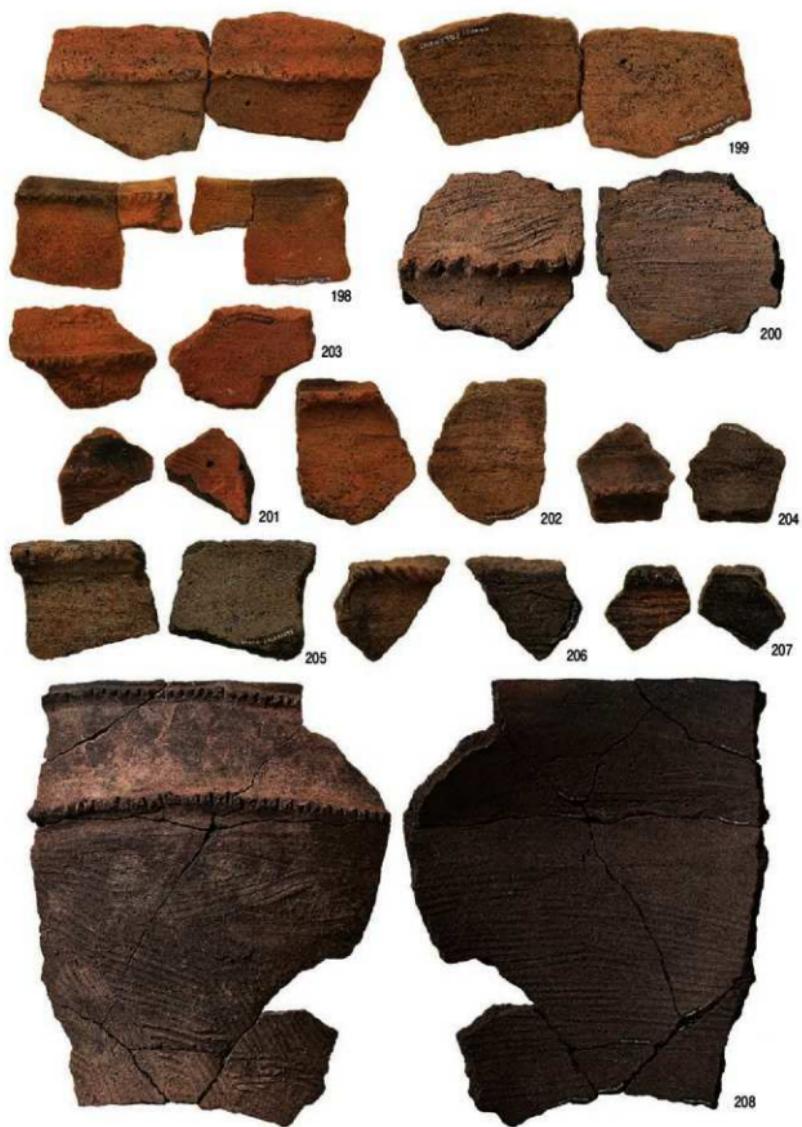
G区土器ほか17



195



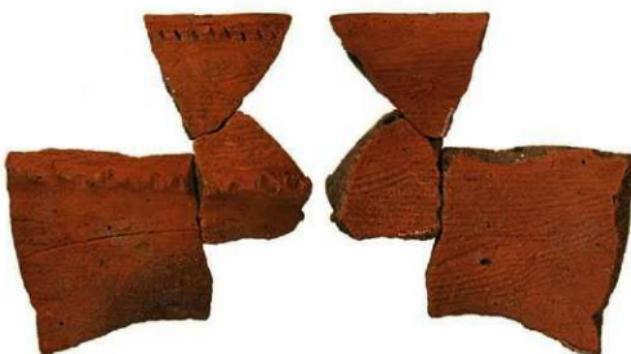
G区土器ほか<sup>18</sup>



G区土器ほか<sup>19</sup>



209

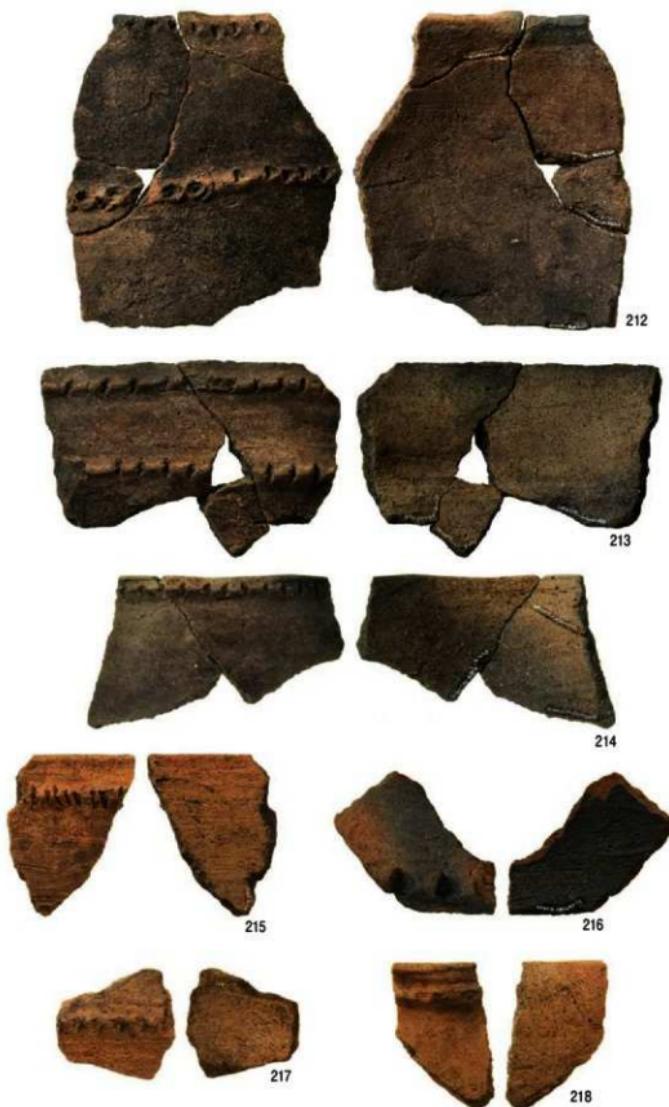


210

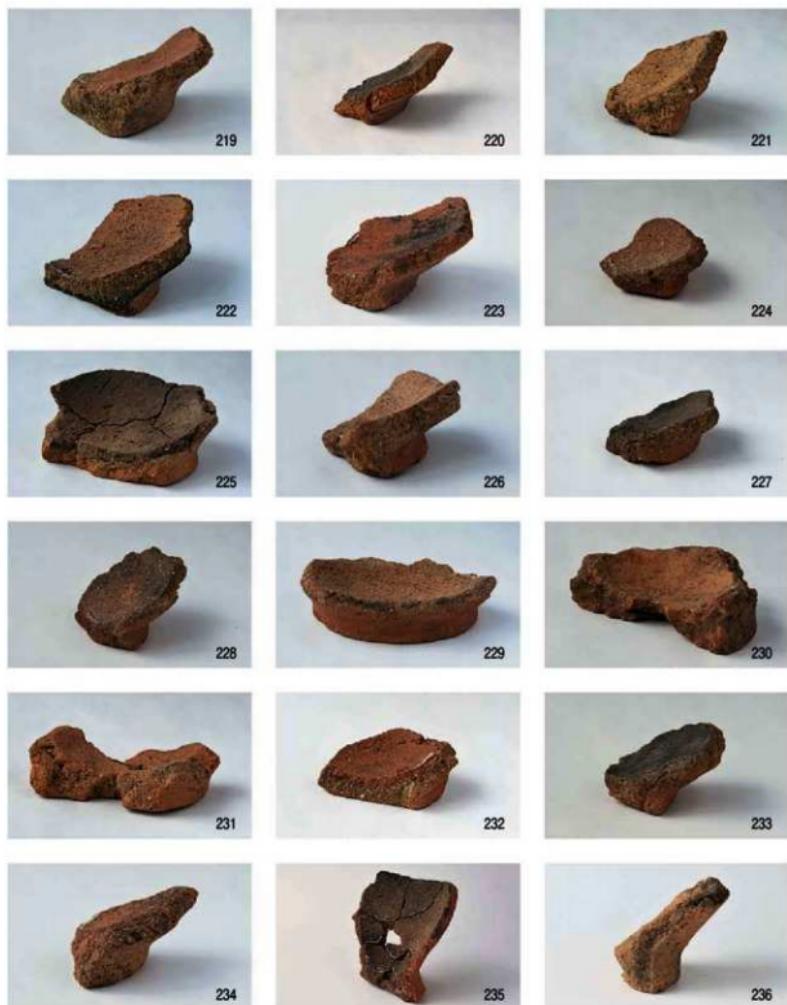


211

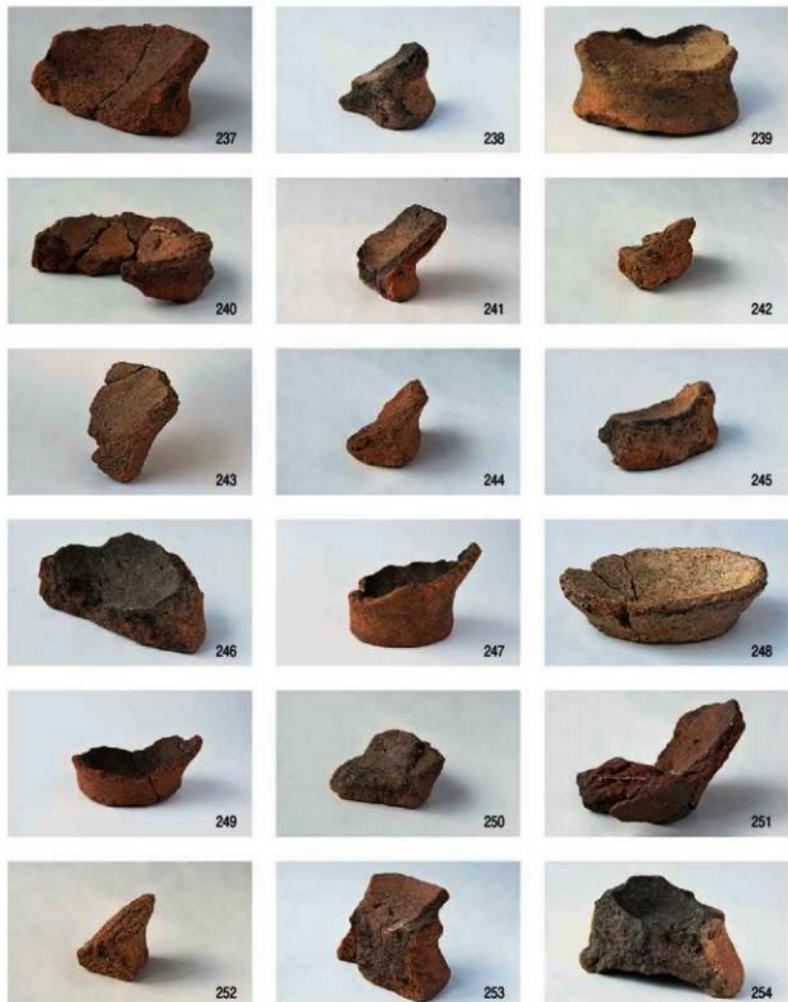
G 区土器ほか<sup>20</sup>



G区土器ほか②)



G区土器ほか22

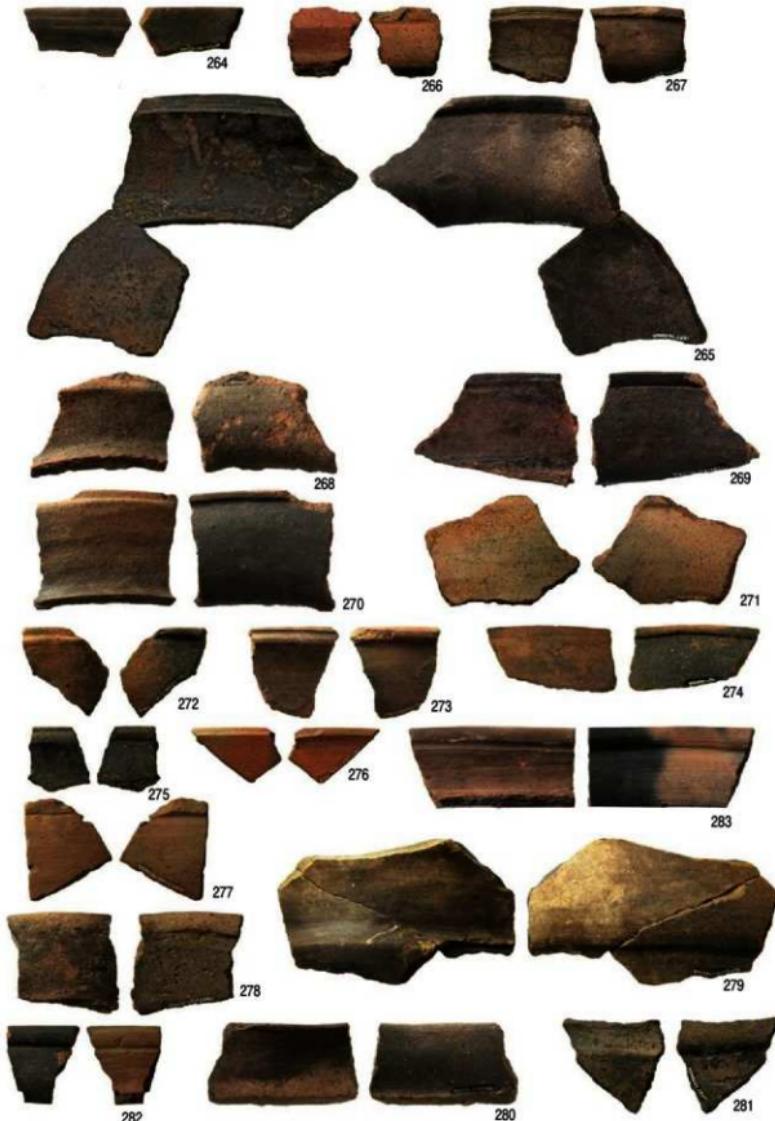


G 区土器ほか<sup>23</sup>

図版46



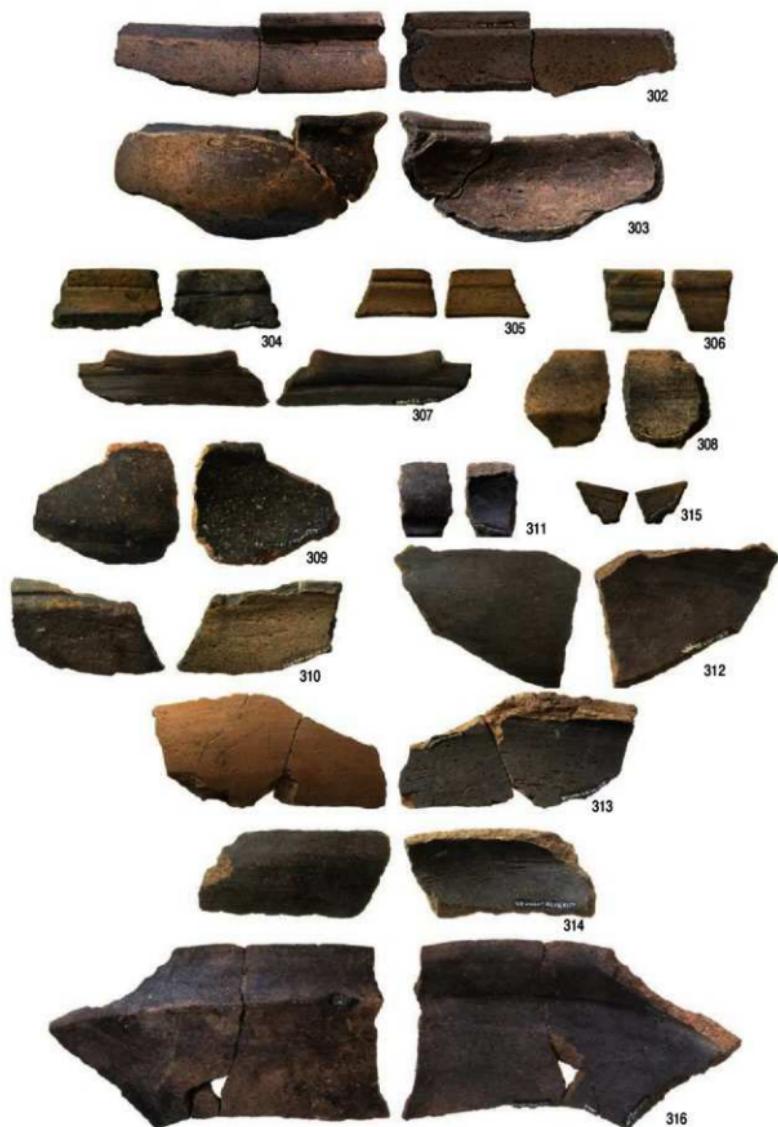
G 区土器ほか24



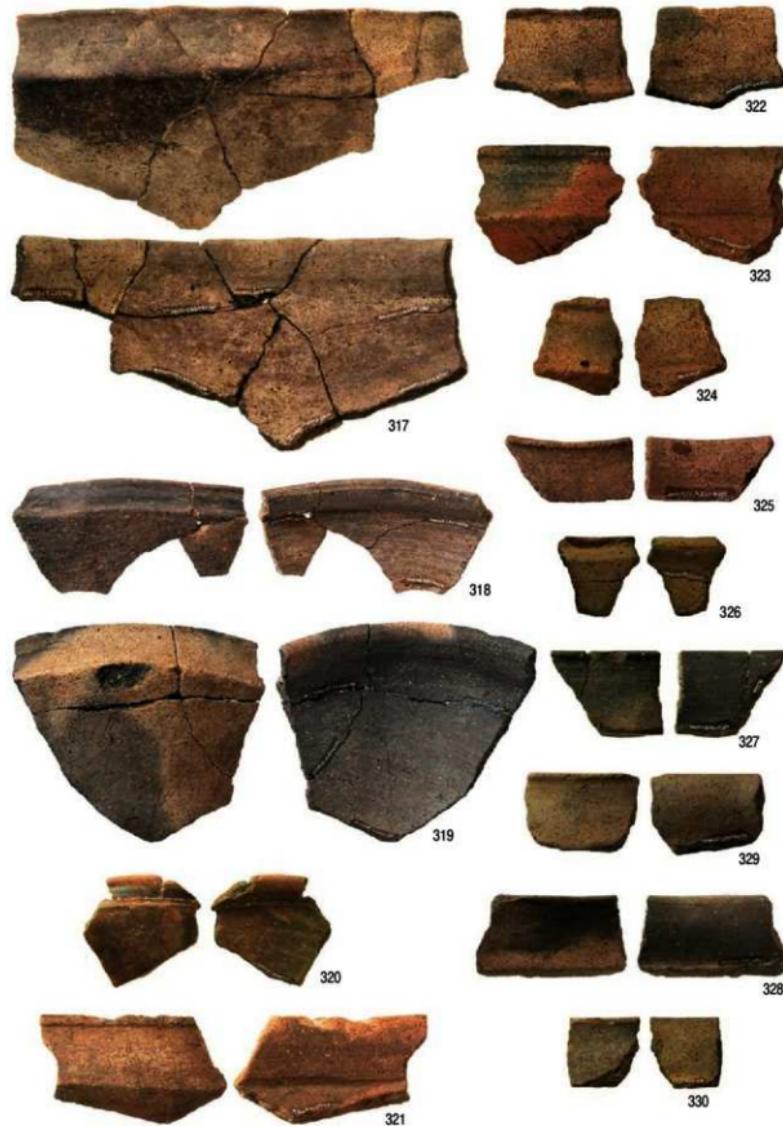
G 区土器ほか②



G 区土器ほか⑧



G区土器ほか?

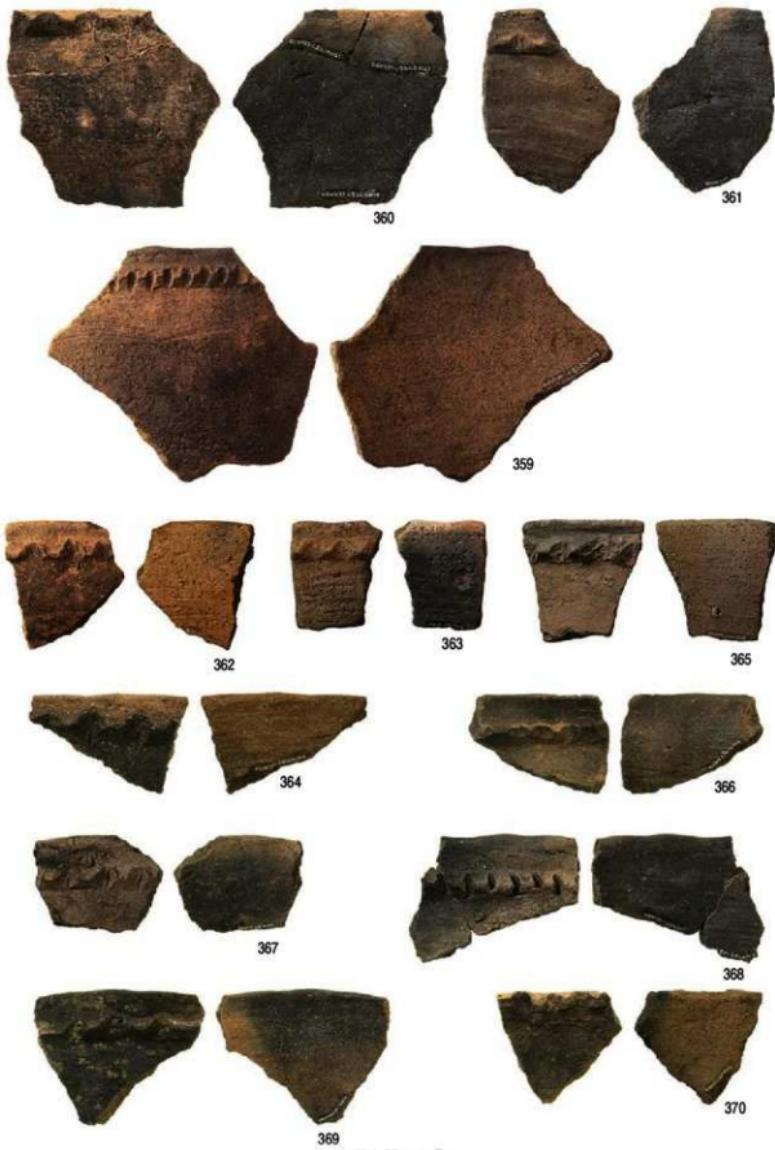


G 区土器ほか28

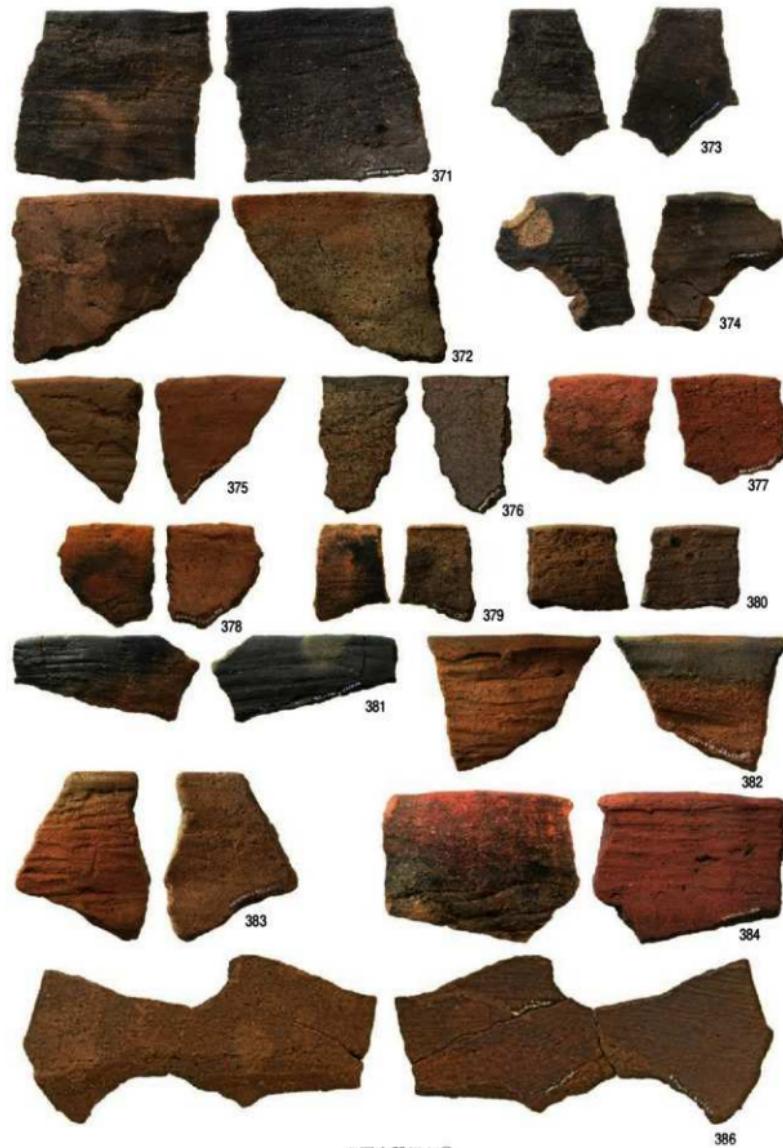




G 区土器ほか⑩



G 区土器ほか③)



G 区土器ほか32



385



387



388



389

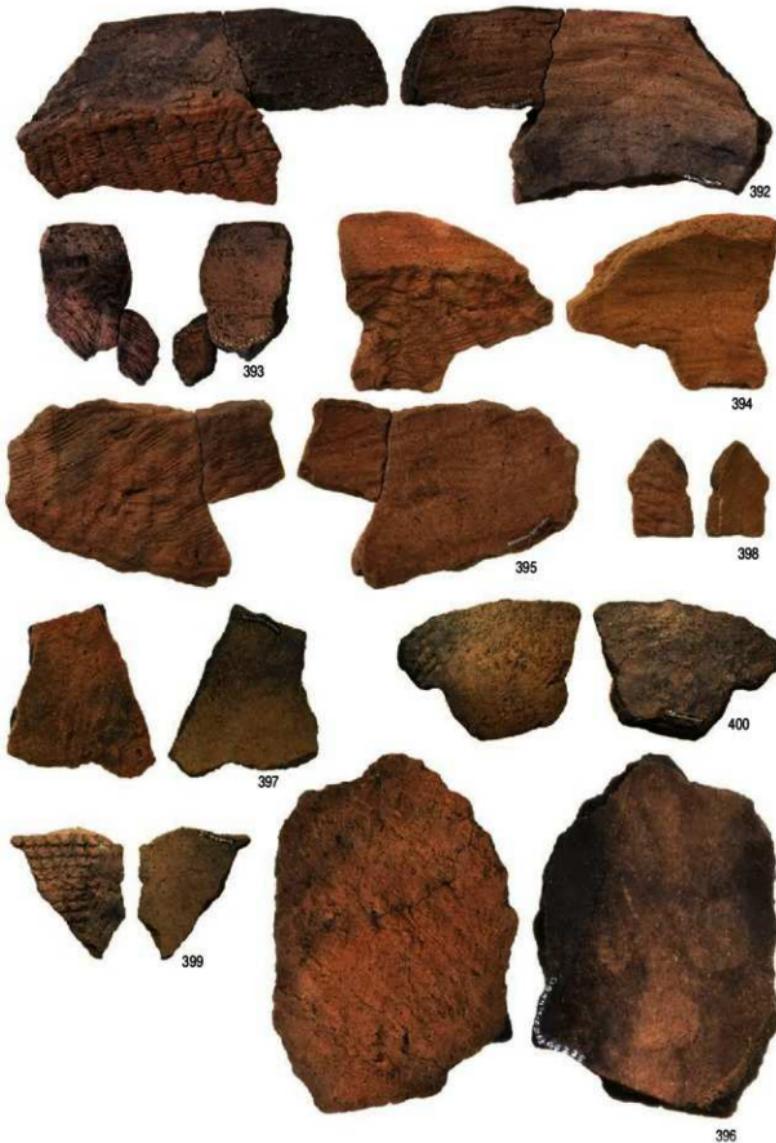


391



390

G区土器ほか<sup>33</sup>



G区土器ほか34



G区土器ほか35

図版58



G 区土器ほか⑧



G 区土器ほか⑦



G 区土器ほか38



G区石器①



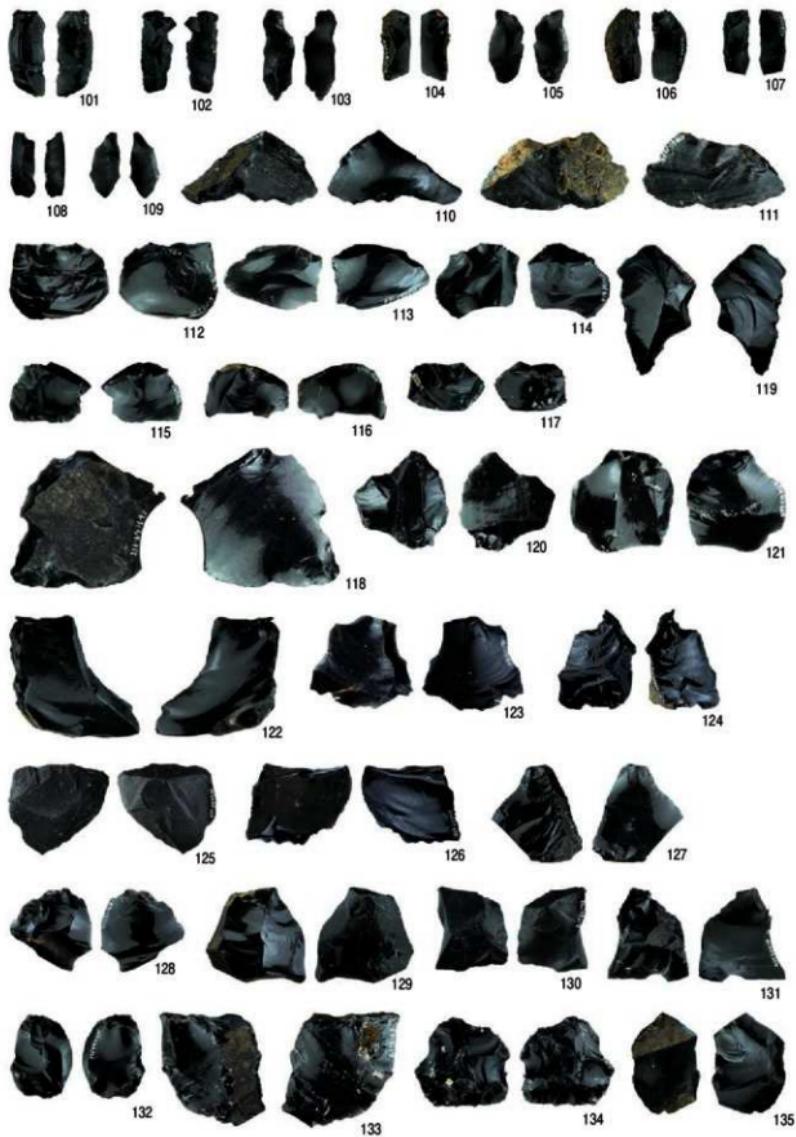
G区石器②



G区石器③



G区石器④

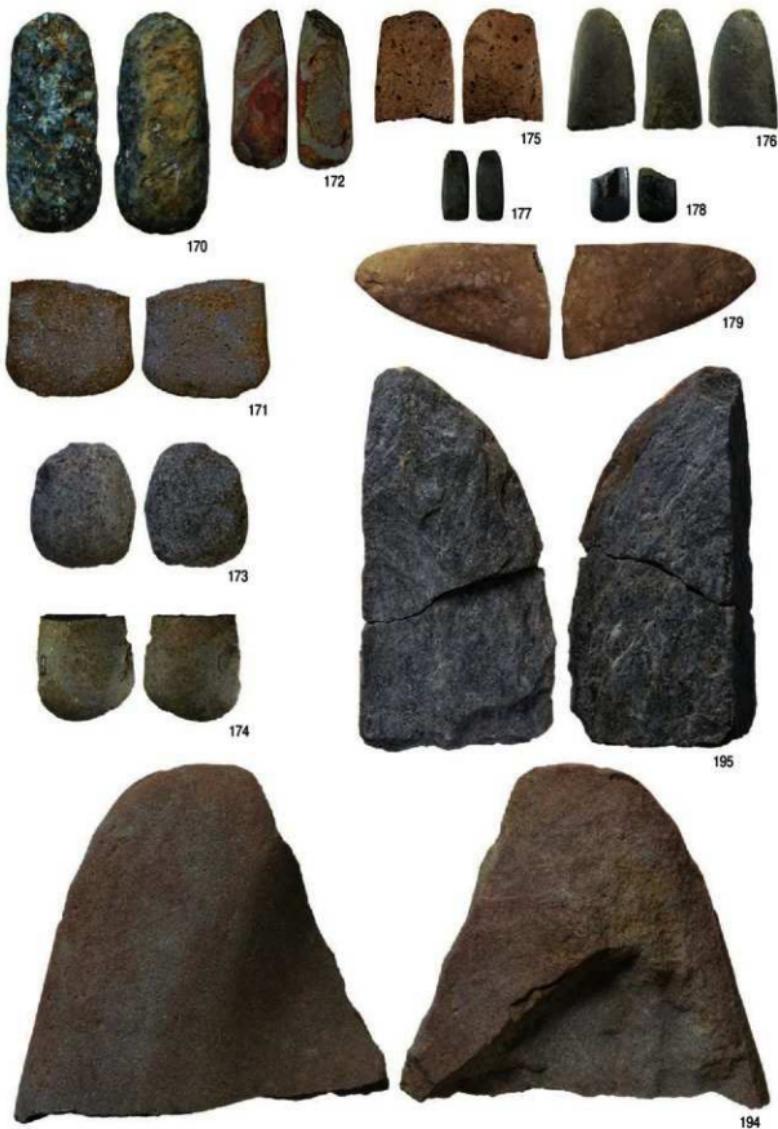


G 区石器⑤

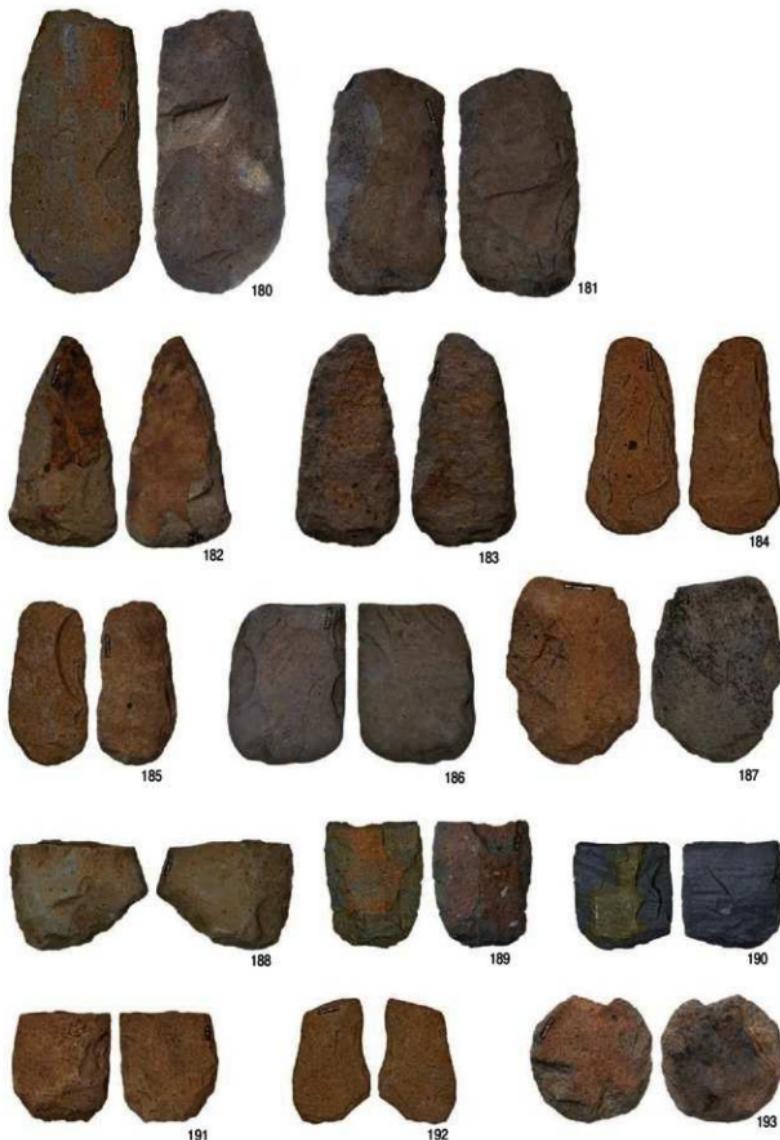
図版66



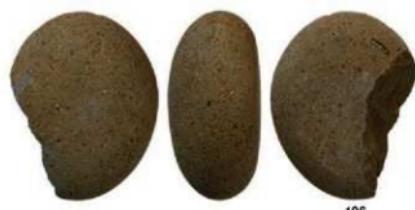
G区石器⑥



G区石器⑦



G区石器⑧



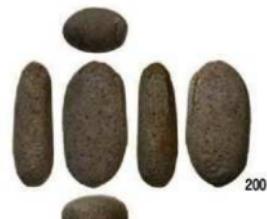
196



199



197



200



198



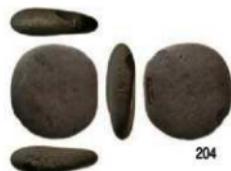
201



202



203



204

G区石器⑨



G区石器⑩



眉山とH区



H区西半部IV層上面（東から）



H区東半部IV層上面（西から）

H区完掘状況



H区全景



石列（西から）



土坑（北から）

H区遺構検出状況



H区土器ほか①



H区土器ほか②



H区土器ほか③



35



36

H区土器ほか④



37



38

H区土器ほか⑤



H区石器①



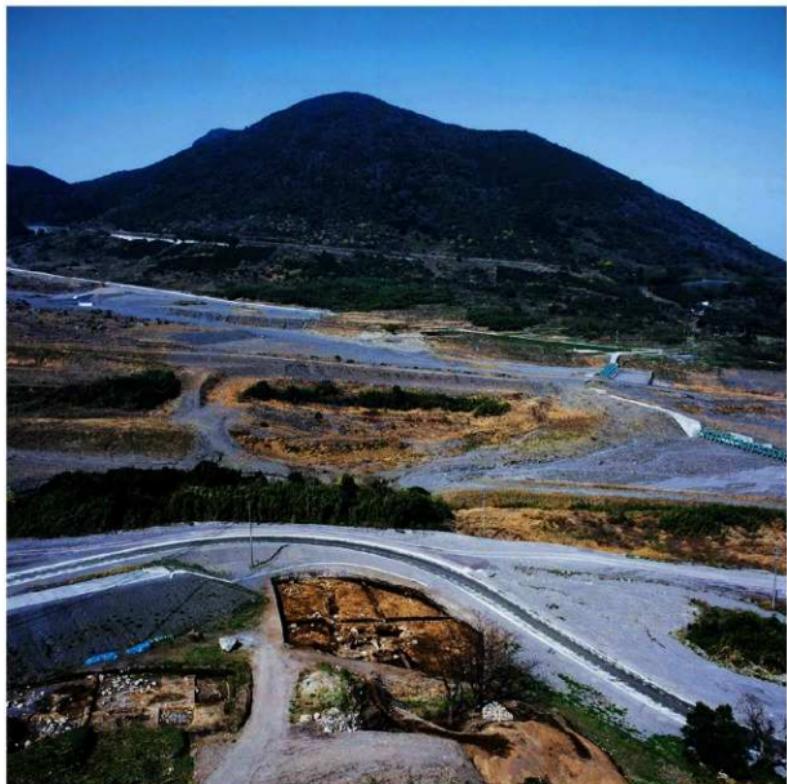
H区石器②



平成新山とⅠ区



赤松谷川 2号導流堤と I 区



眉山とI区



I 区全景



I区III b下層上面（西から）



I区III b下層上面（北から）



I区北半部III b下層上面竹根検出状況（東から）



I区南半部III b下層上面竹根検出状況（東から）



I区IV層上面（北西から）



I区IV層上面（北から）



調査区西壁（北東から）



東西方向ベルト（南から）

I 区土層



大型土坑群（南から）



溝（北から）

I 区遺構検出状況



C47-b・d (西から)



D47 (西から)

I区Ⅲ b 上層遺物検出状況



調査区北西部（南から）



調査区南西部（南から）

I 区Ⅲ b 下層遺物検出状況



I 区遗物出土状况



I区作業状況



I 区土器ほか①



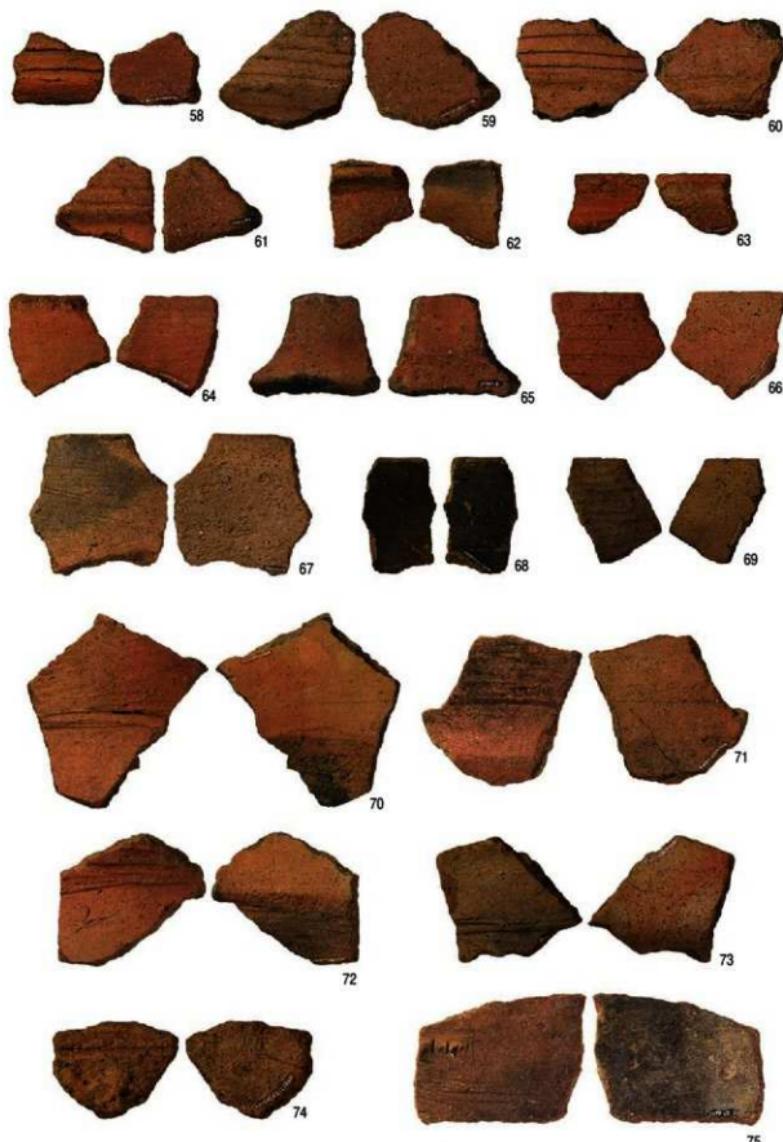
I 区土器ほか②



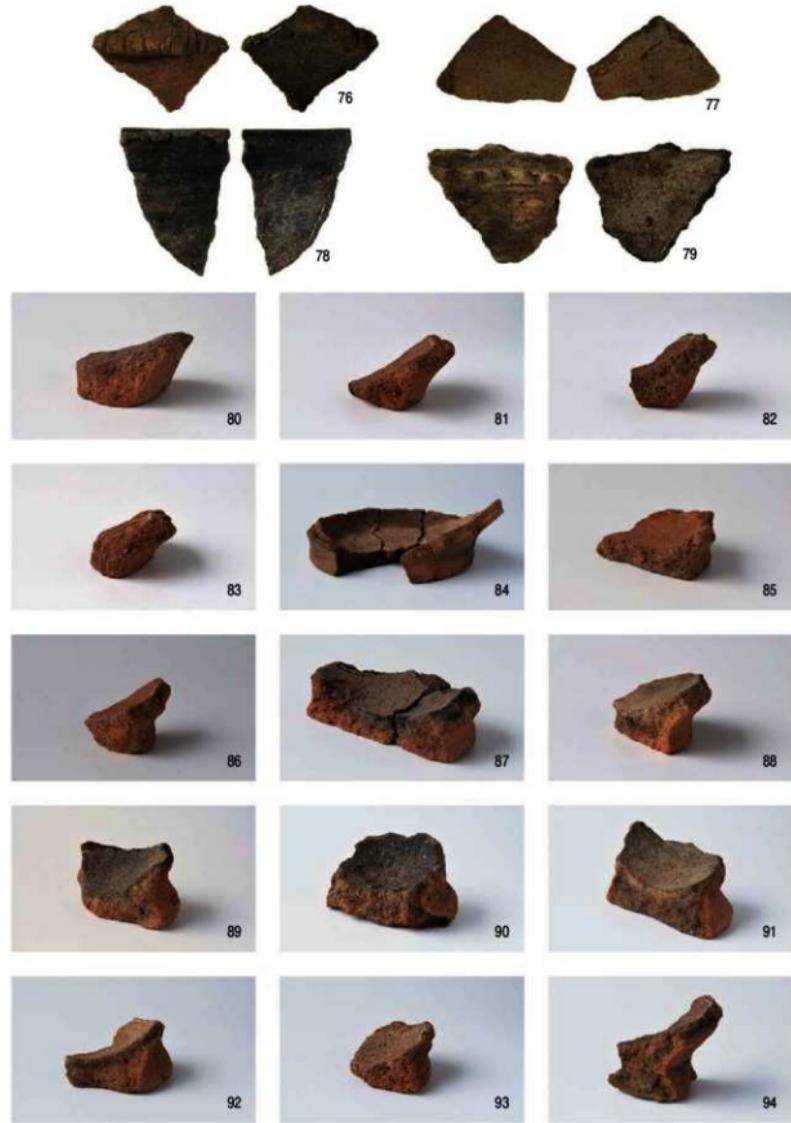
I 区土器ほか③



I 区土器ほか④



I 区土器ほか⑤



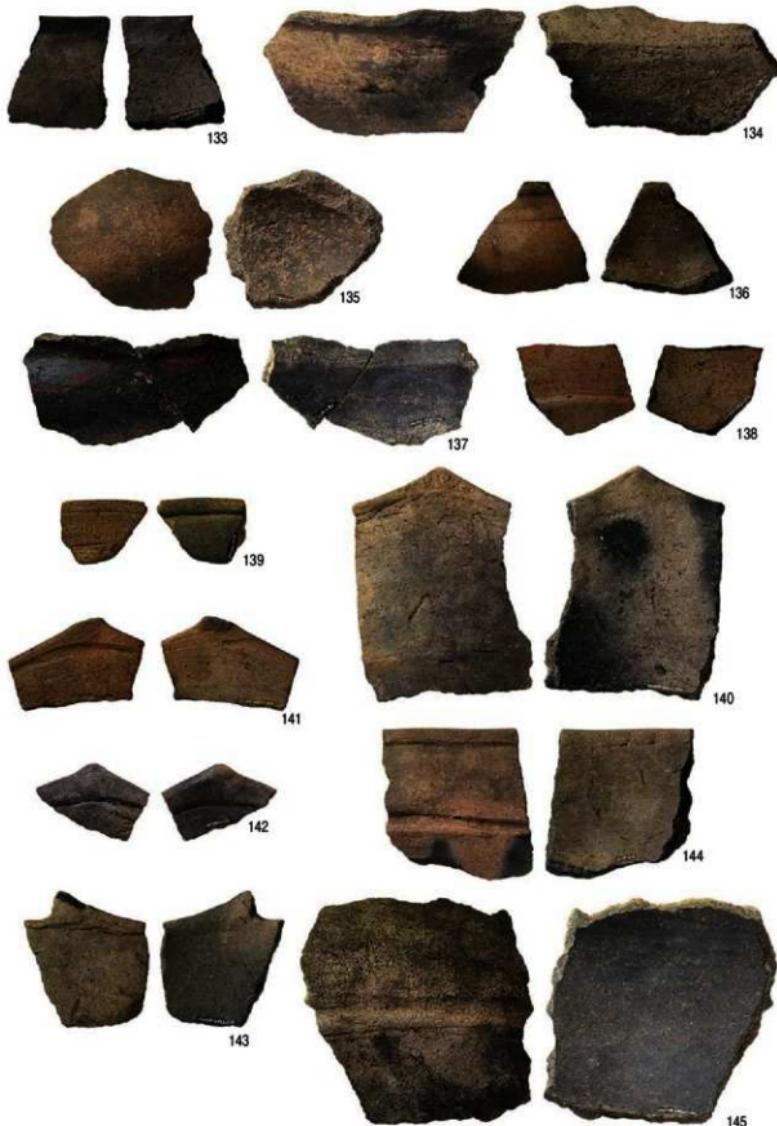
I 区土器ほか⑥



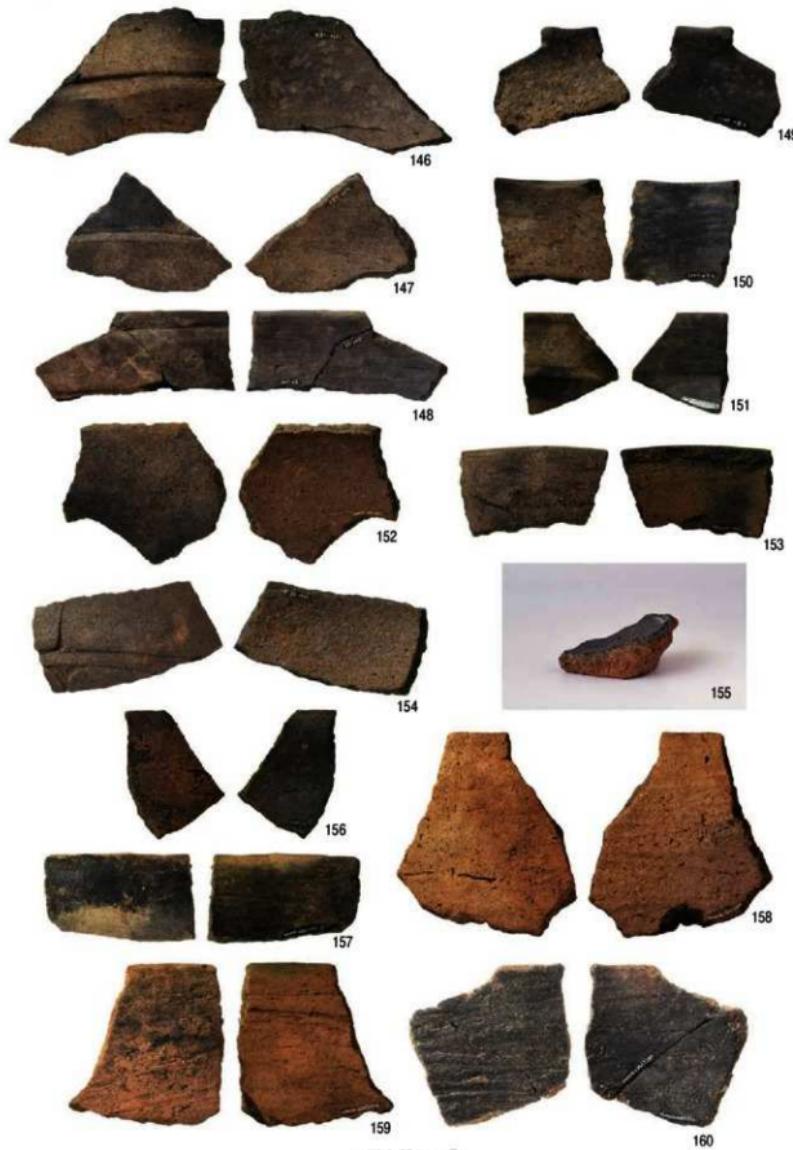
I区土器ほか⑦



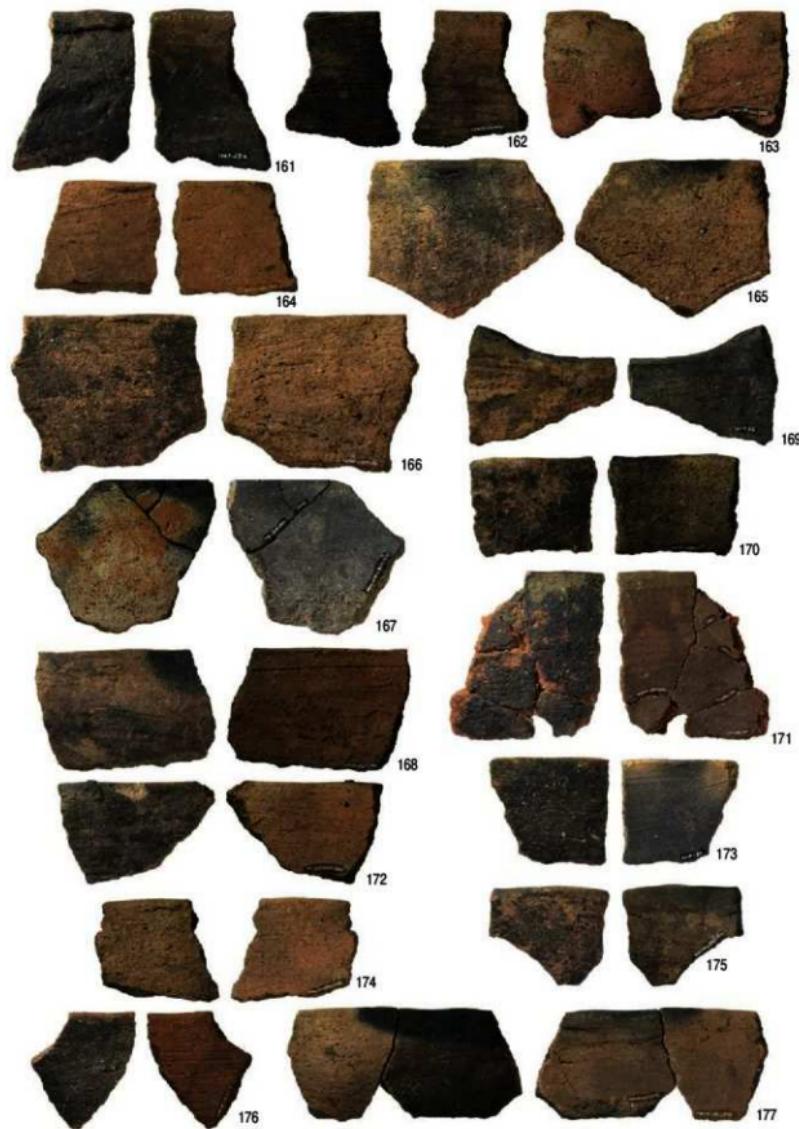
I 区土器ほか⑧



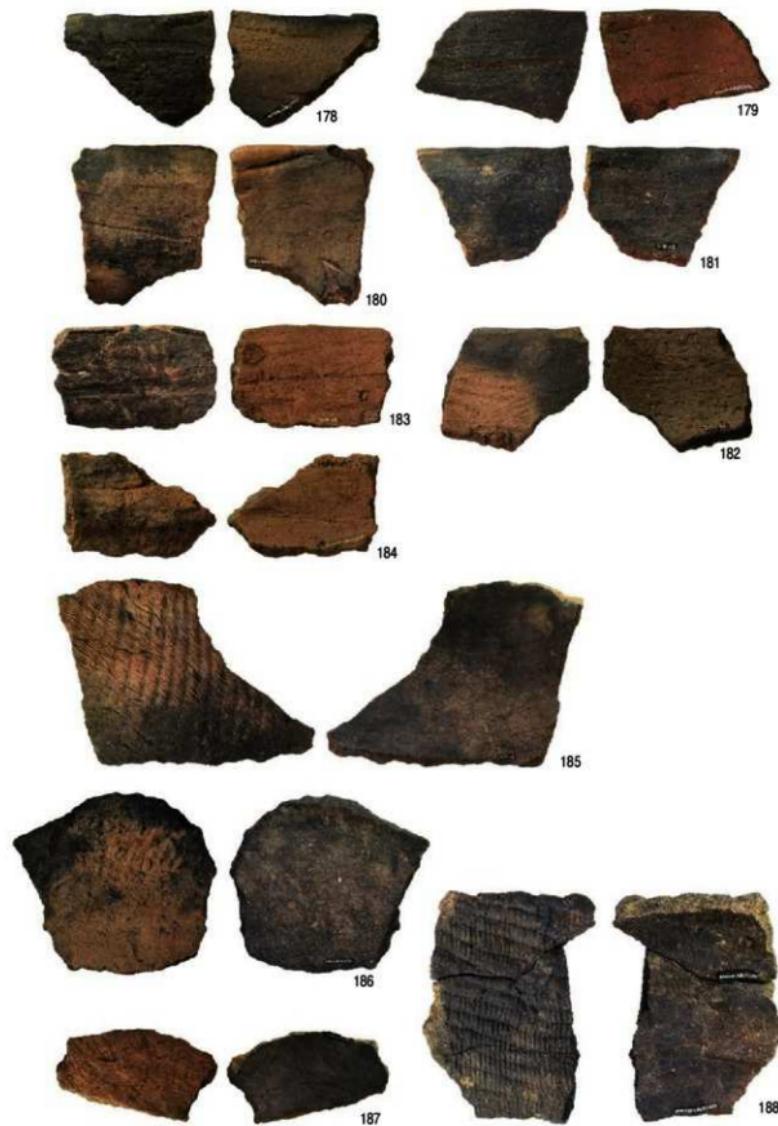
I 区土器ほか⑨



I 区土器ほか10



I 区土器ほか⑪



I 区土器ほか⑫



I 区土器ほか⑬

図版104



I 区土器ほか⑯



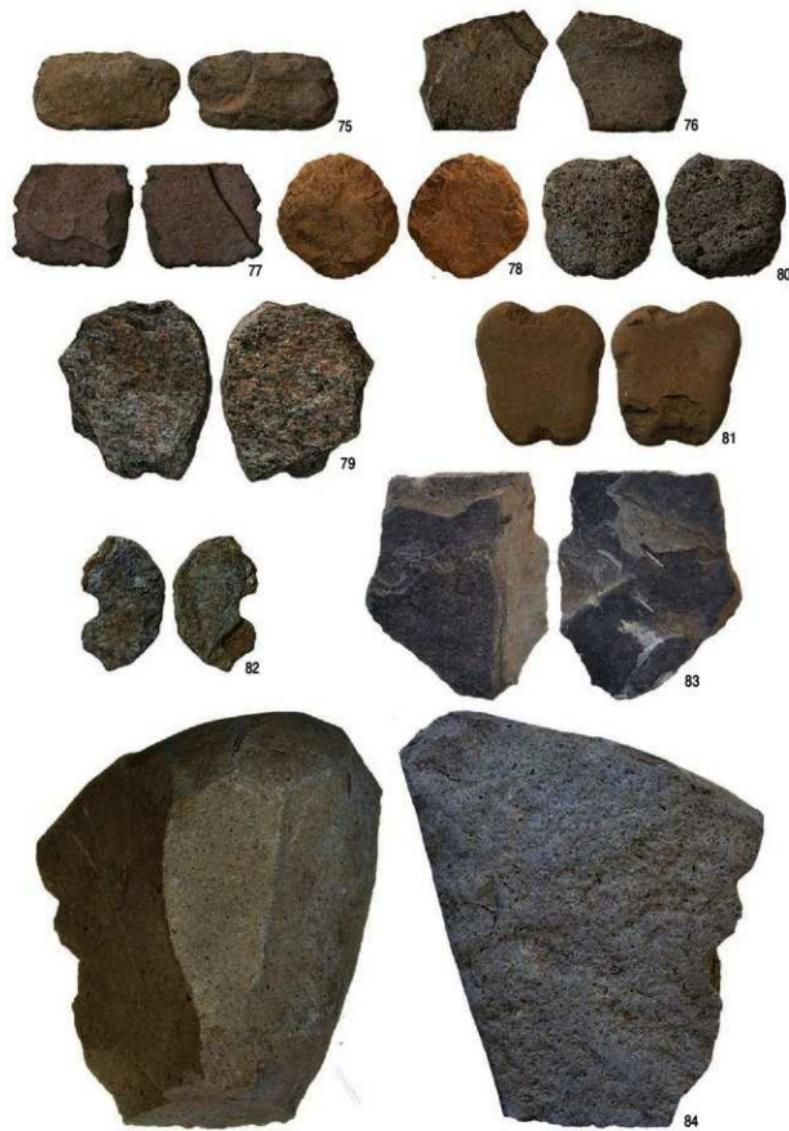
I区石器①



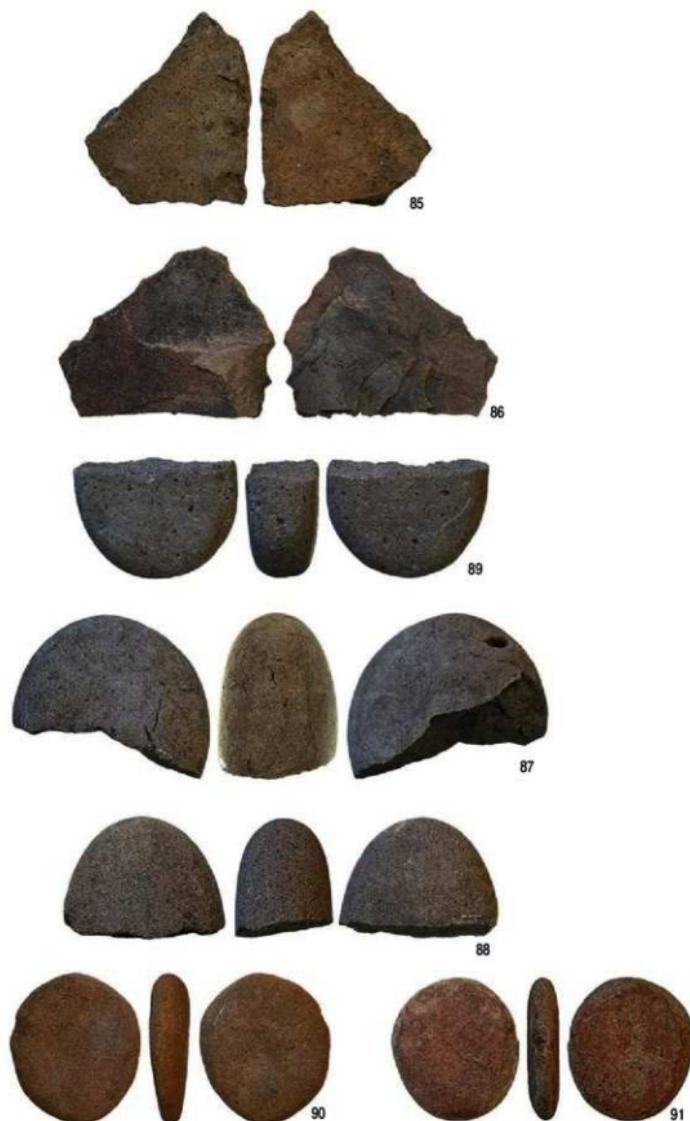
I 区石器②



I 区石器③



I区石器④



I 区石器⑤



## 報告書抄録

ふりがな	ごんげんわきいせき							
書名	権現脇遺跡							
副書名	水無川上流右岸資材搬入路工事に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	本多 和典							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL0957-73-6705							
発行年月日	西暦2020年9月30日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 °°°'	東經 °°°'	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
権現脇 遺跡	みなみしまばら し 南島原市 ふかえ ちよさ 深江町	42214	140	32° 44° 47°	130° 20° 06°	20070806 ～ 20080131 20081216 ～ 20090331	F・G・H区 2,254m <sup>2</sup> I区 808m <sup>2</sup>	水無川上 流右岸資 材搬入路 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
権現脇 遺跡	遺物 包含地	縄文 古墳 中世 近世	土坑 掘立柱建物 大型土坑群	刻目突堤文土器 丹塗壺 打製石斧 玉				

南島原市文化財調査報告書 第21集

## 權 現 脇 遺 跡

2020. 9. 30

発行 長崎県南島原市教育委員会  
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂